
東方現葉幻詩

風未素

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方現葉幻詩

【Nコード】

N3050V

【作者名】

風未素

【あらすじ】

暇を持て余した少女が、自分の村で伝わっているおとぎ話に興味をもちました。そしたら、ちっちゃい神様に力持ちと言われたり、もふもふの妖怪に力持ちと言われたりして、大変なことになりました。

火の無い所に煙は立たぬ（前書き）

本作品は、東方projectの二次創作でございます。

独自解釈やらキャラ崩壊やらを含んでおりますので、そのようなものが苦手な方は、アイマスクを装着するなど、各自対策をとった上で楽しんでくださいませ。

火の無い所に煙は立たぬ

私、木葉緑このはみどりが住むこの村には、あるおとぎ話が伝わっている。今はそのおとぎ話の内容を、私の婆ちゃんに聞き出している。

昔、ここらに1匹の妖怪がいた。

その妖怪には悩みがあった。

その悩みとは、妖怪達の力が弱まっている事。

「近頃の人間には、妖怪は実在せぬと云う意趣がある。我ら妖怪は人の恐れを糧にするが、この様であると皆死ぬであろう。」

そして妖怪は、思い付いた。

「妖怪は実在せぬと云う人間と他の生物を『壁』で区切り、我らが住むべく地を造る。」

この考えの元、その妖怪は壁を造り始めた。

百年以上の時が経った。

妖怪は漸く壁を造り終えた。

この壁は“常なるもの”と“常ならむもの”を分ける壁。

「此処こそが我ら妖怪の在るべき世。ここを我らの楽園とする。」

その後、妖怪は徐々に現世から消えていったのであった。

「……これで全部じゃ。おまえさんも悪い事したらその壁に“常ならむもの”と思われて取り込まれてしまうぞい」

婆ちゃんが話し終える。学びの観点からすると興味深いけど、個人的な感想としては、地味だな。バトルシーンが欲しかった。

私がこんな話を聞いている理由は、夏休みの宿題の為である。私に通っている高校では、毎年の夏休みに『地域の文化を調べなさい』という課題が出される。学校は地域文化の理解と保存の為という名目で課題を出しているが、高校3年生で受験を控えている人達にと

つては、だだの迷惑でしかない。

私は現在高3生なのだが、受験勉強をする気にはなれないので、学校の課題をやることに逃げている。何もしないのは罪悪感に苛まれるのでだめ。

「悪いことするなって言いたいだけの物語じゃないの？」

この物語のおかげでこの村の中では「馬鹿なことするとむこうの世界、行っちゃうよ」という合言葉らしきものが昔から使われている。子供の頃にはことあるごとに言われるので、嫌気が差すのだ。

「いや、この辺りでは本当に神隠しにあった人間が大勢いるらしいぞい。むこうの世界に行ったんじゃろう」

「らしいってどういう事？」

「わしが生きてる間にそんな事が起こったことは無いのでな。ずっと昔に頻繁にあったそうじゃ」

「へー」

神隠しとこの物語が関係してる訳ないでしょ。近い内に実験して証明してみようか。こんな非現実的なふざけたおとぎ話に対して真面目に実験したら、レポートを彩る面白おかしいネタになるだろう。

「変な気は起こさんことじゃな。どうなっても知らんぞ」

だが断る！……とは思っても口には出さず、素直に頷いておく。老人の話が長い。もし刃向かいでもしたら、ガーガーと小言を浴びせられる。

「婆ちゃんありがとね。これで宿題が片付く」

宿題のネタに困り、思い付きで聞いたのだが、中々興味深い話だった。ちっちゃい頃に散々聞かされたものだけど、今改めて聞くと現実的な視点で見ることが出来て面白い。

「わしも満足じゃ。久しぶりに真面目に話せた。最近の若者達にこの話をしても『はいはい』としか言わないからな」

それはそうだ。私だって妖怪の存在なんて信じない。神隠しなんて無いという前提で実験するつもりだし。でももし本当に向こうの世界があったら行ってみたいね。

「私はその物語を信じるよははは。じゃあねー」

そして私はマイ格蘭マの家を後にした。明日は学校で補習がある。……丁度良い。奴を呼ぼう。

.....

翌日。学校に向かった私は、すぐさま緑色をした奴の元へ駆けつける。

「といついことで早苗、明日山に行こうか」

「なんですかいきなり」

話し掛けたのは我が親友東風谷早苗。神社に住んでいるというところから、クラスでは珍らしがられていた存在だ。

私と早苗は両方とも見た目が緑っぽい色なので、皆から『葉緑隊』と呼ばれる。私、木葉緑の名前の三分の二の漢字が使われているのだ。まことにいかんである。

「私は昨日やらなければならぬ使命ができたのだ。それには君が必要なのだよ」

「遊びたいんですね。どうせ断つても明日直接家に来て、執拗につきまとうつもりですよね」

「分かっているじゃないか」

早苗を遊びに誘うのは月に2回程度だ。高3になってもこのペー
スは崩さない。本当はもっと遊びたいのだが、早苗には神社の仕事があるので遠慮している。私エライ。

「で、明日は山で何をするつもりですか？」

「うむ。壁の向こうに行こうと思う。まあ山じゃなくてもいいんだろうけど？ せっかくだし？ どう？」

「はあ。良いですけど。壁の向こうって……あの物語（笑）の事ですか？」

「そう」

「またメルヘンな事を思いつきますね。頭大丈夫ですか？」

「私はハゲてない」

「うん。もういいです」

昔は老若男女全ての人々があの物語を信じ、恐れていたが（婆ちゃん世代までかな）最近の若者はまるで信じていないので、この話はギャグみたいな扱いをされている。現に早苗もカツコ笑いと言っ
てしまっている。一体何が若者達の価値観をそこまで変えたのだろ
う。

「……もし向こうの世界に行っちゃったら妖怪に食べられて死んじ
やいますよww」

「妖怪の捕食方法って見てみたいよね」

「行ったら帰ってこれないかもですよww」

「壁って何で出来てるか興味深いよね」

「……はあ分かりましたよ明日一緒にさせてもらいますよ」

「よし決まった」

早苗はこんな残念そうな反応をしているが、嫌がっている訳ではない。形式上のやり取りだ。誘った私より楽しんでいるんじゃないかって時もある位だ。早苗によると、「思い出作りは大事です」とのことだ。

……階段の上で高笑いしている人がいるが早苗ではないだろう。

「ハーツハツハツハ！ どうした緑！ 怖気付いたか！」

早苗だった。早苗、戦隊モノとかロボとか好きだからね。時々暴走するんだ。時・場所を問わずに。

「キサマがここに来ることは分かっていたぞ！」

「何！ バレていただと！？ 流石コチヤネットワーク……侮れん！」

適当に合わせてみる。もう慣れてる事なのでスラスラと台詞がでてくる。端から見れば、私も同類だと思われるのだろう。見る人なんて誰もいないが。

「トウツ！」

スタツ！ という効果音でも合うかのような、華麗な着地をする早苗。

「はいじゃあ帰ろーね」

「そうですね」

そして何事もなかったように帰路についた。全てはいつものことだ。

こういつ平和な日々が永遠に続けばいいのに。生きているなら働けっという決まりがあるから、遊んでいられるのはあと少しだっと思つと泣きたくなる。

.....

翌朝。守矢神社にて。

「早苗様！ お迎えに上がりましたぞ！」

ピンポン！ピンポンピンポンピンポンピンポンピンポン
ポーン！！

チャイムのボタンを連打し過ぎて指が痛くなった。否、指だけではないかもしれない。守矢神社の壁には、触れた者の体を徐々に腐らせてしまう特殊な結界が張り巡らせてあるかもしれないのだ。たった今守矢神社に触れた私は、指先から症状が出始めて腕へ体へと……飽きた。

「……………」

ちよつと早すぎたかな。現在午前3時20分。今は夏だからこの時間でも少し明るい。神社の朝は早いらしいから、こんな時間でも大丈夫だと思ったのに。

……ガラ、と玄関の引き戸がゆっくり開く。やったか。

「早過ぎです。帰ってください」

三十秒で十センチ程開かれた引き戸から、気だるそうな目つきをした早苗が現れ、怒られた。

負のオーラを帯びた早苗さんと目を合わせたくなかったので、横を見てみると、人影が二つあった。一つは注連縄をこちらに見せつけるように持ち、赤い服を着た人だ。すごく睨んで来る。

もう一つは、目玉が付いた妙な帽子を被った子供だ。恨みのこもった目で私を睨み付けて来る。一体誰なのだろう。

どす黒い視線を三人に向けられ、居心地が悪くなった私は満遍の笑みを2人に向け、そっと立ち去った。

それにしてもあの二人は何だったんだ。こんな時間に参拝か？ いやそんな雰囲気ではなかった。もしかして守矢神社に住み着く悪霊なのか。ひえーコワイコワイ。あとで早苗に聞いてみよう。

3時間後。ずっと神社の階段で座って待ってました。座り疲れました。

「うう……早苗エ……最後に……君に……会いたいよお……」

ピン………ポン………と、チャイムの音も疲れ気味。

「おはようございます」

「早苗……やっと……会えた……！」

「朝ごはん食べていきすか？」

「遠慮せずに頂きたいと思います」

ということ家で家の中に入れてもらった。神社の中と言った方がいいのか？ 家と神社がつながっているのだ。

まあ良い。さっきの悪霊について聞き出してみよう。

「ここで質問です。この神社には早朝から参拝しに来るような人はいますか？」

まずは当たり障りのない所から攻める。こうして、早いうちに一番の可能性をつぶすのだ。

「いませんよ」

「そうだよ。じゃあ早苗、次の質問に参りましょう。ここって幽霊とか出るの？ 私さっき幽霊っぽい見たんだけど」

「はあ！？ どこですか？」

普通なら「頭大丈夫？」と返されそうだが、当たり障りの無い所から始めたことにより、会話が成立する。

「私がピンポン連打したとき。注連縄持ったお姉さんと変な帽子被った幼女見た。というか睨まれた。あれは参拝しに来た感じじゃないよ。幽霊だよ」

「！……ああ。見てしまったのですね。あれは本物ですよ。見たら最後……酒を飲まされますよ」

あれ？ 一瞬早苗が動揺したような……なんというか……バレた！
みたいなイメージ？

あれ？ 一瞬早苗が動揺したような……なんというか……バレた！
みたいなイメージ？」

「思ったことをそのまま口に出来るのは素晴らしいですね」

「うまきはぐらかされたようだ」

「あれは幽霊では……無いですよ。家庭の事情です」

あまり触れてはいけない事か。それにしても「家庭の事情」って言い訳便利だね。私も面倒な時とかよく使うよ。

そして朝食。食卓には湯気のたった白米と湯気のたった味噌汁と湯気のたったアジの開きと湯気のたったお漬物！？ ……何も言うまい。食べ方は人それぞれだ。

しかし全品見事に熱そうだ。真夏のこの日にそれはキツイ。冷たい麦茶が欲しいところだが、頼む前に湯気のたった緑茶を渡された。

「……すべての生けるものに感謝し今日も我らが生き残れるこの幸運に感謝しその他諸々に敬意を捧げさああっつあつな料理を食そう」

「ようするにいただきますですね」

「朝から酒飲むぞー」

「わーいアジだー」

さっきの悪霊が居る。どうやらただの同居人だったらしい。それでさっき睨まれたのか。でもそんなのいるなんて聞いた事無いぞ。

「家庭の事情は？」

「解除されたんですよ」

「そうですか」

家庭の事情は簡単に解除できるものらしい。そして、注連縄を持ち（今は持っていない）、赤い服を着ていた（今はジャージ姿）姉さんにすごく見られている。睨まれている訳ではない。

「早苗の友人。朝から酒飲もう」

姉さんがとんでもない事をおっしゃる。未成年に酒を勧めるなんていい度胸だ。乗ってやる。

「私、木葉緑と申します。お酒はもらいます」

私は基本的に人見知りするので、初対面の人にはいつも丁寧な喋り方をしてしまう。

「ノリいいね、飴ちゃんあげちゃう。私は八坂神奈子だ。神奈子ちゃんでもいいぞ」
やさかかなこ

妙に軽いテンションなこの人を見て私の頭に電撃が走る。気付いてしまった。この人は遊び人だ。人前だというのにジャージ姿だし朝から酒飲むし。なんというか……覇気がないね。だらしない。きっと神社に居座って金をむしりつつっているんだ。こんなのが居るなんて他人に言えない。近所の評判が下がってしまう。家庭の事情を暴いてしまった。

「神奈子ちゃんなんて歳じゃないでしょww。そして私は洩矢諏訪子^{わこ}。気軽に話しかけてね！」

もりや……守矢……そうか。諏訪子は守矢神社の後継者だな。そして早苗はその世話役だ。ふふふ。私にはすべて分かるぞ。今の私は冴えているのだ。

「お酒は20歳になってから。用法用量をよく守り、正しくお使いください東風谷早苗^{とうふうたけなほ}です」

神奈子ちゃんが私に酒を与えるのを阻止するついでに、何故か早苗も自己紹介する。もう知ってるのに。

「若いうちに酒の味を覚えさせておいた方が後々楽になるぞ？」

神奈子ちゃんは私の中ではもう最低評価だ。もう乗ってあげない。

「神奈子ちゃんやっぱり酒は要りません。駄目人間になりたくないの」

「私の酒が飲めないというのかー！」

「じゃあわたしがのむー」

横から幼女が言う。飲ませていいのか？

「おっじゃあ飲みくらべするか」

なんかいつもものやってるみたいなノリで言う。早苗さん！ やめさせないの？

「お二人共、未成年の前でこういう事はやめてください」

あれ幼女って未成年だよな？ 駄目人間と未成年な筈の幼女が未成年である私の前で酒飲むのをやめろって早苗は言ったんだよな？

……はあ？

「あーこの白米オイシイナーH A H A H A」

「わー緑が壊れた！」

「大丈夫か！ しっかりするんだ！」

「緑さんそれ食べ物じゃない！ 諏訪子様の帽子です！」

……混乱しつつも何とか朝ごはんを終えた私であった。

「さあ出発するぞー早苗、準備はできてるか？」

「はい」

返事をしつつも早苗は懐にお札の束をしまったりお祓い棒らしきものを腰にとりつけたりしている。遊びに行く準備というか武装だ。まさかあの話本気にしてるの？ 本当に向こうの世界に行けて、こわーいこわーい妖怪さんに襲われるのか。

「早苗」

ジャージ姿の神奈子ちゃんが真剣な表情で早苗を呼び、耳元で何かを囁いている。金をくれとでも言っているのか？ だらしない。

「任せてください。ちゃんと住む場所を見つけてきますよ」

高校生に家を探させるのか！？ しかも山の中で！？ だらしない。

そんな人間なんか睨み付けてやる！

「……ん？ おお」

神奈子ちゃんが私の視線に気付いた。そして、相手は何を思ったのか、万遍の笑みを浮かべてきた。私をバカにしているのだろうか。だらしない。

「負けるなよ……！」

ニヤニヤ顔で何か言われる。すでに負けている神奈子ちゃんに言われたって、自信はつかない。

「早苗。無理はするな」

「大丈夫ですよ」

一方で幼女が早苗応援する。諏訪子はまだ小さいので、神奈子ちゃんが早苗をいのように使っているのが分からずに、適当に言っているのだろう。そんな諏訪子を私は哀れみの目を見た。

すると、幼女が私を上目遣いで見返して来た。私と幼女の身長差は結構あるので、そうしなければならぬのだ。

「緑。わたし達を視ることが出来る君は特殊な力をもっている。もし君が危険な目にあつた時、その力が君を助けてくれるかもしれない。だけどその力を過信してはいけないよ。人間に過ぎた力はその身を滅ぼしてしまうから」

難しい事を言ってきた。何かのアニメのセリフかな？ 私もそういうカッコイイ台詞を言いたくなる時期があつたな。……今も十分そうか？

「はい。諏訪子様」

とりあえず適当に合わせる。子供の夢を壊してはならないのだ。私の返事にて満足したのか、諏訪子は頷きパタパタと駆けて家の奥にいつてしまった。可愛らしい。

「じゃあ神奈子様。神社をよろしくです」

「なに。私は長い間この神社を守ってきたんだ。安心して行ってきな」

何十年も自宅警備をしているのか。いったいどこまで私の評価を下げればいいんだ。だらしない。

私の神奈子ちゃんに対する評価が最低ラインに差し掛かった所で、私達は神社を後にし、山に向かった。

.....

この辺では山といったら庸改山よつがいやま、湖といったら奇利湖きしこしかない。
庸改山は昔は妖怪の山といわれていたのだが、ある日偉い人がこの山を隅々まで見てまわり、「何も無い普通の山じゃね？」と評価した。それを聞いた周辺住民は、『妖怪の山』のままでは不吉なので『庸改の山』に改名したそうだ。凡庸な物に改められたという意味が込められている。

奇利湖の周りにはの変哲もない森があり、最深部にはボロボロの神社がある。以前早苗と森に行ったので知っている。

そして私達が今日、何故山に来ようと思ったかというところ、ある時を越えるゲームの中で「山はいいよね」という台詞を見て、行きたくなっただからだ。

「山はいいよね」

「で？ 妖怪でも探すんですか？」

「その前に壁の向こう側に行かないとね」

「どうするんですか？」

「ほら、あれ。『馬鹿なことしてると向こうの世界、行っちゃっよ』だよ」

「馬鹿なことをするんですね」

「それで私はメニューを書いてきた」

早苗にメニューを書いた紙を見せてみる。

1 ・奇声をあげながら全力疾走

2 ・常に高笑いをし、二人でバトル

3 ・いきなり料理をしよう

?) ヤカンに水を入れ強火で沸騰させる。

?) 野菜を1口大に切る

?) ヤカンの水を塩・胡椒・醤油で味つけする

?) ヤカンに入ったスープ的なものを水筒に入れる

?) 水筒に入ったスープ的なものをうっかり地面にこぼす

?) 1口大に切った野菜に「こんにちは」と言い、完成!

食べ物は大事にね!

4 ・落とし穴を掘り、わざとハマる

5 ・そのまま熟睡してみる

「ここまですれば向こうに行けるんじゃない? というかそれで行けなかったらあの物語は嘘だったことだ」

「……………変態ですね」

書くのは簡単だが、実行するには相当の勇気が必要だ。

「早苗。走るよー!」

「いきなりですか!？」

そして私は走り出す。風のように。人々はそんな私を“山越えのロケット”と呼ぶ。嘘だけだ。

「くぁ wse drift gyふじこ1p~~~~~!!!」

奇声を上げて全力疾走。何かのしがらみから解放された気分になり、スツキリする。この爽快感クセになりそうですよ。

「イヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒッ!」

隣で早苗も走っている。断わられるつもりでメモを見せたのに、まさかこんな変態行為に付き合ってくれるとは思わなかった。

声を出しながら全力疾走するのはとてつもなく苦しい。息ができない!

結局走るのは30秒位しか続かなかった。もう無理だった。まだまだこれからやる事はあるんだから体力は温存しておかないと。

「ぜえ……ぜえ……さ、早苗!バトルだ!」

「はぁ……はぁ……受けて立ちます!」

そして私は早苗に殴り掛かる。が、綺麗に避けられる。

「甘いですね」

と、早苗は伸びきった私の腕を掴みとり、慣性の力を利用し引き込む。ああ! 地面が目の前に!

「だがそう簡単には倒れない！」

私はジャパニーズ・ジュードーの概念を利用した前回り受身を使い、体勢を立て直す。その直後、早苗は飛び蹴りをしてきた。

「威力は高いけど……」

スキが大きい。私は地面すれすれまで姿勢を低くし、空中の早苗を持ち上げる。

「どりゃー！」

「ひゃっ！」

……持ち上げたのはいいけど、そこから何をすればいいかわからない。というか私の腕力ではここから大技に繋げることは出来ない。すでに腕が限界なので、早苗を落とす。

「ほーれ」

すると早苗はバック転をして、美しい放物線を描きながら空中で1回転し、体操部もビックリな程完璧な着地をする。こんな事できたんだ。

「終わりだ……」

そう言って早苗は、目の前から消えた。

「うぐっ……」

たぶん目にも止まらぬスピードで私の腹を突いてきたのだと思う。人間離れしている。というか本気で殴ったの!?

痛くて気持ち悪くて、何が何だか分からなくなる。視界がごちゃごちゃになっている。頭が上手くまわらない。ああ駄目だ……少し寝よう……

これが気を失うってことなのかなスゲー始めてだ自慢できるワイワイという下らない言葉だけが、私の頭の中をぐるぐると回っていた。

「緑……ごめんなさい……私が向こうに連れていきますから」

.....

朦朧とする意識の中、そんな声が聞こえた気がした。

「ハッ！」

辺りを見回す。もうすっかり夕方だった。

「やっと気が付きましたね！」

早苗の顔が目の前に迫る。頬を少し赤らめてみると、早苗は慌て離れた。初々しい。

「もう遅いね……諦めようか？」

もう一度辺りを見回すが、変わっている所なんて無かった。たぶん。周りは木ばかりなので少しの変化なんて分からないだろう。

「あれだけ変態行為をしていたんだから、実はもう向こう側にいるのかもしれないね」

早苗が冗談を言う。変態行動メニューの内、まだ2つしかやっていない。こんな事じゃ向こうの世界に行けないということが証明されない。変態パワーが足りない。殴られ損じゃないか。くそ。

「そつだ貴様何故そんなに強い」

「神だからです」

度々早苗は自分のことを神だと言う。私はいつものものように「ああそつだったね」と返した。追求する気は無くなった。夕方特有の、低いテンションだ。

「では暗くなる前に下山しましょうね」

「はいはい神様」

二人は立ち上がり、来た道に戻る。

「奇跡は起きたのでしょうか」

「ははは。君はロマンチストだなあ」

しばらく歩くと、開けた眺めが良い場所に出た。

「あれ？ 何か景色が違う」

火の無い所に煙は立たぬ（後書き）

次から幻想郷だー！

手足を措く所はないのか（前書き）

にわめ。

手足を措く所はないのか

私は確かに今日来た道に戻っている筈だ。一本道だから迷う訳無い。

「歴史を感じさせる木造住宅が見える」

遠目からでよく見えていないだけだろう、夕日のせいで変な色に見えるだけだろう、と自分自身に言い聞かせようとするが、心の奥底では既に、ここはいつもと違う場所だと理解していた。

「私達の住んでいる村には見えませんね」

「……取り合えず山、降りよう？ このままだと野宿する羽目になるよ」

歩きながら、ここはどこだろう？ あのおとぎ話は実話だったのか？ そんな事をずっと考えていた。なので、突然目の前に人が現れたことに気付かなかった。

「……人間。ここを妖怪の山だと知っていてここに居るのか」

そこには、大きな刀を持った少女が立っていた。

「え？ なにその刃物」

少女が言っていた『妖怪の山』って、この昔の呼び方だよね。古き良き木造住宅街があり、妖怪の山があり……タイムスリップしたのだろうか？

「我ら天狗の地を踏み荒す人間よ」

分かった分かった。全てを受け入れようじゃないか。理解は物事をありのままに受け入れる事が重要だからね。

そうして自分を落ち付かせ、目の前の少女を観察する。

服装は……大ざっぱに言うと、上が白で下は黒のスカートで、和服と聞かれれば「……そうかな」と答える程度の和風衣装。小さな赤い帽子を頭に乗っけている。右手に剣、左手に紅葉マークの入った盾を装備している。

髪は白色でケモノミミのような癖っ毛がある。本当にそこに耳がある訳では無いと思う。見た目は可愛いかもしれないが、こちらに向けている敵意が、それを打ち消している。

言動から察するに、彼女は自称天狗らしい。「我ら」と言っているので、何かの部族の人だろう。

「不可侵の掟を破った罰、死をもって償え」

いやいやいやいや。何なの『死をもって償え』って。ただの不法侵入だよ。それって罰金とられる程度でしょ？

一瞬混乱しかけたが、昔の部族では、こういった理不尽な事は普通だったのかもしれないと解釈する。

「な、何でそんな重い罰なんですか!？」

刃物を向けられ、悲鳴をあげそうになるが、何とかこらえて敬語で話す。礼儀正しい子だと思われれば許してくれるかもしれない。早苗は隣で、相手の様子を窺っていた。

「……その奇妙な格好は……外の世界の人間か」

「すみません。ここは何処ですか？」

早苗がいきなり話しかけた。さつき少女が妖怪の山と言っていたじゃないか。早苗の意図が分からない。

「ここは幻想郷。我ら妖怪の、楽園だ」

早苗はそれを聞いて、いつでもお札を出せるように身構えた。それを見た天狗少女も一瞬身構える。余計な刺激を与えないで欲しい。幻想……妖怪の楽園……。おとぎ話でも同じような言葉を聞いた覚えがある。あの話は実話だったのだろうか。有り得ない有り得ないと言ったバチが当たったのか。タイムスリップをした訳ではないようだ。

「外の世界の人間よ。幻想入りを果たし妖怪山に至ったこの不幸、

自らを呪うが良い」

天狗少女が難しい事を言っている間に、早苗が私に密着してきた。

「（……何も言わずに聞いて下さい）」

早苗が耳打ちしてくるが、私は相手の心証を害さないか心配だ。

「（……緑の手を叩いて合図するので、そしたらすぐに向こうに全力疾走して下さい）」

と言って、早苗は村の方を指す。

「何か企んでいる様だが、逃げようとしても無駄だ。我ら天狗の力をひ্যাあー！」

少女が喋っている途中に私は全力で走り出す。早苗が私の手を軽く叩いたのだ。私達が走り出すと同時に早苗はお札を5、6枚天狗少女に投げ付けていた。

追っては……来ない。見えない壁にでも遮られているように、少女は何もない空間に手をつき、動き出さなかった。

「どうして外の世界の人間が結界を張れるんですかあ！？」

天狗少女の叫び声が聞こえた。その言葉にはさっきまでの威厳がまるで無いのだが、あれが地なのだろうか。

「とにかく遠くまで走りましょう」

隣で走っている早苗が言う。

「詳しい事は後で話しますから」

体力、持つかない。

.....

走ること数十分。やっとのことで山の麓辺りまで降りてきた。

「.....ここまで、来れば、大丈夫、じゃない？」

「もう少し、頑張り、ましょう」

そろそろ体力がヤバイのだが。終わりの見えないゴールに私は挫けそうになる。

「もう、限界だよ。少し、休ませてよ.....」

.....。返事がない。ただの早苗のようだ、ってあれ？ 隣に早苗がない。

「えー！？ どこ！？ 早苗！」

後ろを振り返ってみると、早苗が立ち止まっていて、何とも言えない表情をしていた。様子がおかしい。

よく見ると早苗の胸から角みたいな物が出ていた。なんだろうあ

れ？　と思っていると早苗が苦しそうな顔をして倒れてしまう。

「天狗の力を、舐めるな」

早苗の後ろには、先程の少女が立っていて、持っている刀から、赤い液体が滴り落ちている。

「……っ！！」

その光景を見て、あの言葉は警告じゃなくて本気だったのか、と理解する。目の前の少女の可愛らしいという印象が、恐怖に塗り替えられる。早苗が何だかよく分からない方法で足止めして、体力の限界近くまで全力で走ったのに。そんな私達に追いついた彼女は顔色一つ変えていなかった。

ああ、私の人生はここで終わるのかな。理不尽だ。偶々ここに居ただけなのに。こんなことなら山に行こうなんて言うんじゃない。た。もし帰れたら真面目に生きよう。ちゃんと勉強して、働いて、普通に暮らそう。普通は良い。皆と一緒にの事をしていれば、何の問題も起きずに一生を全う出来るのだから。

「これで厄介な術士は封じた。もう逃げられまい」

天狗少女に言われ、倒れている早苗の事を思い出し、怒りが込み上げてくる。どうして早苗が刺されなければならぬ？　山に行く事を誘ったのは私なのだから、早苗は悪くない。一番の原因は私だ。私を先に狙えよ。何だよ、入っただけでゲームオーバーって。クソゲーにすら値しないよ。キャラ作るなよ。

「安心しろ。一突きで楽にしよう」

嫌だ。終わりたくない。早苗と一緒に帰って平穏な生活を送るんだ。無駄かもしれないけど、最後まで抗ってやる。

私は近くに落ちていた丈夫そうな木の棒を素早く拾い、少女の首辺りを狙うように構える。中段の構えだ。

「そんな物で私に勝つ気が」

「うるさい。キャラ作るな」

「……………。ぜ、前言撤回だ。貴様は私に刃向かった事を後悔する位苦しませてやる」

威厳を保たせる為に、声色は変わらなかつたが、言う事が子供っぽくなつた。凶星をつかれて怒つたかな。

そこで私はふと思いついた。一撃で終わらせないとすなわち、戦闘の時間が長引き、それだけ反撃のチャンスが増えるのだ。これなら勝てるかもしれない。

「私の名は犬走椀いぬはしりもみじ。あの世で貴様が呪う名だ」

そう言つて椀は私の前から消える。このシチュエーションは、早苗が私を気絶させた時と一緒に。勘で避けてみせる。

私が右に飛んだ瞬間、椀の盾突きが私の居た所に放たれていた。今がチャンスだ。

「食らえっ!」

隙を見せた椀を棒で殴るが、

「まさか攻撃を避けられるとは思っていなかったが、やはりただ偶

然か。その後の動きがまるで成っていない」

「!!!」

素手で受け止められ、更に力づくで棒を折られた。刀は少女が立っていた場所に刺さっている。完全に遊ばれている気がする。

有力な攻撃手段を失ってしまった。もう一本棒を探そうにも、無防備な姿を晒す訳にはいかない。武器を失った私に残されたのは、自分の拳のみだ。棍の刀と私の拳ではリーチが違い過ぎるので相打ちすら狙えないだろう。……ってあれ？ 棍がない……

「一つ。まずは逃げ足を断つ」

「うあつ!!」

突然右足に激痛が走る。たまらず私は倒れてしまう。立ち上がるうとしたが、痛くて無理だ。右足を見ると、刀で斬られたような傷があった。いや、ようなではなく確実に斬られた。前にはいつの間にか刀を持った棍がいた。

「二つ。抵抗する術を失くす」

「ううつ!!」

棍が消える。右腕を斬られる。そんな事しなくても、すでに抵抗出来ない状態なのに。感覚が麻痺してきた。血がすごい。反撃のチャンスが増えるなんて言ったの誰だよ。全く動けないじゃないか。

「三つ目。もがく事も許さず」

「いつ!」

左足を斬られる。痛みで意識が薄れてきた。本日二回目の気絶だ。二度と目覚める事は無いだろうが。なぜか早苗の同居人の言葉を思い出す。

(……負けるなよ)

神奈子ちゃんの言葉だ。ごめん無理。このままじゃ負ける。

(君は何か特殊な力をもっている)

諏訪子の言葉だ。本当にそんな力を持っていたら、バンバン使ってやりたいよ。

「四つ。救いを求める事も許さない」

「っ……」

左腕を斬られる。早苗と一緒に遊んだ日々を思い出す。

湖に行つて蛙を捕まえたり森に行つてキノコを採ったり早苗の趣味に付き合ったり……

帰りたいな。何が何でも帰りたい。

「……軟弱な人間よ。これで終わりにしよう。覚悟しろ」

誰か助けてよ。

「……いやだ」

もう色々と限界だというのに、勝手に言葉が出てくる。まるで私じゃないみたいだ。

「この期に及んでまだそんな事を」

相手の話し声なんて聞こえない。私と早苗がこんなに傷付いているのに、何故お前はそんなに元気なんだ。少し位反撃させてくれたって良いじゃないか。

そんな支離滅裂な理論を立て、僅かに残った力で、その不満を思い切り叫んで締め括るとしよう。

「うあああああああつっつっ！……！」

同時に、椀の体に異変が起きた。

「な、何ですかこれはっ!？」

薄れ行く意識の中で目に入ったのは、出血をしながら倒れつつある椀だった。

.....

不覚にも刺されてしまいましたよ。すごく痛いです。とりあえず回復促進作用のあるお札で応急処置はしましたけど……まだ動けません。二人供ここで尽きてしまうかもしれません……
そう言えば明日の夜、神奈子様と諏訪子様に山に行くことを伝えたら、

「早苗、向こうの世界ってのは本当にあるんだ」

「その世界は近いようで遠い世界。普通の人は行けないよ」

と言われました。神であるお二人にそんな事言われたら、信じざるを得ないですね。

「だけど、早苗が奇跡を起こせば、そこに行けると思う」

「明日行くんなら、そこに行つて下見をしてくれないかい」

最近信仰が薄くなって来てますから、どこかに引越すという話は前々からしてました。“常ならむもの”が住むそこでなら信仰を得る事が出来るかもですね。

「だけど、そこって妖怪の住み処でもあるんですね。」

「緑と一緒に行くのですが……」

私一人なら妖怪を追い払えるかもしれませんが、誰かを守りながらなんて無理だと思います。あ、緑を放っておいて私だけ行くとか？でもそんなことしたら緑が突然居なくなつた私を探し続けるだろうし……

「連れて行くんだ。緑は奇跡の『きっかけ』となる。それから、向こうで危険な目にあつても、必ず帰つて来れるから」

「最後の思い出作りになるだろう。きつと一生残るものになるだろうしね」

何か深い理由がありそうですね。追求はしません。お二人の考えは、私のようなものにはおそらく理解出来ない事でしょうから。

「分かりました」

そして今日になります。早朝に緑が来て、普通の人には目視出来ない筈の神奈子様と諏訪子様を見たと言いました。その時は嘘だと思いました。お二人が私以外の人間の前に立つというのもあり得ない事ですし。

でも朝食の時間の事です。緑とお二人が当たり前のように喋っているじゃないですか。驚きですよ。緑は神様を目視してるし神奈子様と諏訪子様は一般人の前でじゃれ合うし。

出発する直前に、諏訪様様が緑に意味深な事を言いましたが、いったいどういう事だったのでしょうか。気になりましたけど、帰ってきたら聞こうと思い、黙っていました。

山では、能力を使う所を見られると色々と厄介なので、緑を気絶させました。ごめんなさい。

そんなこんなで、こちら側にやってきたのですが、まさかいきなり妖怪に会うとは……

「一つ目。まずは逃げ足を断つ」

え？ ……緑が足を斬られた。私の大事な友人を傷付けないで！
もう、何で私を置いて逃げなかったんですか！？

「二つ目。抵抗する術を失くす」

「三つ目。もがく事も許さず」

「四つ目。救いを求める事も許さない」

緑がどんどん斬られていく。やめてください緑は許してあげて下

さい。巻き込んでしまったのは私なんですから。
私は椀を押さえようと、痛みを我慢して立ち上がります。
すると、

「うあああああああつつつつつ！！！！」

「な、何これ!？」

椀の体が突然傷だらけになり、そのまま倒れて動かなくなっ
てしまいました。一体何が起きたのか分かりません。

……でも、逃げるチャンスが出来ました。

私は気絶する緑を素早く止血し、慎重に抱えました。とにかく人
の居る場所まで行きましょう。

く、苦しい……。緑を抱えながら歩いているので、胸の傷が余計
に痛みます。もうどれ位歩いたかは分かりません。私はかなりの距
離を歩いたと思うのですが、実際は少ししか進んでいないのかもし
れません。ただ一つ言える事は、山を抜けた事です。

遠くに一軒家が見えますが、そこまでたどりつけるでしょうか。

あ、でもそれよりも手前に農作業中の人がいきました。景色と同化し
ていて、分かりづらいですね。

緑を抱えた私は何とかそこまでたどり着きました。

「す、すいません」

農作業に夢中で、近付いて来た私達に気付いてないようなので、
声を掛けました。

「ん？ ……わ、大変」

その人は、赤い帽子を被り、オレンジ色のエプロンをした金髪の少女でした。

「手当てしなきゃ。取りあえず、あそこの家まで頑張れる？ 手、貸そうか？」

「友人を、お願い、します……」

「分かった。じゃあ付いてきて。ゆっくりでいいから」

緑を任せたことで少しは楽になりましたが、辛いものは辛いです。ゆっくりゆっくり歩いて、やっと家にたどり着きました。途中、少女は秋穰子あきみのりこと名乗りました。

「さ、入って入って」

部屋の中まで案内してもらい、倒れ込むように座ります。

「お姉ちゃん！ 大変大変ー！」

「………どうしたの？」

穰子が姉と呼んだ、真っ赤なワンピースを着た人が部屋に入ってきました。

「あら、怪我人？ ……もう手遅れね。全ての物には終焉が訪れる

から、逆らうことは出来ないわ」

「もう、何言ってるのお姉ちゃん！？ ごめんね、こんな事ばっかり言う人だから」

一瞬ドキつとしました。悪い冗談です。穰子の姉は、床に横たえられた緑を手厚く介抱しました。本当に口だけのようですね。

余った穰子は、私の方に回って来ました。

「はい。これ食べて安静にしててね」

「こら穰子。怪我人においもなんて出さないの。喉に詰まったら大変でしょ」

そんな和やかな光景を見て、やっと安心出来る場所に来たのだな、と思い、そのまま私は眠りについてしまいました。

.....

.....腕が痛い足が痛い。あれ？ 私生きてる.....？

「なんじゃこりゃあー！」

一度言ってみたかっただけ。特に意味はない。私は今、七畳程の広さの和室に安置されているようだ。

「え！ いきなり何か言った！」

目の前に、おいもの匂いがする少女が立っていた。そういえば、今日お昼食べてないな。

「誰だ貴様は！」

のほほんと緊張感の無い顔をしているので、高圧的な態度をとってみる私。大の字で寝ている状態で。同時に私は助かったのかなー、と思った。

「私は秋穰子って言うんだけど……」

「なるほど。大体分かった」

「え！ 何が分かったの!？」

……この子面白い。私が人見知りなのを忘れる位、良いリアクションをしてくれる。

「……あら。起きたの？」

二人の会話（叫び合い？）を聞いたのが、真っ赤な人が開けっばなしの襖から和室に入って来る。

「この人は姉の静葉しずはだよ。暗いけどいい人だからね」

「どうも。あなたの恋人は隣の部屋に埋葬されているわよ」

私に恋人なんていない。私に恋人なんていない。たぶん

早苗の事だろうけど……埋葬って！？　もしかして……！

「え！　あの人恋人なの！？　あ、心配しないでいいからね。ちゃんと元気に生きてるから」

穰子がああいう事ばっか言う人だから、と付け加える横で、静葉が不敵な笑みを浮かべる。何はともあれ、良かった良かった。

「緑！　目が覚めたんですね！」

いつの間にか静葉が居なくなつて、代わりに早苗が現れた。早苗を呼びにいつてくれたのだろうか。

「早苗！　傷は大丈夫か痛いっ！？」

さっきから叫ぶ度に傷に響くのだが、何か叫んでしまう。

「私は何とか完治させましたけど……緑こそ大丈夫なんですか？　二週間位眠ってたんですよ？」

二週間って。学校の補習を全部欠席してしまった。まあいいか。

「体中が痛い。何とかしてくれー」

「待ってて。今楽にしてあげるわ」

再び現れた静葉の右手には、包丁が握られていた。

「お姉ちゃん！　早まらないで！」

「落ち着いて下さい！」

「ひい！ 殺さないで！」

三人が一斉に声を上げるが、静葉は無表情のままだ。

「……ほら。これを食べると元気になるわよ」

静葉の左手にはリンゴがあった。またやられた。この人ずっと無表情だから、本気なのか冗談なのか判別出来ないよ。

リンゴを食べて落ち着いた所で、話し合いタイムに突入しようと思っ

「えーと、ここはどこで、一体何が起こったんですか？」

抽象的すぎて伝わらないかな、と思っ

ている内に、早苗が答えてくれた。

「ここは常ならむものが住む世界、幻想郷です。私達はここに来て
すぐに妖怪に襲われました」

手足を措く所はないのか（後書き）

椀ごめん。

腹八分に医者要らず（前書き）

さんわめ。

腹八分に医者要らず

うわー、やっぱり来てしまったのか。壁の向こう、幻想郷に。

今まで会話から予測してた内容を、こうして他人から改めて言われることで、頭の中がスッキリした。でも腕と足は痛い。身動きがとれない。

「妖怪が本当にいるなんて、幻想郷って怖い所だねえ」

「山の妖怪はプライドが高いのばっかだから、近付かない方がいいよー」

緊張感の無い声で返す秋穰子。全く説得力が無い。いやだからと言って、また行こうなんて思わないからね。

「知能が高い妖怪なら、怒らせなければ人間に対しても社交的らしいですよ」

早苗は私が寝ている間に、一通りの事を秋姉妹から聞き出したそう。妖怪が社交的やっていけるのか。

「じゃあ椀は？」

「あれは天狗と言ってですね、余所者が山に入るとすっごく怒る妖怪です」

「だからいきなり襲ってきたのか。……なんで私達生きてるの？」

「それはよく分からないんです。いきなり椀が倒れて、私は夢我夢中で緑を抱えて逃げましたからね」

「そうなのか。ありがとうね早苗。生きてる事実さえあれば十分だよ。幻想郷は理解できない事でいっぱいだからね」

「そうですね。幻想郷を理解しようとしてはいけませんね」

幻想郷だから、という理由で納得してしまう私達。また一つ、素敵な言い訳『幻想郷だから……』が増えた。

「……幻想郷を馬鹿にされている気がするわ」

静葉が不満そうな声色で言い残し、どこかに行ってしまった。怒らせてしまったか。

「ちなみに私達姉妹は神だよ。神なんだよ」

「私も神です」

「じゃあ私も神だ」

「嘘じゃないからね!？」

穰子が言い出したおかげで、この場にいる全員神になってしまった。言ってて非常に痛いと言途中で気付いた。

「やっぱり神じゃなくていいや……」

「本当だってば！ 私は豊穰の神なんだから！」

「私は現人神です」

「もう！ 信じてよ！ 私すごいんだからね！」

対抗する早苗と、どんどん子供っぽくなっていく穰子。本当に神だったとしても、こんな神はいやだ。これ以上痛い子にはなつて欲しくないので、ストップをかける。

「はいはい穰子様と早苗様は神ですな恐れ入りますははー」

「やっと分かってくれた……」

得意気な表情になり、落ち付く穰子。単純でよかった。早苗はいつものように薄笑いの表情だった。

そこに静葉様が再び現れる。手には私達を仕留めるための鈍器……ではなく、鍋を持っていた。

「さあ、夕食にするわよ。大勢いるから鍋にしたわ」

「お姉ちゃん……これで15回連続鍋だよ……」

どうやら、私達がここに来てからずっと鍋だったらしい。真夏の夕食がいつも鍋ってどうなの。

「あの私、この通り両手両足が使えなくて、寝たきり状態なのです
が」

「大丈夫よ。穰子が煮えたぎった具材をあなたの口に運んでくれるわ」

これ絶対罰ゲームだ。やはり私達が幻想郷をバカにしたことを怒っているんだ。

「ごめんなさい静葉さん許して下さい」

「へ？」

あれ？ ……怒ってないの？

.....

早苗と穰子がテーブルを持ってきて、私の近くに置く。そして八角形の物体をテーブルの中心に置いた。

静葉が鍋を八角形の物体の上に置き、つまみを捻る。穰子によると、あれは八卦炉と呼ばれるものらしく、用途は物を熱したり、戦闘で使ったりと幅広く活用できる便利グッズだそうだ。八卦炉を使ってビームを出す人間がいるから、気を付けるようにと言われた。

そう言えば、昼から何も食べていないと思っていたのだが、早苗の話聞く限りだと、ずっと寝ていた私は二週間何も食べていない事になる。いきなり食べて大丈夫だろうか。

そんな私の表情を見て察したのか、早苗が話し掛けてきた。

「緑が寝ている間は、野菜ジュースとか青汁とかどくだみ茶とか、色々飲ませてましたよ」

「他にも色々な液体を飲ませたわ……。ふふふ」

「栄養たっぷりだったんだよ」

……。うげ。全部嫌いなものだ。どくだみ茶なんて飲んだ事無いけど、絶対不味いつて。他には何を飲ませたんだ。すごく気になるが、聞きたくない。静葉のニヤケ顔が不安をかき立てるのだ。虫が入ったものとか飲まされてないよね。想像してみると、うう……。吐き気が……。

「あ、そろそろ良いんじゃない？」

こんなタイミングで鍋が食べ頃になる。私は吐き気がしてるのですが。

「秋様、お先にいただきますね。ほら緑、キャベツですよキャベツ」

「熱っ！！」

早苗が熱々のキャベツを私の口の中に入れる。少し火傷したが、これは美味だ。

味噌仕立てのスープ（要するに味噌汁）のしょっぱさが、キャベツの甘さを引き立てている。しかもこのキャベツの甘さが、尋常じゃない。取れ立ての新鮮なものを使っているのだろうか、野菜本来の味がよく出ている。そのまま生で食べたい位の一品だ。キャベツ一つでここまで感動出来るとは、夢にも思わなかった。この一口だけで、さっきまでの吐き気なんて吹き飛んだ。

「次はナスですよー」

早苗が全然冷ましてくれないので、口の中で少しずつ冷ましなが
ら咀嚼する。

……すごい。キャベツの味が強すぎて、味のバランスが崩れるん
じゃないかと思っていたら大間違이었다。ナスもしっかりと自己
主張をしている。やわらか過ぎず、かた過ぎず、絶妙な食感と香ば
しさ。是非とも自分のペースで、ゆっくり味わいたいのだが、動け
ないのでそれは叶わない。悔し過ぎる。

「私達を作った野菜だよ！」

「おお！ 豊穰神様……！」

こんな素晴らしい野菜を作る秋姉妹は、自称豊穰神も伊達じゃな
いと思った。

.....

2カ月経って、現在恐らく九月。カレンダーが無い為、正確な月
日が分からない。

秋姉妹の家でなんとなく過ごしている内に、結構な時間が経って
いた。

私の傷は大体治っていて、普通に歩けるようにはなったが、まだ

本調子ではないので、今はリハビリに努めている。

……ところで最近秋姉妹のテンションがものすごく高いのですが。

「うおー！ 秋じゃー！ 紅葉じゃー！」

「姉ちゃん！ 今日は収穫祭だよ！」

「そんなの知るか！ 私は紅葉狩りを楽しむのだ！」

毎日早朝からこんな調子で、見てるだけでもとても疲れる。静葉のキャラが変わっております。

窓から見える木々の葉は日に日に黄色に変わっていき、秋になりつつあるなー、と時の流れをしみじみと感じた。

「……うわっ。2学期始まっちゃってる」

「帰れるんですかねえ。帰れるとしても、傷が完治するまでは駄目ですよ。向こうで警察沙汰とかになったら面倒ですからね」

私達はいきなり行方不明になったような物だから、今帰ったとしてもどちらにしろ警察沙汰にはなりそうだが。まあ、私の傷を見られたらただの行方不明ではなく、拉致監禁されていたと思われる、もつと面倒な事になるか。

ここに来たばかりの頃は、こんな物騒な所から一刻も早く出たいと思っていただけ、今はそこそこ幻想郷の生活を楽しんでいる。むしろ、私達の世界での生活がつまらないものだ、とも思うようになった。

最近はりハビリと称して、農作業を手伝ったりその辺を散歩したり、のんびりした日々を送っている。あまり遠くまで行くと妖怪に

おそわれる為、行動範囲が秋姉妹の家とその近辺のみだが、秋姉妹が色々世話をしてくれるので不自由はあまりない。

ここは田舎にきたような感じがして居心地が良い。見渡す限り畑で、何の障害物もないおかげで、地平線が見える。私の村は、小規模ながらもみっちり家が立ち並んでいる為、そうはいかない。

「早苗！ 緑！ 収穫祭に行くよ！」

姉に収穫祭への同行を断られた為か、矛先が私達に向いて来た。

「どこでやるの？」

「人間の里だよ！」

人間の里は妖怪の山で見た木造住宅街で、ここからだ和林が邪魔して見えないが、近い場所にあると思う。今の私でも行けるだろう。

「リハビリと情報収集を兼ねて行きましょっよ」

「祭りって騒がしそう……」

嫌そうには言ったが、断わる気は全く無い。

「準備出来た！？ はやく行こう！」

私達が行くのはもう決定事項らしい。穰子がすごい急かしてくる。

「行きなさい！ 私は美しい美しい美しい紅葉を独り占めしてるわ！」

「椀を楽しむんですか!？」

「早苗さん。それもみじ違い」

「行かないならここで紅葉の素晴らしさを語るわよ!」

静葉がさつきから紅葉紅葉椀とすぐくうるさいので、素早く準備をして家を出ることにした。

.....

「お。見えてきた」

秋姉妹の家から歩くこと30分。広大な畑や林を越えて、人里まですぐの所までやって来た。

「収穫祭……収穫祭を感じる!」

「そんな電波出てません」

里に近づくにつれ、穰子がだんだんおかしくなってきた。静葉も今頃紅葉を感じている最中なのだろうか。

「焼き芋がしたいですねえ」

「収獲したてのお芋は私のものよ！」

態度も傲慢だ。まるで私のようだ。

「緑が二人に増えた感じがしますね」

「な、なんだってー」

自分の思っている事でも、他の人に言われるとすごく傷つくことがあるよね。私は常に今の穰子のような状態なのか……。今度からもっと大人しくしよう。

隣にいる穰子は、さっきから「秋じゃ秋じゃ」と低い声でぶつぶつぶ言っている。そうしてくれた方が、無駄に叫ばれるよりは良い。

「うお。何か来る」

村の方から人が猛スピードでこちらに向かって来た。

「穰子様ー！ お迎えに参りましたぞー！」

走りながら叫ぶ村人の声を聞き、穰子はぶつぶつぶ喋るのをやめて目を輝かせる。

「おおー！ 大葉さんじゃないかー！」

いかにも農業をやっている、という身なりをしている大葉さんと呼ばれた人が穰子の前に止まる。

「ささ。他の者達が待っておりますー！」

「そうなの！？ はやく行かないと！」

二人供うつさいなあ、と思っているうちに、穰子と大葉さんは村に向かって走って行ってしまった。私と早苗は取り残されてしまった。

「……………ああ静かだ」

「……………二人で村を見て回りましたよ」

「……………そうだね」

急に静かになったせいで、とても虚しい気分になった。

村に入ったのだが、祭りがあるような活気はなかった。何と云うか、普通だ。

疑問を解決するべく、近くを通りかかった白髪のメイドさんに聞き込みをする。

「何故メイドさんがここにいるんだ！？」

「はい？」

質問を間違えた。あまりにも場違いな格好をしているのが悪い。

「いやいやここは幻想郷だ何があってもおかしくない……………」

「何ですか？」

「あ、すいません。今日は収穫祭をやるんですよ?」

「え? 初耳だけど……」

「は……?」

何ということだ。村の人が収穫祭の存在を知らないとは。今までの穰子のテンションは何だったのだろうか。

「あ、ありがとうございますー」

「いえいえ」

と言って、メイドさんは行ってしまった。

「で? 収穫祭は?」

「この何だかやるせない気持ちを早苗にぶつける。

「……やってるんですよ。きつと。どこかで。私達の知らない所でひっそりと……」

「はあ……村、探検しようか」

「そうですね……」

そのうち穰子も出てくるだろう。

さて始まりました村の探検タイム。

右手には私達の世界の家とは似ても似つかぬ木造住宅及びお店、左手には江戸時代を感じさせる木造住宅及びお店。要するに同じような建物がいっぱい立ち並んでいます。

八百屋と思われる店には、「本日休業」の貼り紙。その他の店は通常営業。活気はあるが、お祭り騒ぎではない程度。

「肉が食べたい」

「そうですねー」

探険しようにも、腹が減っては戦が出来ぬ。そろそろお昼時なので、まずは腹ごしらえをしようと思いつく。早苗にたまたま目についた食べ物屋を示してみる。食事処としか書いていなく、何の店かは見ただけでは分からない。

道中、穰子が「ほらほらこれあげるから好きな物買っていいよ！」と言ってお金をくれた。お札を5枚もらったのだが、私には幻想郷の貨幣価値が分からないので、何をどれ位買えるのかは未知の領域だ。さつきから分からない事だらけだ。

「まあ、何とかなるでしょ」

「自然食レストランみたいな所じゃないといいですね」

秋姉妹の家にいた2ヶ月間は、ずっと農作物中心の生活だった。そんな長い間同じ食品群を食べていると、いくら美味しくても流石に飽きる。私が「たんぱく質を摂りたい……」と言うと、「豆を食べなさい」と静葉が答え、食卓に肉や魚が並ぶ事は無かった。米は蓄えがあるのにもかかわらず、一度も出てこなかったので、主食と

なるものも食べられなかった。

そんな理由で私はつきつきしながらその店に入る。中に居た先客の「天ぷらうどん（めが）1つ！」という声を聞き、ここが何の店なのか明らかにする。

「1111うどん屋だ……」

肉は食べられないのか、と思い一瞬落ちこむが、ふと思いついた事があるので、言ってみる。

「すみません！ 肉うどん2つ下さい！」

「はいよー！」

おおおおお！ やったぞ！ 肉うどんがあった！ 言ってみるべきだね！

「お？ その格好は外の世界の者か？」

先客が私達に気づき、声をかけてくる。紺色の服を着た白髪の女性だ。

私達の服は椀にやられた時に破れていたが、いつの間にか静葉が縫ってくれていて、普通に着られるようになっていた。

「少し話をしよう。私が食べ終わるまで待っていてくれ」

私達も今注文したばかりなのに、あちらが絶対に遅くなるような言い方をする。

このまま遠くの席に行くのも何なので、私達はその女性の向かい側に座る。

……10分位経っただろうか。店のおっちゃんがうどんを持ってきた。

「めが盛り一丁、お待ち遠さん！」

運ばれてきたのは、とにかくでかい器に、揚げ物が山積みになされた物体だった。

「食欲の秋だからな」

そう言って、女性は早速揚げ物の山を崩していく。

「メガ盛りは幻想郷にもあるようですね」

「早苗、全く動じないね」

そしてすぐに私達の所にも、うどんが運ばれくる。

「肉うどん二丁、お待ち遠さん！」

運ばれてきたのは、ごく普通の大きさで豚肉がのったうどんだった。メガ盛りと比べると、とてもかわいらしく見える。

「ついにお肉が食べられる！」

「緑はベジタリアンになれませんね」

「女性がそんな肉肉言っんじゃないぞ。もっとおしとやかに」

言いつつも、揚げ物の山から麺を掘り出し、ずずずずずずと豪快にする目の前の人。その言葉はあなたにも当てはまらないですか。まあいいや、はやく食べたい。

「いただきます」

真っ先に豚肉を口に入れる。

「ああああ……。ひさしぶりだああああ。しみわたるうううう」

「……ごく普通のお肉だけど、すごく美味しく感じますね……」

本当に何の変哲もないただの豚肉。噛んだら歯につまる位のものだ。そんなのも2ヶ月ぶりだと、高級な物を食べているかのような錯覚に陥る。

「かつおだ、かつお出汁だ……！」

「……涙が出てきました」

秋姉妹の家では決して味わうことの出来なかったこのうま味。何故あそこまで動物性の食材を使わないのだろう。かつお節は日本の誇れる食材だぞ。

「二人供、ここ何日か食べていないのか？」

「毎日三食きっちり頂いておりました」

「じゃあ何でそんな感動してるんだ？　そうか、量が少なかったの

だな！ 私の揚げ物やるからいっぱい食べる！」

「ぎゃあああああ！」

女性は私のお椀に、ナスやらカボチャやらサツマイモやらをこれでもかという程入れてきた。私達はこれらに苦しめられてきたのだから、出来ればこの村にいる間位は、野菜を見たくなかった。

「ほら君も」

「え、遠慮しますっ！」

「気にするな、まだこんなにあるんだぞ」

やんわり断る早苗を抑え、揚げ物（野菜）を移していく。二人に大量にあげたのにもかかわらず、女性のは全然減っている感じがしなかった。一体何キロ入っているんだ。

いつもと違う安物の野菜達を、苦しみの涙を流しながらやっこのことで食べ終えた。女性はあんなに量があったのに、とっくに食べ終わっていた。

「そんなに涙ぐんで……よっぽど嬉しいんだな。 普段から何を食べていたんだ？」

「……野菜です」

「なに！？ 道端に生えてる草を食べる位切羽詰っていたのか？」

私の言葉に何をどう勘違いしたのか、女性は私達が拾い食いをしていた、と思っただらしい。

「美味しい野菜でしたよ」

「待て待て待て、君達は野草を美味しく感じる程に危うかったのか！？」

早苗がフオローするが、意味をなさなかった。

「親切な姉妹に養ってもらったんです」

「物乞いまでしていたのか！？……うう、可哀想に。私の家にいらっしやい。しばらく面倒見てやるぞ」

女性の勘違いは全く直らず、それどころか悪化した。

「私は上白沢慧音だ。かみしろのみわけいね寺子屋で先生をやっている」

「え、あ、私は木葉緑です」

「東風谷早苗です」

自己紹介をされたので、こちらも返す。

「さあ。食べ終わった事だし、私の家に行こう。おごってやるから待ってる」

「慧音さん、良い人ですね」

「すごい勘違いだけだね。……穰子はどっしりよじ」

「あ……」

「待たせたな。じゃあ案内するからついて来い」

こうして私達は、穰子に別れを告げることなく、誤解も解けぬまま慧音さんの家に行くことになった。

……

「着いたぞ。ここが私の家だ。まあ半分は寺子屋だがな」

目の前には、さほど広くはないグラウンドがあり、奥の建物には教室らしき大きい部屋と、居住区らしきなんだかごちゃごちゃした場所があった。グラウンドには十数人の子供達が戯れていた。どうやら慧音さんは子供達を放って一人でうどん屋に行ったらしい。

「あ！ けーね先生だ！」

「お昼休み終わり？」

「このひとたちだれー」

「次は何のお勉強をやるの？」

「わーわー」

「ぎゃーぎゃー」

グラウンドで遊んでいた子供達が私達に気付き、駆け寄って来る。

「昼休みは終わりだー！ 皆ちゃんと昼ごはん食べたかー？ ちゃんと食べないと先生みたいに大きくならないぞー！ 特に胸が」

先生にあるまじき発言をした。胸だと！？ そんなもの私にはない！ あつても邪魔なだけだろH A H A H A。

早苗が私を見てくる。失礼な。私はちゃんと食べてるぞ。栄養が体全体に行き渡っているだけだ。健康体だぞ。

慧音さんも私を見てくる。たまに男と間違えられるけど、それ以外は何の不自由もないんだぞ。

「じゃあ授業始めるぞー！ 中に入れー」

「はいー！」

元氣よく返事をして、子供達は教室に駆けていった。

「私はこれから授業だからな。暇ならお前達も受けるといい。積む話はそれからだ」

「うえ。勉強するの……」

「久しぶりですねー」

断わる義理も勇気もないので、授業を受けることにする。穰子は……後でいいや。

「さあ授業を始めるぞ。数学をやるから準備して待っているよ。今日は特別ゲストが来てくれているんだ」

はあ！？ 小さい子に数学を教えるの！？ いやいや名前だけだろう。きつと内容は算数で、やさしい授業に決まってる。

「お前達は教科書無くても大丈夫だろう。外の世界の教育水準は高いらしいしな」

ほらやつぱり。すごく簡単な内容なんだ。心配して損した。

「それでは来てもらいましょう。八雲藍やくもらんさん！」

慧音さんが司会者みたいな口ぶりで言うと、呼ばれた人が教室に入ってきた。金髪碧眼でゆったりとした服を着た女性の姿が見えてくる。

「どうも。八雲藍です。それでは一時間楽しくお勉強しましょう」

しっぽが生えてる。しっぽが生えてますよ早苗さん！ なにあれすごい。九本もしっぽがある。やわらかそう。

「私、幻想郷に慣れた……」

「私もです……」

しつぽが生えてる人を見ても、素直に受け入れられる自分は、精神的に強くなったと思う。

「それでは、代数幾何学の教科書の、49ページを開きましょう」

「……………」

「数学……………ですよね？」

精神的に強くなったというのはただの思い過ごしのようなのだ。挫けそう。

「新生さん。この考え方を教えて下さい」

うわいきなり当てられた。藍先生が指し示した黒板には、問題文が一行書かれていた。

「……………分かりません」

一行しか書いていないのに、読めない。解読不可能な漢字の羅列がそこにはある。数学なのに数字が無い。

「気を使わなくていいんだぞー」

慧音さんが横から言ってくる。本当に分からないよ。

「…………… aとbが0以上だと仮定して、xが0以上だと思えば何とかなるんじゃないですか……………？」

適当に思いついたことをそれっぽく言ってみる。自分でも言うてる意味が分からない。

「へえ。そんな考え方がありますか。面白いですね。前代未聞の考え方です」

これで良かったのか？ 藍先生の頭の中が現在どうなっているのか想像出来ない。

「解けますよ、この考え方で。すごいですよ、新発見です。でも一般人がやるには時間がかかり過ぎますね」

誉められたのか？ 私の頭の中にはハテナしか無い。

「じゃあ教科書の解き方でやりましょうね」

隣の早苗も問題の意味すら理解していないと思う。どっしりよづ。こんな授業受けてても楽しくない。一時間暇だな。

……そつだ、寝よう！

.....

「ほら緑、今日の授業終わりましたよ」

「へ？」

目が覚めると、外はすっかり暗くなっていて、子供達はいなくなっていた。いるのは慧音さんと、早苗と、藍先生だけだった。

「すまないな。お前達には簡単過ぎたか」

「はははは……」

慧音さんは会ってから勘違いしかしらないね。

「さて、積もる話をしようじゃないか」

寝起きだというのに、早速だな。今の頭の調子だとせつかくの情報も聞き逃してしまうかもしれない。

「紫様、えー私のご主人様ですけどね、その方が2ヶ月前に博麗大結界を越えた何かを感じとったらしいんです」

藍先生が話し出す。博麗大結界とは、外の世界と幻想郷を分ける壁の事だろう。これが正式名称だったのか。

「紫様はそれが二人の人間だと分かりました」

「それはお前達の事なのか？」

「そつだと思えます」

他にこの世界に来た人なんていないだろう。実は他に幻想郷に迷い込んだ人が二人いて、私達は数え忘れられている、というのは流石に可笑し過ぎる話だし。

「それですね、紫様の力無しで結界を越えられる程の力を持った人がここにいると、幻想郷のパワーバランスが崩れるんですね」

偶然やって来ただけだと思っただが、どうやら違うような口ぶりだ。

「藍さんから聞いて私も驚いたぞ。お前達はそんな力を持っている様には見えないからな」

持っていないに決まってるじゃないですか。

「そういうことで……」

藍先生が再び話し出す。

「お二人には外の世界に、帰ってもらいます」

腹八分に医者要らず（後書き）

グルメリポートは難しいです。

宝の山に入りながら空しく帰る（前書き）

序章がおわります。

宝の山に入りながら空しく帰る

「お二人には外の世界に、帰ってもらいます」

「え……」

外の世界に帰る方法を探す為に人里にやってきたのだが、いざ帰れると言われると何だか残念な気持ちになる。私は幻想郷が好きになっってしまったのかもしれない。

「丁度良いじゃないですか。ようやく帰れますね！」

早苗には未練は無いようだ。

「いえあの……私、傷が完治するまで、戻るのは好ましくないんですが……」

「今直ぐには言いませんよ。ただ、人里から離れた所に住んでいるすごい人と一緒に過ごしてもらいます。力を持った君達に目を付けている妖怪がいるんです」

さつきから本当に力とやらがあるかのように言ってくる。そこまで言うのなら、本当に力があるのだろっ。早苗に。

「それに、直ぐに帰らなければならぬのなら、2ヶ月前に君達を

「尋ねたはずですよ」

「言われてみればそうだ。特に急を要する事ではないのか。」

「少し前に、君達が人里に向かっているという情報があつて、私はここに来ました」

「少し前つて、私が秋姉妹の家を出た時か？ 穰子が危ない電波を飛ばしたのだろうか。」

「今朝いきなり藍さんが寺子屋に来て、『外の世界の人間が迷い込んでるからよろしく』と言われたからな。探したんだぞ？」

「じゃあ私達と会つたのは偶然じゃないと？」

「そうなるな」

「……何だかすごく手際がいい気がする。私達を外の世界に帰すために、前々から計画を練っていたような印象を受ける。二ヶ月放っておきながら、帰す時はてきぱき動くという矛盾。……考え過ぎなのかな。」

「藍先生は、私達が幻想郷にいると不味いと言いましたよね」

「はい」

「もし私達が力を持っていたとしても、全然使いこなせません。そこからへんに放置しておけば、妖怪に襲われて抵抗も出来ぬまま死んでしまうと思うんですけど……」

椛と遭遇した時がまさしくそうだ。奇跡的に生き残りはしたが、二度目は無いだろう。

「それなのに何故藍先生は、私達を外の世界に帰そうとするんですか？ 手間がかかるだけじゃないですか」

「……君は強い力を持っています。些細な事がきっかけとなって、君がその力を使いこなせるようになって、私達が危ないのです」

何だその超展開。私は一般人だ。何の変哲もない生活を送る、『普通』と分類されるであろう人間だ。

「君は普通の人間ではありませんよ」

直ぐに否定されてしまった。

「まあ、君が力を使いこなせなくとも、そちらのお嬢さんが能力持ちですから」

衝撃発言。早苗は超能力者だったらしい。前々から自分は神だとは言っていたが……。

「わかつちやいます？」

「わかつちやいます」

私には分かりません。早苗、ずっと普通の友達だと思ってたのに。

「……私は“奇跡を起こす程度の能力”を持っています。幻想郷に来れたのは、私が能力を使って奇跡を起こしたからです」

何！？ 私のせいじゃなかったのか？

「緑を危険な目に遭わせてしまったのは、元はと言えばすべて私のせいなんです。……今まで言えませんでした、ごめんなさい」

そう言って早苗は頭を下げてきた。超展開過ぎて、理解が出来ませぬ。

「いやまあ早苗は悪くないよ。幻想郷に来て良かったと思ってるし」

とりあえず無難な返事しておく。余りにもおかしなことが起きているので、早苗が悪いとはちつとも思えない。

……今までの話を整理すると、私は力持ちで早苗は超能力者で、そんな私達は幻想郷じゃ手に負えないから帰ってもらって事？
何かがおかしい。藍先生に聞いてみよう。

「不思議な力を持った私達が、外の世界に行っても良いんですか？
その、パワーバランスとやらは外の世界では気にしないんですか？」

「外の世界は幻想を否定する世界ですから、ある程度の力は無い物とされてしまうんですよ」

「そうなんですか。……外の世界って、夢が無いですね」

大体の事情は分かった。物は本来在るべき所に収まれという事だね。

これ以上聞いても、多分理解出来ない事ばかりだろうし、そろそ

る切り上げますか。慧音さんも空気になって来てるし。

「質問はこれ位でいいです。まあまあ納得出来ました」

「分からない事があつたら、君達の移転先に居る人に聞くといいですよ」

「今日はもう遅いからここで泊まるんだ」

「明日出発しますから、よく寝てくださいね」

そう言い残して藍先生は、部屋から出て行った。さっきから何もしゃべらない早苗は一体どんな気持ちなのだろうか。

「早苗、元気出して」

「え？ 元気いっぱいですよ」

先程頭を下げた人間が、何事もなかったかのように振舞った。薄情にも見えるが、そうしてくれた方が変な気を使わなくて済むので安心出来る。

早苗のこの切り替えの早さが、私は好きだ。

人里に来てから、話がとんとん拍子に進んでいる。残りの幻想郷生活、存分に楽しもう。

.....

翌朝。身仕度をして、藍先生との待ち合わせ場所の寺子屋前で、私と早苗は佇んでいた。慧音先生は準備にもう少しかかるらしい。

「どこに連れて行かれるんだろう」

「あ！ 緑後ろ後ろ！」

「へ？」

早苗に言われて後ろを向くが、何も無い。

「いきなりどうした」

「何か変なのが……あ！ 後ろ後ろ！」

「またか」

再び後ろを向くが、何も無い。

「何も無いよ？」

「確かにあった……ああ！ 後ろ後ろ！」

「もう騙されない」

そうして振り向かず早苗の方を見ていると、ペシッ！ と誰かに後頭部を叩かれた。

「あう！ 誰！？」

「何もない所から……手が出てきました！」

再度後ろを向くが何もない。前を向こうとする素振りを見せてすぐに後ろを向いてみる。

「は!？」

「テヘツ！」

空間に亀裂が生じていて、そこから金髪の女性が顔を覗かせ何か笑ってきた。

というか、この亀裂の中に目がいっぱいあって気持ち悪い。

「何だコレ!？」

「バイバイ」

すぐに亀裂が閉じてしまった。

「何これこわい」

「ホラーですね……あああ！」

今度は早苗と私の目の前に亀裂が生じる。さっきの金髪の女性は出てこなかったたので、亀裂の中のおめめが私をすごい見えてくる。

「紫様！ 橙を頼みましたよ！ え!？ もう寝る!？ 私が帰るまで我慢して下さい！」

そこから藍先生の声が聞こえてきた。

「ちええええん！ いい子にしてるんだぞ！ え！？ 紫様の肩たたきをする！？ なんていい子なんだ！！」

「何でしょうこれ……」

「どこでも扉的なアレ……？」

某人気アニメの秘密道具が思い浮かぶ。ドアじゃないよ、扉だからね。

「じゃあ本当に行きますからね！ 雨が降ったら洗濯物を取り込んで下さいよー！」

言い終わると同時に、私達の目の前にある亀裂に藍先生の顔が現れる。

「おはようございます」

ニカツと笑い、挨拶をする藍先生。その笑顔は、裏での苦勞を感じさせないような爽やかなものだった。

「……朝から大変ですね」

「紫様がだらしないですから」

「（聞こえてるわよ！）」

「うわー！」

藍先生が急いで亀裂から出てこようとする。端から見れば、上半身だけが浮いているような状態になっているだろう。

「狭い……！」

途中でつかえたようだ。

「ぐおおお……！」

藍先生が力を振り絞ると、ポン！ と音が鳴るような勢いで抜け、倒れ込んだ。それにしてもしっぽがすごいな。

「いつも大変ですよ……！」

「その苦勞……私にも分かります」

早苗が藍先生に同情する。守矢神社にも神奈子ちゃんという厄介者がいるので、苦勞人同士で共感出来るのだろう。

「待たせたな！」

そこに慧音さんがやって来る。

「遅かったですね」

「すまないな。朝食をとっていた」

「え？ よく聞こえませんでした」

「朝食をのんびりとっていたから遅れた」

私達は朝食抜きだというのに、この人はのん気に食べてたらしい。

「……もう。早く行きましょよ」

少しムカつときたので、出発を催促する。

「そうですね。では慧音さん、またいつか」

慧音さんに別れを告げ、藍先生が歩き出す。

「慧音さんも来るんじゃないの!？」

「私には寺子屋があるからな。見送りだけだ」

「そうですか……さようなら」

「一宿一飯の恩は忘れません。では」

素っ気なく別れを告げる私と丁寧に挨拶する早苗。慧音さんと会うのは最後になるかもしれないので、ちゃんと挨拶すべきだったと後悔した。

寺子屋から大きな通りを真っ直ぐ歩き、村の入り口まで至り着くと、藍先生が立ち止まった。

「それじゃあここからはパッと行きましょね」

「わっ」

「きゃっ」

藍先生はそう言って私と早苗を担ぐ。すげー力持ちだね。一体これから何をするの？

「すぐに着きますからねー、ほい！」

何の前触れもなく、空高く飛び上がった。そのまま空中で静止する。

「すごい……浮いてます！」

「重力は？ 重力無視なの!？」

「幻想郷では珍らしくない事ですよ。舌を噛まないようにして下さいね」

「舌? ……つぎやああああ!！」

宙に浮いたまま、猛スピードで前に動き出した。……もう何が起きたって驚くもんか。

.....

「着きましたよ。ここが君達が今日から滞在する所、博麗神社です」

あつという間に目的地に着いてしもうた。藍先生の飛行は、ジェットコースターみたいで少し面白かった。

私達に気付いたのか、前にある神社の中から紅白の少女が出てくる。この神社の巫女さんだろうか。

「ああ？ この人達が紫の言ってた人……？」

「そつだ。怪我が完治するまでここに置いてやってくれ」

藍先生は人によって口調を変える人のようだ。これが普通か。

「はあ？ 今直ぐ帰すんじゃないの？ 面臭い……」

巫女さんがとてもだるそうな顔で、私達の前に歩み寄り、手を差し出してくる。

「はい」

「はい？」

握手かな？ と思い、私も手を差し出す。

「違つわよ。お金」

「へ？」

金を要求する手だった。

「まあ、外の世界の人間が持つてる訳ないわね……」

「え、いや、あの、持ってますけど。一応……」

私が言った瞬間、巫女さんの目がキラッと光り、下げかけていた手を再びビシッと伸ばしてきた。

「頂戴！」

お金にうるさい人種か。宿代だと思って全額あげてしまっていたのか。

「早苗ー、お金ー」

穰子にもらったお金は、私が持っていると思うと失くしそうなので、早苗に持たせている。……あ、穰子にお別れ言うのを忘れてた。

「はいどうぞ」

早苗はもらった5枚の紙幣のうち、3枚を巫女さんに渡した。もう使う事はないと思うのだが、何で全部渡さないのだろうか。

「うわ！ ここここここんなに！！」

3枚だけでもすごく価値があるようだ。一万円札的なものかな。そんなものを5枚もくれる穰子は一体何者なんだ。

「私は博麗^{はくれいれいむ}霊夢よ！ ここで思う存分楽しむと良いわ！」

だるそうな表情が一変して、万遍の笑みを浮かべる博麗さん。現金な人だな……。

「わ、私、木葉緑です。えと、博麗さん、よろしくお願いします」

「そんな固くならなくていいわよ！ 敬語もいいから！」

言いながら、私の背中をバンバンと叩いてくる。

「東風谷早苗です。お世話になりますね霊夢さん」

「……私の勘が言ってるわ。あんたは危険だと」

反して早苗には、あまりよろしくない対応をする。

「じゃあ博麗霊夢、後は頼んだぞ」

「分かったわよ。じゃあね。紫によろしく言っついて」

「藍先生！ もうさよならですか？」

「やることはやりましたから」

慧音さんといい藍先生といい、さっぱりした性格をしている。

「そうですね……。今度会ったら、お話ししましょうね」

叶うことのない願いだろうが、つい言ってしまう。本音を言っとしっぽがさわりたいのだ。

「短い間でしたけど、お世話になりました」

早苗も別れの挨拶をする。昨日から私が喋ってばかりで、早苗の

存在感が薄い感じかするのは気のせい？

「お礼を言われる立場ではないですよ。会って早々帰れなんて言ったのですから」

そう言っつて藍先生は私達から距離をとる。

「あ、そうだ。昨日の君の解答、意味不明でしたよ。ふふふふふふふふ」

最後に言わなくて良い事を言っつて、飛び去つてしまった。は、恥ずかしい！

.....

それから3ヶ月間、私達は霊夢の仕事の手伝いをしながら、のんびり過ごした。

途中、霧雨きりさめ 魔理沙まりさという金髪の魔女っ子にいたずらされたり、サニーレタス(?)・ルナムーン(??)・スターゲイザー(笑)とやらにいたずらされたりした。

例としては、

「掃除はパワーだぜ！」

「神社が壊れるでしょ！ 私が怒られるんだからね！」

「魔理沙さん！ それどうやってやるんですか!？」

「朝からうつさい」

とか、

「出たなスターゲイザー！ 今日はひっかからないぞ」

「スターサファイアだって！」

「皆さん、おだんご作りましたよー」

「わーい」

という事があった。

そんなこんなで、私の傷は痕が見えない位完治していた。

「……そろそろ、ね」

「お？ もう帰すのか？」

「金の分は働いたわ。これ以上長く居ても危険なだけだし……」

「寂しくなるな……」

「という訳であんた達、帰る支度をしなさい」

霊夢と魔理沙で勝手に話を進める。

「え……いきなり過ぎない？」

「本来は緑の傷が完治するまでの筈だわ。少し長くしてあげたんだから」

「うん……そうだね……」

間違った事は言っていないが、すごく残念な気持ちになった。

「とつとつこの生活も終わりですか……」

「早苗は寂しくないの？」

「私は、神奈子様や諏訪子様の事もありますし、それに……」

言いかけて、口ごもってしまう。

「そうか……早苗には帰る場所があるもんね……」

私の両親は小さい頃からいなかったもので、婆ちゃんと暮らしていた。今は婆ちゃんの負担になりたくないと思い、一人暮らしをしている。

昔婆ちゃんに何で両親がいないかを聞いたら、「金を置いて出てった」と答えた。死別したという意味なのか、捨てられたという意味なのかは分からないが、いじめも無く、この環境に不満も無かった。なのでそれ以上は聞かなかった。

「明日決行よ。私の事はいいから、今日は好きにしてください」

「好きにしてと言われても、することないんだよねー」

とりあえず外に出たが、秋姉妹の所に居た時と同じく、行動できる範囲が狭い。

「秋姉妹にさよなら言っていないなー」

「お礼もしなきゃいけませんしね」

「今どうしてるかな」

「……やっと見つけた……」

「!?!?」

「穰子さん！ 静葉さん！」

噂をすれば何とやらとも言うのか、秋姉妹が神社の階段を上って来た。

「……あなた達が帰ると聞いて、ずっと探してたのよ……」

「……お別れをしようと思ったの……」

感動の再会にもかかわらず、秋姉妹がものすごく暗い。

「会えて良かったけど、何故そんなに暗い」

「……冬だからよ……」

「……寒いよ……」

「中に入りましょう?」

「ここで話してても寒いだけなので、神社の中で話すことにした。」

「最後に会えて良かったよ。……あの時はありがとございました。穰子様と静葉様のおかげで私達は今を生きる事が出来ます」

「……気にしないでいいわ……」

「そんなテンションで言われると、とても不満だったように見える。」

「私達の世界では味わうことが出来ないような楽しい生活をさせて頂きました。感謝してます」

「……いいんだよ。私も楽しかったから……」

「早苗も感謝の意を示す。穰子も返答するが、楽しかったようには全然見えない。」

「……渡したい物があるわ……」

「……やっとあげられるね……」

「この為に私達をずっと探してくれたのか。本当、良い人達だな。」

「……これ、外の世界に帰っても、私達の事、忘れないように……」

「……忘れちゃ、やだよ……」

そう言って差し出して来たのは、紅葉の飾りがついたペンダントだった。……うう、泣けてきた。

「すごい、カッコイイ……うれしいようわああああん！」

話し出すと嬉しさ悲しさが収めきれなくなり、静葉様に泣きついてしまった。

「……よしよし。でも、綺麗とか、可愛いつて言っただけだったわ

……」

「……早苗にも、はい……」

「あ、ありがとうございます……ぐす」

早苗もこらえきれなかったようだ。

「……じゃあ、私達は帰るわ……」

「え、もう？」

「……冬だから、何にもやる気が起きないの……」

「……帰って寝る……」

長い時間をかけて私達を探してくれたのに、会っのは一瞬だなん

て……。

「待ってよ、もっと話したい事が……！」

すると、秋姉妹の纏っているやる気の無い空気が一転して、緊張したものになった。

「私達は秋を司る神。冬は私達の出る幕じゃないわ」

「冬は植物が枯れる季節。私達はお休みの時だよ」

……今まで度々秋姉妹が、自分は神だと言っていたが、私は信じていなかった。だが今なら信じられる。

今秋姉妹が纏っているこの空気は、私でも分かる位神々しいものだった。この場の空気は、私が声を出す事を禁止されているような感じがする程、神聖なものだった。これが神というものなのか。

「秋は一年かけて成長した植物達の祭りの季節」

「冬は植物達がお休みして春を迎える準備をする季節」

「私達は祭りを盛り上げる為の彩りに過ぎない」

「私達は植物達におやすみって言う存在だから」

「私は紅葉の神、秋静葉」

「私は豊穰の神、秋穰子」

「我ら秋の神は、」

「あなた方外の世界の人間を、」

「歓迎致します」

「歓迎致します」

私達が何も言えないまま、秋姉妹は行ってしまった。手に持ったペンダントが、キラリと光った気がした。

.....

「朝よー、帰る準備出来てるー？」

翌朝。とうとう帰る時が来てしまった。

「うん。気持ちの整理してて寝れなかった」

「決着ついた？ ついてなくても帰すけど」

「大丈夫。だと思っ」

幻想郷での生活は、例えのんびり暮らしてたとは言え、外の世界での生活と比べると刺激が強過ぎた。

皆が安心して暮らせるようにと、全ての物事が管理され、その中で休むことなく競い合い、人それぞれの幸せを勝ちとる外の世界。一歩外に出ると命の保障は無く、仲間達がお互いに助け合いながら、生きていることに対して幸福を感じる幻想郷。

どちらも利点欠点差し引きゼロだが、私は幻想郷の方を気に入ってしまった。参った参った。

だから私は一晩かけて自分に言い聞かせた。ここは自分の居るべき場所じゃない、ある物はあるべき所になきゃ駄目だ、と。

「さあさあ早く帰ろう。気が変わらないうちに」

「私も準備万端ですよ」

「じゃあ外に出て。一瞬で終わるからね」

博麗神社の裏側に連れて来られた。地面は舗装されていなく、雑草だらけだ。

「……ここ博麗神社は幻想郷と外の世界の境。幻想郷であって、外の世界でもあるの」

「なんか、分かん」

「あんだ達を帰せる場所だって言いたいの」

「へー」

じゃあ外の世界でもここに来れば、幻想郷にもう一度行けるんじゃないか？

「だからといってもう一度ここに来れると思わない事よ」

「無理なの？」

「無理よ。私が居なきゃ。例え無理じゃなくても駄目よ」

不可能に加えて禁止までされた。

「駄目って？」

「あんだねえ。何で帰されるか分かってんの？」

「パワーバランスが何ちゃらかんちゃら……」

「そう。だからあんだはここに居てはいけないの」

あんだ“達”ではないのか。

「早苗は？」

「早苗は……いいんじゃない？」

「じゃあ私は残ります」

「ふざけるな早苗。くっついてやる」

力持ちな私は駄目で、超能力者の早苗は良いのか。……よく分からないな。

「まあ早苗は幻想郷的には良くて私が嫌だから、強制的に帰すわ」

「霊夢さんひどいです……」

霊夢は最初に会った時から、何故か早苗には厳しい。

「まあ、ここでぐたぐたしてても時間の無駄だし、パッパとやりましょっ」

「時間の無駄って……」

別れのシーンが台無しだ。

「後ろ向いて」

言われた通りに後ろを向く。神社に背を向ける形だ。

「はいパッパ」

「…………え？」

ふざけているのか、と思い背後の霊夢を見る。

「…………は？」

誰もいなかった。それどころか、目の前の神社が荒れ果てた建物になっていた。

「…………終わり？」

「…………ですね」

あっけなさ過ぎて、何の感情も生まれてこない。

「そうか！ 夢オチか！ 早苗、私さつきまで寝てたんだよね。今七月でしょ」

「現実を見ましようね。首元見て下さい」

視線を下げると、首にかけてある秋姉妹から貰ったペンダントが目に入る。

「現実だった……」

こんな終わり方嫌だと思っても、どうすることも出来ない。

「……帰ろう」

「そうですね」

後で考えると、こうして帰した方がモヤモヤも残らないという、
霊夢なりの配慮だったのだろうと思った。

.....

森を抜けると、舗装された道路に出た。

「うわ、本当に戻って来てる」

「人に見つかるとう面倒ですから、こそこそ帰りましょう」

「そうだね。婆ちゃんの所に行かなくちゃ」

半年ぶりだから、何を言われるだろう。

「つて婆ちゃん！」

いきなり出現した。

「緑……緑か……！ 何だか今日はこの道を通らなきゃならない気がしたが……まさかこのような奇跡があるとは……」

十五秒かけてすごーくゆっくり話すので、感動の再会として抱き合うというシーンは、消滅した。

しかも、半年ぶりの最初の言葉は要約すると「電波受信した」だ。

「二人は家出した不良少女、という事にしといたぞい」

「うん。すごい冷静だね。もう」

拳句の果てには、悪者にされていた。

「向こうの世界、行ってたんじゃろ」

「……うん。幻想郷って言うんだって」

婆ちゃんにはすべてお見通しらしい。村のおとぎ話を信じている婆ちゃんは、私達が消えた事を直ぐに受け入れ、理解したのだろう。現実を見過ぎていた昔の私みたいな人には、何考えてんだこの老人、とでも思うだろう。

だが今の私は、婆ちゃんが言った事は全て正しいのだと、理解できる。

「おかえり」

「ただいま」

普通のやり取りが、そこにはあった。

.....

「いやあー参ったねー。道行く人みんなに白目で見られる」

「なにそれ怖ッ！ 『白い目で見られる』ですよ」

婆ちゃんとの感動の再会は済ませたので、何となく早苗について行く事にしたのだが、良い選択だった。

周りの視線が怖く、一人じゃ歩けない。すっかり村の悪者になっていた。

「守矢神社だーなつかしー」

あとは階段を上るだけの所まで来た。

「神奈子様諏訪子様は元気にしてますかねー」

「いやー駄目でしょ。あれ働いたら負けな人でしょ？」

言ってから気付いた。触れてはいけない家庭の事情だと。

「あ、一応あの方達は神ですよ？」

「はあ!？」

「守矢神社で奉られてる神様ですよ」

つい昨日秋の神様に会った私には、神の存在というものが信じられる。だから早苗も言ったのだろう。

「普通の人には見えないはずなんですけどね」

「私は見えたぞ。ジャージ着た神奈子ちゃんが」

神様の服がジャージ上下なんて嫌だ。

「それでも神様なんですよ……」

「あ! 早苗達帰って来たよ!」

丁度階段を上り終えた時、諏訪子に見つかった。

「おーう! お帰り! どうだった向こうは」

諏訪子の声を聞きつけ、神奈子ちゃんもやって来る。今日も元気にジャージ上下だった。

「こんな神様は嫌だ」

「やあ緑っこ! 何か特殊能力使えるようになってないか?」

変な呼び方をされた。その言葉に堪忍袋の緒が切れた私は突然潜

在能力が目覚め、神奈子ちゃんに対して正義の鉄槌を下すという」とはあるはずがない。

「なってますん」

「そうか。残念だなー」

「そう簡単に出るもんじゃないよ。もっとすごい事が起きなきゃ」

諏訪子も私の力を引き出したらしい。

「じゃあ、襲うか!」

「こんな神様なんか嫌だ」

「冗談だよ冗談。ふふ」

目は本気だった。

「さて緑っ子。大事なお知らせがあるんだが」

神社の中に招き入れられ、落ち着いた頃に神奈子ちゃんが話し始める。早苗は、晩ごはんの材料を買いに家を出てしまった。

「大事なお知らせ?」

「そつだ。本当に大事だからな」

「そうですね」

「いいか、話すぞ、驚くなよ、よく聞け」

「早く話して下さい」

言い出して置きながら、中々本題に入ってくれない。

「……近い内に、引越す」

「ちよつなら」

やっとこのだらしない神様は独り立ちするらしい。目出度い。

「ああもう。神奈子が言っても冗談にしか聞こえないよ」

諏訪子が割り込んで来る。

「あのね、今の君には分かると思うけど、私達神は人間の信仰が無きゃ生きて行けないのね」

「はあ」

ものすごく嫌な予感がしてきた。

「だけどね、最近の人間達は神を信じないでしょ？」

確かに、この神社の参拝客も極僅かで、これで良いのかと思つてももある。

「最近私達は信仰を集める為に、ちよくちよく引越しを繰り返しては、その人間の信仰を集めるの」

「最初の方は珍しいという理由で参拝客も増えるさ。でも長くは続かない」

「最後に引越したのは、2000年位前かな」

2000年！ それを最近と言うこの人達は、一体何歳なのだろう。見た目からは想像もつかない。神は老化しないのか？

でも、大抵の人が想像する神って、髭がモジャモジャで顔は皺々のおじーさんだよな。イケメンが神なんて聞いた事ない。まあ目の前に幼女の神がいるからそんな夢はぶち壊されたけど。

「でね、ここももう信仰を集められなくなっているんだ」

「だから私達はここから離れようと思っている」

「皆、行っちゃうんですか？」

「うん。皆でお引越し」

「早苗も？」

「早苗が居なきや、神社として成り立たないよ」

唯一の親友の早苗が居なくなってしまうたら、私は独りになってしまう。

「もう1000年位我慢出来ないんですか？」

さんの友人じゃないか」

紺色の制服を着た不愉快なオッサンに話し掛けられた。

「少し話を聞かせてくれないか。怖がらなくていいからね」

「私はなーんも知りませーん」

「昨夜はどこで何をしていた？ 普段の東風谷さんを見て変わった事は？ あなたと東風谷さんは半年家出していたらしいが、何か関係していると思う？」

家出が関係している？ もしかしたら関係してるかもしれないね。いや関係してるんだ。絶対そうだ。他に思い付かないよ。早苗は私を置いて幻想郷に行っちゃったんだ。ズルイなあ。私も行きたかったのに。ん？ 私も行けばいいのか。1回行けたんだからもう1回行けるはずだよ。そうだ、行こう。行けばいいんだ。

「あ！ 待て！ どこへ行く！」

気がつくのと、訳もわからず走り出していた。

私は走った。走って走って、山の頂上まで来た。

あの時と同じ場所に来れば、幻想郷に行けると思った。

「あの頃に戻りたい！ それで幻想郷に行きたい！ こんな今なんて要らないから！」

私は叫んだ。あの時と同じで、普段と違う事をすれば、幻想郷に行けると思った。

私は走った。走って走って、博麗神社まで来た。

現実と幻想の境目ならば、幻想郷に入り易いと思った。

「早苗に会いたい！ 会えるんなら、命を差し出しても良いから！」

私は叫んだ。皆、私には力があるって言ったじゃないか。

さつきから、支離滅裂な事を言っているのは分かる。

早苗が幻想郷に行ってしまったという証拠は何処にもないし、幻想郷に入るきっかけとなったのは、早苗の能力だったらしい。

博麗神社に来たって、霊夢が居なければ幻想郷に出入りする事は出来ない。命を差し出したら、早苗と会えなくなるのは当然の事だ。

そんな事は分かっている。分かっているさ。

……なんだか馬鹿らしくなってきた。

走り過ぎたのか、体がだるいし、瞼も重い。

……もういいや。寝よう。

怪奇事件！ 消えた神社と2人の少女

一月五日未明、とある村落に建てられた神社、守屋神社が一夜にして跡形も無く消え去ったという通報があった。

通報をしたのは朝のジョギングで、守矢神社の階段を利用してい

る男性の村人である。

本人によると、「私は毎日この階段を上っている。事件当日もこの階段を上り終え、その時に昨日までであった神社が無くなっていると分かった。」とのこと。

原因はまだ不明で、建築物の専門家は、神社のような建て物を誰にも気づかれずに短期間で壊す事は、理論上不可能だと述べている。また、同日、この神社に住んでいた18歳の少女と、その少女と同年齢の友人が行方不明となっていることが明らかになった。

その二人は、7月から12月までの5ヶ月間、家出をしており、警察はその事が関係しているのではないかと見て、捜査を進めている。

この事件は不明な点が多く、有力な証拠も見つからない為、捜査が困難である。我々取材陣も独自に捜査をし、この謎を解明して行きたい。

宝の山に入りながら空しく帰る（後書き）

文章力がほしい語彙か欲しい会話をもっと長引かせたいあ、あああ
あああ！

こんな幼稚で長い文章を読んでくれて、ありがとうございます。

……文字を書くときは、ペンタブを使って一字一字書いています。
試しに今回慣れないキーボードで打ち込んでみたら、一文字目に三
スってしまったので、すぐに挫折しました。

こんな調子で大丈夫かな……と思う次第でございます。

行雲流水、ばかばつか(前書き)

オリキャラのみです許してください。

行雲流水、ばかばっか

目が覚めるとそこは森の中だった。

「いや私は何故こんな場所で寝てるんだ」

私、木葉緑は森の中で寝るような変人ではございません。ちゃんと毎日お布団敷いて寝ています。

そんなに長く寝てなかったのか、あるいは丸一日寝ていたのか、辺りは明るい。

「……ああ、そうか。そうだった」

だんだん頭の中がスッキリしてきて、自分のした事を思い出せるようになる。

何を考えたのか私は突然発狂し、幻想郷へ無性に行きたくなったんだ。

そこで私は山を駆け巡り、森を走り抜け、最終的に現世版博麗神社の前まで出た。

走り過ぎた所為なのか、その時体が異常にだるくなって倒れ込んでしまい、今に至るといふ訳か。

だったらさ、目の前に博麗神社があるはずだよな。

「博麗神社はどこに消えた……」

無いんだよ。360度全方位を見回してもどこにもない。

「幻想郷に来れたのかな……って、そんな事ある訳ないか」

幻想郷から外の世界に出る事は出来ても、逆は無理らしいからね。

「私はなんて馬鹿な事をしたんだ。……すっかり頭が冷えた。よし帰ろう」

とは言ったものの、博麗神社が無い為、自分がどこに居るのが分からない。目覚めた時に向いていた方向と逆に進めば、村に着くかな。

「ぎゃーす」

「うわ！？ この声は大学受験のストレスで頭が残念な事になった山田さんの声か!？」

一歩踏み出そうとしたら、不意に横から何と表現したら良いか分からない微妙な声が聞こえた。山田さんは私と同じクラスに在籍している元友達の話だ。

身の危険を覚えた私は、すかさず振り向く。相手の不意打ちを予防するために、前後にステップをするという器用な事は出来ない。

「何コレ……」

「ぎゃーす」

何だかよく分からない白くもっさもっさもした物がこちらを見て？
いた。

「キモチワルイ……」

「ぎゃーすー！」

「ツツ！！」

私の言葉に怒ったのか、白もっさもっさもいきなり光弾を吐き出した。咄嗟の事に反応出来なかったが、幸いなことに私のすぐ横を掠めただけで大事には至らなかった。光弾はそのまま直進して私の背後に立つ木に当たり、乾いた破裂音を発して消えた。

「はぁ！？」

……奴は危険だ。千を越える生命の危機を乗り越えてきた私には分かる。嘘だけ。

「とにかく逃げなきゃ！」

白もっさの挙動を伺いつつ、私は逃げだした。走って寝て起きて走って、一体私はどれだけ走れば気が済むんだ。

「体がなんか軽い！まるで生まれ変わったようだ！」

走りながら後ろを振り返ってみるが、白いのは……追って来てるのか？ 奴のスピードが遅過ぎて、どんどん距離が開いていく。

あっという間に白は見えなくなったので、もういいかと思いい立ち

止まる。

「あんなのが居るって事は……本当に幻想郷に来れたのかな？」

私達の世界では、あんな危険な生物は存在しないだろう。ここは幻想郷で、あれは知能の低い妖怪だと言われた方が納得出来る。

「で、ここはどこ？」

ちやつかり村の方向だと見当を付けた方へ走っていたのだが、道路も建物も見えない気配がない。大自然だ。

「本当に本当に幻想郷に来れたの……？」

一層期待が膨らみ、ほとんど確信の域にまで達する。

「なんだ。普通に來れるじゃん」

ならばもう少し歩けば人里に着くかなと思ったところで、後ろから物音が聞こえる。

「おまえ、つよそうだな！」

……今度は何だ。一歩進む毎にエンカウントなんて嫌だぞ。

「いえいえ強くないですよ。弱いですよ。弱いから私とはさよならですね」

「そっか、つよいのか！ たたかおう！」

「……」

言葉が通じない種類の人種だった。エンカウントは免れないようだ。

次の行動をどうすべきか考えるために、相手を観察する。

頭に二本角が生えた黒髪のお姉さん。ファイティングポーズをとっている。これは妖怪ですか。妖怪ですね。今の私はちょっとやそつとじゃ驚きませんよ。成長しましたから。

「逃げろー！」

「あ！ くら！ まで！」

私と妖怪の追いかっこパート2が始まった。

.....

ヤバイ。大分走ったが、全然距離が開かない。いつの間にか森を抜け、見はらしの良い草原に出してしまった。これでは隠れる所が無い。

白もつさもつさみに光弾は撃つて来ないから良いものの、このままずっと追いかっこをしていれば、疲れにやられてしまうだろう。

「ストップ！！ 止まれ！！ 止まって！！ 止まってください！！」

「お！ たたかうきになつたか！？」

相手は全く疲れていなく、私もあまり疲れてはいない。今日の私は絶好調なのだ。

「いいですよ。戦ってあげますから。今度ね」

「それじゃあはじめるぞ！」

言葉が通じないんだった。コイツはあれだ、バカだ。話す言葉が全部平仮名だし。それならそれなりの対応がある。

妖怪が私に直接攻撃をするべく、こちらに走って来る。

「ふん！」

「うわーやーらーれーたー」

あまりにも正直な直線攻撃だったので、しゃがんで避けて、そのまま寝っ転がり敗北の意志を示す。

これこそが私の作戦。よっぽどのバカなら、これで満足して帰ってくれるハズだ。

「どうだ！ まいったか！ とどめだ！」

「ええっ！？」

しまった。止めの事を考慮してなかった。

目の前の妖怪は拳を自分の頭より上まで持ち上げ、寝転んでいる私に狙いを定めた。

「ひっさっ……」

「まずっ！」

妖怪が拳を振りおろす直前に、私は横に転がり、更に前転をして妖怪の視界の外に出る。

ガンツッ！！

瞬間、妖怪が放ったパンチで、地面にクレーターができた。えええええええええ何ソレえええええええええ。

「お？ いなくなったのか？ ……そうか！ あたしのちからがっよすぎて、なにもなくなっちゃったんだな！」

ああ勘違いしてくれた。良かった……少し予想と違う流れだったけど、結果は一緒だ。今の内にそっと距離をとろう。

「もつとつよいやつだとおもったのに。まあいいや。ねよう」

満足したのか妖怪はその場で寝てしまい、私はそっと立ち去る必要が無くなった。予想を遥かに超えるバカだった。

「……………」

さて、のんびり人里でも探すか。前方には山、それ以外には森が

ある。どうしよう。

「……うわっ、またか」

取り敢えず後ろを向くと、今度は白に近いピンク色で、セミロングな髪型をした幼女が、腕を組んで仁王立ちをしている姿を発見した。

これで3連続エンカウトだ。もう飽きてきた。

「何やら尋常でない妖気を感じて来たは良いが……只の小鬼と小僧か」

幼女に小憎と言われた。これは年上に対する口の利き方と日本語を教えねばならぬ事態だ。

「ふむ。……その小妖怪。お前の能力は何だ」

その小妖怪と聞き、私は後ろで眠っている小鬼と呼ばれた妖怪を見た。

「お前じゃお前」

小鬼ではなく、私の事を呼んでいるようだ。

「へ！？ 私は人間ですよ!？」

「そんな妖気を持った人間があるか。さっさとお前の能力を教えろ」

前々から普通じゃない普通じゃないと言われて来た私だが、とうとう妖怪と呼ばれるまでになってしまったらしい。私は悲しいよ。

「……能力？」

「ああもうそんな事も理解出来ぬか小妖怪め。要するに、自慢出来る力じゃ。ちなみに我は自然を操る程度の能力を持っているぞ。ふん」

初対面の少女に頭が悪いと言われ、自慢もされ、心が挫けそうになる。土下座して謝って終わりにしよう。

「すみません何も出来なくてすみません」

「そんな阿呆みたいな力を持ちおって何の能力も使えぬのか無能め。宝の持ち腐れじゃな」

土下座してもさらに続く少女の暴言。言い終えると黙り込んでしまったので、ちらりと様子を伺ってみると、何かを考えているようだった。

「……ふむ。これはやってみる価値があるか。……おいお前、我について来い」

「え？」

最終的に私をお持ち帰りすると決めたようだ。私よりちっちゃい子にここまで偉そうにされると、却って清々しい。

「本当に理解に乏しい奴じゃな。我が世話をしやると言っているのだぞ。感謝せい」

「……ふう。我と戦いたいか！ 1秒と持たんぞ!？」

「いや、戦いたくないです。うう……」

小つちやい子に泣かされる、もうすぐ大人の人の図。大層シュールな光景なのだろう。

「お前が居れば、これから面白くなりそうじゃ！ 我は龍たつみのかみみな巳神水！
さあ付いて来い！」

勝手に決められたけど、襲って来ないのなら、他に頼れる人も居ないし良いか。プライドなんて言葉はすでに木端微塵に砕け散った。誰の世話でも受けてやる。

そうして私は、歩き出す水の小つこい背中を追った。

「私は木葉 緑です。……お世話になります」

.....

草原を小鬼の寝ている方向に進み、再び森の中に入った。小鬼は全く起きる気配が無かったので、普通に横を通り抜けられた。水なんて小鬼を踏んづけたし。

この方向には山があるので、だんだん坂道になってきた。ふとここは妖怪の山周辺の地形に似てるな、と思った。

「そろそろ私のねぐらに着くぞ」

「どんな所なの？」

「うむ。暗くて狭くて湿ってて、良い所じゃぞ」

「最悪じゃないか」

「何を言う！ この辺りではちょーこっきゅーぶっけんだ！」

価値観が分からない。そう言えば、この子は人間なのか妖怪なのかまだ聞いていなかった。まあこんな常識外れの事をする位だから妖怪なのだろうが、念の為に聞いておこう。

「えっと、水は人間？」

龍巳神さんと呼ぶのは長くて面倒だし、相手は子供なので、名前で呼ぶ事にした。

「ん？ ……どちらかと聞かれば、妖怪か？」

質問に質問で返されても……。まあ妖怪って事で良いのだろう。

「出会った時から人間に拘るな。あんなの猿の進化形態だろう。緑とは似ても似つかんぞ」

水の言い方だと、人間は猿っぽいみたいだ。原人か？ 幻想郷にそんなの居たっけ？ いや、ここが幻想郷だというのは私が勝手に決めつけた事だ。違うかもしれない。

「ここは幻想郷？」

「幻想郷？ 何だそれは。そんなもの聞いた事無いぞ」

「じゃあここはどこ？」

「難しい事を聞くな。説明出来ん。強いて言えば、ここは何処でもない」

対応に困る返答だ。でもここが幻想郷ではない事が明らかになった。博麗神社が無くて幻想郷ではなく、妖怪と猿みたいな人間は存在する場所。私が居た世界ではないのは確かだ。

一瞬タイムスリップの可能性が思い浮かんだが、流石にそんな事は無いだろう。

しかし、そういう事にでもしておかないと、この状況が説明出来ないのも事実。

では試しにこの仮定を使って考えてみようか。

“現代ではない場所には、現代人が存在しない”というお題がある。

そのお題の意味と順序を逆にすると、“現代人が存在する場所は、現代”だ。

“現代人が存在する場所は、現代”というお題は正しいと言えるので、それを2回逆にした“現代ではない場所は、現代人が存在しない”というのも正しいのではないか。裏の裏は表という事だ。すなわち、ここは過去だと証明された。

うわー、暇つぶしに突拍子のない事考えたただけなのに、以外に証明出来るものなんだね。無茶苦茶な理論だったけど。

「おお。そこじゃそこじゃ」

いつの間にか目の前に断崖絶壁が現れていて、水の示した範囲を見ると暗い洞窟があった。

これ以上ここはどこかを考えてもどうにかなる訳じゃないし、成りに任せるでしょうか。

「あれが超高級物件なの……？」

「そんな残念そうな顔をするでない。住めば都かも知れんぞ」

「私は文句を言える身分じゃないです」

「それもそうじゃな。それにしても腹が減った。昼飯にするぞ、手伝え」

水の言葉を聞いて、私も空腹な事に気付く。今は昼時なのか。こんな所で出される物って何だろうか。ちゃんとした料理が出るとは思えない。でもサバイバルっぽくて面白そうだ。

洞窟に入ると、そこは案の定真っ暗だった。私がひゃーと言ってる横で、水は手から火の玉を出し、焚き木に火をつけた。

「うわ何なのその力」

「驚く事ではない。火は自然。この程度は我にとって造作もない」

そうだった。会った時に自然を操る程度の能力を持っているって自慢されたのだった。

「我は肉を用意してくる。緑はこの奥から酒を運んで来い」

「は？ 酒？ 駄目！ 小さい子がお酒飲んじゃ駄目でしょ！」

「……」

「……？」

「……はっはっはっは（以下略）」

また爆笑し始めた。

水の笑いがおさまるのに5分少々かかり、その間私は、ただうなだれている事しか出来なかった。

「……緑は面白い事を言う奴じゃな！ 子が酒を飲むと言う決まりが何処にある！ 第一我は、万を生きる妖怪ぞ！」

「……万？」

「そつは見えぬか！？ 我もまだまだじゃな！」

万なんて有り得ないだろう！ ……と思ったが、妖怪には常識が通用しない。もう有り得ないとは考えないで、全てをありのままに受け入れよう。また一つ成長を遂げる私である。

水が本当に何万年も生きているというのなら、色々知っている事もあるだろう。

「えーっと、水の生きてた中で、人間が栄えていた時ってある？」

「また人間の事か。奴らはい最近出現したばかりだと言うのに、我が物顔で生活してあるよ。全く、迷惑な生き物じゃ」

そうですか。もうここは過去って事で良くない？ 色々と説明つくし。ということ、私は原始時代に来てしまったのでした！。

「しかし、緑は酒を知っておるのか。我のオリジナルな飲み物だと思っただのう、つまらんのう」

「オリジナル？」

「うむ。我が採っておいた果実を放置していたらな、何やら良き匂いがするようになってな、食ってみたら良い気分になれたのじゃ」

内容が内容だが、今の水のうれしそうに説明する姿は、見た目相応に子供っぽく可愛らしい。

「それでな、研究に研究を重ね、ついに量産化に成功したのじゃ！
ここまでするのに千年もかけたのだぞ！ ふふん」

こんな小さいのに、ずっと独りで生活してたのかな。私が居るところで、その寂しさが紛れてくれれば幸いだ。上手くいけば、ずっと世話してもらえるかもしれないし。

「そんな事より飯じゃ。直ぐに戻って来る！ 持っておれ！」

そう言って、水は目にも止まらぬスピードで駆けて行ってしまった。

.....

「ほら美味しいぞ飲め飲め飲め飲め」

「いやあ！ あと2年！ あと2年待つて！」

「私の酒が飲めぬと言つのかー！」

昼食時、私は幼女に酒を強要されていた。現代でも同じような事をされた覚えが有るような無いような。

「あと2年！ いっぱい生きてるんだからその位待てるでしょ！」

「むう……つまらん。何故そんな自分を縛る。良いではないかほれほれほれ」

考えて見れば、ここが過去なら法律なんてないし、特に酒を禁止する理由なんてないな」と思った。興味あるし、少し位なら良いかな……。

「つて、ダメ！ ぜつたい！」

毅然とした態度で勧誘を断わる。そういう勇気が大事なのです。

「むう……頑固じゃな。もう良い！ やめだ！ 外に出るぞ！ 来い！」

水は怒って外に出てしまい、私もそれを追う。後片付けは後でいいや。

そして、洞窟から出て直ぐにある、木々に囲まれた小さなスペースまで来た。

「緑の実力が見てみたいんじゃない。手始めにそこにある木を一本折ってくれぬか？」

水が示したのは、周りにある木と同じような太い木だった。

「無理」

「遠慮するな。ガツンとやって良い」

無理だよ、無理に決まってる。でも、そんな期待の眼差しを向けられたら……見た目年上の私はやるしかないじゃないか。

「とりゃーっ！っ！」

ボスッ。

私はその木に向かって全力で飛び蹴りをしたが、聞こえたのは悲しい音だけで、ビクともしなかった。

「……」

「……」

「ん？」

「……」

「お、終わりか……?」

「うん……」

「え、その、緑が持つてる妖力とか、使ったりしないのか?」

「そんなの持つてる自覚はないし、持ってたとしても使いこなせません」

私の言葉に水は溜め息をつき、頭を垂れ、背中を曲げ、膝をつき、手をつき、終いには地面に倒れこんだ。落胆を体全体で表現したようだ。

水は倒れた状態で、私に話しかける。

「……能力を発現させる以前に、基本的な事から教えねばならぬよ
うじゃな」

……

「まず緑には、妖力を感じ取る事を知って欲しい」

立ち上がって身なりを整えた水の、第一声がそれだった。

「我が緑に向かつて妖力を流すからな、何か変化があったら言ってくれ」

そう言つて、水は私に小さな手を向けた。が、特に変化はない。

「……」

「何も感じぬか？」

「うん」

「じゃあもつと強めるぞ」

「……」

何の変化も起きない。妖力つて言つと何か恐いな、殺気と同じ様なものだと思つてしまつ、と他の事を考えられる程の余裕がある。

「む。もつとだ」

「……」

「もつと」

「……」

「まだ何も感じぬのか」

「……」

向こうはどんどん妖力を強めているらしいが、私には水が「スト
ップ!」という姿勢をしているようにしか見えない。

「まだなのか」

「……」

「鈍い奴じゃな」

「……」

「何か反応してくれ」

「……」

「チツ……」

うわっ、舌打ちした。そんな事されても感じないものは感じない
んだよ。

「ああ焦れたい! 一気に100倍じゃ!」

水は目を閉じ、集中する。その瞬間、私は何だかパツとしない気
分になった。

「おお?」

「……何か、変わったか……?」

水は、集中している上にすごい力を使っているっぽいので、言葉

が途切れ途切れになっているのだろう。

「んー、もうちょっと強く」

「……まだ、なのか」

水は眉間にシワを寄せ、汗をかき出した。私の方は、あと少しで何か掴めそうな気分で、それが何かを思い浮かべるのに必死だ。

「おお！ もう少し、もう少し！」

「……」

「いいぞ！ 頑張れ頑張れ！」

「……」

水が黙り込むようになってしまい、さっきとは逆の立場になってしまった。

「うわ！ 分かってきた！ 何というか、あやしい雰囲気かな？」

「……ぐ、も、もう良いか……？」

「もーいーよー」

私が許可すると、そのあやしい雰囲気は消え去り、水は再び倒れ込んだ。

「はあ……はあ……こんなの、鈍い所の話ではないぞ……」

行雲流水、ばかばっか（後書き）

オリキャラだけだと書きにくい・・・

七転八起、ひとやすみ

龍巳たつみのかみみな神水が目覚めたのは夕方になってからだった。

「ふああ。よく寝た」

「やっと寝きた？ …… ああ暇だった」

私が今居る場所は、大自然の真つ直中にある天然の洞窟だ。

そんな所に暇つぶしの道具などある訳もなく、散歩をしようにもいつ妖怪に襲われるか分からないので、だたじっとしている事か出来ない。

「もう夕方が。おい緑、暗くなる前に水浴びじゃ」

「水浴びって、もしかして真水に入るの？」

今は1月、寒い時季だ。こんな季節の真水になんか触れたら、風邪をひくどころか凍え死ぬ。

「愚か者。そんな事したら爆発するぞ」

「爆発！？」

「自然は怖いんじゃ。頂上に温泉があるからな、そこで温まるぞ」

こんな所で温泉に入れるのか。中々潤った生活が出来るんだな。

「ああ疲れた。あんなに力を使ったのは久しぶりだのう」

水は気だるそうに立ち上がり、私を連れて外に出る。断崖絶壁を迂回するルートで頂上に行くらしい。

道中、疑問に思った事を水に聞いてみる。

「気になる事があるんだけどさ、何でそんなお婆ちゃんみたいな話し方してるの？」

「……婆だと？」

「うん」

私は喋り方の事を聞いたのに、水は年の事を言われたのだと勘違いしたのか、ギラリ、と目を光らせて来た。面倒なことになりそうだ。

「ふ、ふふふふふふふふふ……」

「な、何か気に障る事でも……？」

「緑もすぐに人の事言えなくなるぞふふふふふふ」

「ぐっ……」

何万年も生きた水にとって、私の寿命なんて埃のようなものに違

いない。

今日の事を根に持った水は、嘲笑いながらヨボヨボになった私を介護するのだろう。

「いいんだ！ ヨボヨボの私なんて、きつとボケてて何も分からなくなってるさ！」

「ふふふふふ緑は老いる事もボケる事もない。お前は今のままの姿で他人に老人老人と言われるのだ……！」

見ためは子供、頭脳は大人、気持ちは10代の状態になるという事か。

「何言ってるの！？ そんなの人間じゃないじゃん！」

「緑こそ何を言うか。お前は人間ではないと言った筈だ。妖怪だぞ、よ・う・か・い」

あまり覚えてはいないが、最初に会った時に小妖怪と呼ばれた気がする。

「何故私が妖怪だと言える!？」

「あのな、妖怪の持つ力は妖力で、人間の持つ力は霊力だぞ。緑が持っている力は、妖力じゃ。立派な妖怪ではないか」

「うぎゃー!！」

言い返さないよもう。じゃあ妖怪緑の誕生なんですネ？ 私はそこから辺の人に「たーべちゃーうぞー」って言うような生物ですか？

そんな生物絶対嫌だ。

「妖怪の寿命は長いぞ。老いる事など無いに等しい。せいぜい覚悟して置く事じゃなふふふふふ」

「私、人間なのに……」

「あと50年もすれば分かるぞ……」

私がオバサンになれば私の勝ちで、何の変化も無ければ水の勝ち。私にとっては勝っても負けても複雑な気分になるだけだ。

いや、水の話聞く限りだと、妖怪は老人と呼ばれる以外のデメリットは無さそうだ。じゃあ私は妖怪であった方が色々良いことがあるんじゃないか？ そうだよ、良いんだよ。やったー私は妖怪だワイワイ。

「緑は我と同類だふふふふふ」

「私は妖怪私は妖怪ふふふふふ」

不気味に笑いながら山を登る少女二人であった。

……結局、水が何故そんな喋り方をするのか、聞き出せなかった。

頂上に近づくにつれて、硫黄の香りが漂って来る。それを嗅いで私は本格的な温泉があるんだなと思い、到着するまで温度やら効能やら、色々な事を想像して楽しんだ。

「うわぁ……すごい広い」

そんなこんなで到着。眼前には天然の硫黄泉が広がっていた。ま

さに秘湯。整備された形跡はないが、流れは無く所々良い感じにお湯が溜まっている場所がある。

大自然に囲まれ、まったりと温泉を楽しめる最高のスポットです。あなたも一度、来てみては？ と紹介したくなるような美しい光景だ。

「さて、我は先に入って来るから、緑はそこで待っておれ」

「へ？ 一緒に入らないの？」

私が言うと、水の顔がたちまち赤くなる。

「そそそそそんな、お、男と一緒にいるなど……！」

「は？ 男？」

「いくらお前が小僧とは言え、い、一緒なんて……！」

「……」

「と、とにかく！ そこで待っておれ！」

この子、私の事ずっと男だと思ってたの？ まあ、よく間違えられるよ。間違えられないのは制服着てる時位だ。

アレか、シヨートヘアーだし普段はいつも適当な服を着ているから駄目なのか。くそう。

「ちょっと……」

とっとうと行くこうとする幼婆を呼びとめる。

「な、何だ？」

「私は女だっ！！」

.....

水の誤解を解き、無事入浴を終えた私達は、洞窟に戻って食事（主に肉）をして就寝し、次の日を迎えた。

朝起きて早々「さあ！ 今日から修業じゃ！」と水が叫び、昨日私が妖力を感じ取れるかを試した広場まで連れて来られた。

「さて、緑が感じたような妖力がお前の中にもある筈じゃ。頑張つてそれを感じ取ってくれ」

「え、それだけ？」

修業と言う位だから辛い事でもするのかと思っただが、水はそれ以外のメニューは言わなかった。

「今まで自分に無いと思っていた力を見つけ出すんじゃ。簡単な事では無いぞ」

「いやまあ、そうだろうけど。……何かコツとかないの？」

「無い」

「……そうですか」

何時までもここに居たって時間の無駄だと思い、水との会話を適当に済ませ、作業（修業？）を始めることにした。

「時間の無駄とは言っても、他にする事なんて無い所なんだよなー」

心の中の声に対して普段、自分がどれ程生き急いでいたのかをしみじみと感じてしまつたのであつた。

「何じゃ。まるで前まではすべき事が沢山あつたような言い方じゃな」

自己完結したので作業に入ろうとおもつたが、水が私の呟きに反応してしまつたので応えない訳にはいけなくなつた。

「うん。あのね、私が住んでいた所は、皆それぞれ何らかの義務が与えられて、それこ毎日こなさなきゃ駄目なんだ」

「義務？ 与えられる？ 何を言っておるのだ？」

「ここには社会という形態が無いので、私が言う事は到底理解出来ないだろう。」

「えーと、私が住んでいる所では、そういう決まりがあるの。義務をこなせば少しの権利が与えられる。そうやってその中で上手いこと生活するの」

「むう……。よく分からん。義務権利とは何じゃ。やらねばならぬ事を与えられるとは、変ではないか。我はそんな物など貰った事無いぞ」

国も社会も他人とのコミュニケーションもないこの大自然では、義務など無い。義務が無ければ、その対になる権利も発生しない。何をやっても良く、やらなくても良いのだ。その代わりに常に危険が付き纏い、欲しい物は全て自分で勝ち取らなければならない場所だ。

その違いを説明しようにも、専門用語を専門用語で説明するような形になってしまうので、理解に到達するのは難しいだろう。

私が当然だと思っていた事は、違う場所に一步踏み入れれば当然では無くなってしまふ。カルチャーショックというものを初めて受けた。

「私にはこれ以上説明出来ないのです、そろそろ修業を開始しようと思います」

「そうか。……緑は頭が良いんだか悪いんだか分からんのか」

文化が違えば必要とされる知識も違う。この環境においての私は、ただの馬鹿でしかないのかもね。

「さて、緑が修業している間、我はひまじやのう」

はあ。変な事考えてないで、水の為にはやく終わらせようか。

とりあえず、目でもつぶっていれば何か起きるんじゃないかな。

「……………」

うん。分かる訳ないじゃん。視界が真っ暗なだけだ。

そんなすぐには分からないか。もう少しやって駄目だったら、他の事しよう。

「……………！」

十分程経過しただろうか、突然強大な力が私の体の中を駆け巡るのを感じた。

「くっ……………！」

これは辛い。なんて力だ。

「まだまだ……………！」

それでも私は頑張らなければならない。

「うぁ……………！」

水のためにも。

「負ける……………ものか！」

それは、誰も抗う事が出来ないであろう偉大な力。

「ここまで来て終わる訳には……！」

この力に飲み込まれれば最後、抜け出す事は不可能だ。

「駄目、耐え、られない……！」

「ごめん水。もう私は限界だ。」

「……」

今日一日の事が走馬灯のように私の頭の中に映し出される。朝起きて、移動して、水が喋って、目をつぶって。なんだ、ほとんど何もしていないじゃないか。

「……」

せつかくの修行、もう終わってしまうのか……。

「zzzz……」

ついに私は眠気と言う強大な力に負けてしまった。茶番茶番。

どうやら本格的に眠ってしまったらしく、目が覚めたら夕方になっ
てしまっていた。

水も寝ていたようなので、起こされる事はなかった。昨日今日で寝過ぎだ。何やってんだろう私達。それにしてもよく妖怪に襲われ
なかつたな。

.....

修業（笑）を始めてから二週間位か、何となく過ごしていたので正確には分からないが、とにかくそれ位の時間が経っていた。

そして今日も修業だ。

「やれ」

水の言葉が大分簡潔になっている。

「飽きた」

これまで私は瞑想という名の睡眠以外にも、「出るー、出るー」と言いながら飛び跳ねたり、目についた木を適当に蹴ってみたりと思いつく限りの事をしたのだが、自分が痛い子になっていくだけだった。

そんな進展の気が全く無いこの状況に対し、そろそろ飽きが来てしまっているのだ。

「何か自分の力について思い当たる事は無いのか。どんな些細な事でも良いから、良く思い出してみるんじゃない」

思い出せ、ねえ……。

私の身の回りで不思議な事が起こり始めた時を思い出し、水に洗いざらい話してみた。

「おかしくなったのは、夏休みからだ」

「夏休みとはなんじゃ」

「話が進まないなので適度に無視して下さい」

きっかけは、私が受験勉強の逃げ道として始めた、地域の何だかを調べる課題。

私は村で古くから伝わっているおとぎ話に興味を抱き、調べた。そのおとぎ話の内容は、幻想郷の存在を仄めかすようなものだった。当時の私は、そんな虚構的な内容など信じる訳も無く、それを否定する為に唯一の友人東風谷早苗を連れ、遊び半分で実験のような事をした。

そしたら、幻想郷に入ってしまった。

「これは早苗の仕業だと言ってたから関係無い」

幻想郷に入ったのは、早苗の『奇跡を起こす程度の能力』によるものだ。私はただ騒いでいただけだった。

「それで、自分の居る所が幻想郷だとは知らずに普通に帰ろうとしたら妖怪に襲われたんだ。この時初めて妖怪に会った」

「何？ 緑の住処は妖怪が出ないのか？」

「うん。私にはそれが当然だったから、変とか言わないで黙って聞いててね」

「……………」

現れたのは、幻想郷では縄張り意識が強いことで有名な妖怪、天狗だ。確か犬走椛と名乗っていたかな。

私達はその椛とやらに侵入者とみなされ、攻撃された。私はその攻撃で動けなくなる程の傷を負って気を失い、早苗も重傷を負った。早苗によると、私が気を失うと同時に椛が突然倒れて動かなくなったので、その隙に早苗は残った力を振り絞り、私を抱えて逃げ出したそうだ。

「椛が倒れた理由は分からんのか」

「分からない。この話のあとで考えてみようか」

気が付くと私は布団の上に寝かされていた。そこは酷い状態の私達を治療してくれた、親切な姉妹（秋静葉とその妹の穰子）の家だった。

秋姉妹が特に何も言わなかったので、私達はその家に滞在した。そこでご馳走になった野菜が美味しかった。

「ここでも野菜を作ろうか」

「我は肉食じゃ」

二ヶ月後、私と早苗は穰子に連れられ人里に行った。そしたら元の世界に戻ってしまった。

「かなり省いたじやろう。訳が分からなくなったぞ」

「特におかしな事は無かったからね」

元の世界に帰る直前、秋姉妹は神だということが判明し、記念にペンダントを貰った。そのペンダントは今も私の首にかけられている。

「ん？ ペンダントなど見当たらぬぞ？」

「ぶらぶらするから服の中にしまっただけ」

元の世界に戻ると、早苗のご家族（神様）が引越すしてきた。私の唯一の友達の早苗が居なくなってしまうので、最後の最後まで一緒に過ごして思い出を作ろうとした。

そしてある日、私が早苗の家兼神社に行くと、そこには何も無かった。一日で神社が跡形もなくなってしまったのだ。もちろん、早苗とのご家族もいなくなっていた。

「この原理は分からないけど、私は関係して無いよね」

「早苗のご家族が神だと言ったな。其奴らなら出来ぬ事も無いじゃろっ」

「神様を其奴呼ばわりする水は一体何者なんだ。まああれは一度見たらそう呼びたくはなるけど……」

神社跡地を見た私は錯乱し、滅茶苦茶に走りまわって気を失い、目が覚めたら知らない所にいてそれから色々あって現在に至る。

「こんなもんかな。なんでここに来たのか未だに分からない」

「うむ。不明瞭な点は二つじゃな。椀の時と、ここに転移した理由じゃ。絶対緑の能力が発動しておる」

「絶対って……」

「それでもしないと話が進まん。まず椋に遭遇した時、緑がどう行動したか詳しく話せ」

「えー……つと、さっきの説明以上の事は思い出せません」

「はああああ……」

水は深いため息をつき、体育座りをして顔を伏せてしまった。だつて半年も前の出来事だよ。しかも極限状況で意識が朦朧としてたんだから思い出せないのは無理もないよ。

「……ここに来る直前の行動を話せ。忘れたとは言わせぬ」

「あ、それなら……」

一昨日の事だからはっきりと覚えてる。狂った自分の事なんて他人に話したくないが、我慢する。

「神社跡地を見て、私は早苗が幻想郷に再び行ってしまったんだと思ひ、自分も行きたいと強く願った」

そして私は、山に行つて叫びんだ事、森に行つて叫んだ事、その時言った言葉など事細かに話した。まるで懺悔している感じがした。

「……『あの頃に戻りたい今なんて要らない』、『早苗に会えるなら命を差し出す』か。必死じゃのう、若いのう」

「やめて復唱しないで恥ずかしい！」

「……緑の能力の見当が付いた」

「ええ！？ 何で！？ 私の能力はどんなの！？」

私の質問に水は答えず、不敵な笑みを浮かべながら「さー昼飯じやー」と言っつて洞窟に戻つてしまった。

「……ずるい」

.....

「緑。人間の住処に行つてみたことはないか？」

昼食を済ませ、修業を再開するのかと思つていたら、水が突拍子もない事を言い出した。

「行つてみたいけど……何でいきなり？」

「明日から修業をキツくするからな。少し自由をやるうと思つたんじゃない」

何か嫌な予感がある。こういう人が「キツくする」とか言つと危険なんだよ。能力の見当が付いたのが原因なのか。

嗚呼、私の命も今日までなのかな。最後の時間は大切に使わない

と。

「ほら、行くぞ」

私はここが過去だと思っっているから、人がいる所に行っても面白くないのではないか。という不安感があつたが、少し興味もあつたので水に付いて行つた。

そして山の頂上に着いた。見晴らしが良いです。

「草原にポツリとあるコンクリートジャングル……」

眼下には、巨大な壁に囲まれたビル街が見える。明らかにこの風景にマッチしていない。

「原始時代は何処へ……」

昔過ぎると逆に文明が発展しているのか？ こんな景色は歴史の教科書でも見た事がない。竪穴住居は無いのか。

「最早見る事は無いと思つていたあのぐちゃぐちゃ。誠に遺憾である」

「緑もそう思うか。あやつら、ここ数百年であんなに発展しおつた」

数百年でここまで？ この人々は大変頭が宜しいようですね。

「まあ、都会なら楽しめるか……」

私が住んでいた場所は田舎だけど、根本的な所は同じだ。初めて見る超古代文明都市が、いつもいつも見ていた都会だったことに強い失望感を抱いた。皆ももし過去に行く事があつたら気を付けましよう。

「我が緑の妖気を隠す。あまり離れるでないぞ」

「あ、そうか」

私は妖怪らしいので、人間に私の存在がバレたら解剖される危険性がある。身に纏う妖気をどうにかすれば大丈夫なんだね。

「一番なのは緑が力を制御すれば良いのじゃがな」

水は私に手を向け、念じる。すると周りの空気が圧縮されたような気がして、変な気分になった。

「うわ。私自身があやしい感じがする」

まるで私が不審者みたいな言い方だが、他にじっくりくる表現が見つからない。水に妖気を当ててもらった時に感じたものよりもハッキリと認識出来、それはあやしいながらも自分の一部であるかのような安心感も同時に存在した。

「感じるか。……最初からこうすれば良かったかのう。まあ良い、それが普段お前が撒き散らしている妖力じゃ」

「私が知覚出来る程の妖気って、普通の妖怪にとっては危険な量なんですよ？ そんなのいつも撒き散らしてたら不味くないの？」

「緑の妖気は広範囲に薄く広がる。ただ目立つだけじゃ」

ここに来た直後に連続エンカウントしたのはそういう理由だったのか。はやく何とかしなければ……

「そんな緑に弱小妖怪が近づかんのは我が居るからなのだぞ。感謝せい」

確かに水に会ってからほどなに隙を見せても、妖怪に襲われな
い。水はこの辺では番長的存在で、皆恐くて近付けないのだろう。
人は見かけによらない。

「せっかくの自由時間じゃ。妖力云々の話はもう良いから、さっさと行くぞ」

水っててきばきと行動するよね。

.....

高く分厚い塀に囲まれた街に入る際には、幾多の検問を突破しなければならなく、人外生物が近付こうものなら即殺害出来るような設備があつた。

その検問は無人で、代わりに所々に銃付き監視カメラ設置されている。さらに空港にあるような金属探知機らしきアーチや、X線照
射機のようなハイテク機械の中を通り抜けなければ先に進めないよ

うに作られている。

水の堂々と歩けという指示に従って探知機類をスルーすると、私にとっては見慣れている都会に出た。車いっぱい人いっぱい、信号いっぱいビルいっぱいの地獄絵図だ。

「都会のセキュリティがこんなんで良いのかな……」

「自惚れてるだけじゃろう。全く、危機感が足りぬ」

自惚れているのかは分からないが、街の中にも多くの監視カメラが設置されていて、せわしなく動いている。

恐らく妖怪が入った時、直ぐに機動隊のような恐いお友達が駆けつけ圧倒的武力を以って駆除したり、事件事故が起きた時に色々な役目をするのだろう。

「これじゃあプライバシーなんてあって無いようなものだね」

「ぶらばしー？」

「他人に口出しされない自分の時間のこと」

「む？　そういうものは、自分で勝ち取るのでは無いのか？」

また大自然幼女水の質問タイムが始まった。こういうのって答えるのが難しい。

「ここにあるのは共存だから、そういうのはダメ」

「面倒じゃのう」

私の適当な答えに満足したようだが、私にはさつきから気になっている事がある。

「監視カメラとか車とかに付いてる、あの『YATSUIGROU P』ってロゴは何なんだ？」

視界にある全ての物にこのロゴが付いているのだ。普通ならば色々な会社名が見えるハズなのだが、この光景は異常だ。

「この集落は、八意やこいという名の人間を筆頭にしてここまで栄えたんじゃない。最初の代は向上心があって良い人間だと思ったが、今の八意家はどうも好きになれん」

「水はバ……その頃から生きてるんだね」

禁断の語句を言いそうになったが、とっさに婉曲な表現をしてみかけた。危なかった。

「こんなハイテク都市がある今を原始時代とは信じたくないけど、本当ならどうしてローマ字やら漢字やらがあるんだらう」

「それは大人の事情じゃ」

「大人の事情か」

大人の事情で真実は隠されてしまったが、考えようによってはこれが言語の大本で、後々世界中に広まったと解釈できないこともない。漢字アルファベットその他の絵文字がバラバラになって各国に伝わり、時が進むにつれ再び一つにまとまったとかだったら面白いのに。

そんな妄想をしつつも人いっぱいの大通りを進むと、左斜め前の方に良さそうな店を見つけた。そこにもYATSUIGROUPのロゴが入っていた。

「あ、あそこに百円ショップがある！ 行ってみよ！」

「金は無いぞ。見るだけだからな」

百円ショップまでやってるのか。そんなすごいすごい社長の顔が見てみたいね。

「何じゃこれは。入れないではないか」

水の前には自動ドアがあるのだが開かない。水の背が底過ぎてセンサーを感じ取れないのだろう。

私はブーブー言ってる水を抱きかかえて普通に店内に入った。

店内を見渡そうと思った瞬間、真っ黒な高級スーツを着こなし、嫌らしい営業スマイルを浮かべた男達に囲まれた。

「な、何ですか……？」

「おめでとつございます！」

中央に居るリーダーっぽい男が私の質問に答えず、妙にハイテンションで祝いの言葉を叫んできた。

「あなた様は、ヤツイグループの店に訪れた丁度八億人目のお客様です！」

……もう、意味分かんない。

七転八起、ひとやすみ（後書き）

とある事情により投稿が遅くなりました。

FFと風のクロノアとゼル伝をやって遅れたなんてことは誰にも
言えませぬ。

飛花落葉、なにしよう

「八億人目のお客様には記念として、ヤツイグループ主催のパーティーに招待させて頂きます！」

黒スーツをびっちり着こみ、髪をこれでもかという程ギットギトの油でオールバックに固め、胡散臭く不愉快な笑みを浮かべた社員がおっしやった。

「八億人って、この街にそんな人口多く無いですよね」

「お前の顔を見てると気分がっ……」

水が社員に悪口を言いそうになったので、すかさず水のあごを押上げて阻止する。気持ちは分かるけど今は言っではいけない。後で陰口をいっばい言えればいいのだ。

「八億人という表現は語弊がありましたね。誠に申し分け御座いませんでした表現を来店回数八億回目のお客様と訂正して御詫び申し上げます誠に申し分け御座いませんでした重ねて御詫びします誠に申し分け御座いませんでしたどうかこれからヤツイグループの店舗を御利用下さいませ」

しつこい。

「それではこれから御会場に御案内しますので我々が用意したヤツイグループ自動車部門による最新モデルの車まで御足労を御願いますさあさあこちらで御座います」

すごくうざい。所々に宣伝を入れてくるのがうざい。あからさまな営業スマイルを絶やさないのがうざい。そんな男達に囲まれててよりうざりたい。

「何なのだその喋り方は気味わるっ……」

すごくうざいが悪口は後だ。再び水の口を閉ざしてやる。

「（しばらく黙っててねー）」

「……ぶう」

ただ目についた百円ショップに入ったただけなのに、エライ事になってしまった。スーツ長の言う“パーティー”への参加は、すでに決定だという雰囲気が出来上がっていた。

「ああ私としたことがすっかり忘れていました私ことういう者です自己紹介が遅れてしまって申し分け御座いません」

途切れない言葉と共に名刺を渡して来た。それにつられて他のスーツ達も名刺を差し出す。

一々名前を覚えるのは面倒だから、今からスーツ達の事を三郎と呼ぼう。名前の理由は特に無い。

さあさあ向かきましょうと三郎に押され気味になりながら、百円ショップの外に出た。店内を見てみたかったのに。

「車を用意させますので少々御待ち下さい」

三郎はすぐそこに見える電話ボックスに入って、公衆電話にカードらしき物を差し込んだ。

二、三秒すると地面が轟音を立て、電話ボックスとその周辺の地面が段々と陥没してきた。あれ、陥没と言うよりも地中に潜ってないか？

「うわ、落ちてる、落ちてるよ！」

「御安心下さい現在車が格納されています地下に移動しているので御座います。我々ヤツイグループ専用の地下通路なので渋滞などは無く快適なドライブをお楽しみ頂けます一般の方にも月二十万で御利用出来ますので宣しければ是非ヤツイグループの道路を御使い下さい」

……もう話して欲しくない。何回「御」をつければ気が済むんだ。他にもつつこみ所満載過ぎてやってられない。

こうしている間にも公衆電話付き地面は地中の奥深くに沈んで行く。まわりの壁はコンクリートで舗装されているので、土管の中にも入っているような気分だ。

そして、幅が10メートル位のすごく広い道路がある最深部にたどり着いた。真上を見る。地上はもう点にしか見えない状態だ。

地面の下降が止まるか止まらないかのタイミングで、見た目からして超高級な黒塗りの長い車が走ってきて、私の目の前に止まった。

「どうぞこれがヤツイグループの最新式全自動操縦車音声認識機能

付きリクライニングシートを添えて、御座います来月発売予定で御座いまして御値段は八千万とさせて頂だき御座います」

「ふっ……」

三郎の商売根性に対して、呆れを通り越して笑えてきた。失笑である。

「御気に召しませんでしたかならばこれよりもツーランク上に御座いま」

「や、いいですから行きましょう」

「そつで御座いますかそれでは私めがこのヤツイグループ最新式全自」

「これに乗ればいいんですね」

このまま三郎に喋らせて置くと、この薄暗い地下から出るのがいつになるか分からないので、私がきびきび動いて差し上げる。とりあえず後ろの方に乗れば良いんじゃないか。

「ん！？ こ、これが車の中だと……！ 認めない、私はこんなの認めない！」

ドアを開け、車に入ればびっくり。決して高いとは言えない天井には、豪華過ぎてごちゃごちゃしているようにしか見えない位の装飾をされた明かり。その真下には、鏡のようにツルツルで光沢の出た木製の机。両サイドには、座った者を必ず眠りに落とすと主張しているかのごときふわふわソファー。

あのソファアに座ってみたい。いいよね、本当に私の為に用意されたんだよね。突撃だ！

私はさっきから黙っている水を引っ張り、駆け込み乗車のような入り方をして、ソファアに座った。ダイナミック乗車をした時に天井に頭をぶつけたのだが、興奮状態の私にとって、そんな事は気にする程のものではなかった。

「おおおおお！ 何だこのソファアはzzz……」

あまりにも良い座り心地で、ソファアが言っていたように、座った瞬間に寝てしまった。

.....

「お客様、起きて下さいませ。ヤツイグループ本社ビルに着きました。これより徒歩で地上23階に御座いますお客様御来店回数八億回目記念パーティー本会場に向かいますのでどうか御目覚め下さい」

どれ位寝ていたのか分からないが、会場に着いたようだ。隣の水は腕を組んでムスツとしている。どうしたのかと思い、やや本気で水の頭を叩くと、水は驚いてこちらを見てきた。叩いたのが私だと分かれると、水は呆れたような顔をして私の腹部を殴りつけ、再びムスツとしてしまった。お腹痛い。

水の事は諦めて窓の外を見ると、大理石が見えた。どこを見ても大理石だ。どうやらここは、床・壁・天井の全てが大理石でつくられたホールようだ。超金持ちだね。

「お気に召しましたかこの駐車場はヤツイグラー」

三郎が話し始めてしまった為、急いで車を降りる。車内は遮光処理がなされていたので分からなかったが、ドアを開けた瞬間、このホールがとても明るい事に気付いた。いや少し待て、三郎はここを駐車場だと言った気がするぞ。この大理石空間が駐車するだけの場所だというのか。金持ちは許せん。

この大理石空間をじっくり鑑賞しようと思った瞬間、前のドアから下車し、先回りをした三郎達にこちらですと先導された。三郎達のうちさつたさと面倒さを考えると、素直に従った方が良いと思い、大理石鑑賞を諦めて歩き出した。私は大理石の床をコツコツと鳴らして、駐車場の端に見えるエレベーターに向かう。

そのエレベーターの前まで来ると三郎達は立ち止り、少々御待ち下さいと言う。三郎の内の一人が懐からリモコンを取り出してボタンを押した。するとエレベーターの扉が開き、私達が乗り込むと自動的に閉まって上昇し始めた。

エレベーターの中は8畳位の広さで、私と水と三郎5人が乗っても余裕があった。降りる階を選択するボタンはどこにも無く、恐らく社員が持つリモコンでのみ動かせるのだろう。一般人や産業スパイが簡単に侵入出来ないようなシステムだ。

「……………」

「……………」

水は私が黙れと言った時から一言も喋らないし、私も三郎に出しゃばって欲しくないので無表情を貫いている。三郎達も、私が何らかのアクションをとらない限りは黙っているだろう。エレベーター

特有の無言ゾーンに突入した。

『23階です』

機械音声が到着を知らせ、扉が開いた。すかさず三郎4人が降り、2列に分かれて「いらっしやいませ」の体系になった。残ったリーダー三郎は、私達を案内する為に真ん中に立ち、御辞儀をする。

「どうぞこちらへ」

三郎の後を着いて行く。上品な暗さの長い廊下を少し進むと、いかにも大ホールがありますよーと言っているかのような重厚な扉が現れた。緊張してきた。これから何が起こるんだろう。

三郎が扉を開ける。廊下の暗さとは対象な、眩しい光がホールの中から漏れ出す。

三郎が扉を開ききる。ワイワイガヤガヤとしていたホール内が一気に静になる。

「八億人目の御客様の御登場で御座います！ 皆様御拍手で御迎え下さい！」

ホール内からその台詞が聞こえた瞬間、割れんばかりの拍手が巻き起こった。とてつもなく広く、天井も3階層位使っているんじゃないかという位の高さがあるホールだ。その中に無数の社員が集まり、一斉に拍手をしているのだ。すごくうるさい。

奥にある舞台に、『祝、八億記念PARTY』と行書体で描かれた看板がぶら下げている。アルファベットを行書体で書くのは無理があると思った。

「さあさあ御客様ホール内に御入ってしばらく御くつろぎ下さいませ。私めはヤツイグループ新会長、八意永琳やじこんえいりんを呼んで参りますので」

「……そうですか」

そんなこと言われても、こんな人々の中にくつろげる訳ない。さらには、このパーティーの主賓は私達だろうさ。絶対何かされるよ。

しかし、私達にはここに入って待つ以外の選択肢は存在しない。勝手に外に出て歩き回ったら警備員に捕まるだろうし、帰ろうにもボタンの無いエレベーターは使えないので不可能だ。

「ごちゃごちゃが嫌だと思っ反面、私自身パーティーに参加するのは始めてなので、すごく興味があるという一面もある。せつかくだから、私はこの変なパーティーを楽しむぜ。」

私達がホールの中に入るのを見送った三郎は、そつと扉を閉めて行ってしまった。

やっとあのスーツから離れられると思ったが、周りを見ると同じようなのが大量にいた。さらには、お面を被っているのかという程の化粧をして、目に突き刺さるような光沢を出しているドレスを着た女性までいる。

初っ端からこんな目に毒な光景を見せるとは、歓迎されているのだろうか。嫌がらせの間違いではないのか。

「……臭い」

ここで始めて水が言葉を発した。すごくテンションが低い。

「何が？ 香水の匂いとかキツイの？」

「……香水？ この不自然に甘い臭いの事か。確かに酷いがそれだけでは無いぞ。ここには人間共の企みや欲望やら、様々な感情が空气中に漂つておる。そんな場所に閉じ込められて実に不快じゃ」

水の言う事は分かる気がする。会社がやるパーティーが、純粹に楽しませる為にあるとは考えられない。こういったパーティーは、下っ端が上司に媚を売つたり、出会いを目的として参加しているだけの社員がいたり、酒の勢いに任せて取り引きをしたりする場と成り得るのだ。

そう考えてみると、私達が直接的に何かされる可能性は低いのかな。でも幼婆こどもにとつてはこの空気自体が毒なのだろう。何か気分転換になるものでも持つて来よう。

「……じゃあ端っこの方で待つて。飲み物貰つて来るから落ち着こうね」

「……酒な」

「却下」

水がいくら長生きだとしても、見た目は幼女だ。私からお酒をすすめるような事はしない。出来ない。見られたら捕まる。

ジュース類……お茶の方がいいか？ うんお茶だ、抹茶でも貰つて来よう。適当に歩き回ればきつと見つかる。

「じゃっー！」

「酒だぞ！ 間違えるなよ！」

水の要求を華麗にスルーして、私は陰謀と欲求が噴き出す戦場へと飛び込むのであった。

ホール内には、料理がのった丸テーブルが等間隔に並べられていて、その周りはドレススーツ達が立っている。ドレススーツ達はテーブル毎にコミュニケーションを作り、雑談をしまくっている。

「こんな私服で目立つ高校生が歩き回ってるというのに、全く見向きもされないんだね」

飲み物がどこにも見当たらず、かなり歩き回ってしまった。

私は主賓であるのに、ドレススーツ達は自分の用事で一杯一杯になっただけで、私達をもてなす事なんて元から頭に入っていないような様子だ。

「誰かに聞いてみようか……」

全く気が進まないが、このまま探し回っていても時間がかかり水が窒息死してしまうので、目の前にあるテーブルに群がった人々に素直に声をかける。

「すみませーん……」

「……た……の……」

「……ち……………ふ……………」

私の声が小さいのか、それとも向こうが自分の世界に入っていて気付かないのか、どちらでも良いがドレススーツ達の反応は無かった。

一体何をそんな夢中になって話しているんだ。私にも聞かせて！。

「……今日の“パーティー”が成功すれば会長の座が我々に近づく。決して失敗するな」

「……何度もシュミレーションして来ましたがね、失敗する確率など極めて低いでしょう。しかし流石ですね小林専務。会長の座の為に一般人も巻き込んで“パーティー”を開くのですから」

「……大切なのは一般人に目撃される事だからな。それを実現するのに適しているのが“パーティー”という形式だ。例え一般人が一人だとしても、そいつが言いふらせば一瞬で会長の“失態”が町中に知れ渡る」

うおう。こいつら一般人の前で穏やかじゃない話をしてるよ。私から見て右にいる三郎が『小林専務』で、左にいる三郎が『小林専務』と呼ばれた三郎の部下か。三郎がいつぱいで意味分からなくなってきた。

「……会長の“失態”が町中に広まった瞬間、奴は辞めざるを得なくなるだろう」

「……そうすれば会長の座は何の疑いもなく小林専務にまわってきますね。私の昇格も忘れないで下さいよ」

汚いよ汚過ぎるよこいつら。会長の座を狙う下っ端社員のだろドロドロ口話だ。だが残念だったな小林専務、私は今全てを知ってしまったのだ。私はお前達の思い通りに動かないぞ。

「（……小林専務、後ろに“招待客”が）」

「（……クツ。聞かれたか？ いや、大丈夫だろう。周りの音で我々の会話などろくに聞き取れない筈だ）」

「（……見た目からして十代後半から二十代の男です。もし聞かれていたのならば、後々この事を拡大解釈されてネットに流されますでしょう。大変な事になりますよ）」

「（……とにかく媚を売れ。ここでの話を忘れる位に、な）」

部下が私の存在に気付き、こちらを見ないように小林専務とコソコソ話をするのだが、丸聞こえだ。私ってこんなに耳良かったっけ？

それよりも重要な発言があった。こいつ、私の事を男って言ったな。何故だ、何故私を女だと思わないんだ！ あれか、目つきか？ 思わずゴミを見るような目つきをしてたから駄目なのか？ くそう。

「お客様、どうなされましたか??？」

三郎達は振り返り、すさまじい営業スマイルを浮かべながら私に話し掛けて来た。

「いえ、何でもあ」

『皆様方！ 準備が全て整いました！ 当グループ御来店回数八億人目に選ばれたお客様はステージまで御越し下さいませ』

三郎達に再び嫌気が差し、自力で飲み物探索をしようと思った丁度その時、召集の放送が入った。

「では失礼しましたー」

無表情で適当な別れを造げ、ステージに向かう。少し離れたところで陰口を言いまくった。有言実行である。

ステージ前に、水（放送を聞いて嫌々来たのだろう）と三郎が立っていた。私の到着を待っているのだろう。水を三郎と二人きりにさせるのはあまりにも可哀相なので、私は急ぎ足でそこに駆けつけた。

「お客様いらつしやいましたかではステージ上に御上がり下さい私からの御挨拶の後にヤツイグループ新会長八意永琳が参りますので」

三郎の滅茶苦茶な御御言葉に返事をせずに、私は水を引つ張ってステージに上る。途中水が「酒は……」と呟いた気がしたが、気のせいだろう。

ステージ上からホール内を見渡すと、数えきれない程の人々が隅から隅までいた。全員こちらに注目しているのかと思ったがそうではなく、相変わらず世間話に夢中になっていた。それでも多人数の前に立っているのは同じなので、私は緊張して足がふるえてきた。

『では私、三上三郎みかみさぶろうが御挨拶をさせていただきます……』

あれ、私は思い付きでスーツ達の事を『三郎』って名付けたのに、
どうやらこの人は本物の三郎らしい。

本物の三郎はマイクを持って挨拶を続ける。これは長くなりそう
だ。

『我々ヤツイグループは、“弓のマークのヤゴコロ製薬”を起点
として……』

三郎の挨拶を聞く人は誰一人としていない。三郎も気にする様子
は無く、カンペを丸読みしている。

「おい緑」

水が痺れを切らしたのか、私に話し掛けて来た。

「はいはい何でしょう」

「ここの人間共の話聞いたのだがな」

どうやら水も三郎達の話盗み聞きしていたらしい。

「近頃、この辺りの森林伐採と有害生物の除去、すなわち妖怪の駆
除をして我が住む山を行楽地とする計画が実行されるらしいぞ」

「はあ!?!」

「人間が自然に刃向かうなど……」

学校の授業とかで「森林伐採して動物が住む所が無くなり絶滅し
ました」と教科書に客観的に書いてあって、何の感情も湧いて来な

かった。しかし今は違う。立場が違う。傍観する側ではなく、やられる側なのだ。この世界に来てからまだ日が浅いとは言え、水との生活が壊されると思うと、もやもやするものがある。

「嘘でしょ？」

「奴らならやりかねない。人間共はこの街という枠内に収まり切れなくなったのだ」

嘘だと信じたいが、“今”を生きた私にとってこの計画が確実に実行される事は分かっている。エコという名の抑止力はお金の前では何の効力も発揮しないし、そもそもまだ環境汚染を気にする必要の無いこの世界では、何の枷も無い。もー三郎達はどうしてこうも私と水の気に障るような事をするのかね！

『時が経つにつれて徐々に事業拡大をし……』

三郎のスピーチをBGMにして、私は色々な事を考えた。今の場所が無くなったら？ 上手くやればこの街に住めるか？ 私の力とやらでこの計画を中止に追い込めないか？ 洞窟で生活するのこの街で生活するのは、どちらが幸せなのか？

「ああもう！ 分かんない！」

「緑にとっては、この街の生活は快適なものだろう。しかし緑は妖怪じゃ。人間の恐怖があつてこそその生物じゃ」

確か幻想郷が出来た理由は、人間が妖怪を信じなくなったから、だ。水の言うように、妖怪は人間が恐怖することによって初めて存在出来るものなのだろう。妖怪である私が、街のど真ん中で人間と

仲良く暮らす事は不可能なのだ。

『……で御座いまして、先週からヤツイグループ会長に就任なされました八意永琳様に祝いの言葉を賜りましょう。それでは！ 新会長、御願います！』

そこで三郎に思考を切断された。

ステージの奥から、赤と紺の継ぎはぎな服を着た看護師みたいな女性が歩み寄ってきた。長い銀髪を三つ編みにした女性は、とても面倒臭そうな顔をして、私の前に立ち止まる。

「はいおめでとう。……もう良い？ 作業に戻らせてもらおうわ」

「は？ いえいえ御待ち下さい八意永琳新会長。我々が開催したこのパーティーが台無しになってしまいます。まさか御客様の前で醜態を晒す気ですかね？」

この女性が会長らしい。本物の三郎が私の相手をしていた時より酷い顔になって、嘲笑を混ぜた喋り方をする。

会場内はざわめきが起こり、耳を済ますと「我々が仕掛けるまでもなかったな」とか、「やはりあんな人間は会長に相応しくない」といった声が聞こえて来る。

「……はあ。下らないわ。じゃあ一つ面白い話をしてあげる。それで満足でしょうっ？」

そう言つて永琳会長はマイクを持ち、話し始める。

「……来週、この街を月に向かって打ち上げます。理由は明白。このまま地上にいるとあなた達のように穢れてしまっただけだから。私

はこの純粹な少女を純粹なままでいさせたい。そしてあなた達に染み付いた穢れを取り除きたいと思つています。月は穢れを許さない場所です。皆様の淀んだ目がキラキラ光る光景が見てみたいですね。この計画に不満がある方はこの街を出てもらつて結構です。何も無い所で、八意家の力も借りずに生きてみて下さい。出来無いでしょう？ あなた方は八意家にすがり付いているだけなのですから。私が会長になった事に不満があるのなら、外に出て勝手にして下さい。必ず成功するでしょうから。それすら出来ないのなら、私と月に行つて綺麗になりましょう？」

「うわっ、この会長すごい事言う。月に行くという発想と、汚い三郎達に向かつて物怖じもせず批判する姿勢と、二つの意味ですごい。しかもこの人は私の事を少女つて言つてくれた。絶対良い人だ。」

「何を夢見事を言つているのです？ 八意新会長。来週は山のリゾート化計画実行の日ではないですか」

「その計画は私を抜きにしてあなた方が勝手に決めた事ですよね？ すごいじゃないですか。私がいなくてもしつかり出来るじゃないですか。良いですよ？ 八意家が最低限の機材を提供しますのでご勝手にどうぞ。その間に私達は月に行きます。後はあなた方で生きて下さいね。私がいなくてもしつかりやれるのですから」

「……チツ。たかが十数年生きてだけの小娘が……！」

永琳会長の演説に、ついに三郎がキレた。ざまあ。

「そうですね。生まれたばかりなのでこんな飛んだ発想が出来るのです。いえ、月に行くのは別に強制では無いのですよ。私の考えに付いて来られないのなら辞めて下さつて良いのです。あなた方の大

好きなお金をいっぱい差し上げます。それを使って大自然の中で生きれば良いじゃないですか」

「……」

三郎は言い返せない。スッキリ。

「……か、会社を作つてやる」

「あらどうぞご自由に。この街の全ての物は八意家のみで研究・開発しているのですけどね。あなた方のような頭の回らない人が、一体どうやって社会を形成していくのでしょうか」

元々この時代は原始時代っぽい。全く発達していない原人が、八意というイレギュラーな人間のおこぼれを貰ってここまで来たに過ぎない。すなわち、いくら三郎が現代人のように見えても、頭の中身は原人であり、八意がいなければ石器を作る程度の能しかないのであろう。私が三郎と口論になったら余裕で勝てるんじゃないか？

「ぐっ……!!」

喋れば喋る程自分の首をしめる事になる三郎。永琳会長は相手の反論を待つてあげている。

「お、俺は山のリゾート化計画を実行する!!」

その時、ホールのどこかから本物じゃない三郎の声があがる。その声を起点として、次々と俺も私も声があがった。

「ふふふ。どうぞご勝手に。それはそれで、人の発展という物が見

警備員が私達を強制退場させるようだ。やっと帰れるね。

もう用無しだからか、世間で自分を包む事を忘れてしまったのか、ここに来た時とは打って変わったとても手荒なお見送りをされた。簡単に言くと、私と水はそれぞれ警備員に担がれ、ダストシュートらしき穴に放り込まれたのだ。そして気付くと歩道のご真ん中で倒れていた。

.....

「休業じゃ」

あの後普通に歩いて山に戻り、夜を明かした。そして今、何事も無かったような顔をした水が死の宣告をした。

「今日からキツくするんですね……」

「うむ」

「もう一日待てませんか……」

「だめ」

「あと5分……」

「早くせんか！」

どうしても死は免れないようだ。昨日、少し妄想イメージトレーニングをしたから少しでも長く生きれないかな。

「ほれ、朝飯にするぞ。こっちに來い」

そう言っつて水は薪がある場所から手招きをする。私は二週間余り生活して、すっかり定着した位置に腰を降ろした。

「……いつもおにくだよな」

「我は肉食じゃ」

「野菜も食べよう?」

私の首にかけられている豊穰神のペンダントに掛けて、私は野菜を推進する。

「あんなもの食えるか!」

「何故そんなに嫌っつておられるのですか」

「肉の方が美味しいのじゃ! 苦いとかそんな理由で嫌っつているんじや無いからな!」

苦いのが嫌いらしい。世の中には甘ーいキャベツとかすごーいナスとかがあると云つのに。

「暇が出来たら一緒に野菜をつくらうね。絶対美味しいから」

「……そんな事より緑、のどかわいたじやろう？ ほれ、水じゃ」
話をそらされてしまった。野菜の話をするのすら嫌らしい。

「まあ、貰っておくよ」

水から木製の器を受け取り、一気に飲みほした。

「ぎゃあああああああああ！…これお酒じゃん！…何してんの水！ あと二年待ってって言ったよね！？」

「緑、良い飲みっぷりだったぞ！」

万遍の笑みを浮かべながら肩をポンポン叩かれる。

「景気付けじゃ！ そんなに気にするでない！」

「……苦い臭いのどが痛いクラクラする」

この酒のアルコール度数はいくつなんだ。体のあちこちがパツパ
ラパー。

「それ以外に感想は無いのか」

「水のばかぁ……う」

「うわっ！ 緑、大丈夫か！？ ……我の酒はそんなに酷いのか？」

慣れない酒を一気飲みした事により、私は意識を失ってしまった。

目覚めた場所は洞窟内では無く、草原。私が水と出会った広い草原のど真ん中であつた。

「何でやねん」

「修業じゃ」

「私、あなたのせいで意識、失つてた。分かる？」

「緑がどんな状態であろうと修業はするぞ」

まだ頭はクラクラしているし、息苦しい感じもする。こんな状態で修業なんて出来るのか。

「修業の内容自体は簡単な事じゃよ。そう焦らんで良い」

「あなたの言う簡単とは上の下という意味ですよね」

「難易度は緑次第じゃな。うむ、内容を発表するぞ」

「……」

「発表するぞ？ 何か最後に言いたい事は無いのか？」

「……生きて帰つたら、水と温泉に入るんだ」

「えっ我と？ そ、そんな、照れる……じゃなくて、内容を発表するぞー」

「……もう言い残すことは無い」

「緑には一週間、山以外の場所で一人で生活してもらおう」

……ああ。それは確かにキツイ。私が普段から垂れ流しているらしい妖気を何とかしなければ、興味を持った妖怪と連続エンカウトすることになる。私が持っているという妖力を使いこなさなければ、襲ってきた妖怪を追い払うことが出来ない。

逆に私が妖力を制御出来れば、妖怪に見つからずに、安全な生活を送る事が可能なのだ。難易度は私次第なのだ。

「頭を使え。自分の周りで奇妙な出来事が起こった時を思い出せ。妖力を使え。一番手っ取り早く能力が引き出せる」

「……自信無いなあ」

「一週間じゃ。一週間後に山へ戻って来るが良い」

「……分かったよ」

「さらばじゃ！ 緑！」

「ばいばい」

短い別れの言葉と共に、水は山へ飛び去った。

「……はあ。一週間究極のサバイバル生活か」

ここは見晴らしが良く、妖怪に見つかり易いので取りあえず、博

麗神社があつた森の中へ行こう。

「……あ」

「……あ」

水がいなくなった瞬間これだよ！ 早速エンカウントしたよ！

「おまえはこのまえの！ しんでいなかったのか！」

水と出会う直前に襲われた黒髪長髪二本角長身スタイル抜群のバカ妖怪だ。

「少し待とうね。私、今頭が回らないから」

「しょうぶだ！」

話すだけ無駄である。どうしようこの妖怪頭は悪いけど持つてる力はスゴイ。いきなりピンチだ。

「パンチ！」

「うわっ！」

不意に妖怪はパンチを放ってきたので、すれすれで避ける。前は余裕で避けられたこの真っ直ぐなパンチ。今は酔いのせいで上手く反応出来ない。

「キーク！」

「うおっ！」

続けて放った回し蹴りをしゃがんで避ける。いつもやってる手順だ。

「うっ……」

急にしゃがんだお陰で一瞬意識が飛んだ。不味い、この隙は不味い！

「とどめの……」

妖怪は、前と同じように地面にクレーターを作る威力のパンチをするようだ。前と違うのは、私が動けない事。

「ひっさっ……」

ああ、何でいきなりこんな危ない状況になっているんだ！ 考える、考えるんだ！ 私の能力は何なんだ！

私がこの過去らしき世界に飛んだ時。

「あのころにもどりたいこないまなんていらぬい」
「いのちをさしだしてもいい」

“今を失い、過去を得る”

“人間としての命を失い、妖怪としての命を得る”

私が椀と相対した時。 やっと思ひ出してきた。

「わたしとさなえがこんなにきずついてゐるのになぜおまえはそんなにげんきなんだ」

「な、なんですかこれはっ!？」

“自分が失つた体力の分を、相手にも支払わせる”

ああ、考えてみれば簡単な事だ。

“対価を支払い、利益を得る”

こんなの世の中じゃ基本中の基本じゃないか。

私の能力はこんなにも分かり易いものだったのか。

「すーぱー……」

これが正解かどうかは分からない。しかし試してみる以外に道は無い。

「妖力を使つて……」

「パンチ!!!」

「相手を吹き飛ばせ!!!」

迫り来る拳に反射的に目を瞑ってしまった。

「……あれ？」

相手の攻撃は来ない。目を開けて、周りを見る。

「……………おお！」

鬼は、数十メートル離れた所に倒れていた。

「良かった。当たってた……………」

私の能力。

名付けて“等価交換する程度の能力”と言ったところか。
等価交換とは、元々建築の世界で使う用語だった気がするが、他に良い呼び方が思い付かないのでこうしよう。

「あの鬼、死んで無いよね……………」

いくら私を襲ったとしても、殺してしまったとなると私の心が痛む。なので、少し近付いて様子を見てみた。

突然鬼は起き上がり、こちらに駆け寄って来た。

「すげー……………！！！」

「え？」

「あたしをとばしたのなんて、おまえがはじめてだぞ！」

「そうですか」

「ししよーとよばせてください！」

「ええ！？」

能力が発現した瞬間、弟子が出来てしまった。

.....

それから一週間。妖力の使い方が分かった私には、7日間の生活など容易いものであった。かなり調子に乗った。

まず、垂れ流しだと言われていた妖気は、“妖力を使い妖力を隠せ”という、おかしな方法で隠した。隠すのに妖力を使ってるけど大丈夫かなと思ったが、大丈夫だった。

妖怪に襲われたとしても、弟子（気分で花子と名付けた）が適当に蹴散らしてくれるので、安全に生活出来た。

「よし帰ろう」

「きょうはどこにいくの？」

「私の師匠のお家」

「ししよのししよのおうち？　すげー！」

やっと水と会える。強くなった私にひざまずくがいいぞ。

そんなこんなで、私達はすでに水のねぐら近くまでやって来ているのであった。

「あ！　あれだよ花子！」

「なんだあのどうくつは！」

何だか洞窟の様子がおかしい気がする。静か過ぎる。

「おーい！ 水ーみーなーみなみなみなみー！」

何の反応も無い。

「あれー？ 歓迎は？」

その時、鼓膜を破るかのような雷鳴が轟いた。

「ひっ！」

「でっかいおとだねー」

雷につられたようにポツリポツリと空から水滴が降って来て、次第に雨足が強くなる。

「早く洞窟の中に入ろう！」

「しししょうはー？」

「雨宿り優先！」

分厚い雲におおわれて、世界は真っ暗になる。不規則に落ちる雷が、辺りを照らす。

今日は私が修業を始めて一週間になる日。

また、意見が分裂した人間達により月の居住計画と、山のリゾー

ト化計画が実行される日。

雷は轟き続ける。豪雨は降り続ける。

それは、祝福のクラッカーのような音に聞こえ、怒りの爆発音にも聞こえた。

三日三晩雷雨が続く。

帰って来いと言った本人、龍巳神 水は帰って来る事は無かった。

「怒った。水が帰って来るまで、待ってやる」

飛花落葉、なにしよう（後書き）

第二部が終わりました。ありがとうございました。

蛙鳴蝉噪、お久しぶりです

三十年だ。

三十年経ってしまっただよ。

私、木葉緑は命の恩人であり師匠でもある幼婆よっしよ、龍巳神水たつみのかみみなの帰りを待ち続けています。半分は「明日きつと帰ってくる」という期待と、もう半分は「水が帰って来るまで絶対ここから離れない」という意地で三十年も待つてしまいました。水が死んだ等の考えは持つておりません。何しろ水は何万年も生きている妖怪ですから、そう簡単には死んでしまう筈が無いと信じております。

水が姿を消した三十年前の、あの日に、大規模な降雨と落雷が、この辺りを襲いました。余りにも酷いものでしたから、天候が回復した後に、私は山の頂上まで上り、周辺地域の様子を見ました。すると、ああ、何たる事。麓にあるべき筈の高層建築物密集地、すなわち人間の街が跡形も無く消え去ってしまっていたのです。この出来事が起こるのは以前から知っていたので、そこまで驚かなかつたのですが、もう一つ、おかしな事があり、私はそちらの方に吃驚びっくりしました。

私が住んでいる洞窟と、丁度反対側に当たる山の面が、木は疎か

雑草一本すら生えていない、唯の斜面となっていたのです。いえ、唯の斜面とは言い切れないかもしれませんが。よく見ると、そこら中に鉄の屑が落ちていたことが分かりました。その屑は落雷によって破壊された機械の破片でしょうか、落雷で壊れた物を見たことが無かったので、推測の域を出ませんが、それ以外にも螺子やら梃子てこやらと、特徴的な物が落ちていたのです。

さらには、余り思い出さたく無い事なのですが、人間の死体も数体ありました。一瞬だけ見ても、それが一体何だか分からない程、真っ黒に焦げた死体でした。この光景を見た私は錯乱してしまい、死体は全て埋め、金属類は私の『等価交換する程度の能力』により、妖力を存分に使って吹き飛ばしました。それでも落ち着く事の出来なかった私は、私が住んでいる側の山の面から、植物の種を採れるだけ採り、本当に何も無くなった斜面へ蒔まいたのです。

私は死体と種が埋まったその山の半面を恐しく思い、それから三十年間一度も見に行っておりません。水の埒なぐさを私の家とし、その周辺が私の行動範囲となっております。三十年の時が経ち、漸おそく私はこの時の記憶が受け入れられるようになりました。

「ししよー。朝あごはんにしよー」

「何ですか花子さん。今何時だと思っっているのです。あと二分で昼食の時間ですよ」

「あたしは一日三食とらないと気が済まないんだ！ ……あと何でそんな変な喋り方してるの？」

「良いじゃんたまには。大人の女性は綺麗な言葉を使うの」

三十年経ったけど、嫌な記憶がどうでも良くなったこと以外は、はつきり言って何の変化も生み出していない。年齢的には、私は4

8歳のオバサンになっているのだが、肉体的な変化は全く無い。老化をしないのは良いが、背は伸びないし顔も大人っぽくならないし胸は……。

せめて口調だけでも大人っぽくしようと思ったが、油断するとすぐに元に戻る。

昼食の直前に朝食をとろうと言っているのは、私の弟子である黒髪長髪二本角ナイスボディの鬼、花子だ。花子は何も成長しない私と違って、この三十年で少し頭が良くなった。平仮名でしか喋れなかった花子が、漢字も使って話せるようになり、人の話もしっかり聞くようになった。

「あとさ、前から思ってたんだけど、あたしのこの花子って名前、しつくり来ないんだけど」

「はあ！？いきなり何言ってるの！？三十年間ずっと花子じゃん！」

「でも、あたしの見た目からして……花子じゃないよね？」

「まあ……そう思ってたけど……やっぱり花子だ！」

花子という名前は元々ノリで付けたものなので、身た目と合ってなくても無理はない。しかし三十年もその名前を呼び続けたのだ。今更変えるなんてとんでもない。

「今更だなんて思うなよ。今だから変えるんだ」

「心を読まれた……」

大変不本意だが、花子は一度決めたらそこから動かないことに定

評がある生物だと何年か前に分かったので、名前決めをして差し上げる。

「……貞子！」

「あたしは幽霊じゃない」

「……陽子！」

「普通過ぎる」

「由子音子詫子園子！」

「あたしは猫でもタコでもない。何で『子』にこだわるの？」

「え、名前と言ったら『子』じゃないの？」

男だったら『郎』で女だったら『子』を付けるのは、命名において一般常識だと思っている。だめ？

「……ししよーの名前は」

「木葉緑だけど……」

「……ししよーのししよーの名前は」

「龍巳神水」

何故か水の名前も聞き出し、花子は一人で考え始めてしまう。

「……決めた。あたしの名前は今から木隠黒花こぼりくろかにするね」

数分後、花子の名前が決まった。それに至った経緯を詳しく聞いてみると、木葉の弟子ということで木隠の名字、緑に対し黒、一字じゃつまらないから黒花という名前にしたらしい。遠まわしに私の一文字の名前を否定されたような気がする。

「水の名前を聞いた意味は？」

「参考になるかと思ったけどならなかった。変な名前だね」

「そうだね。変だね。適当に付けた感じがするね」

「それを言ったら緑もそうだ。全部七才位までに覚えられそうな漢字でできてる」

「私の名前はどうでもいいから。それにしても水って名前は変」

「……変で悪かったな。死ぬが良い」

ここに居ない水の名前にケチをつけていると、背後から声がした。振り向いた瞬間、火炎放射が私を襲って来た。

「ぎゃああああっ!!」

叫びはしたが、私だつてこの三十年間ボーっと過ごしていただけでは無い。花子……黒花とずっと修業を続けていたのだ。不意打ちの火炎放射に対しても、ちゃんと“妖力を使って目の前の火を消せ

”と、能力を使い回避行動をとっている。私はつよい。

「ししよー！ 大丈夫かー！」

「私はもう駄目だ！ 逃げてくれ！」

「……師匠だと？ 大層良いご身分になったもんじゃな」

火炎放射がおさまり、発生源が見えるようになる。そこにいたのは、三十年経つてもやはり何一つ変わった所が無い、水であった。噂をすれば何とやらで、その内容が内容だけに再会の感動も喜びも焼き尽くされた。なのでやる気の無い様子で手を振ってみる。

「うっわー水だー久しぶりー」

「……長時間ここを開けていれば、緑が一人立ちすると思ったのう。それから我が死んだと思ひ、一人立ちした緑が偶々旅行中の我と出会って感動の再会を果たすと思ったのにのう」

「何だそのロマンチックな筋書きは」

「ししよー、ろまんちっくってなに？」

水はどうやらこの変なストーリーを実現させるために、長年ここを離れていたらしい。意地張ってずっとここで待ってて良かった。まんまと策にはまる所だった。

「何万歳のばあにとって三十年なんて一瞬に過ぎないか」

「……あん？」

「お帰りなさいませ」ご主人様」

私の悪口に反応した水と口論になる前に、すかさず自分でも気持ち悪く思っ位の愛想笑をして、某喫茶店の名台詞を発声。

「気持ち悪い笑いをするでない。しっかり聞こえたぞ、ババア」

「……う」

水にやり返しされた。自分がもう48歳で、立派なオバサンであることをすっかり忘れていた。しかし心はいつも18歳なのだ。

「ししょー！ ばばあってなにー？」

「Bachelor of Business Administration。経営学士って意味。それを略すとババア。偉い人だよ」

花子……黒花に正しい知識を教える。私は一応元受験生だ。この単語だけは覚えてた。こういう余り役に立たないような単語だけは、ずっと覚えてるんだよね。

「違うぞ。年をとった老女の事を婆あと言っんじゃ。偉くも無い人じゃぞ」

すかさず水が黒花に間違っ知識を埋め込む。特に間違っ説明でも無いが、とにかく間違っているのだ。譲るものか。

「じゃああたしもババアだ！」

「……うん。まあ、そうじゃな」

黒花が元気よく宣言をしてしまったので、水は返す言葉が無くなった。黒花の歳は、お姉様な見た目からして、私より年下である訳が無い。

「は……黒花は何歳なの？」

ついさつき改名をしたばかりなので、いつものように花子と呼んでしまいそうになる。花子と言い切らずに、黒花と呼べたのは上出来だと思う。

「あたしの歳？ えっと、525歳ぐらいかな？」

「あ、そうなんですか。どうも」

「……？」

黒花が予想以上に歳上で驚き、つい敬語になってしまふ。それ以前に出会った当時の、黒花が495歳の時点で、喋る言葉が全て平仮名という程度の知能しか無かったのか。……まあ、誰も教えてくれる人が居なかっただけなのだろうが。

「何万歳に525歳に48歳……。私が一番若いね。ババア共」

「いくら若かろうが48という数字はは嘘を吐かぬ」

「ししょーがほめてくれた……！」

一応強がってはみせたが、私の心はもうズタズタだ。48という数字が妙にリアルで、私の精神を蝕んで行く。

「……今から私の歳は48（仮）ね」

「四八括弧仮とは何だ。サバを読めば済む事じゃろう」

「じゃああたしは525歳（税込）だ！」

段々と場の雰囲気がお遊びになってきている。このまま放つて置くと私は自虐の限りを尽し、最終的に私は心が壊れた生ける屍と化してしまうかもしれない。ここでストップをかけるか一人で逃げ出すか、私の命はこの二択にかかっている。

ここでストップをかけて、果たして会話が途切れるだろうか。幼^{よう}婆^よはそんな事で怯むとは思えないし、ナイスバディの方は「もっとほめてー」と見当違いな発言を続ける可能性がある。

では一人で逃げ出すか。私が突拍子も無い行動をとれば、二人の集中が切れると思う。もし切れなかったとしても、ここを何日か空ければ、流石に言い過ぎたと思いついた水が、私を探しに来る筈だ。奴は寂しくなつてここに戻つて来たのだと私は予想しているからね。逃げてみよう。突然の奇行など、私にとっては日常茶飯事だったのだ。失敗する訳が無い。これからはしばらく、本当の本当に一人暮らしだ。余裕余裕。さあよーいどんで走り出すぞ。よーいどん！

「……ちよつと旅に出てくるから探さないでくださーいーい！」

「分かった。さらばじゃ」

「ししよー！ 一人で修業するのか！ またねー！」

……あれ？

.....

水の所から逃げ出して数日経った。さらばと言われて、戻りに戻れない気持ちになっている。そこで、もう妖怪に襲われても対処出来るし寿命で死ぬことも無いだろうしこのまま旅しても良いんじゃない？ という考えが出現したので私は旅立つことを決心した。現在地は、どこかは分からないけど水の山が見えなくなる位の所だ。結構高かった山が見えなくなったので、随分と遠くまで来たと思う。何百キロ歩いたんだ。

私が妖怪になって、身体能力と五感が素晴らしい事になった。動き続けても余り疲れず、遠くの物がくつきり見え、小さな音でも聞き分けられ、匂いに敏感になり、暗くても周りの障害物の存在を肌で感じとり、食べ物を目わって食べるようになった。妖怪って便利だね。

「ん？ この臭いは？」

ふと、進行方向から異臭が漂ってくるのに気付く。

「う、臭っ！（自主規制）だ！（自主規制）のおいだ！」

臭いの強さから言うと、私の近くには（自主規制）は無い。遠くに発生源がある筈。そして、ここまで漂ってくる程の強い（自主規制）の臭いがするならば、この先に生物の集団がいるのだろう。個

体がこの異臭を放つのは不可能だ。

「ついに原始人が見られるの……!?!」

淡い期待を胸に、私は獣道を駆けて行った。

私と原始人の出会いのきっかけは、(自主規制)なのであった。

.....

「てつてつてつてつてつー」

わたし 洩矢諏訪子は、新素材の発見で、今すごく機嫌が良い。そうでなくても機嫌が良い。

この世界に神として発現して早千年。全ての物事が順調に進んでいてうひゃひゃひゃひゃ。信仰はガツポリでわたしはどんどん強くなり、力が強くなれば信者にしてあげられることも増えて、またまた信仰が強くなると、無限ループ最高。

で、今日は鉄という新素材を見つけたんだけど、これ便利だね。丈夫だし変形できるし大量生産できるし。鍋作ったり武器作ったり用途は色々だ。

ある日私が治めている集落の外を散歩してたら、地面に見慣れない物体が落ちてたんだ。それが鉄と私の出会い。すごく小さな鉄で、表面に『 』って絵が書いてあった。その時は鉄の存在を知らなかったからね、面白い物見つけたーと思って持って帰った。

何がきっかけで鉄を精錬するようになったのかは忘れた。でもここまで来るのは長かった。民と協力して頑張った。

こんな良い素材を見つけたのは偶然だけど、まあわたしは神だから、偶然じゃなくて必然だったのかもよ？ 神だからね。神だもん。

「……んん？」

集落の中に何かが入って来た気配がする。人間……にしては違和感がある。卵の殻のような薄い妖力の膜に包まれているから。たぶん妖怪なんだろうけど、あれで隠しているつもり？

知能が低くはなく、高過ぎでもない中妖怪と言ったところか。でも集落に入られる前はそいつの気配を全然感じとれなかったし……。うむ、分らん。

何はともあれ、妖怪は追い出さなきゃ。民がびっくりしちゃう。

人前に出るときの正装、今着てる白い服の上にもう一枚、カエルの絵が描いてある紫色で袖無しの服を着る。さらに自慢の大きい帽子をかぶって準備完了。元氣百倍。さあ出発だ。

「いってきまーす」

「いってらっしやーい」

神社をよく掃除してくれるアヤコさんに別れを告げて、わたしは妖怪探しを始めた。場所はとくに割れてるから、探す内に入らないか。特に目立った動きはしてないようだし、のんびり行こうか。

しかし、よくここまで発展したな。何も無い所が小さいながらも立派な村になったんだから。民達はか、み、さ、ま、の、わたしを頼り過ぎな所があったり妙に、か、み、さ、ま、の、わたしに対して友好的な印象もあったりするけど、そのおかげで今がある。生きてるって素晴らしい。

「あ、いた」

前方に黄緑色をした人型の生物を発見。その生物は緊張感のかけらも写していないのんきな顔をして、道の端っこをちまちま歩いている。謙虚だ。

自分が妖力を垂れ流しているのに気付かないのか。そして神！様！のわたしからあふれ出ている、この神気にも気付かないのか。すごい弱そうな妖怪だ。

接触を試みるかいきなり殴りかかるかどっちにしよう。まあわたしはエライから、いきなり殴りかかるなんて卑怯なことはいらないよ。考えてみただけ。

「おーい」

素直に声をかけるが、黄緑色の妖怪は振り向かない。

「おーい！」

大声を出して呼ぶが、相手はまるで聞こえていないかのようにのんびり歩き続ける。

「おーいってばー！」

地団駄を踏んで腕をパタパタさせながら呼ぶが、奴はわたしを意識して無視しているかのごとく、ペタペタと歩き続ける。

挑発してるの！？ かつみっさつまっのわたしを挑発してるとうの！？ わたしは心が広いからもう一回呼んであげるよ。耳元で。

「おらあっー！」

「えっ！？ 私！？」

何か変な言葉になったけど気にしない。やっと気付いてくれた。

「……我が領地に土」

「うわっ！ 諏訪子だ！！」

わたしの威厳たっぷりの忠告をさえぎって、こいつはわたしの名を呼び捨てにした。

「なんでわたしの名前を知ってるの？」

.....

（自主規制）の痕跡をたどった私は、予想通り人里を発見した。よし乗り込むぞ。

「こんにちはー」

「こんにちはー」

入り口に立っている第一村人に華麗に挨拶を済まし、村の中に侵入した。思っていたより原始っぽくなくて残念だ。木造の家が、ポツポツと乱雑に建てられている。

願わくばこの村に数カ月間滞在したいと思っている。急ぐ旅では

ないので、一つの場所に長く留まり、地域の見聞を広めたいのだ。

「おーい」

子供が何かを呼んでいる声がする。平和だなあ。

「おーい！」

相手が反応しなかったのだろう。より大きな声で子供が叫ぶ。

「おーいってばー!!」

あれだけ大きな声で叫んでいたのにもかかわらず、標的は反応しなかったようだ。わざと無視しているのだろうか。かわいそうに。

「おらあっ!!」

子供が私の耳元でおかしな言葉を発した。さっきから呼ばれていたのって……。

「えっ!?! 私!?!」

どうしよう。わざと無視していたと思われるかもしれない。謝らなきゃ。

「……我が領地に土」

振り向くとそこには奇妙な目玉付き帽子。こんな帽子をかぶっている人は一人しか心当りが無い。

「うわっ！ 諏訪子だ！！」

そう。守矢神社で奉られている神、守矢諏訪子だ。神奈子ちゃんは何処だろう。

「なんでわたしの名前を知ってるの？」

立ち話も何だし神社に行こー、と私が提案すると、諏訪子は首をかしげながら渋々神社に案内した。

畳が敷かれていなく、机と座布団だけがある部屋で座って待つてると言われ、待つこと四十五分。緑茶と水を持った諏訪子が現れた。

「はいこれおみず」

「あ、ありがとう」

普通はお茶を差し出すと思ったが、それを指摘するのは図々しいと思ひ、お礼しか言えなかった。

「で、あなた誰？」

諏訪子が私に自己紹介を要求する。そうか、ここは過去だからまだ私の事を知らないんだ。

「私は木葉緑と申します。はじめまして」

「緑？ 見た目通りの安易な名前だね」

「名前のことを言うのはやめなさい」

私も水と別れる前に、さんざん水の名前をバカにした気がするが、知らないふりだ。

「……わたしは洩矢諏訪子、ってもう知ってるんだよね。何で？」

「痛い所を突かれた。家庭の事情、とでも言うっておこうか」

本当の事を言うと面倒な事になりそうなので、便利な言い訳をする。すると諏訪子は眉をひそめてため息をつき、机に肘をのせる。

「家庭の事情？ 意味分からないよ」

「あなたの事は全て分かっております。ここ守矢神社の神様の片割れ、守矢諏訪子様ですよね」

これは余計な言葉だったかな。諏訪子が不審者を見る目ですごい見てくる。

「……ここは守矢神社でもないし、わたしは神の片割れでもない。もう一つ違和感があるような気がするけど分からない。神違いなの？」

神違いと言われてもどう見たってこの少女は諏訪子だ。名前も同じだし。私の知っている情報と細かい違いがあるが、誤差の範囲内としておこう。

「まあいいや。それで話があるんだけど」

分かってくれたようで何よりだ。流石神様。飲み込みが早い。呆れただけだろうが。

「……妖怪は村から出てって」

「えー私は妖怪じゃないよー」

不味いバレてる。ちゃんと妖力隠したのに。

「妖力隠せてないって。何を企んでんのか分からないけど、わたしが黙っている内に出てった方が身のためだよ」

「私はわるい妖怪じゃないよ。いじめないで」

正体が分かっているというのなら作戦変更だ。媚びてやる。

「良い悪いの問題じゃないんだ。妖怪はこ」

「諏訪子さまー。来訪者ですよー……はっ！ お邪魔しましたー」

諏訪子が言い切る前に、神社に勤めている人が部屋に入ってきた。だが、私達の姿を認識した瞬間に、出て行ってしまった。

「民の皆さーん！！ 諏訪子さまに春が訪れたようですよー！！」

「アヤコさんが面倒事を……」

外からアヤコさんなる人の大声が聞こえる。それを聞いた諏訪子がものすごい落胆を示し、机に頭をぶつけた。

数十秒後、ドドドドという足音と共に、大多数の人間が神社に集

まってきた。

「ワシの諏訪子ちゃんに恋人だと!?!」

「諏訪子さまもそんな歳か」

「相手は誰だ!?!」

「イケメンなの!? イケメンなのね!」

「神様が増えるとは、目出度いこった!」

「わー、きっかけは何だろう」

村人の色々な声が聞こえる。どうやら私と諏訪子がお見合いをしていると思われるらしい。という事は、私は今男だと思われるのか。またか。

あれか、発言か。さっき私が(自主規制)(自主規制)って連呼してたから駄目なのか。ほとんど心の中の声だったのに。くそ。

「とは言え、これで私は出られなくなったな。諏訪子よ。私をここに置くが良い」

「何でそんなにふてぶてしいんだよ。……もう、分かった。今追いついたら面倒な事になりそうだし、騒ぎがおさまるまでここにいていいよ。一週間位だと思うけど、その間は神社から出るなよ。あと、変な気も起こすなよ」

「やったー」

思いがけないことから始まってしまった旅だけど、何とか上手く
やっていけそうだ。

私の人生はこれからだ。妖怪緑の生き様、見せましょう。

蛙鳴蝉噪、お久しぶりです（後書き）

のどが痛くなつて寒気がして鼻水が出て頭が痛くなつて咳が出ている気がしますが、気のせいですよね。
遅くなりました。

東方神霊廟のノーマルがクリア出来て最高の気分です。下手なので紅魔郷のイージーが出来ない程度です。

……ダブルスポイラーはエクストラまで出したのに。

「室」と書くとうとすると、無意識に「窒」と書いてしまつのが嫌だ。

蜿蜒長蛇、落ち付きますな

『果し状』

明日お前の所に行くからな。戦う準備して待つとけ。

軍神より

「……………何コレ」

翌日、諏訪子の神社に、果たし状なる手紙が届けられていた。

朝、起きたばかりの私は、正座をして俯いている諏訪子を発見した。理由を聞くと、諏訪子は無言でこの手紙を差し出してきたのだ。

「大和の神が宣戦布告をしてきた」

顔を上げずに諏訪子が言う。朝から暗いなあ。

「戦争ですか？」

「……………うん」

「へー。じゃあね」

人様の戦いに、他人が関与してはならない。ここでお別れだ。

「ちよ、そんなあっさり!？」

「出てって欲しかったんでしょ?」

昨日の夜、寝る前に、妖怪が神社にいるってことが民にばれたら……とか、妖怪が人里で過ごすなんて……などと、一時間かけて諏訪子に説教された。

その割には、私が出ていこうとすると引き止めてくる。言葉で引き止めるだけでなく、服も引っ張られている。

「いや、そうだけどさ。ここに残って応援するとか、そんなやさしい心は無いのか」

「妖怪だからね」

「こっちは明日戦うんだよ!？ 心配しろよ!」

「まだ会ってから十八時間しか経ってないよ」

私が未来に居た時（前世?）に、諏訪子と接触した時間を合わせても、十九時間程度。

そんな短い付き合いの神様を、心配しろと言われてもねえ。

私は引き戸を開けようと手をかけると、諏訪子は私の服をつかみ直して、膠着状態に陥る。

「緑、絆というのは時間の長短で決まるものじゃあないのさ」

「いいこと言っただけまかさないの」

戦争が起これば、死者が出る。私は死など見とうない。

「君がいなくなったら誰がわたしの世話をするんだ！」

「いつから私は諏訪子の世話係になったのか甚だ疑問である」

「泣くよー！」

「え」

泣くよ、と顔を上げた諏訪子の目には、すでに涙が溜まっていて、思わず怯んでしまう。

諏訪子は私の服からそっと手を放し、再び下を向く。私は何も言えない気持ちになり、そういえば帽子を被っていない諏訪子を見るのは始めてだなー、と、別の事を考えて気を紛らわした。

「……不安なんだよ。今は妖怪でも良いから、気を紛らわせてくれるものが欲しいんだ」

「え、そ、そう？　じ、じゃあ、やっぱり、一週間はここにしようか？」

「……うん」

「よ、よろしくね、諏訪子」

「……よっちゃん」

不吉な言葉が聞こえてしまった。諏訪子の右手が、ガッツポーズをしたかのように、ピクツと動いた。

そして、顔を上げた諏訪子の表情は、太陽のように明るく笑顔だった。

「優しいね！ 緑は！ じゃあ準備手伝って！」

「それが目的か」

再び逃げようとしても、泣き真似をされそうなので逃げられない。幼女の泣には、誰も勝てないのだ。例えウソ泣きでも。

「物置きに整地するアレがあるから、湖の周りをキレイにしてきて！」

「湖なんてあった？」

「緑が侵入した入り口とは逆の方向にあるから頑張ってーばいばい」

と、諏訪子は私の背中をぐいぐいと押す。引っ張られたり押されたり忙しい。

「逃げるよ」

「泣くよ」

どう足掻いても逃げられないようである。

.....

「広っ！」

神社にある整地するアレを持った私は、とりあえず湖を見つけようと、村の出口で景色を眺めた。が、眼前に広がるのは草原。ずっと向こうに、ちょこんと見えるのが湖。

湖の周りを整地しろと言われても、それがどこからどこまでを指しているのか分からない。全部とは言わせない。

「ちょっとやればいいよね……」

諏訪子も流石に昨日会ったばかりの通りすがりの妖怪に、完璧な仕事を求めてはいないだろう。

心の中で言い訳を確定させ、私は湖の方向へ歩き出すが、直ぐにやる気が滅亡・枯渴・退廃する。

「……自転車」

滅茶苦茶とおいんだよ。湖まで。今までの経験からして、歩いて三時間掛かるか掛からないかの距離だろう。

「効率的な移動法が欲しい」

整地するアレに車輪が付いてたら、足をかけて滑って行けるのに。

現実が駄目なら幻想はどうだ、と突発的な考えが現れ、幻想郷での移動法を思い出す。思い浮かんだのは藍先生のしつぽ。

「……飛ぶか。おそらを飛んでみるかもふもふ」

空を飛ぶのは人類の夢だが、私は妖怪になつたので関係ない。藍先生は、幻想郷での移動方法が空を飛ぶことだと行動で示した。さらに、妖怪が空を飛ぶのは珍らしくないらしいもふもふ。

「『妖力を使って空をとべー』」

私の『等価交換する程度の能力』を使ってみると、いとも簡単に体が宙に浮く。五メートル位上昇した。人類破れたり。

「うわーすげっふげっふぐああ……！！」

景色を見ようと前方を向いた瞬間に、原因不明の気だるさと吐き気に襲われ、墜落してしまう。地上五メートルからの落下だ。

「うぎゃあああああ！！」

ボスツ！！ という情けない着地音と共に体中に激痛が走る。背中を強打した私は、意識が飛びそうになる。でも死なない。五メートルから落ちても骨折しない位丈夫。

「うう。空は駄目か……」

痛みと気だるさと吐き気が、引き続き私の心を攻撃してくるので、挫折そうになる。

このだるさと吐き気には心当たりがある。無理な運動を続けたた

ときに現れる症状、すなわち疲れだ。

考えてみると、空を飛ぶには、重力と同じかそれ以上の力を、常に出し続けなければならぬ。空を飛ぶのに必要とされる妖力が馬鹿にならないのだ。地球に力のみで反抗するなんてとんでもない事だよ。

何事も休めばすぐに回復するというゲーム的思考に基づき、私はそのまま大の字になって、息を整える。

数分で大分マシになり、休憩終了を決意。ちなみに現在地は村から五十メートル程離れただけの所だ。村人からまる見えの位置で少し恥ずかしい。

「ふう……ちゃんと歩きますよーだばーか」

治り切らずに少しだけ残っている三つのステータス異常に耐え、ゆっくりと立ち上がる。フラフラになりながらも、地球にケンカを売りつつ、私は湖方面へ再度向かった。

歩いているうちに段々楽になり、ペースを上げて、ついに湖のほとりまでたどり着いた。日の出頃に出発したのに、今はもう太陽が真上にある。今は冬なので、日の出から昼までの時間が短いというものもある。

前方の風景は……やはり、湖だ。向こう岸がはるか遠くに見える位の大きさだ。広くて良いね。

私には美的感覚なんてない為、それ以上の言葉は出てこない。感性が豊かな人は、「太陽の光を反射させ、美しく光る湖は、壮大な自然に囲まれ、その身を一層輝やかす。それはさながら……」など

と訳の分からない表現が出来るのだろう。

上手い表現は出てこないが、初めて見る湖の広さに何も感じない訳ではなく、しばらくの間心を奪われていた。
すると、

「よお」

後ろから聞き覚えのあるだらしない人の声がした。

「私は八坂神奈子という名だが、明日に大きな戦いを控えているんだ。私とちよっと練習試合をしてくれないか？」

声の正体は、やはり守矢神社に居座る神、神奈子ちゃんだった。今朝、宣戦布告してきたのはこいつだったのかな。

「私が神奈子ちゃんに勝てると思いますか？」

私は振り返らずに答える。

ただの妖怪が、神に勝てる訳がない。たとえそれが、働いたら負けな神でも。

「……ちゃん？ 面白い。軍神八坂神奈子をちゃん付け出来る程度に、お前は自信があるのだな」

相手の雰囲気は妙に真面目だったので、流石に失礼だと思い、私は振り返ってしっかり答える。

「私は今妖力切れなんですよ。まともに勝えません」

さっきのたつた十数秒の浮遊で、妖力をこっそり持ってかれた。私の能力の欠点を見つけた。すごい事をしようとすると、それだけ多くの妖力が必要とされる。いくら持っている妖力量が多くても、消費量が多ければ意味をなさない。私はいわば一リットルのガソリンで一キロメートルしか走れない、燃費が超悪い自動車と一緒なのだ。

「関係無い。勝負だ」

神奈子ちゃんが戦闘体勢に入ってしまった。三十年前の黒花（元・花子）のやり取りに似ている。

逃げたい。けど、そしたら射殺されるだろう。そして妖力は無く、時間稼ぎも出来ない。持っているものは整地するアレのみ。抵抗は出来ない。

逆に無抵抗でやられ、自分に力が無い事を示せば助かるか。

「うおりゃあー！」

「えっ!?!」

勝負は急に始まった。

.....

「諏訪子さまー！ あの緑色の子はどうしたんですかー!?!」

「んー、出かけた」

緑を見送ったわたしは、明日の戦いに向けて準備するものは特に無いから、暇になってしまった。

それにしても、昨日見つけた変な妖怪は色々と思えそうだね。

わたしが涙を見せれば何でも言う事を聞いてくれると思う。

整地なんて明日の戦いには全く無意味なことだけど、とにかく緑が無害な妖怪かどうか試したかった。結果、緑はお願いを聞いてくれるやさしい生物だった。

妖怪は妖怪でも、緑はそこら辺のとは少し違う。社交的で人間を襲う気配もない。非常に僅かだが神力までもが感じとれる、今までに見たこともない妖怪だ。

そんな珍しい妖怪に、わたしは一目惚れをしてしまった。一目惚れと言っても、面白そうな玩具を見つけた子供の心っていう程度だよ。

大いなる神であるわたしが、妖怪なんかといるのは色々まずいかもだけど、バレなきゃ良いよね。神社を毎日掃除してくれるアヤコさんも、緑が妖怪だって分からない様子だし、しばらくは大丈夫じゃないかな。

緑は何故か最初からわたしを知っていたようで、初対面特有の過ぎた遠慮は無かった。野生の妖怪が知っている位、わたしは有名になったのか。そうだよな。わたしは超すごい神だからね。

……ここで突っ立ってるのも何だし、中に入ろう。寒い寒い。

「じゃあアヤコさん、あとはよろしくねー」

「了解です!」

さて、今日は何をしよう。

明日使う鉄の輪はいっぱいあるし、戦いに民を巻き込むつもりは無いから、宣戦布告を知らせる必要もない。アヤコさんにだけ言うておけば良いだろう。

やることないなあ。まだ朝早いし、二度寝しよう。

.....

「く、負けた……」

神奈子ちゃんとのバトルは、数秒で終わった。

咄嗟の攻撃に反応できなかった私は、一撃でやられてしまったのだ。

「……甘いな。あの余裕は何だったんだ」

「不意打ちなんて……卑怯だぞ……」

「卑怯？ 戦略と言ってくれないか。……ああ、準備運動にもならなかった」

この神奈子ちゃんは未来の神奈子ちゃんとは違う。覇気がある。働いて勝った者のオーラをまとっている。服装もジャージ上下ではなく、赤いシャツに黒のスカート、腰に縄を巻いている。

外見だけ見れば変な服装だが、溢れ出す覇気と合わせると、非常

に凜々しく見える。

「……見直しました。神奈子ちゃん」

「ふん、恐れ入ったか。神奈子ちゃんって呼ぶな」

未来では神奈子ちゃんと呼べと言っていたのに、今は嫌らしい。でも無駄だ。呼び方はそう簡単に変えられるものではない。

神奈子ちゃんは興味を失った様子で、私に背を向ける。

「さあ帰れ。ここは私の野営地だ。戦いが終わったらまた相手をしてやる」

「お邪魔しました。またいつか」

整地をサボれる口実ができたので、言われた通り帰ることにした。

来るときと同じ時間をかけてゆっくりと村に戻ったので、夕方になってしまった。

こんな長い道のりを歩かせ、広過ぎる湖の周りを整地させるとは、諏訪子は遠回しに帰って来るなどでも言っていたのだろうか。

私は整地するアレを神社の物置に放り込み、神社に入る。

ところで、整地するアレの正式名称って何だ？

「ただいま戻りました木葉ですよろしくよろしく」

「あれー、もう帰ってきたの」

玄関みたいな所で帰還の報告をすると、諏訪子が左側にある部屋から、体を丁度半分だけ出して返事をした。

「邪魔が入って全然作業が出来なかった」

「そう。おつかれさまー」

そう言っつて諏訪子は部屋に引っ込もうとする。

「あれ？ 邪魔ってなにー、とか聞いてくれないの？」

三分の一程諏訪子の体が引っ込んだ所で私が質問する。

「いいよめんどくさい」

三分の一諏訪子は、私の苦勞をぶち壊して、完全に部屋の中に入った。

「……ああ、哀しい、私は哀しい。駄目神とのバトルで負け幼女にはいい加減に扱われ。私はここに居るべきなのか」

これが妖怪であることの欠点か。人類皆友達とはいかなくなるのか。早苗、やはり私には早苗しかないよ。タイムスリップしてこい。

「早く入りなよ！ ごはんにするよー！」

私が声と心で同時に嘆いていると、部屋から諏訪子の呼び声が周

りの空気を毎秒340メートルの速さで揺らし、天井床壁に反射して反射して、私の耳殻がその振動を捕らえ、集まった振動は外耳道を通って鼓膜をドンドコし、つち骨きぬた骨あぶみ骨によって振動をワツシヨイすることにより、うずまき管内のリンパ液を波紋疾走させ、それがうずまき細管の基底膜をチクチクし、聴神経がワイイとなつて私の脳に届き、そこで始めて諏訪子の声だと認識する。

要するに諏訪子が当然のように私を呼んでくれてうれしい。神類皆友達。

「おじやまします」

つめたい廊下を一步一步踏みしめ部屋に入ると、この時代にしては豪華絢爛なお品がずらりと並ぶ食卓が、我が物顔で部屋のだ真ん中に鎮座していた。

その周りには、諏訪子とアヤコさんと呼ばれていた人が刮目して、私が座るのを待っている。

「じはんじはんじはんじはん」

「今日はモシエコッコを作ってみました」

空いている席につくと、アヤコさんが不思議な単語を出してきた。思わず聞き返してしまう。

「……も、もしえこっこ？」

「モシエコッコです」

「やったーモシエコッコだー！」

「な、何ソレ……」

得体の知れない料理の名に危機感を覚える私。

「ご存知ないんですか？」

「えー知らないの？」

「モシエコッコ知らないって、ねえ諏訪子様」

「そうだねアヤコさん」

「時代遅れですねー」

「若者は新しい物好きははずなのにねー」

モシエコッコを知らない私を容赦無く非難する二人。

未来から舞い降りてきた私は、時代遅れというより時代進みではないかと思った。そして私は間違いなく若者だ。よく分かっているじゃないか幼女。

「どうかこの最先端過ぎる私にモシエコッコの正体を教えてくれませぬか」

諏訪子とアヤコさんは答えずに箸を取り、

「細かい事は気にしない！」

「食べてみれば分かりますよ。さあさあ」

「冷めちゃうから早く食べよ！」

「お箸をもって」

食事を開始する魔法の言葉を口にす。

「いただきます!!」

「いただきます!!」

温かいなあ。

「い、いただきます」

細かい事は気にせず、私も皆と同じように箸を取り、食事を楽しむ事にした。

.....

翌日。軍神八坂神奈子と何らかの神洩矢諏訪子の戦いが始まる日。

私は諏訪子に連れられ、例の湖へ向かっている。

諏訪子によると、「流石に一人位には見えて欲しい」だそうだ。

「わたし、勝ったらまたみんなとは」

「言わせないよ」

「へ？ 何で？ わたし、帰ったら神社を改ち」

「やめなさい」

「んー……。わたしが負ける訳な」

「そこまでだ」

「そつだ！ わたしの大切な帽子を緑にあず」

「封印！」

道中、諏訪子が一般に死亡旗と呼ばれる不吉な言葉を乱発してくる。私はそれを頑張って阻止する。それでも諏訪子は鳴り止まない。唇を指ではさんで封じる。諏訪子の唇は「3」の形になった。

（……緑、わたしが無事に）

「あーあーあーっはっはっはっ！」

口を防いだと思ったら今度は念力を使って、私の頭の中に直接話し掛けてくる。それをかき消そうと叫びながら諏訪子を見ると、「3」の唇が目に入って思わず笑ってしまう。

（……これぞ神通力！）

「……」

（そしてわたし、帰ったら大好物の）

「あかん！」

（……アヤコさんが作った肉じゃがを食べるんだ！）

「あ……。死亡決定」

ついに言い切ってしまった。言葉に魂が宿り、諏訪子を呪う。私は諏訪子の「3」を解いた。

「口で言っていないから大丈夫だもん！」

「お前はすでに、死んでいる」

「お前とか言うな！」

未来の諏訪子は元気だったから、死ぬことはない。

そうこうしている内に、湖のほとりに至り着いた。目の前の障害物を取り除けば、昨日と変わらない景色が見られるだろう。

「……待っていたぞ」

障害物は、私と喋っている時には見せない、威厳と神々しさ
神気とでも言うのか　を出し、諏訪子を睨み付ける。

「じゃあ私は向こうの方に……」

「うん」

「神奈子ちゃん、またねー」

「雰囲気ぶち壊しだな」

全く、その通りだ。

私は五メートル程離れた場所で、体育座りをする。

「……大和の神よ、我が領地を諦める気は無いのか」

「無いのなら端から宣戦布告などしない」

土地をめぐる争いだったのか。初めて知った。

諏訪子も神奈子も、すさまじく真面目モードになっている。互いに睨み合い、一瞬の隙も見せない。

「これは無意味な戦だ」

「無意味ではない。統一こそが平和。大人しく降伏すれば危害は加えん」

「統一なんてしなくとも我が領地は平和だ」

お互い一步も譲らない。二人のオーラがどんどん黒くなっている気がする。

「程度の低い平和など平和の内に入らない」

「何を見た訳でも無いのに何故程度の」

「うおりゃあー！」

「っ！」

諏訪子が喋っている最中に、神奈子ちゃんは不意打ちをしかけた。

昨日私にやってきたのと同じ戦法だ。ずるい。

「じゃんけんぽん！」

「つつー！」

神々の戦争　じゃんけんの不意打ちに、諏訪子は咄嗟に反応することが出来た。神奈子ちゃんはチヨキで、諏訪子もチヨキ。あいこに持ち込んだようだ。

昨日の私は、神奈子ちゃんが殴りかかって来ると思い、開いた手で顔を守ろうとした。そして何も起こらなかったなので手を下げるとチヨキを出していた神奈子ちゃんがいたのである。

……こんなのが土地をめぐる戦争で良いのかな。いや死者が出ないから良い方法なんだろうけど、なんかねえ。

「……ふん。やはりこれが防げる者でなければな」

「まだ、勝負はこれからだ……！」

そして本当の戦いが始まる。

「あいこでしよっー！」

「あいこでしよっー！」

「しよっー！」

「しよっー！」

「しよっー！　しよっー！　しよっー！　しよっー！」

「しよっー！　しよっー！　しよっー！　しよっー！」

「……ふふふ、わたしの取っておき、見て驚くなよ」

バトルは最終章に突入したようだ。じゃんけんだが。

二神は最後の力を振りしぼり、腕を高く高くあげて一喝する。

「じゃんけんぽんっ！……！」

「じゃんけんぽんっ！……！」

諏訪子は、親指と人差し指で輪っかを作ったものを出す。

神奈子ちゃんは、人差し指を立ててウネウネさせたものを出す。

「……これは最先端の素材、鉄でできた輪。石を包み、鋏を開けないようにはめることが可能で、勿論紙も切れる。負けないよ」

小学生か。

「甘いな。私のこの植物の蔓つるを表わした形は、鉄を錆に変える効果がある。この私が対策をしていないとでも思ったか」

だから小学生か。

「そんなもの後付けの設定ではないのか」

「そう言うだろうと思って実物を用意してきた」

「神奈子ちゃんは植物の蔓を取り出し、諏訪子に見せる。」

「奇遇だね。わたしも鉄の輪を持ってきた」

諏訪子も、どこからともなく鉄の輪を取り出す。

変なルール作るからこんな事になるんだ。

「私がそれを錆びさせたら、お前の領地を貰い受ける」

「錆びなかったら、さっさと帰ってもらおうよ」

「……いざー！」

「来い！」

神奈子ちゃんが蔓を掲げる。諏訪子、君はここに来る時に死亡旗を立てまくったんだから、負けは決まっているんだよ。

諏訪子自慢の鉄の輪は、たちまち錆びて崩れ落ち、地面に還る。諏訪子本体も崩れ落ち、俯き手を付きしゃがみ込み、その姿は蛙のよう。

「あ……う……錆びていく……」

神奈子ちゃんは、未だに片方の手の人差し指を立ててウネウネさせている。

神奈子ちゃんは、鋭い笑みを浮かべ、その表情はまるで蛇のよう。

「私の勝ちだな」

三日に渡る戦が終わった瞬間だった。

この神々による壮絶な戦いは、後々に諏訪大戦と呼ばれるようになった。
ははは。

蜿蜒長蛇、落ち付きますな（後書き）

次回予告でも書いてみようかな……。

人心収攬、神様は友達です

神奈子ちゃんに負けてしまった諏訪子は、土地を明け渡した。神奈子ちゃんは新しい神として、諏訪子の土地の民に信仰して貰おうとした。

しかし、その土地の民は神が幼女で無くなる事に絶望し、皆鬱になってしまった。皆で可愛いがってきた娘のような存在がいなくなってしまうば、そうなるのも無理はない。

神奈子ちゃんはそれでは駄目だと自分の代わりとなる新しい神を創り出し、諏訪子と融合させた。とは言っても大した事ではない。新しい神様を創った何だかんだというのは言葉だけで、要するに外ヅラをしつかりさせたかったらしい。ただの辻褃合わせだ。空想上の新しい神は諏訪子と融合出来る訳がなく、諏訪子は今日も元気に走り回っている。

一応土地の権利者は神奈子ちゃんなので、領土内で洩矢様洩矢様と崇められては権利者の面目が立たない。神奈子ちゃんは洩矢を守矢に改名させてやることで、名前を付けてあげたんだから私は守矢の飼い主だよねと、御主人様の主張をする役になった。

そうすることで、民の信仰は洩矢に集まり、洩矢の信仰は守矢の信仰となり、守矢の信仰は飼い主の手柄となる。みんな幸せになる仕組みだ。

すごく簡単に言えば、私の知ってる守矢神社が出来上がった。

歴史的瞬間に立ち会えて大変喜ばしい。諏訪子の名字ってずっと守矢だと思ってたけど、違ってたんだね。

「……あのさ、聞きたい事があるんだけど」

改築した新しい神社、守矢神社の縁側に寝っ転がって回想していた私に、諏訪子が話し掛ける。縁側は良い具合に日が当たっていて、ごろごろするのに適している。

「あ、もう私帰った方が良い？」

最初に約束した一週間の期限など、とつくの昔に過ぎている。どの位過ぎているのかと言うと、八十三週間位 昔年ちよつと過ぎている。季節は春夏秋冬春と、四分の五巡した。

そろそろ私の心の中は、守矢神社に届まり過ぎた罪悪感で満杯になる。さらに、今の私は働かずに引き込みもっているだけなので、神奈子ちゃんにあれこれ言える立場では無くなってしまった。

「いやここにいっても良いけどさ。今更いなくなったら嫌だし。それですつと気になってた事があるんだけど」

諏訪子が良い事を言う。さりげなく私の存在を認めてくれる発言 素晴らしい。

「気になってた事？」

諏訪子も私の隣に寝っ転がる。諏訪子の本体とも言える、眼球帽子は被っていないので、今はただの金髪幼女だ。

「おかしいなとは思ってたんだけど、そこまで多い訳でもないから聞きそびれてたけどね」

「単刀直入に言いなさい」

「……何で緑が神力持ってんの？」

「おーそれは私も気になってた所だ。……二人して寝そべって、すごい光景だな」

盗み聞きでもしていたのか、神奈子ちゃんが会話に割り込んで来て諏訪子の隣に寝っ転がった。

「神力つて、何で私が？」

「それを聞いてるんだよ」

「何か崇められるような事でもしたか？」

「してないよ。そもそも人に会わないから」

「神力は道具にも宿るものですよ。……三人で楽しそうですね」

仕舞いには守矢神社でよく働いてくれるアヤコさんも来て、神奈子ちゃんの隣に寝っ転がる。縁側はもうギツチリだぜ。

アヤコさんは神社の掃除をよくやってくれるとの事で、守矢神社にリフォームすると同時に、諏訪子がアヤコさんを養子にとり、巫女に任命した。

それを快諾したアヤコさんは、名前をちゃんとしたものにしようにするべく、東風谷亜矢子へと進化した。早苗のご先祖様はこの時出来上がったのだ。私は感動して言葉を失い、泣き崩れるなんてイベントは起こらない。

「道具……道具……あ」

「ち」

「き」

「ゆ」

私の「あ」に、諏訪子神奈子亜矢子が続く。五十音順ではなくいは歌の順だ。どこで知った。

そういえば、皆三文字の名前で最後に「子」がつくね。

「とある神様にもらったペンダントがあるよ」

「神様？」

「神に対して顔が広いな」

「羨ましいです……」

秋姉妹がくれた、紅葉形のペンダントを服の中から出す。普段はブラブラするとペンダントに負担が掛かり、壊れると嫌なので、服の中にある。

「おお、そんな仕舞い方私には出来ないな。胸が邪魔で」

「チッ」

「チッ」

神奈子ちゃんの挑発に私と諏訪子は憎しみを覚える。

「……ま、まあまあ。それより綺麗ですねそれ」

亜矢子さんはペンダントをよく見ようと私の頭がある場所まで四足歩行で移動し、身を乗り出す。

「チッ」

「チッ」

亜矢子さんの胸が目の前に迫ってくる形になり、私と諏訪子は怨念が増加する。

先祖だからか、スタイルは早苗と酷似している。つまり良心的なスタイルだ。

「え、え、す、すみません……?」

怨まれている理由が分からない亜矢子さんが、疑問形で謝ってくる。

すると諏訪子は立ち上がり、私を見下して言う。

「緑、あっち行こ」

諏訪子が入差し指を天井に向ける。昇天? スタイルごときで早まっではいけないよ。

「お、お子様同士で話すのか」

「神奈子ちゃんつつさい」

私が神奈子ちゃんの挑発に返事をしている内に、諏訪子はさっさ

と外に出てしまった。亜矢子さんはどうして良いか分からずに、オロオロしている。

「神奈子ちゃんって呼ぶな」

私は神奈子ちゃんの言葉を無視し、草履をはいて縁側から外に出る。

春になりたての日の気温では、草履は少し肌寒い。何を思ったのか、私は今半袖半ズボンの格好をしているので、全身で微妙な寒さを受け止めなければならぬ。

服は亜矢子さんが作ってくれた。三十年間何とか着続け、ヨレヨレになった私の服を見て、亜矢子さんは笑顔で嫌悪感を示すという奇妙な表情をし、次の日に亜矢子さんは勝手に服を作ってくれたのだ。

守矢神社にいる四人……二人と二神……一体と一人と二神の服は、全て亜矢子さんの手づくりのものだ。……自分ってどんな単位で数えていいのか分からない。

諏訪子の服はいつも通りで、同じデザインを何枚も持っている。本人によると、紫色の服に描かれている蛙の位置が違っらしい。

神奈子ちゃんは、普段は例のあれの方が動きやすいという理由から、例のあれすなわちジャージ上下になっている。時代は無視され

た。

「緑緑、屋根乗るよ」

服の話なんてどうでもいい。今大事なのは、あの二人をどうしてくれるかだ。

「屋根で作戦会議するのか」

「作戦？ とにかく乗るよ」

諏訪子は驚異的な跳躍で、さっさと上ってしまつた。

「……ハシゴ」

もちろん私にはそんな脚力は無いので、道具を所望する。

「どうしたのー！ はやくおいでー！」

それに気付かない諏訪子は、容赦無く私を呼びつける。

「ハシゴー！」

「ハシゴなんて無いよ！ うちには整地するアレしかないの！ 飛んできてよー！」

自分が出るからって他人も出来るとは限らないのだよ諏訪子。それと整地するアレしかない神社ってどうよ。

……屋根までだったら能力を使って飛んでも大丈夫かな。最初に浮遊して墜落した時以来、空を飛ぶのはあきらめている。

(……妖力を使って浮遊)

気が進まないが『等価交換』をして、ゆっくり上がる。落ちたら怖い。

「やった屋根まで着いっふげっふっだめだったー……」

とりあえず屋根には乗れたが、ゆっくり浮かび過ぎたせいで妖力

切れ。自業自得である。華麗な着地とは程遠く、ドサツと落ちて頭をぶつけた。痛みよりも疲労が強く、倒たままの格好で休憩する。

「何でそんなに疲れてるん？」

諏訪子が倒れて息を切らしている私を見下して変な訛りで言う。
本日二回目、幼女に見下された。

「空なんて飛んだら、妖力切れるよ……」

「ウソだ。そんな簡単に切れるものか」

諏訪子は私の能力をまだ知らない。聞かれなかったから話してない。

「私の能力はね、『等価交換する程度の能力』だからね、空を飛ぶにはそれに見合った妖力を払わなきゃ駄目なの」

「そう」

「いくら妖力があっても足りないよ」

「ふーん。へーえ。ふむ。えーと。うーん。その……」

諏訪子の声が段々と小さくなり、思考モードに入る。初公開の私の能力に、少しは驚いて欲しかった。

そして、申し訳けなさそうにこちらを見て言う。

「……その能力だったら、別に妖力を使わなくても飛べるんじゃない

いか？」

「はい？」

「対価って妖力じゃなくも良くない？」

「……………うん」

私としたことが、こんな簡単な事に気付けなかった。三十年間も妖力を対価にしていたんだ。今更そんな利用法思い付……………老化？老化して頭が固くなった？

「私はまだ若い」

「へ？」

「うん大丈夫気にしないで。じゃあ別の力を使って飛んでみよう」

疲労もある程度回復したので、立ち上がって深呼吸をする。

「わたしは早く本題に入りたいんだけど……………」

諏訪子が足を伸ばしてぺたりと座り込むが無視だ。

空を飛ぶにはどんな対価が適しているか。常に安定していて、長時間使用しても無くならない力。何かがある？

「（おうーい！ 亜矢子！ 投擲捕獲球キャッチボールしないか！？）」

「（ええ？ 少しだけですよ）」

下から神奈子ちゃんと亜矢子さんの会話が聞こえ、神社の中から鉄球を持った神奈子ちゃんとガントレットを装着した亜矢子さんが出てくる。新素材を使いたいのは分かるが、そんなものまで鉄製にしないでいいと思う。

二人は、丁度私が見える位置に立ち、投擲捕獲球を始める。ガツシャガツシャと、鉄球をガントレットでキャッチする音がうるさく聞こえる。

「上から来るぞ！ 気を付ける！」

言いながら、神奈子ちゃんが鉄球を思い切り投げ上げる。

「ちょっと！ やめてくださいよ！ 手が痛くなるじゃないですか！」

頂点に達した鉄球は、当然重力に引っぱられて落ちる。……ん？

落ちる球が地上に近づき、速度が最高になったところで亜矢子さんがキャッチする。一際大きな金属音が鳴り響く。

「ひいええ！ ジーンときます！」

「まだまだ！」

「嫌です！ もう終わりですよ！」

亜矢子さんがガントレットを外し、神社の中に戻ってしまう。相手が居なくなつた神奈子ちゃんは、つまらなさそうに片付けを始める。

「うーん……思い付きそうで思い付かない」

投擲捕獲球を見て一瞬頭に電気が走った気がしたが、電力が足りなかった。もつと決定的なモノが欲しい。

「緑！ 本題！ そのペンダントの話！」

諏訪子が言葉を発するが無視だ。

「おうわあ！ 物置を開けたら整地するアレが倒れてきた！ 何故！？？」

神奈子ちゃんが下で騒いでいる。何故って……。傾いてたんだったら倒れるでしょ。重力に引っ張られて。……ん？

「良い感じの力を見つけた気が……」

空を飛ぶための大きな力。それはとつても身近な所にあるかもしれない。何か、私の頭に雷を落とす何かはどこかにある筈だ。

「あ！ 緑！ あそこの木のリンゴが落ちそうだよ！」

諏訪子が叫ぶ。

「ほんとだ……」

諏訪子の指し示す方向を見ると、都合よくリンゴが一つだけあり、少しの衝撃でも落ちそうだ。

「分かった……。完全に分かった……。重『力』を使えば空を飛べるんじゃないか……。!?」

正直重力を使ったら色々と危ないんじゃないかと思う。具体的にどう危ないかは分からないが、ぼんやりと、嫌な予感というものがある。駄目だったらすぐ諦めよう。

私の能力をレベルアップさせるために、自ら犠牲になってくれた諏訪子は地面に這いつくばって痛そうな声を出している。屋根の上から二拝二拍一拝で感謝。

「さあ飛んでみよう！」

得体の知れない力を使うことが怖く、大声を出して紛らわす。

重力を上向きの力に変える。それは、空に向かって落ちるようになる。一歩間違えれば高く飛び過ぎて、生命の危機に直面するかもしれない。

それでもやらなければならない時がある。今後の移動方法を左右するのだ。やってみせる。

(私にかかる重力の六割位を上向きの力と交換せよ……。！)

目標と対価をしっかりとイメージする。

「……………」
だが、何も起こる気配がない。

「……………」

私の能力は目標と対価をイメージすることで発動するのだが、今

回は何も起きない。

「……………?」

地球は私に味方してくれないのだろうか。試しに『妖力を使って火の玉出る』と、能力を使ってみると、いつも通りに出来た（火傷した）。私の能力に不調がある訳ではないらしい。

……出来ないなら出来ないでいいや。怖い思いをしなくて済むし、歩行でも全然支障はないし。能力を使わない分気楽だし。歩きは趣があるし。エトセトラだし。

「……………はあ」

引き籠もろう。私は一生空を飛べないんだ。

「づう……………。崇ってやる……………!」

金髪の子が下で崇ってきたが無視だ。今日は疲れたから寝る。

……………

守矢神社で生活する事一年二年三年四年五年六年……………何十年何百年と、随分長い時間が経った。年をとったせいか、一日がすごく短く感じるようになり、一年があつと言う間に過ぎてしまうのだ。最近なんて一年が一週間のように感じる位だ。

東風谷亜矢子さんは人間であるため、老化しておばあちゃんにな

り、寿命を迎えた。その時は人の死にショックを受けて、さらに引き籠もりになった私であったが、諏訪子と神奈子ちゃんが慰めてくれたおかげで、何とか立ち直ることができた。

亜矢子さんは子供を作り、その子供も成長して子供を作り、代々守矢神社の巫女を務めてきた。そんな訳で、私は何十回も死を見ている内に、慣れてしまった。これを進歩と呼んでいいのかは分からない。

東風谷の巫女は、現在二十三代目である。諏訪子が人前に出ずに、神事を全て巫女に任せるといふ暴挙を成し遂げたことにより、人々は巫女こそが神だと勘違いする結果になった。そうしている内に、信仰の対象の一部は東風谷に向けられ、東風谷は人でありながら神である、現人神となってしまった。

風や雨を操る巫女は、いつしか風祝と呼ばれるようになった。実際に操っていたのは諏訪子であったが、東風谷が現人神になることで、東風谷も風や雨を操ることができるようになったのである。

という訳で、諏訪子神奈子私は完全にやる事が無くなり、三人で毎日トランプをしている。発明したのは私だ。

「そう言えばさあ」

カード一枚一枚にHPMP攻撃力防御力魔力すばやさを設定した、テイルズオブ大富豪（訳：大富豪物語）を遊んでいる途中で、私は思ったことを口に出す。

「何で神奈子ってここにいるの？」

昨日の夜、神奈子にちゃん付けするのをやめるよう決心した。理由は、今や私も神奈子をバカに出来ない立場に居ることを痛感したからだ。

「何でって何だ？ …… スペードの五で諏訪子のダイヤの六を攻撃。私のスペードは死んだがダイヤの残りのHPは一だ」

神奈子は私の質問に返事をしつつ、ゲームを進める。

「神奈子ってこここの神じゃないじゃん」

「私はこの神社の立派な神だぞ。あと神奈子ちゃんて……あれ？」

「そうだったの？ …… ハートの四で諏訪子のダイヤの六を攻撃。相打ちだね」

毎日世間話をしながらまったりとトランプをする私達。正直この生活が飽きつつある。

「嘘つき者には策士の才能、槍を持って、楯を持って、おまえの勝利は確定だ！ 出でよ、JOKER！」

諏訪子が妙な決めゼリフをはいて魔王ジョーカーを出す。残りの手札で勝てそうにないので、この勝負は終わりだ。

逆に、ジョーカーに勝てる程の手札を持っていた場合、諏訪子の負けだ。ジョーカーを出すのは賭けに近い。

「あー負けた！」

「わーい勝った勝ったー」

「今、神奈子ちゃんて……呼ばなかった……？」

「……はあ」

「……終わった」

「き、気のせいだろう」

ゲームが終わり、何とも言えない空気が流れる。諏訪子も、このトランプの日に飽きているのだろう。ここいらが潮時かな。

「……決めた」

「えっ？」

「もう一回呼ばせてみよう……」

神奈子は上の空でぶつぶつと囁いている。

「私木葉緑は明日、ここを旅立とうと思っています」

人心収攬、神様は友達です（後書き）

元々亜矢子さんは登場させるつもりはなかったキャラなのに、成り行きで早苗さんのご先祖様になってしまいました。

天馬行空、道に迷うのです（前書き）

独自設定がありますので気を確かに。

天馬行空、道に迷うのです

今さあ、一体何年なんだろうね。

守屋神社にて、トランプに明け暮れる日々に飽きた私は、旅立つことを決心した。諏訪子の最後の言葉は「まあ分かってたさ」で、神奈子の最後の言葉は「か、神奈子『ちゃん』って呼んで！」だった。あっさりとした別れであった。会いに行きたければいつでも行けるので、そんな程度だろう。

旅立つ前に一回私の師匠、龍巳神水の所に戻るうかと思いつき、歩を進めた。でもねえ。何百年ぶりのおそとだよ？ 道が分からん。

所々に町が出来ていて、自然の形も大分変わっていた（気がする）。

自棄になって歩き荒らすと、でかい町があったので入ってみた。

町の中には、至る所に宗教の宣伝ポスターが貼られており、挙句の果てに、

「道教、良いよ」

と、青緑の髪を8の字に結わえ、金の簪かんざしを挿し、柔らかそうなワンピースを着た怪しい少女に宗教の勧誘を受けたので、私は怖くなって逃げた。

途中で、和服なのに生足を出した不思議な人や、十人に囲まれて願い事を聞いている超人がいたが、スルーして町を出た。

今は見知らぬ森の中にいます。

「歩くの飽きたー」

走るのも飽きた。面白い生物はいないのか、と考えながら歩いていると、何かを踏んで滑って転んだ。歩くのも走るのも飽きたからといって、転ぶのが楽しい訳がない。

何を踏んだのか確認してみると、そこには透明のツルツル床があった。

「こ、これは！ 魔王城の最深部によくある透明な床か！？ それともHPをかなり持つてかれる例のバリア床か！？ いや、まことのおメガネでしか見えない、アレか！？」

平穏な日常に刺激を与えるべく、無駄にハイテンションになってみるが、虚しいだけだ。でもやめない。やっている間は楽しいから私は危険を顧みずにその床に触れてみる。しばらくすると床に触れた指先からは刺すような痛みが伝わり、指先周辺には悪寒が走るような空気が。

「……氷、だと」

そう。ツルツル透明床の正体は氷であった。

しかし今は夏寄りの春であり、氷が存在できるような条件ではない。そもそも森の中に氷があるのがおかしい。

「なにしてんの?」

「転んでんの」

横から幼い声が質問してきたので、正直に答える。声の方向を見
てみると、さっきまで何も無かった所に、幼女がいた。半袖のブラ
ウスの上に水色のワンピースを着た幼女。水色の髪に青色の大きな
リボンをつけて、全身真っ青な幼女。唯一違う色は、ブラウスの襟
から顔を覗かせている赤いリボン。私が行く先々で会うのは幼女ば
かりである。

気になったのは、背中から羽のように生えている六本の氷柱。こ
れは、ようかいなのですか?

「ふーん、転んでんだ。あたいと勝負だ!」

「……」

ああ、この感覚。この脈絡もなくいきなり勝負だと言われるこの
状況。黒髪長髪二本角長身ナイスボディの鬼、木隠こもり黒花と初めて会
った時と一緒だ。言葉が通じない類の生物。こういった生物への対
処法は、まだ明らかになっではない。

「あたいはさいきょーだからね!」

どうする、どうするの私。選択肢は、たたかう、まほう、ぼうぎ
よ、アイテム、チェンジ、にげる。どれにすれば……。

今さらだが、私はゲーム脳を持ち主である。早苗は特撮やその他
アニメ・漫画類を担当し、私はゲーム類担当だった、覚えがある。
今となつては遠い昔(未来?)の記憶である。思い出は大事だ。

まあ、今はそこで胸を張っている、やや自己陶醉気味のお子様に対して、私はどう振舞うべきかを考えなければね。

「たたかう」を選ぶには勇気がいる。私が児童虐待しているような絵になる。幼女の実年齢が見た目通りなのかは分からないが、過去二件の例から言うと、多分おばあちゃんだろう。

「まほう」は使えません。能力を使えばそれっぽい事も出来るが、相手の強さが分からない以上、不用意に使うのは危険だ。

「ぼうぎよ」「しません。

「アイテム」持ってません。

「チェンジ」意味不明。

「にげる」と、ずっと追っかけられる可能性がある。に○ん横断してしまう。あ、○ほんって伏字にして置かないと色々駄目だからね。固有名詞だから。

おお、選択肢が全部潰れた。

「…………どのぐらいさいきょーかというとね」

水色幼女はずっと自慢をしている。胸を張り過ぎてこちらを見ていない。このまま去っても気付かれないんじゃないか。

「さようなら」

私は特に気も使わずに立ち上がり、その場を去った。全然気付いていない。扱いやすいなあ。

.....

そして歩く事十数分。獣道をずかずか進むと、開けた場所に出た。広いとも狭いとも言えないこの不自然な広場には、花がちらほら咲いている。その花の周りを走って追いかけてっこをしているのは羽の生えた子供達。その花の上空を飛びまわり、きゃっきゃきゃきゃとじゃれ合っているのも、羽の生えた子供達。子供達が乱雑に動き回っているのにもかかわらず、その姿は自然の一部のようであり、その表情は草花の喜びを表しているように見えた。

妖精の楽園、という言葉はこれの事だと思った。

好奇心に従ってその広場に足を踏み入れると、妖精達の歌が聞こえてくる。

「てつめえこのつやろ」
「なんつだつおまつえは」
「わたつくしつこつうついうつもーのですよ」
「どうも、どうも、ごてーいねーいに」
「そーれじゃーあきよーうは、こつこいらで」
「おふる、ごはん、どつちらつにすーる」
「そつんなつのしつるか、おーれはかつえる」
「わつたしつとしつごと、どつちがだーいじ」
「おつかねつでかーえない、もーのがあるー」
「そつうよあつなた」
「かえつるものは、おれつのだーん、どろー、どろー」

……。始まり方が物騒だよ！ それから何も無かったように丁寧の名刺交換って、何が起こったんだよ！ って言うかこの二人

は夫婦なの！？ 名刺交換要らない！？ ドロドロした関係なの！？ それでも愛はプライスレスなの！？ クレジットカード一杯ドロして物買っちゃうの！？

……ふう。最近の妖精は過激だなー。あんまり関わりたくないねー。何か他に面白い物はないかなー。あれ、広場の端っこに一人だけ仲間外れにされているような妖精がいるぞー。

気を取り直してその妖精をよく観察する。話し掛けやすそう……な雰囲気ではないが、そこら辺で歌っている妖精よりは話が通じそうだ。

私は支離滅裂な妖精の歌詞を聞かないようにして、広場の隅で木に寄りかかって俯いている少女の元へ足を運ぶ。

少女は、私と同じ緑色の髪で、セミロングの片方を黄色いリボンで結び、おさげにしている。服装はさっきの「さいきょー」と自慢していた少女 恐らくあれも妖精だろう とほぼ同じだ。ただこちらの方が、お淑やかさがある。少女の背中には、蝶のように広がった透明な羽がある。本当に、簡潔に、言葉を選ばないで言えば、八工の羽だ。

「ねえ、君。ここはどういう場所なの？」

私は少女に妖精の楽園の正体を尋ねる。すると少女はゆっくりと顔を上げ、大きな瞳でこちらを凝視する。私も負けるものかと少女を凝視する。

「あなた、人間ね」

私が妖力を隠している為、少女は私を人間だと認識する。諏訪子とか神奈子とか強い個体なら、一瞬で私の正体を見抜く。ならば見

抜けないのは無害な個体と思って良いのではないか。

「いいえ、ちがいます。私は妖怪ですが？」

相手が無害（暫定）だと分かった瞬間、少し舐めたような態度をとる私。弱肉強食による上下関係決定。うわっ醜い、醜すぎるそんな決定法。こんな浅はかな考え方なんて、そこら辺の動物と一緒にじゃないか。今度から気を付けよう。

そんな軽い自己嫌悪に陥っている私の思考など知る由もない少女は、私の態度を気にした様子もなく無表情のまま口を開く。

「そう。……どちらにせよ、ここを直ぐに離れるべきだよ。あれを見てると馬鹿が移るからね」

少女は目で、戯れている妖精達を示す。何となく、少女は他の妖精達を見下しているような感じがする。

「君、名前は？」

「名前……。そんなの無いね。あつたとしても妖精達は三分で忘れるから。強いて言うなら、大妖精、かな。普通より力を持っている妖精の称号だよ。称号は元から妖精の頭に入っている情報だからいくら馬鹿な皆でも忘れない」

大妖精の言葉一言一言には、他妖精への悪意を込められているように感じ取れる。

「私は木葉緑。心はいつも十八歳の少女です」

初対面の人に悪意がなんぞというぶつちやけた質問をする気には

なれないので、私も自己紹介で応戦する。心は十八歳だなんて言ったらもう駄目だと、言ってから気付いた。

「大妖精……さん？ で、ここはどんな場所なの？」

最初の質問を再び。

「呼び捨てで構わないよ。好きに呼んでくれてもいい。他の妖精達は私のことを大ちゃんって呼ぶ。大妖精だから大ちゃん。短絡的だよね」

質問に答えてくれない。

「じゃあ留怨最凶^{ステイ・グラッジ}。ここはどーゆーばしょ？」

「うん。おかしいよねその名前。好きに呼んでいいとは言ったけどさ、留怨最凶は無いと思うよ。そこは空気を読んで大ちゃんって呼ぶのだと思ったんだけど」

「今日から大ちゃんの名前は留怨最凶にしてあげる。『留怨最凶！ いざ参る！』みたいな感じで」

「……………」

「カツコイイ登場シーンを見せてよ」

「……………ここは寿命を迎えた大木が倒れたことにより、日が差し込んで来て、日なたでしか生きられないような草花が育つようになった場所。妖精達の遊び場だよ」

大妖精は私の命名を無視し、当初の質問を答え始めた。大妖精によると、妖精は木の中に住み、毎日外に出て来てはこの広場で戯れるそうだ。自然が具現化した存在である妖精が木の中に住むと、その木は元気が出るらしい。木はロリコンシヨタコンなのである。さらには、この広場のように妖精が沢山いる場所の植物も元気になるらしく、植物は全てロリコンシヨタコンだということが明らかになった。

「このロリコンどもめ……」

「へ？」

私から思わず出た呟きに、首をかしげる大妖精。構わずに私は質問する。

「で、留怨最凶は何で一人で座ってるの？」

「……………」

「で、大ちゃんは何で一人で座ってるの？」

「私は一人で静かに寝ていたいんだ。それなのに他の妖精達がうるさくて」

留怨最凶と呼ばれるのは嫌らしい。言い直すと、ちゃんと答えてくれた。

「家で寝れば？」

「家で寝たら意味ないでしょ」

「どろして?」

「どろしてって……」

そのまま無言になって目を泳がせる大ちゃん。考えてるね。

しかし私にはもう分かっている。何だかんだ言って、大ちゃんも皆と一緒に遊びたいのだろう。大ちゃんは仲間の元に寄る勇気が出せず、隅で悪態を吐き続けて他人と壁を作ってしまうタイプだ。ツンデレだ。早めに直さないと、将来いじめられっこになるだろう。

「他の妖精達と遊びたいんでしょ? ほら、行って行って」

いじめられっこにはなつて欲しくないのです、私は大ちゃんの背中を物理的にも精神的にも後押ししてあげる。しかし大ちゃんは席つたまま物理的にも精神的にも動こうとしない。

「……一度行ってみたよ。さけられた」

手遅れだった。

大ちゃんの立場に絶望を覚え、顔に手をやり落担する私をよそに、大ちゃんは語る。

「私が悪いんだよ。生まれた時から私は能力を持つちゃってたから、皆怖くて近付かないんだ。その能力っていうのが、私が大妖精と呼ばれる理由なんだけどね。……最初は皆も普通に接してくれたんだけど、それで段々私が調子に乗っちゃってね、その、能力を使って色々するようになったんだ。」

詳しく話すとね。生まれたばかりで友達がいなかった私は、思いつきで能力を使って芸を試してみせた。そしたら妖精達は喜んでくれたんだ。すごい嬉しかったんだよ。私は皆に認められたんだって。妖精達は次第に私の元に集まってくるようになって、いつの間にか大ちゃんって呼ばれて、ついに遊びに誘ってもらえるようになってしまったんだ。

それから毎日、毎日、追いかけてこをしたり歌を歌ったり、充実した生活を送っていた。能力持ちの私は皆に持ち上げられて、グループの中心にまでなったんだよ。でも、ある日、私のせいでそれは壊れてしまった。

その日も、いつもと同じように妖精達に頼まれて、芸をしていた。芸をしている途中に、私は、ふと、思った。『私の能力はこの程度じゃない』って。この考えが駄目だったんだ。芸の途中でいつもと違う能力の使い方をした。能力をいつもと違う使い方をした結果、妖精達を一回休みにしてしまったんだ。……………何で前もって何が起こるか試しておかなかったんだって、今も後悔してる。

あ、一回休んでっていうのはね、妖精以外で言う、死ぬってこと。死ぬことと違う点はね、妖精は自然が具現化したものだから、自然が無くならない限り、復活できるというところ。動けなくなったらしばらくすると復活。だから一回休み。

とにかく、皆を一回休みにしてしまった私は、復活した皆から恐れられるようになってしまった。今まで一緒に遊んでたのが嘘に思える位、私の事を無視するようになって、私が近付くとあからさまに逃げていくんだ。悪口を言われる訳でもなく、直接何かされる訳でもない、無視。皆の目には、私に対する恐怖しか浮かんでなかった。

ねえ。たった一回だよ。たった一回間違えただけで、こうなってしまうんだよ。名前も覚えていられないような妖精達が、本能で私から逃げるようになってたんだよ。もうどうしようもないよ。ねえ、緑さんだけでも友達になってよ。」

最後まで無表情で話した大ちゃん。懇願するような所をも無表情で喋り通した。それでも初対面の私に全てを話した。

この、誰のせいとも言えない話。仲直りしようにも、相手が心を開かないので手も足も出ない状態。

不意の暗い話に、私は何を話して良いか分からなくなるが、無理矢理にでも話さないと進展しない。

「友達になるのは良いけど、大ちゃんは一体どんな能力を持つてるの?」

「『色を操る程度の能力』だよ」

「……色? それで皆を?」

「私にもよく分からないよ。それに二度と使う気は無い」

「そう………」

「………」

苦しまぎれにした会話は大して続くはずもなく、無言ゾーンに入ってしまう。どうしよう。解決法が見つからない。

「ああー! 見つけたー!」

無言ゾーンで暗い空気になったこの場に、緊張感の無い声が響き渡る。大ちゃんが小声で「あれはチルノ」と教えてくれた。

「おおーまあーええー！ あたいと勝負だ！」

台無しである。対象はもちろん私。経験から言って、二回目に遭遇したこういうのとは、戦わざるを得ないのだから。

チルノと呼ばれた妖精は戦う気満々だ。がっちり、私を捕捉している。

昔の私と違って、今は戦える身だし、さっさと終わらせて大ちゃんの相手をしなくては。

「大ちゃんちょっと待っててね！」

「あ、うん」

私は大ちゃんを巻き込まないように、広場の中心へと向かった。他の妖精は……勝手に逃げてくれるだろう。

.....

緑さんはチルノと戦うために走り去って行った。

………何で私、あんなに話したんだろう。こんな状況、どうすることも出来ないのに。

もう一人でいるのも慣れたよ。毎日ここでこうして、座っていれば時間は勝手に過ぎていく。

「（家で寝れば？）」

ふと、緑さんの言葉が浮かぶ。

うん、分かっているよ。本当に一人でいたいのなら家ですっと引き籠もっていれば良いんだ。それでも私は毎日ここに来てしまう。

私はまだ、皆と一緒にが良いと思っているんだ。

「かんねんしろ！ 氷！」

緑さんとチルノが戦闘を始めたようだ。チルノは知らない物に出会うと力比べをする癖がある。自分の力量も分からずに。昔、まだ森は幼く、妖精達の力が強くなかった頃に、偶々通りかかった薄い桃色の髪を持ち、おばあちゃん口調の女の子にチルノは勝負を仕掛け、一瞬で負けていた覚えがある。

「氷だねえ！」

チルノが氷柱を飛ばす。緑さんは何の能力を使っているのか、飛んでくる氷を粉々にする。

「まだまだあ！ 氷氷氷氷氷氷氷氷氷氷氷氷！」

「連続攻撃するな！ 『全部砕け！』」

チルノが氷を何個も打ち出すが、緑さんは全てを破壊して防ぎきる。

「今度は私から……って、どうやって攻撃するんだ？」

「アイシクルフォール！」

緑さんは攻撃できず、再びチルノに場を譲ってしまう。

アイシクルフォール。左右に氷を発射し、攻撃対象を挟み打ちするような弾幕。欠点は、氷を左右にばらまくので、目の前がガラ空きになること。それを補うように、チルノは前方にも僅かながら氷を発射する。

「あ、当たる！ もう『全部壊せ！』」

そんな弾幕も、緑さんは一瞬で消し去ってしまう。

「……うわ、まずい。妖力すごい減った……」

「ダイヤモンドブリザード！」

緑さんのつぶやきを気にすることなく、チルノは更に弾幕を張る。ダイヤモンドブリザードと、名前だけはしっかりしているが、実際はチルノが乱雑に、絶え間無く氷をばらまくだけの技だ。だが、適当にはらまかれる氷は軌道が読めず、運が悪ければ逃げ道が無くなることもある。チルノって以外と頭良いんだと思う。少なくとも他の妖精よりは。

「うう、『全部消せ！』」

無数の氷が緑さんに当たる直前、全ての氷を無にする。

「なんで消すんだ！」

「当たったら痛いでしょ！ 他の妖精にも当たるでしょ！」

目を凝らして見ると、緑さんとチルノの周りには、体育座りで戦いを見物する妖精達が。背の高い草が妖精達を隠すように生えていて、どれ位の妖精が見物しているのか分からない。

「……もう、妖力尽きそうだから、やめ」

「さいきょーさいあく、パーフェクトフリーズ！」

痺れを切らしたチルノが、決め技を使った。

パーフェクトフリーズは、低コストの妖力弾をダイヤモンドブリザードと同様に、無造作に放り出す。十分にはら撒かれたら、今度はその弾幕を凍らせ、動きを止める。避ける側が、調子に乗って動いていると、急に止まった弾に当たってしまう。そして、止まった弾は重力や風に身を任せ、色々な方向に飛んで行く。止まった弾幕を見て調子に乗って動くと、動き出した弾に当たってしまう。調子に乗ったら終わりの技だ。

チルノは妖力弾を上空にばらまいた。広範囲に渡ってばらまいた。緑さんが逃げられないよう、広場を覆う位に。

妖精達も巻き込まれてしまう程に。

やり過ぎだ。巻き込んだら、私みたいになってしまうよ。

「……こんなの、消せない」

「こおれ！」

上空の弾が一斉に凍り、動きが止まる。

「大ちゃん！」

緑さんが私を呼ぶ。

「消せるなら、消して！ 友達がやられちゃうよー！」

友達、ね。ここで私が助けたら、皆はまた私を見てくれるのだろうか。馬鹿だから私が助けても理解できないか。馬鹿だからいつも通り私をさけるか。馬鹿だからこの状況も遊びの一部だと思っているのだろうか。

そして馬鹿だから、単純で何も考えられない純粹無垢な妖精達の事を、馬鹿な私は好きであり続けられるのだろうか。

長年使わない事にしていた『色を操る程度の能力』。
私は再び友達の為に使うことにした。

.....

何で妖力いっぱい持つてるのに直ぐ尽きるかねえ。燃費悪過ぎだよ。

頭上を覆う氷の群れ。数瞬後には自由落下をするだろう。私の

所に落ちてくる氷だけは消せる。他は大ちゃんにかかっている。妖精達は当たっても一回休みで済むらしいので、別に全て消さなくても良いのだが、そうすると私の心が痛む。大ちゃんにとって今は、汚名返上のチャンスと言っても過言ではない。

「あたいの、勝ちだ！」

チルノはもう、悪役みたいだ。子供って時に残酷ですよ。

「面積百ぱーせんと！」

チルノが叫んだ瞬間、それは落下を始める。

数秒後、ぬるい雨が降った。

「……あれ？　なんであたいの攻撃が？」

チルノは何が起こったのか理解できていない。

大ちゃんが「色を操る程度の能力」を使ったのだろう。

色というのは、光の波長によって認識される視覚的な情報だ。色として認識できる波長は、範囲が決まっている。その決まった範囲以外の光は、赤外線やら紫外線やら呼ばれる光である。いわゆる見えない「色」だ。

大ちゃん的能力は、正確には「波長を変える程度の能力」だと言える。大ちゃんが他の妖精を傷付けてしまった時には、光を赤外線

か紫外線に変えてしまったのだろう。赤外線は物体を熱する力を持ち、紫外線は物質を分解する力を持つ。大変危ないヤツだ。生物がそんな光を浴びたら昇天する。妖精達は、この光を当てられ昇天し、大ちゃんを恐れるようになってしまったのだ。

そして今、大ちゃんがやった事は、上空の光の波長を一瞬だけ変化させ、無数の氷を赤外線で溶かした。言うなれば、上空を電子レンジでチンしたのである。頭上でチンしたら、私達に影響は無いのかと思っただが、何にも無かったので良し。

結果的に、全員、大妖精の力で助かった。

私は、呆気にとられるチルノに、拳骨を三つ差し上げて、大ちゃんの所に駆け寄った。

大ちゃんは、倒れていた。

「だ、大ちゃん!？」

「……私の上にあった氷、溶かすの忘れちゃった……」

大ちゃんの周りには、氷塊が落ちていた。私達の方に集中していて、これらに当たってしまったのか。

「……ははは、私、一回休みだ……」

大ちゃんは気付くと消えていた。

.....

「……はっ！」

大ちゃんの復活場所が分からなかったので、森の中を探し回っていたら、意外と早くに気を失った大ちゃんを見つけた。

諸悪の根源であるチルノに「どうやってあたいのパーフェクトフリーズを消したんだ!？」と聞かれ、大妖精がやったと答えると、チルノはすごい興味を示し始めた。そんなことがあり、大ちゃん探索にはチルノも同行している。

そして、たった今、気を失っていた大ちゃんが目を覚ました。

「大ちゃん！」

「これが大ちゃん!？」

二人して喜ぶ。

「……え？ あの、だれですか？」

大ちゃんはパツとしない表情のまま辺りを見まわす。

「私だよ、緑だよ」

「みどりさん……知りません。あの……一つ聞いても……？」

「どうした？」

「ここは、どこで、わたしは、だれなの、かな？」

立派な記憶喪失の人の台詞を言ってきた。

「お、覚えてないの!? 大ちゃん能力を使って皆を助けたんだよ!?」

「はあ……。でもわたし、能力なんて使えないよ?」

「何言ってるの!? 汚名返上だよ!?!」

「え、わたし、悪いことをしちゃったの!?!」

「いじめられっこだったの覚えてないの!?!」

「なにそれ! 嫌だよそんな過去!」

「……。まあ、良いか。」

「君の名前は留怨最凶^{ステイ・グラッジ}。皆の人気者だよ」

「おまえはあたいの、さいきよーの子分だぞ!」

「口癖は『留怨最凶! いざ参る!』だよ」

「おまえがあたりより弱いこと、今日からみっちりおしえてやる!」

好き放題に偽の記憶を植えつけた。

「そつだよ! 思い出したよ! わたしのなまえは留怨最凶で、チルノちゃんの子分なんだね! 留怨最凶! 改めて参る!?!」

良い事をする的最高な気分になるよね！
めでたしめでたしっ！

天馬行空、道に迷うのです（後書き）

秋姉妹的次回予言

「静葉です！」

「穰子です！」

「うおー！ー！ー！ー！ あ、き、じゃー！ー！ー！ー！ー！」

「お姉ちゃんお姉ちゃん！ 秋は、もう死んだんだよ……」

「なななんですって！？ あ、もう、11月だ……うわあ」

「でもでももお姉ちゃん！ 緑にペンダントをあげたおかげで予言させてもらえるようになったんだよ！」

「キャラ付けに成功したのね！」

「そんな事いわないで！」

「で、一体何を始める気？」

「ここでは緑が次にしそうなことを予言します！」

「予想、ではないのね」

「このお話では現在、聖徳太子がいる時代です！」

「最初に色々出てたわね。凄い勢いでスルーしたけれど」

「宗教ってこわいもんね」

「神のわたし達がそれを言ったらお終いだと思うわ」

「さて、妖精たちを救った緑は次に何をするんだろう！」

「便利な能力を持っているのに、チルノにすら負けそうな緑」

「修行だね！ それしかないね！」

「修行ばかりしてもいられないわ。この先重要イベントが盛りだくさん……」

「わたし達はでてくるのかなあ！？」

「……………」

「え、お姉ちゃん！ なんでだまっちゃうの！？」

「……………」

「……………」

「予言を終わるわ……………」

「うん……………。今日は帰って鍋だ……………」

……………この次回予告、いりますかね。

屠竜之技、宿敵は時間です

すごいすごい。

道に迷いまくっていたので、わが師匠龍巳神水の家を見つけるのに二十年位かかった。につぼ〇列島一周したんじゃないだろうか。

「……やっと見つけた……」

地形が変わり過ぎ。よく見ないと分からない位だ。RPG的に言うと、一マス一マス『調べる』を使って、延々とマップを歩き続けるようなイメージだ。人里も大分増えていたし、ここはもう私の知っている所ではないよ。

「みなみなみなみなー」

実家に帰るような気持ちで水の洞窟に足を踏み入れる。もう一度言おう、地形が変わり過ぎ。水の洞窟は、いつ出来たの分からない立派な滝に隠されていた。滝があるということは、川も流れている。もう一度言いたい。地形変わり過ぎ。ここに川なんて無かったぞ。

「出て来な！」

家探しという作業が終わり、飽きと疲れと喜びと怒りと悲しみと期待と不安と休らぎが同時にやって来て、情緒不安定になっています。

「……帰って来たか家出っこ」

ピンク幼女が暗くジメジメした洞窟の奥から、瞬間移動してきた。

「イエス！ 帰ってきたぜ！ すごく久ぶりだねえははは。ここに水がいなかったらと思うと私、不安だったんだよお……。この幼婆が」

「……大丈夫か？」

「うん」

水は当たり前のように私を出迎えた。何百年もここを離れていたのに。……ああ、私、もう六、七百歳だ。おばあちゃん所の話じゃない。

「あの、水。私、間違ってたよ」

「何じゃ」

「生き物って二百歳越えた辺りから、『おばあちゃん』を超越した存在になるんだね！」

「わ、分かってくれたんじゃな……！ 我ら人外は決してびーびーえーなどではないと！」

「分かっちゃったよくそう！」

この家出期間中で私は、体が成長しない代わりに、心が素晴らし

い成長を遂げたのです。まあ、家出期間の九十七パーセントは守矢神社でだらけていただけだし、残りの三パーセントは道に迷っただけだったけど。泣きたい。

「あれ、私の家って、守矢神社って言ってもいいんじゃないか？ 滞在期間的に。別れ際も『いつてきますいつてらっしゃい』なノリだったし」

「うむ？」

「本当、水は変わらないね。ちっこい」

「うっさい」

万を生きる水にとってはこの六、七百年も一瞬だったのだろう。何万分の一は、限りなくゼロに近い値だから。

ちっこいで思い出したのだが、ここにいるメンバーが、一人足りない事に気付いた。でっかいのがない。

「黒花は？」

「ああ、ある時いきなり『人間と妖怪の関連性について第三者的な見地から観察し、その相互作用を考察するために旅に出る』と言って、ここを去って行ったぞ」

黒髪長髪二本角長身ナイスバディの鬼、木隠黒花こくりはいつの間にかにすごく頭が良くなっていったようだ。黒髪長髪二本角長身ナイスバディ+インテリの鬼、って、もう欠点ないじゃん。これでまた「ししょー」って呼ばれたら、私は鬱ふさになるだろう。

「はあ……」

色々な事に疲れたので、とりあえずその場に席る。入り口から聞こえてくる滝が落ちる轟音が、私の心をマッサージしているかのように気持ち良い音……じゃない。すごくうるさいだけだった。

「……」

「……」

「……」

「……」

そのまま無言ゾーンに突入してしまう。気分としては、今まで熱心に働いていた夫が定年退職をして、ずっと家にいる状態なのだが、妻は今更何を話せば良いのか分からず、会話が全く無くなってしまった家庭である。

「……あ、そうだ。水」

「ん？」

「相談」

「何じゃと？」

「相談したい事が……」

「んえー！！何じゃってー！！」

「そ、う、だ、ん!!」

「えお!? もっとでっかい声で!!」

「話ッッ!!」

「どうえ!? 全っ然聞こえないぞ!!」

声が滝の音に妨害されて相手に届かない。さっきは普通に話せてたのに。

「水、愛してる」

「そうかそうか、そんなに死にたいか」

ならばと小声で思ってもいない事を言ってみたが、しっかり聞かれていた。悪い事は言っていないのに、私は殺されてしまうらしい。気を取り直してもう一度コンタクトしてみる。

「だーかーらー! 聞きたい事がっ!!」

「ああ、今日は晴れじゃ」

「天気の話なんて聞いてないよ! 見れば分かるし!」

滝の裏からでも分かるほど、おそとには真っ青が広がっている。

「え? この石のことか? すごいじゃろっ。大地の力がにじみ出てるぞ」

水はポケットから白い石をとり出す。……あれ、これって。

「うわっ！ それ放射性物質だよ！ にじみ出てるのは大地の力じゃないよ！ 放射線だよ！ ばっちいから捨てて来なさい！」

どこで拾ってきたのだろうか。

「ふむ。ついでにこんなものもあるぞ」

水は白い石をポケットにしまい、今度は楕円形の黒い物体をとり出す。白い石は捨てると言ったのに。いやだがしかし今はそんな些細な石よりも重要な物が眼前にある。水が持っているあの黒楕円には見覚えがある。黒い物体の右側には丸三角四角バツが描かれたボタン四つ、左側には上下左右の矢印が描かれたボタンが四つとアナログな感じのする丸いものがある。これはもう、アレしかない！

「ペーえすペーだ！ もらうっ！」

時代を無視して何故か出てきた携帯ゲーム機「ペーえすペー」。六百年振りの再会に私は狂喜する。その嬉しさは一時間位滝に打たれていても揺らがないだろう。ペーえすペーは、私の命と言っても過言ではない存在だったのだ。

「どこで見つけたの!？」

「近くに往む河童が色々とな」

「かっぱ—————っ！ グッド！」

いつか行かなければ。そこは私の桃源郷となるだろう。いつ行くか、あとで行こう。タッチスクリーン搭載型ゲーム機で有名な「二点城SS」もあつたらいいな。

「あ、行くのは駄目じゃぞ。奴ら里の入り口に、とりにとりとなるんちゃらを仕掛けているからな。爆発したら山が荒れる」

「TNT………！ 何をするだアー！」

TNT。爆弾だ。河童め……。

私の夢はTNTと一緒に爆発してしまった。粉々になった夢々は、絶望に変わって私に降りかかる。

残念な気持ちになった私は、水が持っている「ペーえすペー」を筆取り、話を戻すことにした。

「我のペー」

「で、相談ってというのはね」

「……えすペーを返せ」

「はい？ 何の事です？」

「……もう良い。今度河童に最新型作らせてやる。緑には後でそっちをやるうかと思つてたのになー」

水は早くもペーえすペーを諦めたようだ。それとも挑発しているのか？ 無駄だ。私は最新型なんて良い所はあまり無いと思つている。余計な機能を追加されたら使いにくい事この上なくなつてしまふ可能性があるから。という訳でこの古き良きペーえすペーは遠慮

なしに有難く貰います。

「で、話とは何じゃ」

私が挑発に乗らないと分かった水は、自分から本題を促した。ちよろいね。

「単刀直入に言うとな、私って妖精に負ける位弱い……」

妖精は、頭が足りなく攻撃が単純で何度でも復活するため、うさ晴らしに丁度良いと、どこかの町でマツチヨの人が言った。

しかし私はそんな妖精に負けているのだ。その妖精に負けてからというもの、私は妖怪から逃げるようにして各地を転々としていた。ほ○中を彷徨っていた原因は、こうして逃げまくっていたからなのかもしれない。強い強いと言われていた前世の記憶は一体なんなのだろう。

「チルノっていう妖精に妖力が切れるまで追い込まれた」

「弱っ」

「うっ」

水の一言で傷付いた。無意識で出た単純な言葉ほど辛いものはない。

「その妖精なら我也戦った事はある。確か氷精だったな。一撃で終わったぞ」

「うっ」

「緑、ちゃんと修業してたか」

「うっ」

六百年引き籠もってました。

「……………はあ」

「妖力はいつぱいあるって言うけどねえ」

「ああ、変換効率が悪いんじゃない」

「変換？」

「その、『ペーえすペー』に入ってる『あーるぴーじー』みたいに説明するとな」

RPGやったんだ。水とは話が合うようになったね。

「黒魔術士が魔力10消費の『炎』を唱えて敵に1000のダメージを与えたとする。この時魔術士は消費魔力を十倍の威力に変換したことになるな」

「そうなの？」

実際にはもつと複雑な計算法でダメージ算出しているだろう。

「そうなのじゃ。それでな、能力をもった生物も同じように妖力を何十何百倍の威力に変換して現象を操作するんじゃない」

「私は変換できない無能と言いたいだね」

「うん」

「うっ」

さっきから心にぐさぐさと刺さるものがある。この幼女の言葉は昔からキツイ。

「緑以外の妖怪は変換効率が良い反面、我のように『自然を操る』とか例の氷精のように『冷気を操る』とか限られた現象操作しか出来るんじゃない」

「そうですね」

「緑の能力は……って、我はお前の能力を知らんぞ。大方変換効率が悪そうな不思議能力じゃろうが」

あれ、言っただけじゃなかった。私が能力を得てからはほとんど水と会っていないのか。

「私は『等価交換する程度の能力』の持ち主。対価を払えば何でもできる能力。水様々々々のおかげで習得できましたよ」

「我のお陰じゃな。這いつくばって感謝せい」

そんなのは絶対嫌だけどすでに私の心はボロボロで疲れていたの
で、仰向けに寝っ転がって感謝の意を示してやる。全然感謝しているように見えないだろう。

「まあ良い。緑の『等価交換』は何でも出来る反面、支払う対価の消費量が大きいのじゃ。きつとそうじゃ」

最後の言葉で今までの説明の信憑性が失われた。

水の話が正しいと仮定する。チルノ（敵）に1000のダメージを与えるのに水が妖力を10消費するとして、私が同じだけのダメージを与えるには妖力を100消費しなければならないのだ。等価交換って時には不便だね。

「そんなに妖力の消費が激しいならば他の物で代用出来ぬのか？
ここに来た時だってそうしたのじゃろう」

「うん。重力には裏切られた」

「じゅりりよく？」

「あー、地球が物を引っ張る力」

「ち、ちきゅう！？」

大自然幼女水のご質問タイムの始まりだ。これは、説明した内容を更に説明させられる、地獄の時間である。懐かしいなあ。守矢神社に引き籠もっていた無味乾燥な六百年間の記憶が全く無い代わりに、それ以前の記憶がかなり残っている。

「意味分からんぞ！」

水が叫ぶので懇切丁寧に説明しなければ。

「まず大前提として私達が住んでいるここは宇宙と呼ばれるただ広い空間の中に浮かんでいる地球という球体であってその地球には引力と名付けられた物を引っ張る力がございましてその力があることにより落ちるといふ概念が存在するのですそして私はその力を対価にして空を飛ばうと思ったのですがどういふ訳か失敗してしまいました」

一息に説明するが、水は煮え切らない顔をしている。

「はあ？ 考え方がぶっ飛んでおる。そのうちゆうというのは、『アナタハシューキョーヲシンジマスカ』と同じような考え方か？」

違うけどはつきり違うとも言えない。あやしい宗教の決め台詞に『ウチユウノシンリー』というものがあつた気がする。

「否定出来ないよ！ 大いなる宇宙の真理とは神の存在であるーだよー」

宇宙と宗教は表裏一体なのだ。理解出来ない物は、神や妖怪という実体のある形にして理解しようとする。理解の範疇を超えたスケールの大きい話をいきなりされた水は、それを宗教として捉えてしまったのだ。典型的な昔の人の思考法だ。その方が夢があつて良いかもしれないが。

「……難しいものだな」

「……あとちよつとだけ待てば、分かるようになるよ」

どこかで偉い人が証明してくれる筈だ。

「……あーるぴーじーとは、良い物じゃな」

「でしよう」

結局、何の進展も無いまま、うやむやになって終わってしまった。水は何万年も生きているのだから、全知全能であって欲しいものだ。

……いつか、自分の能力と向き合わなきゃね。でも当分はペーえすペーだ。

屠竜之技、宿敵は時間です（後書き）

秋姉妹的宇宙の真理

「静葉です！」

「穰子です！」

「うおーーーーー！ あーきーーじゃーーーー！」

「お姉ちゃんお姉ちゃん！ 現実を見ようよ！ もう11月の後半だよ！」

「穰子。信じれば、全ては救われるのよ」

「宗教的だ！ でもお姉ちゃん。秋の神って、私たちだよ？」

「え、ほ、本当だ……うわあ」

「お姉ちゃんのテンションが下がった所で次回予告です！」

「今回何の進展もなかったわね……」

「結局修行もしなかったね。でも！ 次は！」

「お！？」

「あそこに行きます！」

「どこよ」

「嫌だなあ。お姉ちゃん知らないの？」

「知らないわ」

「あそこだよあそこ」

「分からないのね。それっぽく見せようとしているだけなのね」

「うう」

「……」

「……」

「……『予言』を終わるわ」

「お、お姉ちゃん、『予言』って強調しないで……！」

「大丈夫。私は穰子の事、信じてるわ」

「はあ……。帰って「タツ」の準備でもしよつか……」

空谷聲音、村に行くのです

今日、自分の能力と向き合ってみました。

「妖力を使つて火を出せ！」

出た。人差し指の先っぽに小さな火。これは出来て当然だ。火が出なきゃおかしい指が熱い！ 火傷した！ 消火しなきゃ！

念じることで、出した火を消す。念じなくても妖力が尽きるか一定時間経つと勝手に消えるが、熱過ぎて我慢するのは不可能だ。ここでだれても意味が無いので次の作業へ。

「重力を使つて火を出せ！」

出ない。これは前やって出来なかったことだから、予想の範囲内。もし成功していたら、火を出している分の重力が減って体が軽くなり、月面移動ごっこでもできたんじゃないの。

そして次からは初の試み。初めての事はやはり怖い。

「カロリーを使つて火を出せぐあぁ……」

思い付いた事を言ってみたら一瞬だけ火が出て、同時に寒気が襲い私の体から力が抜ける。カロリーで火を出すなんて事をするからだ。でもこれ、上手く使えばダイエットにならない？

こんな風に急に力が抜ける事など、しょっちゅう起こるので慣れ

た。さあ続けるぞ。

「太陽光を使つて火を出せ！」

太陽光は光のエネルギー。この力は太陽光発電とか虫メガネを使つて黒い紙を焼いたりするのに使われるからいけるんじゃないかと思つたが、結果は駄目だった。

下手な鉄砲も数打てば当たるんだ。まだまだ終わらんよ。

「寿命を使つて火を出せ！」

流石に寿命は無いだらう。つて火点いちゃったよ！ あ、え、どうしよう！ 寿命がちぢむ！ 現在進行形でちぢんでる！ 死ぬう！

自分の寿命がどれ位あるのか分からないが、早死にしたくないのでとっさに息を吹きかけて鎮火する。

「ふう。……水の妖力を使つて火を出せ！」

「空気中の酸素を使つて火を出せ！」

「血液中の酸素を使つて火を出せうぐつ……！」

「何も使わないで火を出せ！」

「何か使つて火を出せ！」

「筋肉を使つて火を出せあれ腕に力が入らなくなった」

「髪の毛を使 いや危ない予感がする」

「秋姉妹のペンダントに宿る神力を使って火を出せ！」

「火出るよ！」

と、この調子で続けていったのであった。私の身に何か起こっている時は大体点いた。

最終的に分かったのは、成功する時は毎回私にとって不利な対価が必要とされている事。『等価交換』によって得られる利益は、自分が完全に所有しているモノを対価にしなければならぬようだ。手離そうと思えば手離せるモノや、空気のようにいくらでも手に入るモノは対象外だ。自分が使える力の中で、最も使いやすいモノが妖力だというのを、数々の実験の中から身を以て学んだ。

.....

少し休憩をとり、水が寝っ転がってペーえすペーをしている横で、自分について考えてみる。

「私は強くなれない」

「……おっ！ 魔神腱をマスターしたぞ！」

「妖力が増えないと何も出来ない」

「……あん？ 飛焰連脚もマスターしなきゃ駄目なのか？」

「でも妖力を増やす方法は分からない」

「……よし！ 適当にエンカウント……うあ、HPもTPも金も道具も近くに町も無い……」

「妖力以外の力は使う気になれない」

「あ、ああああ……仲間も三人死んだ……」

「詰んだ……」

「詰んだ……」

滝の音が響く洞窟の中で、私と水は同時に詰んでしまった。

「水、どうしたらいいと思う？」

「……うむ。調子に乗ってえんかうんとし過ぎなければ良いじゃろ
う」

当たり前のようにゲーム用語で返す水。もうすっかり染まっているよね。

「いや、避けられない戦いもあるでしょ。強いヤツとかに出会ったら逃げられないよ」

「そこはあきらめて全滅するしかないじゃろっ」

「全滅！？ 死ぬじゃん！」

「大丈夫じゃ。何度でもやり直せばいつか勝てる」

「やり直せないよ！ 人生は一度きりだよ！」

「何じゃ。緑は縛りふれいでもしておるのか？」

「縛ってないよ！ 皆命は一つだけだつて！」

「ならばこまめにせーぶをする事じゃな」

「せーぶなんて出来る訳無いでしょ！ ゲームじゃないんだから！」

「え？」

「何なのその今始めて分かったような顔は」

「げーむの話では無かったのか……」

「……………」

最初から会話が噛み合っていなかったようだ。このまま続けていたら現実と虚構の区別がついていない子との会話になっただろう。

「で？ もう一度最初から言ってくれないか？」

水はペーえすペーの電源を切り、私に向き直った。詰んでいたの
で、せーぶせずに電源を切ることは未練がないようだ。

「妖力の増やし方についてだけ……………」

「妖力の増やし方？」

「私をもっと強くなるにはこれしかないと思って……」

「もっと他にもあると思うのじゃが……。まあ良い。妖力を増やしたいのなら人間でも脅して来い」

随分簡単な方法ですこと。

「でも無理です」

「……あのな、そもそも妖怪とは人間が理」

人の恐怖心そのまま私達妖怪の力となるので、私が人を脅かせば脅かす程強くなるらしい。これだけの情報の為に何故か三十分位説教をされた。全く近頃の老人は……。

「だから無理と言ってる暇があったら人里にでも行ってる、と言いたいのじゃ」

「いないいない婆!」

「うわっ!」

いきなり過ぎる私の行動に驚いて飛び上がる水。こういう仕草は子供っぽくて良い。

「こんな風にやればいいの?」

「……良いんじゃないか? 出てけ」

またまたキツイお言葉を。まあ行くだけ行ってみるか。能力の使い過ぎで疲れたから、今日はゆっくり休んで明日行こう。

.....

次の日の朝を寝過ごし昼頃に、私は水に簡単な別れを告げて洞窟を発った。

遠足気分で山を下り森を抜け人里を探索する。獣道を歩くのはもう慣れたこと。慣れ過ぎて困る。

で、今はこんな状態。

「嫌だねえこうも失敗ばかりしていると本当にやる気無くなるわー私は馬鹿かつ！」

要するに、またも道に迷ったのだ。獣道に慣れたのは、この極度な方向音痴が原因なのを忘れていた。

時刻は夜。現在地は一寸先も見えない程真っ暗な森の中で、私はその場に座り込み途方にくれている。人里がどこにも見当たらないのが悪いんだ。どこにあるか分かりやすいように異常発光していればいいのに。……って、それは懐かしき『現代』の有り様じゃないか。そう考えると素直にいいって思えないね。星見えなくなるし。

座りながら記憶の中の街を探検している途中、前方がガサガサと音が鳴っているのに気付く。こんな時に、こんな状況で敵さん襲来か。

「……………」

いつでも動けるように立ち上がり、身構える。戦うという選択肢などある訳が無い。仮に戦う気があったとしても、こんな真つ暗闇では為す術が無い。私はか弱い18歳だから、一生懸命逃げるしかないのだ。

ガサガサ音は徐々にこちらに近付いて来る。それは私のすぐ近くに来た時に止んだ。

「……………」

静寂が訪れる。音の主は私に狙いを澄ましているのだろうか。

「……………！」

来た。

「覚悟おおっっ！」

(妖力を使って結界を張れっ！)

何者かが大声を出して飛びかかってきたので、すかさず能力で防ぐ。キツ、と鉄とガラスがぶつかったような音がした。何者かの攻撃が結界に阻まれた音だ。

結界とは言うものの、実際は妖力で作ったただの壁であり、何のありがたみも意味も無い障害物だ。格好良く言いたかっただけ。

「うっ！ 防がれた……ってあれ？ 人間？」

この真つ暗闇の中で私の姿が完全に見えるのか、何者かの動きは止まった。しかし私は相手の姿が見えない。視力が良いのと夜目が利くのと別。

何者か 犯人 と名付けよう が飛びかかってきた時に上げた声は高かった。それだけで判断すると、相手は女性か子供なのだろう。今までの経験からするに、きっと幼女だ。

「いきなり攻撃して悪かったよ。君、こんな所でどうしたんだい？」

「み、道に迷って、そしたら夜になってしまっ……」

見えない相手に人見知りと警戒心と恐怖心が発動し、言葉が途切れ途切れになる。そんな私の態度を気にすることもなく、犯人は口を開く。

「あらまあ。よく妖怪におそわれなかったねえ。私の攻撃を防ぐ位だし、少し位は出来るのかな？」

「え、ええ。まあ」

犯人 はフレンドリーな調子で話してくるが、私の警戒心は揺るがない。いきなり襲い掛かってきた相手に対して警戒しないというのも可笑しな話だ。

「いきなり襲ったお詫びと言っては何だけど、外まで送ろうか？もしも行く当てが無いんだったら私の村まで案内するよ」

「はあ。よ、よろしくお願いします」

警戒はするが、相手の提案が魅力的だ。このままここにいっても危

険なだけなので、とりあえず同行させてもらおう。もし犯人が途中で襲ってくるならば、妖力を存分に使って全力で逃げ出そう。

「よし決まり！ 私について来て！」

そして犯人が歩き出す音が聞こえる。闇の中、音だけを頼りについて行くのは無理だよね。

「待って！」

「ん？ どこを見てるの？ 私はこっちだよ。……あれ、もしかして私が見えてない？」

「暗くて……」

「夜目が利かないんだね」

「はい……」

足手まといになっているようで申し訳ない気持ちになる。すると私の手が何者かに握られた。何者かと言ってもこの場にいるのは犯人 しかないが。

「引っ張ってあげるよ」

「ありがとうございます……」

初対面でここまでしてくれるなんて、優しい人だ。だが、私は最初に妖力をあからさまに使っていたのだ。なのに犯人は怪しむ素振りも見せずに私を人間だと判断した。犯人はただ鈍くて面白い

人なのか、それともあの友好的な態度の裏側にはどす黒くなつとりした思惑が渦を巻いているのか、どちらが真実かは分からないので警戒を緩められない。

「そう固くならなくて良いよ。気軽に、ね」

「そうですね。あなたの村が楽しみです」

「うう……。その丁寧な言葉に心の壁を感じずにはいられないよ」

犯人 のように最初から壁を作っていない人はすごいと思う。

.....

犯人 に手を引かれて歩いていると、森が段々薄くなり、月明かりが差し込んで来るようになった。そんな訳で、相手の顔も見える明るさにはなつたのだが……。

「……！ 幼女じゃ、ない……！？」

突然出会う生物は幼女であるという決まりが自分の中ではあったので、相手のある程度成長している姿を見て驚いた。

犯人 の年齢は私（18歳ですよ）と同じ位で、金色の髪を黒いリボンでまとめてお団子にしているのが分かった。

「ん？ ようじょ？」

「い、いや、何でもありませんよ」

「まあいいや。まだ名前を聞いてなかったよね。私はヤマメ。黒谷ヤマメだよ。君は？」

「私は……そうですね、とみやまじはなえもん富山柴左衛門でどうでしょう」

簡単に名前を覚えてしまうと、とあるノートに名前を書かれて死んでしまう可能性がある。黒谷さんには悪いが、ここは偽名で行かせてもらおう。

「どうでしょうって……」

「気軽に富山って呼んでね」

「……はあ。どうしてだろう。自己紹介をしたのに心の距離が開きつつある感じがするよ」

こうして会話している内にも森は薄くなってきた。木の本数は変わらないが、高さが低くなり葉の数も減っている。そう感じるのだ。こうなると出口は近い。長年の経験から得た知識だ。

「あ、手……」

辺りが見えるようになって、黒谷さんはずっと私の手を握っていた。熱くなってきたのでここいらで離してもらえると嬉しい。

「富山は心だけじゃ飽き足らず、物理的にも距離をとりたいたんだね。許さん」

そう言って黒谷さんは、私の手をより強く握り直す。手が熱い。そのまま歩くこと数分。心なしか、黒谷さんの歩行速度が上がっている。前方に出口らしきものが見えているせいか、それとももつと奥に発光体があるせいか。

「富山！ もうすぐ村に着くよ！ ワクワクしちゃってもいいんだよー！」

「その心は」

「えっ？ あ……、ええっ!?!」

私の無茶振りに黒谷さんは一瞬考える表情を見せるが、結局答えは出なかった。

「だ、だから、もうすぐ村だって。ほら、見えるでしょ」

「ほんとだねー」

黒谷さんが繋いでいない方の手で差す方向には、ゆらゆらとゆれる赤い光が二点。さっきから見えていた発光体だ。するとあれは村の入り口に灯しておく篝火かがりびの類かな。

「手を離してください」

「駄目だ。これは私に残された唯一の富山との接点なんだ。ここで離してしまつたら私は……！」

手を繋いでいる姿を村人に見られたら色々と危ないと思うのに、

黒谷さんは絶対離さないつもりだ。

私を困らせた森をあっけなく抜け、村が目前に迫って来る。もう村まであと50センチだ。村は簡素な柵で囲まれていて、入り口には門が無い為、門番が二人立っている。村に勝手に入ろうとする者を撃退するのである。現に二人は近付いて来る私達を狙って槍を構えている。

「門番さん。ヤマメですよー」

黒谷さんが言うが門番は警戒を緩めることなく、静かに口を開いた。

「……一応規則だ。アレをやるぞ」

「私アレ嫌いなんだよ。規則だし、ちゃんとやるけどさ……」

黒谷さんは深呼吸を始める。私の手を握ったまま。

深呼吸を終えると黒谷さんは、真っ直ぐ門番の方を向く。

「今日はいい天気ですね」

「……そうか」

「調子はどつです？」

「……まあまあだ」

「ちゃんと食べなきゃ駄目ですよ」

「……うん」

「1J」

「……………」

「……………」

「……………通ってよし」

真っ赤になる黒谷さんを他所に、門番は槍を横に置いて警戒を解く。この一連のやり取りが合い言葉なの？ ……まあ、ノーコメントで。

「ヤマメが帰って来たぞーっ！」

隣の門番が村人に知らせる為に叫ぶ。すると、村の中にある数々の木造建築物から人がどんどん出て、こっちに来る。

「ヤマメ！ どうだった！」

「今日の晩ごはんは何かない！」

「何匹とれた！？」

「お疲れ様！」

「早く早く！」

老若男女様々な声がヤマメに浴びせられた。しばらくすると、急に声が止み人々が左右に分かれる。中心には一人の老婆が。

「……………ヤマメ。今日の収穫は何だ」

威圧感たっぷりに言う老婆。黒谷さんは俯いてしまう。

「……えっと、何て言ったら良いか……」

「森の神に見放された日だったか」

「……狩りするの忘れてた……」

申し訳けなさそうに小声で話す黒谷さん。老婆はそれを聞くと目を見開き、超速度でこちらに迫る。

「すみませんすみませんすみませんすいま」

「こんの、ド阿呆がーっっっ！……」

「うあああああああ！！」

ハイスペック婆さんはスピードを殺さず、黒谷さんにパンチを繰り出した。俯いて早口で謝っていた黒谷さんは、反応出来ずに吹っ飛ばされる。私の手を握ったまま。

「巻き込まれたあああああ！」

私と黒谷さんは老婆の一撃で垂直に飛び、体勢が整わないまま落下し、追加ダメージを受ける。

「げふっ」

「ふぐっ」

大勢の村人に見守られる中、苦痛に顔を歪ませている私の前に老婆が立ち、つまらなさそうな目でこちらを見下す。

「ヤママ。この男は何だ」

「はい富山柴左衛門と名乗る者です森で迷っていたようなので保護しましたそれで狩りを忘れてしまったのですごめんなさいごめんなさいごめんなさいいいいいいい」

すっかり怯えた様子で老婆に報告をする黒谷さんがいるがそんな事は関係無い。男だと！？ 久しぶりだよこう言われたのは！ あれか、偽名使ったのが悪いのか？ いや違うこの老婆は私の偽名を聞く前に男って言った。つまり外見で判断した訳だ。人は外見で判断しちゃいけないんだぞ！ くそつ。

「そうか。ヤママには罰として三日間交代無しで狩りをしてもらう。……して富山」

「……ああん？」

おおいけない。うっかり強い調子で返事をしてしまった。こんな喋り方では一層誤解を解きにくくなってしまつ。もっとお淑やかに。

「貴様は街の人間か」

「はい？ 街の人間でございまするか？」

口調がおかしい気がする。

「街から来たのかと聞いている」

「いえいえ私は旅の者です。各地を転々としています」

星とか自分で言っつてて気持ち悪い。

「そうか。ならばここに留まる気はあるのか」

「えっと、もし宜しければ……なんて（はあと）」

ここまでしなきゃ女を取り戻せないのならいっその事男でも……
何でもない。

「貴様が街の人間で無いのなら滞在を許可しよう。ただし妙な真似はするな。もし怪しい行動をしたら……」

「な、なにをするのですか……？ 私、怖いですう」

もう男でいいや。

「……その時は、ばちゃん、だ」

「ひiiiiiiiiiiiiii!!」

「ば、ばちゃん？」

隣にいる黒谷さんはその言葉を聞いた瞬間、うずくまって震えてしまう。一体何が起ると言うのだ。すごい気になる。

「そうだ。そうなりたくなければこの村の掟に従うことだ」

「は、はあ……」

よく分からないけど、目立った行動をしなければ大丈夫だろう。

「ヤマメ」

「はははい何でしょうか村長様まま」

「この男はお前が連れて来たんだ。最後まで面倒を見てやれ」

「はいいい！ 了解です！」

話し終えた老婆　村長らしい　は振り返り、村の中に戻って行った。それにつられるようにギャラー達もそれぞれの家に戻る。若者の一人が「ヤマメに手を出したらただじゃ置かねえ」と言っていたが私は女だ。

集まっていた人達がいなくなり、残されたのは私と黒谷さんと門番二人。嵐が通り過ぎたような静寂さが訪れ、門番の前で二人して背伸びして落ち着く。

「さて」

脅威が去り自分を取り戻した黒谷さんが口を開く。

「じゃあ行こうか。私の家に」

空谷聲音、いそがしいです

「じゃあ行くのか。私の家に」

黒谷さんが私の手をとって握り締める。ここで握り返してしまつたら相手の思う壺だ。何かされるかもしれない。

「富山はそこまで私を拒むんだね。ならばこうだ」

「あ！ くら！」

黒谷さんは手を放し、私の腕にのしかかった。握り返さなかつたのが逆効果だつたようだ。密着度が半端無い状態であり、特に胸の辺りにある不要な肉塊が私の腕に当たつていて非常に腹が立つ。

「君が心を開いてくれるまで私はこうしているよ」

「駄目だよ！ 私は男だよ！？ そんなにくつついてたら危ないよ！？」

黒谷さんの呪縛から逃れるためとは言え、ついに自分で自分を男だと言つてしまった。

「大丈夫だよ！ 君みたいな美少年は大観迎だよ！ だけど富山って本当は女だよね」

この言葉が私の心を震わせた。

この人は、良い人だ。私の性

別を間違えない人は、心が純水のように透き通っていて、素直に生きてきた人に違いない。黒谷さんはそういう種類の人だ。

「ああ！ ヤマメは良い人だね！ ヤマメは信用に出来る人だ！」

そんな黒谷さんに敬意を表し、呼び方を黒谷さんからヤマメに変える。

「ありがとう富山！ でも本名を覚えてくれない当たりに未だ隔たりを感じるよ」

それはそうだ。純水は透き通ってはいるが、飲んだらお腹を壊してしまう危険物だ。よって本名を教えるのはまだ危険な段階だと考える。当分私の名前は富山柴左衛門で通すつもりである。

「じゃあ富山、帰ってゆつくりしようよ」

「宿はどこかに無いの？」

「何を言っているんだ。私の家に泊まればいいじゃないか」

「いやいやそれは悪いよ」

「遠慮しないで。少し埃つぽいけど居心地がいい家だから」

「本音を言っと私を襲った犯人と一緒に過ごしたくない」

「うつ……。それはごめん……。じゃあそのお詫びも兼ねるから家に泊まってよ」

「狩りを忘れて住民の期待を裏切るような人とはねえ」

「それは関係無いから家に泊ってよ」

「埃まみれな家に行くのはねえ」

「ちゃんと掃除するから家に泊ってよ」

「むしろ髪型がお団子の人と一緒に嫌だねえ」

「何としても断わりたいたいだね！ おだんごって何？」

「お団子って言うのは丸くて甘くてもちもちした食べ物。そんな人

「はちょっと……」

「美味しそうだねえ！ そんな美味しそうな私となら一緒にでもいいでしょ！」

「いや、もしかしたら次の日ヤマメの家が埋まるかもしれないし」

「埋まんないよ！ もうこうなったら強制連行だ！」

「うわっ！」

ヤマメは私を軽々と担ぎ上げる。私はじたばたと抵抗を試みるが、すっかり腹の部分を持たれているので、手足は空を切るばかりだ。私の負け、完敗である。

「さあこれで文句は言えまい。家に行くよ」

「実際そんな嫌でも無いんだけどね」

「いいさ。楽しかったから」

「……自分で歩くよ。下ろして」

「それは出来ない」

夜空に浮かぶやや欠けた月の下、ヤマメと担がれた私は村に入る。村には簡素な家々が乱雑に立ち並んでいる。それぞれ入り口の向きがバラバラで、何も考えずに掘った建てた印象を受ける。さらに家の周りには、斧鋤槍剣弓棒などなど、物騒な物が沢山置いてある。狩りに使うには種類が多過ぎる。

そんな不可思議な光景にキョロキョロする私を見て、ヤマメは声をかける。

「この村は他の所と雰囲気が違うだろうか？」

「うん。何と云うか、汚いね」

「汚いとまで言われるとは思ってなかったよ。でもまあ、あながち嘘でもないか」

「本当に汚いね。塵一つ残らず消し去りたい位だ」

「そんなに言われると富山を投げ飛ばしたくなるよ」

「なんでこんなに汚いの？」

「そうだね……。まず、こんなに武器が多い理由は何だと思っ？」

質問に質問で返される。

武器が多い理由と言ったら、やはり戦うためでしかないだろう。

村人全員武器収集が趣味とは考えられないし。

「誰かと戦うの？」

「うん。少しワケありでね、時々大勢の人達がこの村を滅ぼそうとしてやって来るんだ」

「こんな小さな村に？」

「小さいけど向こうの人にとっては邪魔なんだろうさ。でも、この村の人達は元々、その人達の街に住んでいたんだよ」

「そうなの？　じゃあ何でこんな村に？」

「追い出された……。いや、皆で逃げて来たんだ」

ヤマメの声のトーンが下がりつつある。あまり気分が良い話ではなさそうだ。

「街で色々とあってね。それはここで話すような事じゃないから追々」

「こんな状態だもんね」

担ぐヤマメと担がれる私のふざけた図では、真面目な話も価値が下がってしまう。

「話がずれたね。村がこんな不思議な構造をしている理由は、街の人が攻めて来る時の為なんだ」

「戦う為か」

「うん。それもああるけど一番の理由は逃げる為だね」

「こんな小さな村の人口じゃ勝てないか」

「一応だけど応戦もするよ。入り口が襲撃の方向を向いてる家がその時の応戦係になるのさ」

「混乱しそうだね。人が動く方向がバラバラだから」

「長年この体系でやってるから皆慣れてるよ」

小規模集団だからこそ可能な事なのだろう。普段から意思疎通がなされていて、役割分担がしっかりと決まっている。義務という事務的拘束ではなく、絆という心の拘束をする事により、不平不満を言ってサボる人を出さないのである。

「なるほどね」

「襲撃が無ければ全てが丸く収まるのに」

「無くせないの？」

「無理だね。向こうは数が多過ぎるから全滅は狙えないし、目的もハッキリしているから諦める見込みも無い」

「最悪な条件だね」

「ああ最悪さ。私達は向こうが自滅するのを待つしか方法が無いんだ」

大分空気が悪くなった所で、ヤマメはある家の前で立ち止まり、私を下ろす。

「富山、ここが私の家だよ。辛気臭い話をしてごめんよ。もう遅いけど、夕食をとって寝ようじゃないか待って、どこに行く気？」

下ろしてもらって体が自由になった私は逃げようとしたのだが、服を掴まれて再び身動きがとれなくなる。

「いや、向こうに家があったから」

「目の前にもあるよね。私の家が」

「あ、あれ」

「え？」

「月」

「そうだねえ逃げ出そうだったって無駄だよ」

服を掴まれたままで走れなかった。

「ほらヤマメ、さいしょはグー！」

「え」

「じゃんけんぽん！」

「わ！」

不意打ちじゃんけんに、ヤマメは思わずパーを出す。対して私はチヨキ。私の勝利だ。

しかし勝負の行方などには最初から気にしていない。真の目的は、ヤマメの手をどけ、かつ注意を逸らす所にある。

「ああ負けた……っておい！　こら！　逃げるな！」

「さらば！」

ヤマメと私の追いかけっこが始まった。

.....

「……ふう」

ヤマメと走り回りながらこの村の地理を確認し、一周してヤマメの家の前まで来た。大きいとは言い難い規模の村なので、方向音痴な私と言えど迷わなかった。

私が巧みに動いたおかげで、何とかヤマメを撒くことが出来た。奴は今頃私を探して見当違いの方向を歩いているのだろう。

「さて、入るか」

ヤマメと適度なコミュニケーションをとれたので満足。大分私の心もほぐれた。これで人の家にお泊まりしても正気を保っていられるね。

私は主が不在の家の戸を開け、習慣的に邪魔しますと言って中に入る。中は真っ暗で、月明かりでかるうじて見える位。こんな暗い所で待っているのも癪に障るので、真ん中に掘られている囲炉裏のような窪みに、近くにある薪を放り込んで能力で火を点けた。

「うわっ汚っ！ これはまるで！ 十年間ゴミを捨てずに家に溜め込んである日それは間違っていると気付き、溜まったゴミを捨てようとするが長年放置して脆くなって穴が空いてしまったゴミ袋から紙くずやら消しゴムのかすがこぼれつつも、何とか全てのゴミを撤去したんだけど床には例のくずが散乱していて嫌になる……。まさにそんな汚さだ！」

分かりにくい例を出し、私はこの家の掃除を決心する。こんな所で一夜を明かすなんて嫌だからね！ いくら洞窟生活や野宿を続けてきたとは言っても、その地面はこんなにくずだらけじゃなかったよ！

目標はヤマメが帰って来るまでに終わらせる事。掃除用具は備わ

つていないので、そこらへんに脱ぎ捨てられているヤマメの下着らしきモノを雑巾代わりにしてやる。他人の下着なんて触りたくもないが、他に丁度良い大きさの布は落ちていないし、雑巾として使うモノならば汚くたって気にならない。だってこれからもっと汚れるんだもんねふふふ。

「掃除なんて久しぶりだー」

実に二十年振りである。これだけを見ると生活能力が皆無な人に見えるが違う。二十年間各地を転々としていたから掃除をする機会に出会えなかっただけだ。むしろ生活能力マックスのホームレス……じゃなくて、サバイバルの達人と言って欲しい。か弱き18歳（二十年前も18歳）が持つような称号じゃないね。

確か、最後に掃除をしたのは守矢神社を出る前日、頼んでもいないのにくれた自分の部屋で、だ。

「水とバケツ……」

掃除用具が無い家にそんな気の利いた物なんてある筈もない。足元に転がってるどんぶりで代用だ。

水は台所らしき所に溜めてあり、それをどんぶりですくう。それを床に置き、拾っておいた例の布を浸してからよく絞る。家主じゃない人が水の入ったどんぶりに下着を入れている光景は、何てシュールなのだろう。

さて雑巾がけをやるぞーと張り切ったが、床には大きなゴミが多いことに気付く。先にホウキでそれらを集めて置かなければ。

「そんなもん無いよなー」

辺りを見回すと、なんと整地するアレが立てかけてあるではないか。アレとヤマメが脱ぎ捨てた服を組み合わせればあら不思議。モップのような物が完成。こういった所で私のサバイバル能力が生かされてくるのだ。

早速それを使い、六畳位の部屋を片っ端から浄化。今まで見た事が無い大きさの埃や様々な物体が集まった。これで雑巾がけに移れる。

雑巾を手にとり、隅っこを重点的に丹念に拭き進める。壁際を一往復しただけで真っ黒だ。汚過ぎ。

そして拭き掃除をする事約一時間。今風に言うところ半刻。ヤマメが帰って来ないのが気になるが、一通り終わった。床だけではなく壁も洗浄して、居心地は悪くない程度になった。それでもさっきまで汚かったのが嘘みたいな仕上がりがだ。ビフォーアフターで見比べてみたいね。

即席モップは分解して元あった所に戻し、ヤマメの雑巾したぎはご愁傷様です。

やる事を終え、生まれ変わった床に寝っ転がってヤマメを待つことにする。する事が無いので、今日一日の行動を振り返ってみる。

「……あれ？ 私は何をしに山を出たんだっけ……？」

少なくとも掃除をする為ではない。私の妖力を増やす為に人間を脅かしに来たのだ。

「そうだ。丁度村にも来れたし、明日やってみようかな……」

こうして寝っ転がっていると、瞼が重くなる。ヤマメに悪いけど先に寝ちゃおうかな……火、消さなきゃな……と、遠くなりつつあ

る意識で考えていると、この家に近付く者の気配を感じる。終に奴が帰って来たのか。

「……おつかしいな。本当に逃げちゃったのかな……。もしかしたら村の外で妖怪に……？ でも富山も夜が危険なコト位は分かっているよね……」

外からぶつぶつぶつぶつと一人言が聞こえて来る。

「……この村に宿は無いし……って、どうして明かりが点いてるん？ 泥棒？ 火事？ 何なの？ 恐っ」

自宅の入り口の前に立ったたであるうヤマメは、家の外からでも分かる第一の怪奇現象『知らない間に明かりがつ』に遭遇して、頭を悩ませている。

そして恐る恐る中の様子を確認しようとしているのだろう、入り口の引き戸が静かに音を立てている。

「この際一気に開けちゃおうか……。でも……。いや、開けちゃえっ！」

相変わらず丸聞こえな一人言が終わった途端に、戸が全て開かれる。

「……は？」

「おかえりー」

第二の怪奇現象『家がキレイにつ』と第三の怪奇現象『探し人がそこにっ』に同時に遭遇したヤマメは、口を開けっ放しにしながらその場で硬直してしまふ。人って本当に訳が分からないところなる

んだね。

「……………おじやましたー」

この状況を処理し切れなかったヤマメは、ここを自分の家じゃないと思うようにしたようだ。そのまま戸を閉めて行ってしまった。

「なんでやねんっ！！！！」

と思つたら、窓から水平に飛び込んで来やがった。昔の家だから良いものの、ガラスが取り付けられていたらまた掃除しなければならなかった。

ヤマメは飛び込んだ勢いで床を滑り、起き上がった私の前で止まった。

「おかえりー」

「ただいまーなんでやねんっ！！！！」

帰って早々ハイテンションだなあ。

「ここはどこ！？ アナタハダレ！？」

「ここは黒谷ヤマメさんの家で、私は木葉緑と申す者です」

「嘘だ！ 私の家はこんなにキレイじゃないし、アナタは富山柴左衛門でしょっ！」

せつかく本名を教えてあげたのに否定された。

「あ、掃除しといたから」

「何でそういうことするん！？」

「善意に満ち溢れた行動なのさ」

「うわその勝ち誇ったような顔が憎たらしい！」
「でさあ、ここって夜ごはんはしない文化？」
「するよ！ ずっと富山を探してたんでしようが！」
「そうか。じゃあほら、席つてよ」
「何も無かったように振舞わないでくれないかねえ!？」
「実際何も無かったし……」
「私は大ありだよ!!」

ヤマメの声が裏返っている。合唱コンクールにでも出るのだろうか。

「この家には掃除用具が無いからねえ。他の物で済ませたよ」
「その見覚えのある黒い塊は何だろうねえ！」
「あ、それは……。何と言うか……。ご冥福をお祈りいたします」
「私のし・た・ぎじゃないか!？ ねえどうしてこうなった!??？」
「この家の秩序と引き換えに、その尊い命は犠牲となったのです」
「嗚呼その悟ったような顔が腹立たしい！」
「んで、何食べるの?」
「待ってその手に持ったどんぶりは何かなあ!？」

汚れきった水が入ってたどんぶりを洗うのを忘れてた。

「バケツ代わりに使われて頂きました」
「そんなのをこれから使う気なのかなあ!？」
「だいじょーぶだいじょーぶ」
「うんんんん? その発想はどこから来ているの!??」
「あ、ヤマメの服もたんで置いといたから」
「ねえねえその服すっごい埃だらけなんだけど!？ どうしてかおねーさんに教えてくれない!??」

「うーん……。整地するアレって便利だよね」

「一体何をした」

「サバイバルだ」

「もう意味が分からない!!」

こんなにも分かりやすいヒントを出したのに混乱するヤマメ。きつと国語が苦手なのだろう。

「あー！ー！ー！ー！ー！ あー！たー！まー！がー！ 部屋が、

キレイな部屋が私に襲い掛かってくる！ー！ー！」

「そんな事より夜ごはん」

「富山が一人富山が二人富山が四人富山が八人富山が十六人ンンン」

私は分裂する生物だったのか。

「ヤマメ、大丈夫？」

「いとうつくしうてあたり！」

「無理しないで寝なよ。夜ごはんは我慢するから」

「すももももももももももももももももものうちィ……」

その言葉を最後に、ヤマメは深い眠りに堕ちた。

.....

夜に何も食べていないと朝が辛い。空腹に耐え切れずに早く起き

てしまった。その点ヤマメはスゴイ。まるで死んでいるかのように眠っている。昨日よつぼど疲れるような事があったのだろう。

ならば今、私がしてあげられる事は一つ。スタミナ満点の朝食を作ってあげる事だ。

「よいしょ」

「動くな」

立ち上がるうとするや背後から声。

「もうやめて。これ以上私の家を改造しないで」

声の主は、死んだはずのヤマメであった。安心して後ろを向くと、目に生気が宿っていないく、幽霊みたいなヤマメの姿があった。

「ごはんだね。ごはんが欲しいんだね。マッテ、今用意スルカラ…」

「私がヤマメに作ってあげようと思ったのに」

ヤマメは死人みたいに立ち上がり、台所に向かう。

「危ない！」

私の警告は意味をなさず、フラフラと歩いていたヤマメは途中の段差に気付かず転んでしまった。

「……わ、私は何を……？」

起き上がったヤマメは何が起きたのかが分かっていない様子で辺りを見回す。その目には、すっかり生気が宿っていた。

「あ、富山、おはよう」

「お、おはよう」

「何で私はこんな所で寝てたの？」

「自分で歩いてたじゃん」

「ええー、そんな記憶ないぞー」

「今さっきの事だよ？ 覚えてないの？」

「私はずっと寝てたよ。富山が見間違えているだけじゃないかい？」

「そんな筈ない。ヤマメ喋ってたし」

「まさか。寝ボケてんじゃないの？」

「……………」

すげー。ヤマメは一連の行動を無意識でやっていたようだ。夢遊病者の素質があるね。

「富山ってすぐにここを発つつもりかい？」

「あー、どうしよう」

別に留ってもさよならしてもどちらでも良いけど、もしここを離れたら次に人里を見つけないか分からない。人を脅かすという目的はここでも達成出来る。あ、でもこの村の住人達が皆妖怪とか神とかだったら無理かも。

「ヤマメヤマメ。こんな事は絶対無いと思うけど、ここは妖怪の村とかじゃないよね」

「……………うん。そんな事無いよ。……………多分」

自信が持てない様子で呟くヤマメ。

「……………私は自分達が人間であると思ってるけど、街の人々がねえ」

「そこは自信を持つとつよ！」

「でも……。富山はこの村が何て呼ばれてると思っ？」

「埃村」

「それは私の家だけだよ。今はもう変わり果てた姿になってるけどね……」

「埃村じゃなかったら他に何かあると」

一拍置いて、ヤマメはハッキリと告げる。

「土蜘蛛の巣。……まるで人間扱いされてないよね」

その言葉に私が反応する前にヤマメは立ち上がり、朝ごはんにしようと言って台所の方を向いてしまう。もうこれ以上は話したくないようだ。

自分が自分であるという認識をする方法は一つじゃない。自分から見た自分と他人から見た自分。前者は自分が思った通りに形を変えられることが出来るが、後者は変えにくい。一度そういった認識をされてしまえば、これからずっと「土蜘蛛」で通されるのだ。

自分一人で人間だと主張するのと、大勢の他人に土蜘蛛だと言われるのは、どちらが力を持っているか。

そこまで考えた所で、ヤマメにストップをかけられる。

「難しい顔してないで、笑え」

「うん？ あ、や、そこは触らないで！ うひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃー」

ヤマメが思いっきり私をくすぐってくる。転がって逃げ回るが、ヤマメが執拗に追いかけるので地獄が終わらない。

三十秒程続いて私が半泣きになった所でやっと解放される。

「はぁ……………はぁ……………もう、ダメ」

「朝ごはんは楽しく食べよう！」

「……………はひ」

もうさっきの事を考える気力は残ってなかった。

空谷聖音、いそがしいです(後書き)

秋姉妹的師走

「静葉です！」

「穰子です！」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………12月」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………予言を終わるわ」

「……………何も喋らなかつたね」

人間版黒谷さんのターンです。

粟散辺士、こわかったです

ヤマメが作った朝ごはんを完食し、今日は人を驚かしてみようと
思い入り口の引き戸に手をかける。と、洗い物をしているヤマメに
気付かれた。

「富山、どこに行く気？」

「ちよつとスパイダー達と戯れようと」

「すばいだー？」

昨日覚えたばかりの土蜘蛛という、この村の通り名を使ってみた。
一応これは蔑称に当たるかもしれないので、英語で言ってみた。

今の時代の人間が蜘蛛スパイダーという英語を知っている訳がないから、堂
々と言えないことを言いたい時に便利。だったら最初から言わなき
やいいじゃんという意見が出そうだがそれは却下だ。思い付いたら
言わないともやもやする。

「じゃ、さよーなら」

「暗くなる前に帰るんだよ。……すばいだーってなんだ？」

外に出る私の背後で、ヤマメは見送りの言葉を発する。当たり前
のように帰って来いと言ったが、ヤマメは昨日私を殺そうと襲い掛
かった人であって、たったそれだけの仲でしかないと思うのだが。

しかし今日の宿が確定しているのは良いことだ。遠慮なく居座ら
せてもらおう。

さて村人探した。左右には狭い道が通っており、それを挟んだ前方には民家の壁が見える。見える範囲に村人がいないので適当にぶらついてみるか。

家が何の規則性もなく並んでいる為、狭い道には曲がり角が数多くある。そのため道を通るといふよりは、家と家の間のスペースをくぐり抜けているような気持ちになる。

そんな道を自由気ままに進んでいると、第一村人発見。角刈りの青年だ。角度が90度未満の鋭い角刈りだ。後頭部が「て」みたいな形になっているよ。

相手にバレないように、足音を立てずにそっと近付く。

「よし。昨日狩りに行って獣を獲るのを忘れてしまった黒谷ヤマメさんが、罰として三日間連続で狩りに行けと村長に言い付けられたから、今日当番に当たってた俺は狩りに出なくてすむぞー」

青年は妙に説明口調なひとりごとを言っていて、私が接近しているのに気付かない。

チャンスだ。私は青年の背後に立ち、静かに深呼吸をする。

「……わっ！」

「わっ！ 後ろからいきなり声が出て俺はすごく驚いた！ 後ろを振り返ってみるとそこには昨日黒谷ヤマメさんが連れてきた少年が！」

青年は驚いているらしいが、説明口調のおかげで全然そう見えな。次行こう。一つ一つに一喜一憂したら身が持たない。大妖怪になるためにはコツコツやるのが大事なんだ。

「あ！ 少年が何も言わずに走ってどこかに行ってしまったぞ。一体何がしたかったのだらう。さて、今日は寝癖がひど過ぎるから散髪でもしてこよう」

私が逃げ出しても、相変わらずひとりごとを言っているのが聞こえた。

ある程度走ってから歩きに戻り、誰にも会わないまま村の入り口に来てしまった。

ここで第二村人発見。金髪を黒いリボンでお団子にした少女、すなわちヤマメだ。村の外に向かってヤマメは歩いているので、私に背中を向けている。これから狩りに行くのだらうが、その前に私はヤマメを狩らせてもらおう。

ある程度小走りで近付いてから、忍び足でヤマメの背後にぴったり貼り付く。あとは驚かすだけだ。

「……わっ！」

「っっ！」

私が驚かした直後、ヤマメは振り返ることなく肘で私の横腹を突き、「うっ」と言って私がひるんでいる隙に私の背後に回って羽交い絞めをし、私の喉元に刃物をあてる。すべてが一瞬の出来事だった。

「ひい……！」

死が身近なものになり、思わず変な声が出てしまう。漫画とかでこういった人を見た時、小物臭がするなーと思っていたのを思い出

した。

「お、おたすけー！」

「……あ、なんだ富山か」

私の命乞いを聞きとったヤマメは、自分がなんて事をしているかに気付いたようだ。

ヤマメは私を解放することなく、一層体を強張らせた。……なん
で？

「よくもびつくりさせてくれたね！ 昨日の恨みと一緒に倍返しだ
！」

「なんですと！」

瞬間、ヤマメは刃物で私の喉をプスリと、躊躇なく刺した。

「ぐはあっ！ 血が！ 血がすごい出てきた！」

「大丈夫大丈夫。あと二時間は生きられるよ」

「余命短いよ！ 驚かしただけで死刑なんてひどい！」

「それだけじゃないでしょ。富山は私の聖域（トキヤウ）を穢（ケガレ）した。そう考える
とこれは当然の報いだと思わない？」

「思わないよ！ 穢（ケガレ）したんじゃないじゃなくてむしろ浄化したし！」

「どちらにせよ、長生きしたかったらこれ以上喋らないことだね」

「気付いたら地面が殺人現場みたいな状態に！ というかこれは本
当に殺人事件だし！」

「そうだ、私はこれから狩りだから、富山が帰っても私はまだいな
いかもしれないね。もし富山が先だったら……家ヲコレ以上荒ラス
ナヨ」

「もっこりごりだよ！ ……うああ」

首を押さえて倒れ込む私を介抱することなく、ヤマメは私の血が付いた刃物をゆっくりゆっくり拭き取ってから、村を出て行ってしまった。だれか助けて！。

「あー、やっと止まった」

気合で止血した。誰も助けしてくれないんだもん。すぐその入り口にいる門番さん二人は、うずくまる私をすげー見てくるだけだった。こいつらといいヤマメといいひどい人間ばかりだね！

でも驚かすのはここでやめる訳にはいかない。強くなる為にはこいつら地道な努力の積み重ねが重要なのだ。きつと。

何とか立ち上がると、血が足りないせいで少しくらくらする。でも能力使用時の副作用のおかげで、そんな状態に慣れている自分がいる。

足下には惨劇の真つ赤な爪痕が。嫌だこんな村の入り口。まあこうなったのはヤマメが私を刺したからであって、私自身は何も悪くないからこのままでいいや。

次の村人はどこにいるのだろう。ただ待っていても、誰かが私を見ないように後ろを向きながら歩いて来る、なんて事はある訳がないので、ふらふらと危ない足取りで歩き始める。

しかし朝早いからか、活気が全く無いね。遠くに見える長い白髪の老人一人しかいない。……ターゲット発見だ。

瞬時に忍び寄り、本日三回目の不意打ち。

「わっ！」

と、老人の背中に声を投げつけてあげたと思ったら、老人がいるはずの場所には誰もいなかった。

「あれー？ どこ行っただー？」

(ゴゴゴゴゴゴ)

確かに老人はいたのに。左右を見回しても何も無い。

「……………もしかして、幽霊？」

(ゴゴゴゴゴゴ)

消える老人と言ったら、これしか考えられない。

「大昔にもユーレイって、いたんだねえ」

(ゴゴゴゴゴゴ)

妖怪の私が言えた事じゃないが。って言うかさっきから後ろでゴゴゴゴ鳴っている気がするけど何なの？

「……………」(ゴゴゴゴゴゴ)

「うわっ！」

振り向いて見ると、驚かした筈の老人が青筋を立てながら腕を組んで立っていた。昨夜村に入る時に話した村長だった。

風も吹いていないのに長い白髪がなびいていて、村長より向こう

側の景色は、陽炎のようにぼやけている。そんな不可解な現象を引き起こしている村長が、私の後ろでゴゴゴゴしていたのだ。

「……………妙な真似をしたら、ばちゃん」

「……………そ、それは…………？」

ヤマメがそれを聞いた瞬間、途轍もなく怖がっていた刑。これから私はどうなってしまうの。

「初犯は三日。さあ逝け」

そんな村長の声が聞こえた時、本体は再び私の視界から消えていた。私がそれに反応する間も無く当て身をされていて、私は意識を手放してしまった。

……………村長って、人間？

……………

目覚めた。……………目覚めたのか？
一応目を開けたつもりだが、閉じている時と見えるものは変わらない。つまり真っ暗である。音も聞こえない。そんな状況に、自分は本当に起きているのかという疑問が浮かんでしまう。

段々意識がはっきりし、自分は起きているのだと思い込むことにする。とりあえず明かりが欲しい。私には『等価交換する程度の能力』があるので、それを使って慣れ親しんだ現象操作をする。

「妖力で火！」

詠唱短縮してしまう程慣れてきているのだ。イメージすれば能力は発動するから、別に詠唱は必要ないけどね。

「……………ん？」

何も起きない。そんなのあり得ないと思い、もう一度試してみるのが、やはり何も起きない。まだよく感じ取ることができない妖力だが、それが出て行っている気が全くしないのだ。いつもは一瞬だけ、ほんの少し空気が変わる感じがあるのに。

妖力以外を対価にしても駄目だったので、能力自体が不思議な力でかき消されているような印象も受ける。詰んでるね。

「……………ここはどこなの……………」

心の準備も何もない状態で、能力が使えない真つ暗闇に一人残されている私。何もなくても、いや、何もしないからこそ、不安な気持ちが芽生えてくる。

心細さに体育座りしそうになるが、そこは堪えてまずは手探りでこの場所の地形を調べることにする。動いてないと思いがどんどん悪い方向に突っ走って行きそうで怖いんだよ。

「……………つるつる、つめたい、かたい」

手始めに自分が座っている床をぺたぺた。摩擦は発生しているの
で氷ではない。鉄かガラスか磨き上げた石か、それともニスのようなものが塗られた木か。叩いてみても床の材質の密度が高過ぎて音が帰って来ないので、判断できない。

ハイハイをして少し進むと床の材質が変わった。動物の毛のような長く、ぱさぱさした繊維の感触だ。糸を編んで作った人工の絨毯と言われればそうかも知れないし、動物の毛皮と言われればそれも納得できる。

ああ分かんない明かりが欲しー、と頭を掻く。

……頭にやった手から、自分が今いる絨毯と同じ感触が。

「あぁっつ！……！」

えも言われぬ不安に駆られ、情けない声を出して飛び退いてしま
う。

（気のせいだ気のせいだあれは人の髪なんかじゃない動物の毛皮な
んだ絶対そうだ）

心の中で自分に言い聞かせて早く忘れるようにする。

何も見えないこの空間で頼れるものは、聴覚触覚嗅覚味覚の四種
類。

そんな言葉が浮かんでくると、今まで気にしていなかった事に気
付く。

（……手から香のにおい……！？）

絨毯についていた手から微かに香のにおいがするのだ。昔の人はお風呂に入れない代わりに香を焚いて体臭をごまかしたって……雑学を思い出す。

ならばあの絨毯はやはり人毛で……？

そ、そんな訳ない。香を焚くのは一部の貴族であって土蜘蛛の巣と言われているこの村にそんな金持ちなどいる筈もなくてあれはきつと花の匂いが偶然付いた動物の毛皮であって！

……では何故、ここに動物の毛皮が置かれているのだろうか。

ここが倉庫だとすると納得が行く。倉庫なら真っ暗であっても毛皮が落ちていても何ら不思議は無い。持ち主が、恐らくあの村長が気に入った毛皮をしまっただけなのだ。

この場所の正体が分かればもう安心だ。深呼吸をすると、胸の辺りでごろごろしていた冷たい物が溶けていく感じがする。寄りかかる所を探して、出してもらえるまでゆっくり落ち着こう。

立ち上がり、真っ直ぐ歩く。

たまに、ぐちゃぐちゃと液体っぽい、だが芯があるモノを踏んで
いるのは気のせいだろうか。

可笑しな倉庫だ。毛皮とかスライム(?)とかが無造作に置かれて
いるなんて。それに適当に歩いているのに全然大きなモノにぶつ
からない。すごく広い倉庫なんだな！。

……………毛皮と、ぐちゃぐちゃしたモノ。それ以外には、何も無
い空間。変な、倉庫だね。

……………それって倉庫なのか？

もう駄目だ。一度疑問を持つと思考が止まらない。

香のにおいがする毛皮と、芯があり、かつ水分を多く含んでいる
モノ。この二つが組み合わさってできる『モノ』って……………。

そんな『モノ』達が放置されている所にいる私って……………。これか
ら私はどうなってしまうの。

うう、涙が出てきた。

……………

どの位まるくなっていただろうか。

一切の感覚を封じ、体育座りをより固くした体勢ですつと転がっていた。勿論、『毛皮』も『スライム』も無い、硬い床があるエリアで。

感覚を封じると同時に、思考も封じた。あれ以上考えていたら私は壊れてしまう。なので今の私はまるく、抜け殻のような生き物だ。

抜け殻とは言っても、生命活動は通常運行している。すると、お腹がへるのだ。水も欲しい。

腹時計を覗き見てみる。ある程度空いた状態になると、逆に空かなくなるといふ現象が起きている。それから予測するに、少なくとも一日は過ぎているんじゃないか。

極度の緊張で、腹時計さんがバグってるかもしれないので、全く頼りにならない。まだ一時間しか経っていない可能性だって否定できない。

そう言えば、「初犯は三日」って村長が言った気がする。

「……………!!」

噂をすれば何とやらという言葉が当てはまるかどうか分からないが、どこか外側からガチャリ、と音がしたような気がする。

「……………うっ!」

間もなく前方から木が軋む音と共に光が差し込む。久しぶりの光で目が開けられない。

「三日経ったぞ。出な」

もうそんなに経っていたんだ。

次第に目が慣れ、声の主が認識できるようなる。例の村長だった。

「ほら早く立ちな。それともまだここに居たいのかい」

慌てて立ち上がる。しかし三日間固まっていた私の足は言うことを聞かない。一步を踏み出そうとしたが足が上がらず、こけてしまった。

倒れる私の眼前には、

「……………柄付きスポンジ？」

手を伸ばして触ってみると水分をたっぷり含んでいるのが分かった。

これを踏んだ時にグチャグチャ鳴ってたのだろう。

「は、はははは……………」

私は一体何を怖がっていたのだろう。まさかこんなものに怖気付いていたとは。

うん。暗所恐怖症になりそう。

不安も一気に解消され、気分を新たにする。

のっそりと立ち上がり、村長の立つ所を目指してぞんび歩きをする。こんな醜態誰にも見せたくないものだが、何しろ体力が尽きているのでどうしようもない。

「やつれたなあ……………。これに懲りたら、もう馬鹿な真似はしないこ

とだ」

村長の元にたどり着くと、村長が私の顔を見て言った。
馬鹿な真似つて。……驚かそうとしただけじゃん。

「さあ、早くヤマメの家に帰ってやりな。お前を待っている筈だ」
村長が私の背中を叩いて送り出してくれた。
厳しいけど、人情がある人だな、と思った。

「あ！ 富山！」

歩いて直ぐの所にヤマメがいた。その名を呼ばれるのも久しぶりだ。そろそろ本名を教えた方が良さだろうか。

(……！ 駄目だ駄目だ！)

暗闇の中での三日間で、私の心が弱り過ぎている。こんな状態じゃ自然界でこの先生きのこれないぞ。

(……この先生、きのこる。ふふ、ふふふふ)

使い古されたネタが頭をよぎってしまった。

「富山ー！ どうしたー！ 壊れちゃったかー!？」

ヤマメを一瞬見たと思ったら、うつむいて静かに笑う私。自分では分からないが、外見はやつれているらしい。こんな私は、向こう

からしてみれば奇怪な風に写るに違いない。

「富山！ しっかりして！ 自分を取り戻して！」

「うううううう」

ヤマメが私の前まで小走りで寄り、すごい勢いで肩をゆさぶってくる。こういう時ってなんか声を出したくなるんだよね。

「目が虚ろだよ！ そんなに怖かったの！？ ……泣いても、いいんだよ」

いきなり深刻な喋り方になり、両手を広げるヤマメ。抱きついて泣けることか。

「……………」

「あれ？ 富山！ なんて行っちゃうの！？ おねーさんのお胸に飛び込んでおいでよ！」

「嫌みか団子！」

「富山がぐれてる！ これは更生しなきゃいけないね。帰って教育的指導だね。私は不良には容赦しないよ！」

三日振りのヤマメは、非常にうっとおしかった。

……………

「怖かっただろう、ばちよん」

横でうるさく動くヤマメを適当にあしらって家に帰る。家主の前を歩いているのは可笑しな話だが、優しいヤマメのことだから気にする程でもないだろう。

そして今は、心の調子を整えたり三日振りの食事をとったりして、一段落ついた所である。

「『ばちよん』って、名前だけ聞くと間抜けな感じがするのに……」

「私も一回入ったことがあるんだけどね、気が狂いそうだった」

「ただ放置されてるだけなのにねえ」

「人間見えないものには恐れが生まれるってことが、よく分かったよね」

目に見えないものは、その存在の影響というものが把握できず、人に何らかの感情を抱かせる。それは恐怖という形で人を襲っているかもしれないし、逆に信仰という形で人を救っているかもしれない。

今回私が受けた罰は、恐怖という形を上手く利用したものだ。たかが柄付きスポンジでも、見えないだけで人の心を壊すことができるのだ。

そもそも私は人間の恐怖心を引き出すために、人里にやって来て何人かを驚かしたのである。しかし結果はこの通りで、恐怖を与えるところか与えられていた。柄付きスポンジに。

要するに妖怪である私は柄付きスポンジなんかに負けたのだ。奴はきつと良い妖怪になれるよ。私は……もう、駄目だ。

「ところでどうして富山はばちよんされたんだい？」

「村長の後ろから、その、わっ、て」

「私にしたことと同じことをしたんだね。いけないよ、この村の人

にそんな事しちや。皆急な襲撃に対応できるように訓練されているんだから」

「……反省した」

「村長はちよつとしたおふぎけなら笑って見てくれるけど、殺しに
応用できるような悪ふぎけにはうるさいよ」

「こ、殺し？　じゃあ、ヤマメは何をしてばちよんされたの？」

「ひざかつくんしてる所を村長に見られた」

「……………」

「……………」

それって、殺しにつながるの……か……？

「判断基準がよく分からないね……………」

「いやあ、たぶん背後からのちよつかいは全部怒ると思う。立派な
不意打ちだし」

「そうですか……………」

基本的に、村長には近寄らない方がよさそうだ。

「もうばちよんはごめんだよ。あんな思いはしたくない」

「ばちよんを経験した富山は、前よりこの村に馴染んだ気がするよ」
「うん。私もこの村と距離が近付いた感じがする」

困難を乗り越える事で、その場所や、関係者への想いが深まる。

……………あれ、これって吊り橋効果じゃないか？

「それにしても、あれは卑怯だったね」

「あれ？」

「柄付きスポンジと、帰る時に確認できなかったけど毛みたいなもの
を組み合わせるなんて」

「毛みたいなもの？」

何を言ってるのか分からない、という目で私を見るヤマメ。

「死体が転がってるって思ったじゃないか」

「ちよつと待ってよ。あそこには柄付きスポンジしか入れてないって村長が言ってたぞ」

「……………え？」

粟散辺土、こわかったです（後書き）

秋姉妹的時間が経つの速くない？

「静葉です！」

「穰子です！」

「うおー！ー！ー！ー！ さ、む、いー！ー！ー！ー！」

「お姉ちゃんお姉ちゃん！ 雪降ってるよ雪！」

「なんですって！ これはもう、雪だるまを作ったり、かまくらを作ったりするしかないわね」

「なに言ってるのお姉ちゃん！ 雪といたら雪合戦でしょ！」

「そんな野蛮な遊び、私は好きじゃないわ」

「お姉ちゃん去年雪合戦大会で単独優勝してたよね！？」

「穰子、あれは避けられない、悲しい戦いだっただのよ」

「その割りにはお姉ちゃん気持ちいいぐらいの笑顔で雪玉なげたよね！？ 秋には見せなかつたようなすごい笑顔で！」

「穰子、あれが私の心からの笑みに見えたの？」

「見えたよ！ お姉ちゃんそれから一週間ずつとにやにやしてたし！」

「だって楽しかったんだもん！」

「やっと認めたね！」

「……そんなことより予言よ。穰子、ここは私の聖戦を話す場ではないのよ」

「強引に話を切り替えたね！」

「さて、村に来てから何の進歩もしない緑」

「いつもやられてばかりだよねー」

「このまま過ごしていてももちがあかないわね」

「行動あるのみだね！」

「かといって村の中は村長という名のモンスターがいるし」

「身動きがとれないね。でも、村が駄目ならフィールドにできればいいじゃない」

「緑は無事に目的を果たすことができるのか」

「……うわー。むりそー」

「しっ！ 本当のことでも口に出すんじゃないの！」

「……うん」

「……」

「……」

「……予言を終わるわ」

「……うん。……帰ってストーブの上でやきいも作る」

粟散辺士、旅行だそうです

「ねえねえ、街に行ってみたいなって思うんだけど」

村長に対する恐怖心からヤマメの家で目立たないように生活すること数日、暇すぎる。木の板で分厚いランプを作ってみただけヤマメが昼間は出かけていないので、一人で七並べするしかない。そんな光景を見たヤマメが、私に優しく笑いかけてきた記憶が妙に残っている。

これ以上ここで生活したら、どんどんかわいそうな子供になっていく気がする。この村はなるべく出歩きたくないから、他に思い付く場所を言ってみた。一人で旅立っても良いのだけれど、無計画で歩き回ると、次に人里を見つけれられるのが何十年後になるのか分からないので、ヤマメに聞くという安全ルートを選んだ。

「はあ！？ あそこは私達の敵しかないんだよ！？ 無理に決まってるじゃん！」

怒られた。

「……いや、でも、たまには潜入して情報を集めてくるっていうのも……」

と思つたら、一人でぶつぶつ喋り出した。

「……相手の戦力とか武器とか分かっていると便利だよな……」

「（あなたは街に行きたくなーる、あなたは街に行きたくなーる）」
迷っているようなので、耳元で応援してあげる。

「……村長に聞いてみようかな。それで駄目だったら諦めてもらおう……」

「聞くだけじゃない！ 説得するんだ！ そういう受け身の態度ばかりとつてると、将来自主性のない人間になってしまうぞ！」
「……？ 富山の言ってる事がよく分から……、ああ……」

何かに気付いた素振りを見せたヤマメは、にっこりと笑いかけてきた。良い笑顔だけど最近なんでそんな表情を向けてくるの？ まるで痛い子を見守っている時のような顔じゃないか。

「大丈夫だからね。時間がある時はちゃんと構ってあげるから、今はゆっくり心を落ち着かせるんだぞ」

やさしい声で喋りつつ、私の頭をなでてくる。どうして急にやさしくなったの？

「じゃあ私は村長の所に行ってくるからね」
「はい」

一人で七並べをする時間だね。

私は木製ランプを道具箱（ヤマメが作ってくれた）から取り出し、シャッフルを始める。

そんな私を、ヤマメは穏やかな、それでいて悲しみももったような表情で見届けて、出て行った。

.....

いつものように一人で遊び始める富山を見届けて、私は外に出た。富山はばちよんをされてから精神的に病んでしまったんだ。あれから富山は毎日毎日トランプとかいう積み木を並べるのに夢中になり、話したと思えばさっきのように意味不明で不安定な言動をとる。それだけ精神的な傷が深いんだろう。幸い暗闇を恐がるという症状は出なかったが、やはり日に日に心が荒れている気がする。真っ暗闇の中、薄笑いを浮かべながら黙々と積み木を並べる富山の姿を見た時は、流石の私でも涙を隠し切れなかった。

そんな富山に私がしなければならぬことは、ただ見守ってやることじゃない。もうそれだけでは取り返しのつかない状態だ。今は、富山が願ったことをどんな些細なものでも叶えてやって、心を満たさなければならぬ。

富山がこうなってしまったのも、元はと言えば私が獲物と間違えて切りかかってしまったのが原因だ。私がこの村に連れてこなければ、富山が病むことはなかったのだ。

そんな私は富山を最後まで面倒を見てやらねばならない。それはいつになるか予想もつかない。しかしこのまま捨てるというのは人間のすることじゃない。街の人間は、私達を土蜘蛛だと言って妖怪扱いをするが、私は人間だ。それは間違いない。人間を助けられる人間は、立派な人間じゃないか。

……一人になるとらしくないことを考えてしまっね。村長を探して歩いているのに、前が見えてないよ。

村長は家にいることが少なく、一日中どこかを歩いている。決ま

った順路はなく、用があるならあちこちを探し回らなければならぬ。しかも背後から話し掛けたらばちよんされるから、必ず正面から遭遇しなきゃいけない。まあ小さな村だから、どちらもそこまで苦じゃない。

と思つたら発見。ちゃんと前を向いてる。いやー良かった良かった。

「村長ー」

「ん、ヤマメか。どうした」

「相談があるんですけど」

「言ってみる。聞いてやるぜ」

「……富山が、街に行きたいと言つてたんですが、一緒に行つてもいいですか？ ほら、潜入捜査的な意味で」

「富山？ あの緑色をした少年か」

「そうです。この前の一件で精神的に参っちゃったみたいで」

「ほー。……良いんじゃないか？」

「え？」

「街に行つても良いんじゃないか、と言つた。もちろんヤマメも込みで」

「そ、そんなあっさりと……？」

「行つたとしてもどうせ何ともないだろ。向こうは我ら一人一人を土蜘蛛と見ているのではなく、この村の中にいる者のみをそう見るのだからな」

言われてみればそうだね。こつちだつて敵の顔を一人一人覚えてる訳じゃないし。

「せつかくの機会だ。敵地では難しいとは思つが、楽しんできたらどうだ。うまいもんでも食つて来い」

「あ、ありがとうございます?」

「土産も忘れるなよ。木刀とか木彫りの熊とかしーさーとかを期待しているからな」

「は、はい。それでは……」

街で売ってるのなんて、木刀ぐらいしかないと考えた。

あっさりとれた朗報を胸に家の戸を開けると、「最初から七が四枚ある!」と言って大声で笑う富山の姿があつた。私と同じ位の少女が、たかが積み木であそこまで笑えるなんて、ああ、なんて不憫な子なのだろう。もう見てらんない。五日使つて武器の整備をしてから街に行こうと思つたけど、それはやめにして明日すぐ出よう。

はやく富山が元気になつてくれないと、私まで病んでしまいそうだ。大きい人二人で黙々と積み木をしている光景は、なんともまあ奇天烈なものなのだろうか。そうならない為にも、一刻も早く富山に日常を取り戻してもらおう。

「富山、許可とれたよ……」

「え! とれたの!? じゃあ街に行けるんだね!」

「うん。明日にでも出ようかと思つてる。準備は……しなくて大丈夫」

「なんで断定?」

現実を失つてしまった富山に旅行の準備をさせるのは、荷が重過ぎる。だから富山には安静にしてもらつて、私一人で二人分の準備をしよう。

「富山は明日のためにもう寝るんだ。街までかなり歩くからね」

「いや寝ろつたつて、まだ午前だよ!？」

「富山、旅路を舐めちゃあいけないよ。寝られなくても目を閉じる真似ぐらいはしてみるもんだ。日々の疲れは意外としつこい」

「全く外に出ない日々はどこに疲れる要素がある?!? むしろ代謝を促進させるために軽い運動をするべきだと思うよ! ……まあ、怖いから外出たくないけど」

富山がよく分からないことを言い、また暴走し始めた。

「分かった、分かったから富山! 早く寝るんだ!」

「寝過ぎも体に毒だと思うよ! 血管が圧迫されて色々ごちゃごちゃするから!」

「富山、もういい……。君がそこまで頑張る必要はないんだ……!」

「全然頑張つてないよ! 自分の準備は自分ですよ! そうすることでホルモ的なものが分泌されて興奮が高まり、明日の旅行を一層楽しめるようになるかもしれないからね!」

「こ、興奮だなんて……、ああもう! 富山しねえ!」

いきなりとんでもない事を言い出す始末。私は富山を黙らせるために、常備している短剣で富山のおでこを突いた。

「ぎゃああああああああ! 血がああああああ………」

よし死んだ。これで今夜は平和に過ごせる。私の心を休める時間も、たまには必要だ。

.....

目を覚ました時にはもう、外が薄暗くなっていた。夕方まで気を失っていたのか、と思ったら、荷物の準備は整っているようだし隣でヤマメが寝ているので、夕方を通り越して朝方まで眠ってしまったのだと判断する。

それはすなわち、もうすぐ外に出られるということ。

「っ！」

言葉にならない感動が、私の中を駆け巡る。

長い、生活たたかいであった。

これで私は、自由に生きられる。

これまでの日々が思い返される。

ヤマメにもらった木の板でトランプを作り、一人で七並べをする日々。

ヤマメが妙にやさしく接してきて、身動きがとり辛かった日々
勝手に掃除しないよう釘を刺され、汚れ行く家をただ見守ることしかできなかつた日々。

ヤマメの言動につっこみを入れ過ぎると、刃物で襲われ、気絶する日々。

トランプ以外の事をしようとする、ヤマメに止められる日々。

ああ、私はヤマメに頼りきりだったんだ。

そんなにも、私の中でヤマメの存在は大きかったのか。

私は感謝をしなければならぬ。

大事に想って養ってくれたヤマメに。

最初に殺そうとしていた私に尽くしてくれるヤマメに。

天使のような微笑みを見せてくれるヤマメに。

不自由な生活をさせてくれるヤマメに。

私は怨を返さなくてはならない。

「ヤマメ、今までありがとう」

「おはよう富山。一体何をしようとしていたのかな」

寝ているヤマメの鼻に色々夢を詰め込もうとしたら、瞬間でうしろに回り込まれた。

「チッ……」

「その手に持っているおはしはなーんだ？」

「……夢、ですわーいいたいごめんなさい」

正直に答えたら固め技をされた。立っている状態で。

「富山はかわいいそうな子供だね」

「やめてそんな直接的な言葉」

「だから私は守ってあげたくなるんだよ」

ヤマメは締める力を強める。

「わ、わかつてる、感謝してるよ、離せ」

「今日から二人旅なんだから、大人しくするんだよ」

「チ、カ、ラ、を強めるなあ……！」

「富山は私がいないと駄目なんだからねえ……！」

「う、ぎ……」

こいつ絶対病んでる。精神が悲しいことになってる。私がちゃんとしてケアしていかないと！

「ヤ、マ、メ、な、お、す……」

「さあ！ もう一眠りしようじゃないか！」

苦しいです。

.....

「やー、いーてんきだねー」

「富山、お天道さまに体力持ってかれないように気をつけるんだぞ。危なくなる前に水を飲むんだ。でも飲み過ぎには注意だ」

「台無しだ」

毎日かぶりのおそとの空気を堪能しようとしたら、ヤマメがつる

さくて無理。

そんなの気にする程でもないのに。私はこんな調子で二十年間にほ〇中を歩き回ってたんだから。君とはスペックが違うんだよ。

「富山、言っ事を聞いてくれ」

「あ、うん」

とは言え、病んでしまったヤマメを下手に刺激するのはよくない。まずは相手の要求になるべく答え、徐々に現実を受け入れられるように考えを誘導させてあげなければ。

「街に着くには四日かかるね。途中途中で小川があるから、そこで野宿していいかい」

「はい」

先は長そうだな。前に見えるのは相変わらず草原とか森とか、見慣れているものばかりなので、道中は退屈しそうだな。こういうときに植物図鑑なんて持って持ったら、面白そうだなー。

適度に休憩をはさみつつ。運良く野生の妖怪にも猛獣にも会わずに、ぺたぺたと二人で歩き、夕方になる頃には見覚のある小川にいた。

「って、これ水の家の近くじゃん」

「どうした富山。何か面白い石でも見つけたの？」

帰ってきちゃったよ。どうしよう、ついでだし寄っていいのかな。

「ヤマメ、こっち」

「え、何を言……あ、うん」

一人で歩こうとする私にヤマメが何か言おうとするが、素直に従ってくれた。なぜだろう。

少し歩くと、そこはもう私の馴れ親しんだ場所だ。でっかい滝の裏にうつすらと見える水の洞窟。漢字で見ると『みずのどうくつ』と読めて、なんだか水を使ったカラクリ満載のダンジョンを思わせるが、正確には『みなはどうくつ』だ。ただ水が住んでいるだけ。

「滝が見たかったんだね。無邪気だなあ富山は。でもあまり近付かないようにしなよ。ここには神様がいるって昔からの言い伝えがあるから」

神？ 神なんていないよ。ここにいるのはただの幼女だ。

「ほらほらついてきて」

「あっ！ もう、今日だけだぞ？」

ヤマメの手を引っ張って滝の中に連れ込む。もろに滝に打たれる形になり、「あ、バカ！」と言われたが、我慢してもらおう。

「洞窟だよ」

「な、なんかここはマズそうな雰囲気があるよ。はやく出よう」

「そんな私の手握っちゃって……まさか怖いのか？」

「こ、怖くなんてない！ あー分かった。今日はここで夜を明かそう！ 富山こそ大丈夫なの！？」

「うん大丈夫」

「くう……」

実家で寝るのに恐れも何も無いよ。

で、ヤマメが勝手な決定をしたとき、暗がりから幼女が手でおいでおいでしているのが見えた。ヤマメはこちらを向いていて気付いてない。

「ヤマメ、ちよつとここで待ってて」

「お、奥に行くの！？ 君の好奇心は底が知れないね！ わわ私はちゃんとここで待ってるから」

ヤマメは入り口ぎりぎりの所に座って、奥を見ないようにじつと滝を見つめ始めた。かわいそうに、何にそこまで怯えているんだ。心が不安定なんだな。

そんなヤマメを私はやさしい目で見てから、洞窟の奥に進んだ。

そこにいたのは案の定、ただの龍巳神水だった。

「おいこら緑、何を連れて来たのじゃ」

本名を呼ばれるのがひどく懐かしい。富山柴左衛門でいるのも当たり前のような気がしてたからね。

「何って、人間」

「阿呆者！ ここは我が家じゃ！ かんけーしゃいがいたちいりきんしじゃ！」

「関係者でしょ。私の……友人？ だし」

「我にとつては何でもないではないか！」

「一日だけだつて」

「嫌じゃ！ 我はその、人間の前では姿を現さない主義じゃからな！」

「一回街行つたじゃん！ えっと、コンクリートジャングルに！」

何百年か前にそんな所に行つた覚えがあるが、あまり良い記憶じゃなかつたのか、ほとんど忘れている。

「それは気のせいじゃ！ ねつぞうじゃ！」

「そんな訳……あるかも」

コンクリートジャングルなんてこんな時代、ましてや数百年前にある訳ない。きつと前世の記憶とこんがらがつているのだろう。

「な、じゃあ出てけ」

「……分かつたよ……」

嫌がつていることを無理におしつけるのはかわいそうだ。ここで寝ても野宿しても寝心地はあまり変わらないので、交渉しても意味がない。

「食べ物もらつてくよ」

「帰つてきたと思えば知らぬ人間を連れ、食い物をあさつてさようならか。不良じゃな。我は緑をそんな風に育てた覚えはないぞ」

「育ててもらつてない！」

不良つて言われたのが結構ショックだった。

「……じゃあ、何も貰わないで出てくよ。確か、山頂に温泉あつたよね。そこは使うよ」

「温泉は消滅したぞ」

「ええっ!?!」

「この滝を見よ。ここも色々変わったのじゃ」

「うう……。長生きって、つらいね」

「つらいのお」

「はあ……。またね」

「さらばじゃ」

さて、ヤマメを連れて出るか。

入り口付近に戻ると、ヤマメは相変わらず滝を見ていた。その背中は、そこはかたなく哀愁を帯びていた。

そんなヤマメを、私はやさしい目で見つめながら声をかける。

「ヤマメ、出るよ」

その声に気付いたヤマメがこちらを向く。

「満足したかい。ところで、奥で誰と話して……。ああ、何でもない。富山はいい子だから」

そう言ってヤマメはやさしい目を向けてくる。二人共やさしい目で見つめ合っている。

「ふふふふふふ」

「ふふふふふふ」

二人で手をつなぎながら洞窟を後にした。

「（……………あやつら、狂っておる……………）」

遠くから幼女の声が聞こえたが、空耳だろう。

.....

つ、疲れた……。

あれから四日かけて、目的の街が見える所まで来たけど、精神的につらい……。ヤマメを刺激しないよう、気を使いながら二六時中行動を共にするのがこんなにきついとは……。

「ヤマメちゃん、疲れてないかなあ?????」

「大丈夫だよ。富山ちゃんこそ、足いたくない?????」

ヤマメも限界が近いようだ。今日こそは、ちゃんとした宿に泊まれるだろうか。

「ところでヤマメちゃん、お金は持ってるのかなあ?????」

「ごめんねえ、一銭も持ってないのぉ」

「使えないね!」

本当、ここまでの道を知っていること位しか取り柄がないね。私の心を削ってくるし。

「富山ちゃんは、何か目的でもあるのかなあ?????」

「いや????? 特にはないよぉ」

「今までの時間を返せ!」

二人ともかなりきている。

「返せないよ！」

「じゃあ私の心を返せ！」

「それはこつちのセリフだ！」 「なにをー！」

「やるかー！」

まさに一触即発。街まであと少しなのに。

「グルルルルル」

「ガルルルルル」

と、そこに、

「女の子が二人も！」

派手な衣装をまとった、優男が現れた。しかし今はそれどころじゃない。

「ヤマメいい加減にしろよコルア！」

「富山は黙っていればいいんだてやんでえ！」

「ああ、二人とも一瞬で僕の魅力に気付いてしまったんだね！」

「ヤマメエ……。今日こそは決着をつけてやる」

「富山エ……。貴様が私に勝ったことがあるか」

「やめて！ 僕の為に争わないで！」

「……………」

「……」

「……ヤマメ」

「……富山」

「まずはあいつを殺そう」

「そうだね、一瞬で殺そう」

あの優男の言葉は、私達の誠実な話仕合の邪魔になりそうだ。

「二人共、まずは僕の家に来てぎゃあああああああ！！」

……

「いやー、悪いねー。無料で泊めてくれるなんて嬉しいよ。誰かさんがお金を持ってないからさ」

「あんたは街の人間なのにいい人だ。誰かさんと違って」

「僕は女の子の味方なのさ！」

私達が男を断罪している途中、なんと何泊でも食事込みで泊めてくれるというので、甘えさせてもらうことにした。いきなり現れた男の家に行くなんて問題がある気がするが、この人は心がキレイだと判断したし、いざとなったらこちらは二人なので、きっと大丈夫だ。

「私はこの人がいい人だつて、最初から分かってたよ？ だつて一発で私のことを女つて見抜いてくれたし」

「ははは。そんな理由になってないね。私はこの人の内面を見て判断したんだ。富山と違って」

「それこそ可笑しいね。人の内面なんて見られるものじゃないし」

「なにをー！」

「やるかー！」

「だからやめて！ 僕の為に争わないで！」

「……………」

「……………」

「…………… ヤマメ、一時休戦だ」

「…………… そうだね、今だけ」

この男がいると調子が狂う。男と離れるまで勝負はお預けだ。

「えっと君達、僕は君達のことを名前で呼んであげたいのだけれど

」

もしかしてこれってナンパだったかな。自分がされるとは思ってもみなかった。実際されてみると、何か嫌だ。

「…………… 僕の名前は水橋清里^{みずはしきよさと}。君達は？」

清廉潔白、食事にしますか

「僕の名前は水橋清里^{みずはしきよさと}。君達は？」

どうしよう。いくら心がキレイな人といっても、ナンパ男なんか
に気安く名前を教えて良いのだろうか。

「私の名前は黒谷ヤマメ。よろしく」

というか今の私は木葉緑ではなく富山柴左衛門だ。もともと偽名
だった。

さらに偽名を作ろうか？ ……そんな事したらもう、自分が分か
らなくなりそうだ。

「……富山柴左衛門です」

「柴左衛門！？ そ、それって、女の子の名前じゃ……」
「何か文句でも？」

有無を言わせない態度で私は言う。ここで引いてしまっっては、信
用は強奪できないのだ。

「や、いい名前だね……。うん。そうだね、ミドリって呼んでいい
かい？ あだ名みたいなの」

「……っ！」

私の名前を見破っただと!? こゝこいつ、できる……!

「そんな見た目通りのあだ名じゃあつまらないよ。もっとひねった、『ああああ』なんてどうだい?」

全然ひねってない。むしろ究極の投げやりだ。しかも私の本名を見た目通りでつまらんとか言っつな。

「余計なこと言っつな団子! だったらヤマメは『ちゅ\$さ』だ!」
「何だそれ! 発音できない!」

「あ、あの、じゃあヤマメとトミって呼ばせてもらうよ。これなら文句はないよね」

口論になりそうな私達を絶妙なタイミングで止める水橋清里。早くも私達の扱い方のコツをつかんだようだ。さすがナンパ男。

こんな調子で歓談しつつも、水橋清里の家に向かって街の中をずっと歩いてるけど、一向に着く気配がないね。

周りの家々はヤマメの村と違って、しっかり整列している。前を見れば障害物など遠くにあるでっかい建物ぐらいしかなく、そこまで一直線に道が続いている。曲がり道で横を見れば、それまた果てしない道が続いている。

こつこつ構造って、なんかで見たことある。

「水橋清里、この街の構造ってなんなの?」

「そんな姓名で呼ばなくても……。清里って呼んでくれるとうれしいな」

「うん。それで水橋清里、この特徴的なつくりは一体なんなの?」
「……。これはね、日が沈む国を参考にしてつくられているんだ。美しい形をしているだろう……」

日が沈む国って、確か中国のことじゃないか？

「あー、それたぶんおそろく聞いたことあるかもしれないと思う」「そんなんじゃないかと知らないのと同じだろう。まったく、富山はこんなことも知らないのか。今まで旅をしてたんじゃなかったのかい？」

「私の旅は自然観察が中心なの！」

間違つてはいない、はず。水の家を探して歩いてるうちに、森の深度が生えてる木の種類で判断できるようになったから。18歳の私が持つようなスキルじゃないが。

「もうすぐ僕の家に着くよ。それと注意が一つ。家に入るときはこつそり、音を立てないようにね。部屋に着いたら好きにしていいいから」

これは家庭の事情ってやつか。あまり触れてはいけないデリケートな問題なのだろうか。うわー、そんな危ない家に招待されると気疲れしそうだ。今の私に必要なのは、心を休める時間だというのに。

横のヤマメを見る。私の疲れの最大の原因だ。着いたらまずどうしてやるう。

私の視線に気付いたヤマメが、意味あり気な目でにらみ返してきた。こちら目つきを鋭くして応戦する。

「……………」(ヤマメあとで絶望を見せてやる)

「……………」(富山にはゆっくり罪を償ってもらおう)

水橋清里にバレないように無言のバトルが始まった。心の本当の

片端でほんのちょっとだけ思ったんだけど、ここまで高度な会話ができる私達って、確たる信頼関係が築かれているんじゃないか。そんな言葉が一瞬浮かび、目に現われてしまった。

「……………!」(あれこれって友情……………)

「……………!」(な、なんだよう)

「……………つ、……………」(私の心を読むな!)

「……………ふっ」(富山、戦闘中に何を考えているんだい)

「……………!」(う、うっさい! ほんの一瞬だけだろ!)

「……………(笑)」(ふふふ、富山は単純だねえ)

ヤマメは最後に勝ち誇ったような笑みを見せつけ、前を向いて通常歩行モードに戻った。む、むかつくなあ……………。

「着いたよ。ここが僕の家だ」

音のないやり取りをしている内に、どうやら目的地に到着したようだ。ヤマメのおかげで全然観光できなかったよ。

水橋清里が止まった場所には、門があった。水橋清里の言葉と合わせて考えると、『僕の家』、『門』。

「門に住んでんの!?!」

「違うよ! ここ一帯が僕の家!」

水橋清里が、両手を広げてアピールする。

「でかつ!」

「いやいやそれ程でも」

ヤマメと会話しているときに、やけに壁が続いていると思ったら、

全部水橋清里の家の塀だったのか。

「清里、貴族なのかい……？」

「亡き親の遺産をかじってるだけだよ」

「そう。よかった」

ヤマメの質問には、悪意が込められている感じがした。この街の人って、ヤマメにとっては敵だし、そんなもんか。

「ほらほら、ここからはそーっと、ね」

水橋清里が大きな扉に手をかけ、音を立てずに開く。そして私達を敷地内に招き入れる。

水橋清里の家は、内から見ても、でかい。建物は二十メートル位奥のところに広がっていて、左右には五十メートル程の庭園が横たわっている。この土地が正方形だとすると、建物の方向にもまだ、庭と同じ位の土地があるというのだ。つまり、八十メートルにわたって建物が続いているということか。金持ちが。

「じやりじやりが敷いてある所があるから、細心の注意を払ってね」

言われなくても見れば分かる。植物はなく、白砂利が敷き詰められた見通しの良いおにわ。意味もない所に池と、通る必要性が感じられない朱塗りの橋もある。お金の無駄遣いは許せない。空を写す水面とか趣のある橋を見て、キレイとか思っていないからね。

水橋清里による忍び足の先導にしたがって、私は大胆に一步を踏み出す。ジャリ、と懐かしい響き。

「（こ、こら！ 静かに歩いてって言ったでしょー！）」

じやりじやり歩く私達に、水橋清里が我慢できず大声を上げた。今まさに、『うるさいって言うやつが一番うるさい』現象が起きている。それに気付いた水橋清里は、あわてて口を塞いだがもう遅い。

「やば、しま」

「誰？」

ショートカットの黒髪を揺らす、気の強そうな少女が、どこからともなく出現した。

その瞬間、水橋清里は見つかったーと全力疾走。貴族のお召物ではそんなに速くないので、なんとなくついていった。

そして敷地の端にある建物まで走り、水橋清里は「ここが君達の部屋っ！ じゃあね！」と来た道に戻っていった。

「でかい部屋だねー」

「そうだねー」

一連の出来事に対応しきれなかった私とヤマメは、ケンカ中であることも忘れ、部屋に入り布団を敷いて寝ることにした。

「（また女を連れこんで来たのね！ だらしない男ね！）」

「（ごめんなさいごめんなさい！）」

遠くから聞こえてくる、水橋清里と黒髪少女と思われる声をBG Mにして。

.....

「ヤマメ、トミ、ごはんだよー。晩ごはんだよー。寝てるのかい？」

建物の内外を隔てる簀子すしの向こうから聞こえる、水橋清里の声で見が覚めた。もう夜か。寝起きで食事はきついな。

「聞こえてるかー。入っちゃうぞー」

聞こえてますが寝起きで声が出ません。目も開きません。

「いいのかー。本当に入っちゃうぞー」

隣のヤマメは……ぐっすりだ。私が返事するしかないのか。

「いくぞー。ほーれ」

さっ、と簀子をめくる音が聞こえる。タイムオーバーらしい。

「おーい。いるん」

「女の寝室に無断で入り込むなんて、いい度胸ね」

もう一人、別の声が現れて、水橋清里が歩く音が止まる。

「ひいっ！ こ、これはただヤマメとトミを起こそうとしただけで特に深い訳はないんだぐあああ！ 足が紙になる！ やめて！ 踏まないで！」

「言い訳は聞かないわ。清里は部屋で待ってて」

「は、はいいい！」

そんなやり取りの後、一人の気配がすごい速さで遠のき、もう一人の気配がゆっくり近付いてくる。さっきの黒髪少女だろうか。

気配はゆっくりゆっくり近付き、寝姿を外から見えないように立ってカーテンのようなもの 几帳っていうやつかな の向こう側で止まった。

「……………」

少女はそこから動く気配がない。なんだろう。

「……………」

すごい視線を感じる。目を開けたら負けな気がしてきた。

「……………」

ヤマメは起きないのだろうか。

「……………」

ヤマメを起こしてやろう。あちらに、私が起きていると思わせないうよう、自然な動作で寝返りをすると同時にヤマメを叩く。力をいれられないので、手加減がなされていない自由落下の一撃であったが、ヤマメは起きなかった。

「……………！」

そんな動作に、少女は反応したようだ。しかし、その後の動きが

ないので、少女も動かない。

「……………」

どうしよう。この際私が起きようか。

「……………」

そんな事したら負けだ。人生の敗北者だ。

「……………」

このまま永遠に目を開けないでやる。

「……………」

「……………」

「……………」

今日は無言のやり取りが多いな。

「……………」

黒髪長髪二本角長身ナイスボディの鬼、木隠こもり黒花は元気にしているだろうか

「いい加減起きてよ！ 私が見てるでしょうが！」

よし勝った。

「わっ！」

本気寝をしていたヤマメが、少女の声に飛び起き、素早く後ずさり、後ずさり過ぎて柵（二階柵というらしい）に頭をぶつけた。地味に痛そう。

「はじめまして。富山柴左衛門です」

対して私はそこから動かずに、目だけ開けて自己紹介。

「しば……、しばさえもん！？ 偽名でしょう！」

「本名ですが、なにか？」

「嘘よ！ あなたが本名を教えてくださいるまで、私は名乗らないからね！」

あれ、毅然とした態度が効かなかった。

「う、うう……。なにか、よう……？」

奥で頭をさすっているヤマメが覚醒したようだ。

「……ああ。晩ごはん、できたわよ。見ず知らずの、それも女なんかに私が作ってあげたんだから、感謝しなさい」

初対面でそんな強い態度をとられると、対応に困る。

.....

黒髪少女に案内　本人はそう思っていないのか、競歩のような速さで歩いていたが　され、食事が用意された部屋に参上した。私、ヤマメ、少女、水橋清里の四人で食事をするらしい。

料理は、大皿にのったものをみんなでつつく形ではなく、小鉢に入った少量のおかず十数種類が、それぞれに配られていた。人との間に、微妙に距離感ができてしまつて寂しい。

「みんな集まつたね。じゃあ、いただきますーす」
『いただきます』

水橋清里の一声で、一斉に食事が始まる。打ち解ける様子を一切見せない強気少女の存在感が強くて、雰囲気少し固い。

でもそんな事を気にしていたら、美味しいものも美味しくなくなつてしまう。私は箸をとり、改めて「いただきます」と言った。

まずは何を食べよう。種類がいっぱい過ぎて、どれから手をつけたらいいか分からないよ。

無難に、ほんのり湯気が立つたお吸い物でも……。

「……、うぷつ」

「……あい!!」

一口嚼ると、あまりのしょっぱさに吹き出してしまいそうになる。隣のヤマメも私と同じく、お吸い物を無理矢理飲み込んでいた。

口の中に味が残っているので、いそいでご飯をかき込む。

水橋清里と少女は、顔色一つ変えずに箸を進めている。

気を取り直して次は、おさかなの切り身に挑戦する。

「……、んん！」
「……！！！」

今度は甘過ぎる！ ヤママも、何を食べたかは分からないが、声が出ない程苦しいらしい。表情に出さないように、顔を真っ赤にして静止している。

口の中に甘ったるい味がこべりついて離れないので、いそいでご飯をかき込む。ご飯はいい香りと程良い甘さが合っていて、美味しい。あつという間にお椀が空になってしまったので、おかわりが欲しいと思ったら少女がよそってくれた。

箸を止めてはならないのだが、もう嫌な予感しかしない。だが、無償で食事を提供してもらっている以上、完食しなきゃ少女に悪いしかも、少女がさっきからずっとこちらを見てくるので、ヤマメに押しつけるなどをして、ごまかすこともできない。

どうしよう……。いや待て、野菜スティックの乗った鉢があるぞ！
最後の希望だと信じて、いざ！

「……、ふーっ！ ふーっ！」
「……ううううう」

……きれいなバラにはトゲがあるのです。野菜スティックは、最も味が濃い食べ物、おつけものでした。

食事、まずい。味、こい。

どうやら野生の動物みたいな食事にすっかり慣れていた私にとっ

て、人間が食べる物というのは刺激が強過ぎるようだ。守矢神社でも、ヤマメの家でも、こんな濃い味の料理は出てこなかった。

ここ最近では、焼いただけの肉、干し肉、野草、野菜、さほど甘くない野生の果実など、料理とはかけ離れたものを食べていた。なので、料理というものに少なからず期待をしていたのだが、そんなものは濃い味に混ざって消えた。

ヤマメも同じ食生活だったせいで、塩分糖分香料満載の料理達に、舌が混乱しているようだ。さっきから声を押し殺し、一口一口噛みしめて食べている。

平然と食べ進める少女と水橋清里を見ていると、本来ならこれが標準の味付けなのだと思われる。そして、未来の食事はこれよりもはるかに濃い味だ。そんな未来で生きてた私が嘔みたいに感じられる程、味覚が野生化してしまっていた。

そんな言い訳は、この場で通用しないので、相変わらずご飯をかき込んで味を相殺する。

「すごい勢いで食べるね。お口に合っているようでうれしいよ。ね？」

「だ、だまって食べなさいよ！」

水橋清里の勘違い発言に、私は思い切り首を振ってやりたくなる。水橋清里と私の間にいる強気少女は、いきなり話をふられて困っているのか、叫んだ後に頬を少し赤らめて気持ち俯いていた。

こんな人間観察に時間を費やしていたって、食べ物が減………
……。増える！ おさかなが二つに増える！ しかもヤマメが少し笑ってる！

「……………くっ！」

強気少女は視線を再び私達に向けてきてるので、おさかなを返してやれない。泣き寝入り状態だ。

もう、これ以上は我慢できない。

私は意識をシャットアウトして、機械的に残りの食べ物、処理した。裏で生存本能が働いているので、味を薄めるために食べる白米の量は莫大であった。

そして完食。

最終的に、食べた白米の量は、ヤマメと二人で合計三升。明らかに食べすぎである。今の私達にちょっとでも触れると、それはもう、色んなものが出てきそう。

「アア、ヨイシカッタナア」

自動操縦状態の私は、お世辞を言うのを忘れない。そのせいで、何か出そうになったのは言うまでもない。

「よかった！こんなに喜んで食べてもらえるなんて、作ったかいがあったよね！」

「う、うるさいわね。さっさと食器を片付けなさいよ！」

水橋清里にも平等に、容赦なく、強気で迫まる少女。ずっと怒ってばかりで、彼女の幸せとは一体何なのだろうか。

「分かったよ……。ヤマメ、トミ、食器は全部僕が片付けるから、部屋に戻ってていいよ」

水橋清里が立ち上がると、少女も立ち上がり、部屋の出口まで移動して止まる。そしてこちらを見てくる。負けじと私も少女を見る。

「……………」
「……………」

ヤマメの時みたいで、目線で会話はできないので、ただ見つめ合っている状態だ。

数十秒間見つめ合っていると、少女が痺れを切らしたのか、口を開いた。

「早く立ちなさいよ！ 部屋まで案内してあげるって言ってんでしようが！」

そんなこと一言も言われた記憶はないが、少女との勝負に勝てたので満足だ。

私はゆーっくり、爆発物でも扱うかのような慎重さで体を持ち上げ、やっとのことで直立する。これから歩かなければならないなんて考えたくない。

ヤマメも、私より遅れて立ち上がる。向こうは、おさかな（+ご飯）を食べていないのに、お世辞も言えない位辛そうだ。目に涙を浮かべて魔物達と闘っている。

少女は立ち上がった私達を見ると、私達の苦しみを察することもなく、部屋を出て行った。来る時と同じように、競歩をしているのだろうか。今の状態でそれを追うなんて、地獄だ。

「ヤマメ、行こう……！」

「……うぷ！」

私は、おさかなの恨みを込めたり込めなかったりして、ヤマメの背中を軽く叩き、湯を入れる。一瞬、この世の終わりみたいな表情を見せたが、何とかこらえたようだ。ちっ。

「おやすみー」

「オヤ、スミ」

「………すみうぷ」

水橋清里の挨拶が、すごく邪魔だった。

私達は瀕死状態の操作キャラのように、おぼつかない足取りで歩き出す。少女がすでに遠くにいるので、おぼつかない足取りを早送りした歩調で進む。調子が悪いのかふざけているのか、どっちかかずの歩き方になっているし、全身が揺さ振られていて、もうパニック状態だ。

そんな奇妙な歩行で少女に追いついた時には、ある種のランナーズ・ハイの状態になっていて、苦しみよりもむしろ気持ち良さを感じていた。

「なによ、そんなうれしそうな顔して……」

「食事がスゴク美味シかったノデスはふー」

喋り出すのはマズいが、それでもお世辞を言うことをかかさなかった。ヤマメは、この世のしがらみから解放されたような表情をしていて、少女の言葉に反応しない。

「お、お世辞を言うのもいい加減にしないで……！」

私もそう思います。

「清里がどうしてもって言うから、仕方なく作っただけなんだから！」

それについては本当に感謝だ。見ず知らずの私達を拾ってここまでしてくれるなんて、良い人どころではない。聖人だよ。

気持ち良さも頂点に達し、意識がぼんやりしてきた所で目的地に到着した。立ち止まると、意識は舞い戻り、苦しい現実が再び襲い掛かってきた。しかし、これでやっと、休める……。

「明日の朝も私が起こしに行くわ。それまでは絶対外に出ないこと。特に清里には近付くな」

少女に諸注意を受け、解散の雰囲気は漂う。

少女が背を向け、帰ろうとするところで、私は少女を呼び止めた。

「少女！」

「少女！？ ふざけないで、私の名前は……いけない、向こうが本名を名乗るまで教えないんだ。油断したわ」

最後のほうは小さな声になっていて、聞こえなかったが、私は気にせず言いたいことを言う。

「今日は本当に、ありがとうございました！ そしてこれから少しの間、お世話になります！」

苦しさを無理矢理押さえつけ、勇気を振り絞って心からの感謝を口に出す。強気な少女は一瞬、瞳を震わせたが、それを悟られないようすぐに後ろを向いてしまう。

「……………ふん」

言葉であるか分からないような言葉を残し、少女はそのまま帰って行った。

少女の足取りは、ここに来る時よりも軽やかだった。

……………

翌朝。

昨夜と同じように、少女に競歩で案内され、食事部屋に四人そろって席につき、水橋清里の一声で朝食が始まる。

そこで私は気付いてしまった。

私のおかずだけ、一品多い。

何コレいじめなの？

清廉潔白、食事にしますか（後書き）

秋姉妹的なぜ前回いなかった

「静葉です！」

「穰子です！」

「うおー！ 前回なぜ休んだー！」

「お姉ちゃん！ それはね、特に意味はなかったんだよ」

「なななにを言っているの穰子」

「強いて言うなら、予言するタイミングじゃなかったなー、と思っ
て」

「そ、そう」

「そんなわけで、予言を終わります！」

「穰子！ あなた最近おかしいわよ！」

「え、でも、冬だよ？」

「あ……………」

「ね、早く帰って、こたつに入りたいでしょ？」

「……うん」

「……帰ろう、お姉ちゃん」

「……うん」

「……」

「……」

「……もうすぐクリスマスだ……………」

捲土重来、ツチグモヤマメ

少女に朝食のおかずを増やされるといいういじめを受け、私は少女を無表情で見つめたが、少女は「早く食べなさいよ」と催促してきた。どうやら私はとても嫌われてしまったようだ。背後から、ヤマメがクスクスと声を殺して笑っている声が聞こえる。ざまあとでも思っているのだろうか。みんなして朝からヒドいなあ。

「ねえヤマメ」

私は大人の18歳（それにかけるさいん24どかける10の2乗とかしちやだめだよ）なので、いじめられていたとしても全然気にしていないかのように振舞う。大人の対応ってやつだ。

「んー？」

早くも濃い味付けに慣れたのか、ヤマメは平然と箸を進めつつ、返事をする。私はおかずを一品消化するのに未だお米一合を要するのに。

「観光しようぜっ」

都会に来たらまず観光と相場は決まっている。それこそが、今回の旅行の目的だし。

本来の目的である人を驚かすために山を下りた云々は、みんなの

心の中で永遠に生き続けるだけだ。

「観光するのかい？　じゃあこの街の地図とか役に立つ物が必要かな？」

水橋清里が口をはさんで来た。この人は何から何まで、本当に優しい人だ。おせっかいやきの清里だ。

「貸してくれるの？」

「……」（チラ）

少女が紙の端っこをチラチラさせてきた。が、今は水橋清里と会話をしているのだ。相手してやれないのを分かって欲しい。

「この街は広いからね。地図は絶対必要だよ」

「……」（チラチラ）

「家一軒ですらこの有様だもんね……」

敷地面積一万平方メートル。三千坪にも及ぶ土地を、たった四人で使っているのだ。

「い、いや、僕の家が特別なだけだよ」

「……」（チラ！　チラ！）

「特別？」

少女のチラチラが激しくなってきた。構って欲しいのなら話にめり込んでくればいいのに。

「なんか親が政府の弱みを握っていたらしくてね、その息子である僕に手出しができないみたいなんだ。それどころか、毎月食べ物を

送ってくれる」

「うおう重大発言。食べ物を与える政府が親戚みたいでかわいい」
「……」（バサバサ）

少女が紙切れを水橋清里に見えない程度で振り回し始めた。私と水橋清里の間にいるので、すぐく会話の邪魔だ。そんなに構って欲しいのか。今日の私は大人だから、負けてあげるのも良いだろう。相手してやるか。

「どうしたの少女。おやーなんだろうその紙は」

「ち、地図よ。たまたま持ってたのよ」

「たまたま？ おかしいな、地図は倉庫の奥にもぐもぐ」

少女の言葉に水橋清里が反応するが、言い終わる前に、少女が水橋清里の口の中に肉料理を放り込んで阻止した。

「あのさ、気になったんだけど、清里と少女の関係って一体何なんだい？」

ヤママメが私越しに問いかける。丁度良い。この隙に私はごはんを平らげなければ。各おかずに米一合という量的に、私は人一倍速いペースで食べ進めないと一緒にごちそうさまができないのだ。

「僕達の関係？ それはもう、誇れる夫婦」

「結婚なんてしてないわよ！」

「ええ？ あれ？ してなかったっけ？」

「してない！」

「そう言われて見ればそうだね。まだ色々やってないし」

「色々……」

「色々かあ……若いねえ」

「げほっ！」

水橋清里の発言に、少女とヤマメが妙に食いついた。こういうのは食事中にする会話じゃない。むせたじゃないか。まあ食事中でなくても、私のいるところでそういった話題はやめて欲しい。

「じゃあなんで一緒にいるのさ」

「えっと、どうして？」

「知らないわよ！」

「げほっげほっ、げほっ！ げほっ！」

「富山うるさい」

咳が止まってくれない。ヤマメ、心配してくれたたっていいじゃない。

「とにかく！ この地図を渡すから！ 夜まで帰って来ないで！」

少女が話題を無理矢理変えた。私の咳を踏み台にされたようであるせない。

咳をしつづける私の前に、容赦無く地図が差し出される。頑張っ

てそれを受け取るが、本音を言うと、お茶が欲しかった。

咳を十分にしたら楽になり、もらった地図を望めてみる。描かれて

いるのは、たてたてよこよこ線ばかり。シンプルなズベストな地図

だ。

「……ふう。なにこれ。……少女、こんな暮盤渡されても困るよ」

「「げぼんってなによ」

「五番？」

「富山、ごはんは今食べてるじゃないか」

私のボケがみんなに伝わらなかった。こういつ時って、私がいきなり意味不明なことを言い出したと思われるので、非常に辛い。またヤマメにかわいそうな子供だと言われてしまう。

ボケが伝わらないということは、まだ囲碁は普及していないのか。この地図に描かれた街並みを見る限り、碁盤のようだと形容した方が説明しやすいのに。

「すみません今のは無かったことに。私はおかしな子供じゃないんです。周りがおかしいだけなんです」

「富山、今まで言っただけで、残念ながらおかしなのは富山一人だけなんだ」

「偽名だし」

「トミのことを悪く言いたくないんだけど、でも僕が会った人の中で、君はほんの少し違うね」

「……うう」

やはり私はいじめを受けている。あからさまに受けている。涙がどんどん流れ出てくる。

「……ひどい……」

「あ、富山ごめん……」

私が涙を流しているのに気付いたヤマメが、すぐに謝ってきた。

いじめが謝って済む問題なら、とくに世界が平和になっているんだと思ったが、そもそもいじめの最中に謝罪というのは起こり得ないことだった。向こうはいじめだと思っていない場合が多いからね。

「みんな、富山は心が不安定なんだ。あまり刺激しないようにしてあげて」

「……そうだったのね」

「じゅめん……」

私の涙もからかいのネタに。みんなは私をまるで病んでる人かのような扱いをしていじめてくる。陰湿だ。本当に病んでるのはヤマメだというのに。

「もういいよ！ 出ていくよ！」

「あ！ 待て！」

さりげなく、朝食をきつちり完食した状態で、私は部屋に駆け戻り、靴を履いて百メートル走って門まで来た。そこでひとまず深呼吸をして、荒ぶった感情をおさめる。

そんな私の後ろに、ヤマメがぴったり付いて来ているのだが、そこまでして私をいじめたいのだろうか。陰湿だ。

まあ私は大人だし？ さっきのことは水に流して、大人の対応を見せてあげるよ？

私は少女にもらった地図を広げ、ヤマメが見やすいように回転させ、かつ中腰になって丁度良い高さにする。一流の接客態度と言っても過言ではないよ。

「黒谷さん、まずはどこに行かれますか？」

「な、なんだいそんな他人行儀に……」

「私は、わたくしそうですね、やはり中央に御座います巨大な建造物に参りたいと……」

「分かったよ。そこに行きたいんだね。これは富山のための旅行だし、自分の好きなようにするといい」

「有り難う御座います。では、この街を二分しています朱雀大路と呼ばれる道まで出ましようか」

「……その喋り方やめてくれよ。人形と話しているようで気分が悪

い
「

君が泣くまで喋るのをやめないと言いたい所だが、私は大人なので、そんな子供っぽいことはしない。いじめっ子の言うことはしっかり聞かないと、さらにいじめられてしまう法則があるという理由でヤマメに従ったのでは断じてない。

一流の接客態度をやめ、順路を確認するために一人で地図を見る。まずは現在地の確認だ。

「……あつた。水橋清里の家つて、かなり端っこの方にあるねー」
「ちよつと見せてよ。……ホントだ」

ここから中央の巨大建造物までは、ゆっくり歩いて三十分位の距離だ。つまりこの街は、一時間で端から端まで行ける程度の大きさなのだ。

「水橋清里の家に戻ってもこれといってやることないし、半日かけて往復できる速さで歩こーか」
「ああそつだね」

.....

行って帰って来ました。黄昏時でございます。
往復一時間の距離を一日かけて歩く。

それは、どんなに苦痛であるかお分かりだろうか。

「では実際に被害に遭った方に聞いてみましょう」

隣で俯いている黒谷ヤマメさん（仮名）に、その実態に迫るべく、インタビュウを試みる。個人情報を守るため、本名を伏せ、声を変えてお送りする。

「本日の歩きについて、（ピー）さんはどう思われましたか？」

「はい。えー大変虚しい時間の使い方だったと思いますね」

「大変虚しい、とは？」

「はい。歩いてても歩いてても、進んでるような感じが全然しないんですよね」

「では（ピー）さんは今日、全く動いていないと？」

「いえいえ、そんな訳ないじゃないですか。確かに動いてはいるんですが、それでも進んでいないんですよ」

「動くことと進むことの関係性。これが事件をひも解く鍵だと（ピー）さん言いたいのですね？」

「それは少し違うと思います。私が言いたいののは、こんなことを有言実行した富山の頭がどうかしてるんじゃないかってことだアホっ！」

「ああ！（ピー）さんが取材陣に牙を向けてきました！ あまりの速さに私は反応できませんそんな叩いて来ないで」

「この！ この！」

「陰温ないじめがついに直接的になった！」

ヤマメの荒れ具合から見てとれるように、今日の観光は苦痛以外の何物でもなかった。

水橋清里の家から巨大建築物を住復したときの距離は、およそ四キロメートル。それを七時間かけて歩こうとすると、一步一步の歩幅を十センチに抑えなければならぬのだ。そうして二人でのると歩いていると、足が疲れてくるし道行く人に視線を合わせない

ようにされるので、肉体的にも精神的にも深い傷を負ったのである。それに、目的地の巨大建築物には、政治の中心になっている所だとか、女は出歩いてんじゃねーといった内容を兵士っぽい人に言われて、近付くことすら許されなかった。私を女と判断してくれた兵士は良い人なのだろうが、なぜかヤマメの機嫌が悪くなったので、他の所に行くなど、悪あがきをせずに一直線に帰った。もちろん牛歩で。

今日の収穫は、心と身体の傷のみ。心を癒すための旅なのに、傷が増えるとはどういうことだ。

「……暗くなってきたことだし、これ位で勘弁してやる」

もう夜か。時間が経つのは速い。空は雲一つ無いことだし、綺麗な月が見えそうだ。

「はあ。いっそのこと、ずっと空でも見てようかな」

楽しもうと躍起になって街中を探索し、失敗するよりも、何も考えずに一日中空を望んでいた方が私らしいんじゃないか、と想想みた。

自分のこと、まだまだ分かってないなー。

.....

「富山、なんかお婆ちゃん、みたいだね」

思い立ったら即行動。私はあれから一週間、ひたすら空を見て過ごしていた。活発なヤマメにとって、私の姿はお婆ちゃんのそれらしい。

「失礼な。これこそが私にとって、真の安らぎになるんだ」

「食って寝て食って寝ての繰り返しじゃないか。こんな不健康な生活してると、早死にしようぞ」

「私は不老不死だから大丈夫」

「そうかい。せいぜい私より長生きしてみるんだね」

「冗談だと思われている。不死ではないが、ほとんど不老だ。少し成長してくれたっていいのに、どこも全く成長しない。だからこそこうしてヤマメとワイワイできるという利点もあるが。」

つくづく思うのだが、時間が経つのは本当に速い。

空を望めるのも、日課となってしまった。相手をしてくれない私に飽き、暇になったヤマメは少女の家事手伝いをするようになった。

ゴミ屋敷在住のヤマメは、料理洗濯掃除など、最初の方こそ失敗ばかりして少女に怒鳴られていたが、日を重ねることにそれも少なくなってきた。私は成長していくヤマメの姿を見守り、穏やかな気持ちになっていた。

……一日中空を見て過ごし、孫の成長を見守るおばあちゃんと今の私が、完全に一致したように感じたが、それは残像だ。おばあちゃんと私は違うというのは自明の理だからね。

水橋清里（みづはし しみず）が、気が済むまでいるといい、と言ってくれたので、こうしてのんびりと代わり映えのない日々を送っていた。

今日も、いつもと変わらない朝を迎える。

「……朝食よ」

未だ名前を覚えてくれない少女が、いつものように朝食を知らせにくる。

食事部屋に何回も行き来し、道は覚えているので少女の競歩に構わず自分のペースで歩く。

私達が付いてきていないと分かった少女が、チラチラこちらを見ながら歩調を遅くする。

食事部屋にみんな集まり、水橋清里の「いただきます」で、食事が始まる。

人間の味付けにすっかり慣れた私は、少女の料理の腕前を毎日のように思い知る。

日常会話をしながら、良い気分で箸を進める。

今日も水橋清里が話し始め、食事が楽しくなる、と思った。

でも、忙しく生きる人間に、そんな平和な時間は永遠に続かない。

「そういえばさあ

」

水橋清里が、いつもの面白い小話をするかのように口を開く。

「四日位前のことかな。『土蜘蛛の巣』を本格的に駆除するとか言って、すごい数の兵が送られたらしいよ。怖いねえ」

ヤマメは、その言葉を聞き終わる前に、駆け出していた。

「ヤマメ！」

「あれ、どうしたの二人共」

「突然だけど今までありがとう、帰ってくるか分からないけどまたね！」

事情を知らない水橋清里に早口で別れを告げ、私は遠くに行ってしまったヤマメを追う。

「ヤマメ！ 待って！」

呼び止めようと大声を出す、ヤマメは止まるどころか返事すらしない。

このまま走って村まで戻るつもりなのか。歩いて四日かかった距離を、準備もせずに、ずっと走って。

「ヤマメ！ 無理だ！」

妖怪になり、体力が上がった私はともかく、生身の人間であるヤマメがそんなことをしたら、疲労で死んでしまう。

それでもヤマメは止まらない。

水橋清里の家がある通りを抜け、街のメインストリートである朱雀大路を一直線に駆ける。私もヤマメの背中を追って距離を縮める。入り口の門も、躊躇ためらわずにくぐる。一日かけてのっそり歩いたこの道も、僅か十数分でお別れ。

ここに来るのにたどってきた草も、どんどん進んで行く。ヤマメとケンカが始まり、水橋清里と出会った場所は、すぐに見えなくな

った。

森林地帯に入り、道なき道を強引に突っ走る。しだいに道が傾いてくる。山登りをしているのにもかかわらず、速度は落ちない。でも、

「……………っ！」

「……………はあ、はあ。ヤマメ、落ち着いて」

村まで約二百キロの道のりは、全力疾走で走破できる訳がない。木々が立ち並び近くに小川が流れる山の中、体力が尽きて転ぶように倒れたヤマメは、言葉にならない言葉を叫び、なま猶も前に進むとする。

「私が、行かなきゃ、村の、みんなが……………っ！」

「ヤマメ！ とにかく落ち着け！」

村に着いても、そこで力尽きてしまつては意味がない。他にも、私の頭の中には客観的な事実が漂っている。が、それを言葉にするのは余りにも残酷なことだった。

「うう、うう……………動け！」

ここまでの全力疾走が、必要以上にヤマメの体を壊している。足を動かしたらしいが、もがく事しかできていない。

こんな調子で体を壊しつつ進んでいたら、徒歩でかかる時間よりも、すなわち四日以上かかってしまう。

「私が、運んであげるから」

かつての友がそうしてくれたように、私は弱るヤマメを背負い、

走り出す。

妖力を消費し、体力を底上げして。ほぼ低空飛行をしているかのような走り方で。

こんな時位、重力に逆らうことを許してもらおうよ、地球さん。

.....

「……ところで」

獣道を器用に走りつつ、私はある日ヤマメとした会話を思い出していた。

「んー？」

「どうしてヤマメ達は、この街を逃げ出したの？ こんなに平和なのに」

デリケートな問題かもしれないが、何の問題もない街の様子を見ていると、どうしても聞きたくなつたのだ。

「本当に、そう見えるかい？」

「うん」

「これは見せかけの平和だ。政府は人々から税を搾取し、外ヅラを良くしているだけさ」

これってよくある、重税がなんたらの問題なんじゃないかと、最

初は思った。

「数年前、私達がまだこの街に住んでいた頃に、突然政府という組織ができてね。奴らが最初にやったことは、土地や商品に税をかけて、金を奪っていくことだったんだ」

「重い税だったの？」

「そこが奴らの卑怯な手口だ。政府は『日常生活に支障をきたさない程度』の税をかけてきた」

次に、軽い税が積み重なり負担になるという手口を予想した。

「それで、生活が苦しくなったの？」

「いや。みんな何不自由なく暮らしていた。しかし、確実に金を盗られている。政府は何もしなくても潤っていくんだ。こんなの耐えられないじゃないか」

しかしヤマメが不満を訴えていたのは、ごく普通の政策に対するものだった。

「うん。でも政府はそのお金で色々役に立つことをしているんだよね」

「役に立つ？ 私達は政府がつくられる前でも平穩に暮らしていたんだぞ。やらなくていいことを勝手にやられても、邪魔なだけだ」

「そう、なのかな。まあ、ヤマメの村も成り立ってるしね」

「あの生活を求めて逃げ出したんだからさ」

私からして見れば、この政治の仕組みは当然のものであったが、何も知らない状態で、いきなり出現した権力者に税を取ると言われれば、反発する人々も出るのだろう。その人々がヤマメ達であったのだ。

「政府が税を課すことをやめさせられたら、私達はここに残っていてもたかもしれない」

「やめさせるって……？」

「私達は戦ったんだ。何度も。でも奴らは聞く耳を持たない。仕舞いには、私達を『土蜘蛛』と名付け、武力で抑圧するようになった」

「でも、先に手を出したのは政府じゃないよね」

「私達には、ちゃんとした理由があったから許される」
「……」

水掛け論である。

デモ隊『土蜘蛛』の主張は、「今までの生活をかえせーこのーこのー」であり、政府の主張は、「こっちの方が平和になるんだー言うこと聞けー」だ。

どちらの主張も通りはするが、暴力に訴えちゃいけない。そのせいで、今の今まで険悪な関係が続いているんだから。そのせいで、今こうして山道を走らなければならぬ状況にまでなってしまったんだから。

かなり単純な、「嫌だから反抗する」という理由からの関係ではあるが、でも当事者達は至って真面目だ。どちらも悪く、どちらも悪くない。それ故に、単純だったものが複雑な問題となり厄介。

「私達は街から出て、もう無関係な筈なのに、政府は軍を送ることをやめない。それって悪がすることだと思わないか」

「あー、うん」

私はどちらに付こうとも思っていないが、あそこでヤマメとケンカになるのは面倒なので、一応肯定をしておいた。

政府がヤマメの村を潰しにかかるようになったのは、戦いを重ねるにつれて、戦う意味が変わってしまった結果なのだろう。政府を

動かすのも人だ。やられれば怒る。怒った政府の目的は、デモの沈静化から、『土蜘蛛』という『敵』の排除になってしまったのだ。たとえ何もして来ないとしても、そこにいるだけで嫌な気分になる羽虫は、つぶすまで追い続ける。それと同じイメージだ。

「まあ、程々にしときなよ……」

「あ、ごめん。富山は無関係なのに、つい熱くなってしまったね……」

興味本位で聞くべき内容ではなかったと後悔した。だが、ここで聞いておいて良かったとも言える。このことを知らなければ、私は走り出したヤマメを追っていなかったかもしれないから。

難しい問題は私の手の届く場所ではないが、友達の暴走を止めるのは、私の役目だ。だから、私はヤマメに協力する。

.....

全力疾走とまではいかなかったけれど、まる一日と半日かけて水の洞窟付近にたどり着いた。余裕が出てきた心の中で、自分の性能に少し驚いた。

背中のヤマメは、極度の緊張と疲労のせいか、よく眠っている。妖力を使っているのは、分からなかったようだ。

森の中の、二人が寝るのに丁度良い広さの空間を見つけ、ヤマメを下ろして私も席る。

村まであと少し　とは言っても、徒歩だと一日かかった距離
なのだが、私の体力及び妖力はもう底を突いている。今日はこ
で休んで、明日の為の体力を取り戻した方が良い。

ここは滝があり、水が豊富なので、植物動物が多く集まっている。
食料を調達しやすい場所なのだ。

妖力は、体力と同様に時間経過で回復する。回復を早めたいのな
ら、とにかく栄養が必要だ。それは人間のヤマメにも言えることな
ので、私は途中で採ってきた果実を、寝ているヤマメの口にねじり
込む。窒息しないように細かくちぎった上で。

動物を追いかける余裕はなく、食事は肉を諦めてすぐ手に入る植
物中心だ。種類を選ばなければ、たんぱく質、糖、脂質などの栄養
は十分に獲得できるので、肉がなくても大丈夫だ。

ヤマメの食事が終わると、私は急いで自分の食事を済ませて就寝
した。この地域に住む動物や妖怪は、みんな穏やかなので安心して
眠れる。

一分一秒が惜しいこの状況、ヤマメの村のことは何も考えないよ
うにして意識を閉ざした。

.....

まだ日も昇らない静かな朝、目が覚めた。これから再び走らな
ければならないと、まだ覚め切っていない頭で考える。目の前には草
木が見える。

「.....」

寝返りを打って体を覚醒状態に近付ける。本当に静かだ。私の周りに生き物なんていないかのよう。

「……！！」

違和感を感じ、体を起こし実際に見回してみたが、何もいなかった。

ヤマメがいなかった。

「一人で……！？」

ヤマメは私を置いて行ってしまったのだ。体力に気を使うばかりで、その可能性を全く考えていなかった。どれ位前に出発したのだろうか。私が寝た瞬間、夜中、少し前、いつなんだ。

思考は時間のロスになる。急いでヤマメを追わなくては。街の兵士達と鉢合わせになったらただじゃ済まない。

着の身着のまま準備をする必要がない私は、立ち上がり早速走り始めた。

ここから先は、すでに二回通った道だ。一回目は山を下りた私が道に迷いながら歩き、二回目はヤマメと所々ではしゃぎながら歩いた道。

進むべき道が明らかで、はしゃぐ相手もない今の状況ならば大して時間はかからない筈。しかしそれはヤマメにも当てはまることであり、ヤマメに追い付く希望の一つにはならない。

頼れるのは自分の足のみである。寝起きで本調子でない体に鞭打ち、見覚えのある山道を下って行く。ヤマメと出会ったあの時はこの辺りで日が沈み、身動きがとれなくなったんだ。ヤマメと話して

るとよく叩かれたり刺されたりするけど、今思うと初対面の時でも襲われてるんだよな。手が早いのも考えものだ。

そしてここから少しの間は何も見えなくて、ヤマメに手を引つ張ってもらったんだ。姿が見えないヤマメに当初は犯人 と名付けていた覚えがある。

少しすると、森が徐々に薄くなる。一日かかった距離も、迷わず走るととても短い。ここでヤマメの姿が見えるようになり、お互いの自己紹介をして富山柴左衛門が生まれた。適当に付けた名だが、もう二月も富山と呼ばれているから今さらヤマメに本名で呼ばれてもしくくり来ないかもしれない。

会って間もないヤマメときこちない会話をした道も、終わりが近付いている。目を凝らせば村が見える距離だ。だが、今日は霧が出ているのか、それらしきものは見えない。

森を抜け、そろそろ村が見えていい筈なのに、何も見えない。

「どうして、なんでないの」

目の前にあるのは、ただの木炭の山だ。

「門番が立っているだけの入り口はどこ？ そまつな建物はどこ？」

木炭の山の周りには、派手な色をした『モノ』達や地味な色の『モノ』達が転がっている。

私は村を探して山とモノの間を進む。走りが歩きに変わっている。ヤマメに追い付かなければならないのに、足が言うことを聞いてくれなくて、のろのろ歩くばかりだ。

「ヤマメの家は？ ヤマメは？」

何を馬鹿な事を言っているのだろう。まだ村に着いてもないのだからヤマメの家なんて見つかる訳ないじゃないか。

「バ、バケモノオツ　　！！」

「あ、こんにちは」

向かいから、派手な鎧を着た通行人が走って何か言っていた。私の耳がおかしいのか、相手の言葉が上手く聞き取れなかったので、取り敢えず挨拶を返しておいた。

そしたら通行人は私とすれ違う前にアカイナニカを吐き出して転び、そのまま眠ってしまった。酒に酔っていたのだろうか。汚いなあ。

「イキノコリガイルゾオツ！」

「ナンナンド、カラダガカユイツ！」

「ヤツニチカツクナアツ！」

こんな所でワイワイガヤガヤと、宴会をしているのか。こんな『妖』しい『気』配が漂う場所で。物好きもいるものだ。こんな奴らに構ってる時間はない。ヤマメとか、村とか、探さなくちゃ。

酔っ払いと遭遇してから、なんか転がってるモノが段々多くなってきた。地味なモノは相変わらずだが、派手なモノの量が増えている。派手の具合も変化していて、横色の水玉模様だったり赤色の水玉模様だったり、様々だ。赤いお花を咲かせたモノもある。隠し芸大会でもする気なのか。

「あぐつ……！！」

余所見のし過ぎで木炭につまづいてしまった。目の前には地味なモノがある。

それと、目が合ってしまった。

「……………そ、村長さん……………！」

この厳つい顔は、忘れてくても忘れられない村長の顔だ。よくできたマネキンだな。だけど、肌の色が白く、冷たくなっていて動かないよ。背中には何十本もの木の棒が生えているのもオリジナルと違う気がする。

涙が出てきた。

「う、うううう……………！」

現実を見ないように頑張ってたのに！ もう無理だよ！ ここが焼き尽くされた村だっていうのはとつくのとうに分かってるよ！ 村の住人達は誰一人残っていないくて、戦いに勝った兵士がここにいるということも察してるよ！ 手遅れなんてことは、街を出る前から予想していたさ！

「ヤママメ……………！ ヤママメ……………！」

ヤママメはどこかにいる。兵士達があんなに騒いでいたじゃないか。ヤママメと一緒に街に帰ろう。ヤママメは嫌がるかもしれないが、説得して水橋清里の家に戻ろう。

そのためにも、ヤママメを見つけないきゃ。

周りにはどこもいないだつて焼け残つた家とか村人や兵士の亡骸しか見えないんだもんそれに兵士の死体は何かのウイルスにでも侵されたかのように色々ぶちまけている状態なんだよ。

「あああああつ！ 落ち着け私！」

散々ヤマメにも言ってきたことじゃないか。私がそれをできなくてどうする。

しっかり立って。

前をよく見て。

現実から目を背けないで。

見えないのなら歩いて。

そこら中に充滿している妖気を辿れば。

ほら、

土蜘蛛がいるじゃないか。

「ヤマメ！」

「ああ……。見てよ。私、変な力が使えるようになったんだ……」

自嘲気味に笑う少女の周りには、苦しみに顔を歪める兵士の残骸。直接手を下した形跡は無く、倒れる方向もバラバラだ。

「これで私と君の二人だけでも村を救えるね。ほら、一緒に行こう」「ヤマメ、もう終わりだよ……」

「何を言っているのかな。意味が分からない」

「長い戦いは今日で終わり」

「………まだだ」

「終わったんだ」

「………どうしてそんな事言うの」

「周り見なよ」

ヤマメはゆっくり顔を上げ、一周回って俯く。

「………は、ははははは。もう、終わりか……」

湧いた笑い声を上げ、ヤマメは膝をついた。

「全部、ここで終わり」

「………うん」

薄笑いを浮かべていたヤマメの表情がなくなる。

「………自分達の村が、どんなに馬鹿げているかっていうのを、度々思ってはいたんだ。街の様子を見て分かるだろう。政府のやり方には共感できないが、そのやり方で街があんなに発展しているん

だ。襲撃の度に新しい武器、新しい戦法で強くなる向こうの兵士を見て、私達はこのままの暮らしでやっていけるのかって。毎日狩りをして、少ない資材で武器を作り、余裕がない暮らしを送っている私達はこのままでいいのかと思うようになったんだ。表情には出さなかつたけど、実際はかなり切羽詰っていたんだぞ。今までこの村で生活していきなりやめるなんてことも言えないし、やめたとしても街に移るのは抵抗があつただろうし、板挟みの状態だった。そこで現れたのが君だ。最初は身元不明正体不明の君に、私達は土蜘蛛ではなく人間だつて認めてもらいたくて一緒に生活し始めた。そんな君はある日、きつかけをくれたんだ。『街に行きたい』と。正直に言うと、その時私の中では嬉しさがこみ上がっていたんだ。村長は私の考えを前々から理解していたんだと思う。そうじゃなかつたらこの村が大好きな村長が、あんなにあつさりとは許可をくれる筈ないから。それで私と君は街に行くことができた。その人の生活を見ててね、これが人間の生活なんだ、って肌で感じた。そんなことを思ってしまったがために、今の状況があるんだよね。全部無くなつちやつたよ。家も仲間も村も無くなつちやつた」

ヤマメの目には、うつすらと涙が浮かんでいた。

「それに、人間であることも、失くしてしまったんだね。分かるんだ。今まで持つていなかった力が、私の中に溜まっていくのを今まで感じとることが出来なかつた何かが、感じとれるようになったんだ」

妖怪は、人間の恐怖を糧に、存在する。逆に言えば、人間に恐怖される生き物は、妖怪なのである。

土蜘蛛と呼ばれた人間は、人々が抱く負の感情を浴び過ぎて、土蜘蛛と呼ばれる妖怪になつてしまった。辺りを漂う濃い妖気は、人々の恐怖の表れなのか、人々に恐怖された土蜘蛛から出るのものな

のか。どちらも当てはまるだろう。人々の恐怖の表れが、土蜘蛛のものになったのだ。

「全部終りだね。何もかも、全部」

ヤマメは立ち上がり、私に背を向けた。

「人間の君と妖怪の私は、相容れない。私は消えるよ。でも、最後に、君の名前を教えて欲しいな」

人間と妖怪は、共存はできないが友にはなれる。現に妖怪の私と人間のヤマメは、一緒にここまで来たのだから。

私は隠していた妖力を解放し、あふれ出す私の妖気が周囲に漂うヤマメの妖力と混じり合う。

「私は木葉緑。人間と友達になれた、妖怪の名前」

動かないヤマメの背後に忍び寄り、頭を思いつき叩いてあげた。

「いてっ！」

「いつもの団子らしくないぞ！ 貴様にシリアスは似合わん！」

「はあ！？ 人がせつかく感傷に浸っている所を邪魔するのか！？」

「ヤマメはただの病んでる子供だ。私がついてないと駄目だよね！」
「ぐ、ぐ、ぐ」

「お？ お？ 手が出るか？ ん？ 我慢できなくなっちゃった？」

「がー！ー！ 富や……、緑しねえっ！」

「ここはケンカするような場所じゃないでしょ！ 周り見てようぎやっ、くび、しめないで……いきが……」

「清里の所に帰るよ！ そこで今後について会議だ！」

ほら、ケンカする相手も帰る場所も新しくできた。
全部が終わったけど、また別の『全部』が始まったじゃん。

捲土重来、ツチグモヤマメ（後書き）

秋姉妹的聖夜

「静葉です！」

「穰子です！」

「しりあすっ！」

「お姉ちゃん！ 緑はシリアスな空気は耐えられないんだよ！」

「現実逃避してふざけたただけなものね！」

「ところで、予言はいいとして、クリスマスだよ！」

「クリスマスね！」

「恋だよ！」

「……」

「……」

「パルスイさんをお呼びできましょう」

「そうだね。おくうもお呼びでこよう」

「明日から地底生活だね」

「今回活躍したヤマメさんもいるわね」

「……ああおもしろそう」

「……最高の夜になりそうだね」

「……ふふふふふふ」

「……ふふふふふふ」

「うふふふふふふ」

『だれっ！』

「金髪の子だけ」

「ここにいるのみんな金髪だよ！」

「このコーナーは二人までよ！」

「じゃあ静葉は今日でおわりだ」

「……なんか変な空気になったので予言をおわります！」

「……私が消えるなんてことは絶対ないわ」

「……さいん二十四度は0・4067、だぜ。覚えておくんた」

秋姉妹に場所を持ってかれてあとがきが書きにくいです。

夜目遠目、みちゃいました

「ただいまー」

「やっと着いたねえ。行きはあんなに速かったのに」

いつもの調子を取り戻したヤマメと、ついに正体がバレた私木葉緑は、どこも行く当てがないので水橋清里の家に戻ってきた。妖怪になってしまったヤマメが、妖力をコントロールして隠せるようになるまで野宿生活をしながら牛歩で街に向かっていて、予想以上に到着が遅れた。今こうして当然のように街にいるのは、ヤマメが日々の練習で妖力をコントロールできる所まで成長したからである。私はこんなに長く生きてきたのに、妖力を扱うどころか感じとることすら危うく全てが能力任せなのに、ヤマメは一月でマスターしてしまったのだ。私は優秀なヤマメを仕留めようと疼く我が右腕を抑えるのに必死だった。「俺に近付くなああ！」って叫ぶ位必死だった。

ヤマメは自分の能力を「病気を操る程度」と称していた。すごい危なそうな能力だが、意識して使わない限り問題ないらしい。でも、あれだ。何も知らない人には嫌われるだろうな。もしもの時は、知り合いの神様でも紹介してあげよう。

「あ！ 少女ー！ 帰ってきたよー！」

広い庭をじゃりじゃり進むと、渡り廊下の手すりに腰かけ、足をぶらつかせている少女が見えた。手を振って挨拶すると、思いきり

そつぽを向かれてしもうた。私が嫌いなのは前々から分かっていることだけど、今日の少女の態度は、憎しみの他にも混じっている感情があるように見える。

「少女ー？ どうかしたー？」

「何でもないわよ」

「怖がらないでいいよ、優しい私に言っただらん」

「部屋に戻ってなさいよ。あんた達が出ていった時のままにしてあるんだからね」

「それはそうと、悩みがあるんじゃないの？」

「強引に話を戻さないでよ！ 部屋で寝てなさい！」

「あーそうか。ヤマメがいる所では話せないんだね。ふむ」

「しつこいわよ！ もうほっといて！」

自分をさらけ出すのが苦手なお年頃なんだね。見るからに十四歳だし。きつと頭の中に魔物でも飼っているのだろう。あとで我が右腕に封印された堕天使と会わせてみるのもいいかもしれない。

「少女、清里は？」

キョロキョロと周りの様子を伺っていたヤマメが質問する。

「し、知らないわよ！」

「その様子だと、知っているね？」

「出てったわ！ あとは知らない！」

「少女、正直に話さないと汚すよ。家を」

「脅してるつもり？ そんなの私には効かないわ！」

「そうかそうか。じゃあ……」

「や、やめなさい！ 砂利を家の中に持ちこまないで！」

「え？」

「あーもうっ！ 浮気よ！ あいつは浮気しているのよ！」

今日は少女がいじられる日らしい。少女は今、会ってから一番喋っているのではなからうか。

それはそうと、水橋清里が浮気ね。そんなことする人には見えな
い。恐らく想像力豊かなお年頃が作る、本格サスペンスドラマなの
だろう。それを根掘り葉掘り聞くのもまた一興。

「浮気ってなにかなー」

「ほら、みど……富山も気になったみたいだし、話してごらん？」

ヤマメと話し合って、富山と認知されている人の前では偽名を通
すように決定した。理由は特になし。

しかし、帰って早々年下の少女を二人がかりでいじる私達。とっ
ても面倒だろうな。

「……今、美しい女がいるって街で噂になっているのよ。その女が
住んでる家の周りには、毎日のように垣間見しようとする男達がい
っぱい。きつと選ばれし者の清里はその中には混じらず一人で歩い
ているところで、悪夢にうなされて家を抜け出した女と運命の出会
いを果たすんだわ。そして空から舞い降りてきた追っ手から逃れる
ために、二人で駆け落ちするのよ！ 浮気よ！」

「うん。ごめん」

「……清里、きつと帰ってくるさ。選ばれてないから」

後半の方からは聞いてて罪悪感に苛まれた。たった数秒の言葉な
のに。

「じ、じゃあ、私達は部屋に戻ってるから」

「頑張れよー」

「私は孤独！ 脇役に過ぎない悲劇の子よ！」

少女が暴走してしまい、私達が話し掛けても反応しない。だからといってこのまま少女の話を聞いていると、私の良心が悲鳴を上げてしまう。私はヤマメの肩に手を置いてうなずき合つと、私達の部屋に向かって歩き出した。

「……少女って結局、清里のなんなの？」

「さあ。前に聞いたときは無関係者だと主張してたね」

せつかく帰ってきたのに、家主がいないのは面白くない。このまま部屋で寝るのもつまらない。

「ねえヤマメ」

「なんだその企てる顔は」

「……行ってみない？」

「行ってみない」

「どこに行くか位は聞いてあげてよ！」

「わっがっまつまつだねえ緑は。で？ どこに行きたいんだい？」

「ほら、さっき少女が言ってた」

「駆け落ち？」

「二人で遠い所に行……くんじゃなくて」

危うくノリツッコミを完全にしてしまうところだった。

「運命の出会いをしに？」

「十字路でイケメンと衝突事故起こしに行……くんじゃなくて」

「悪夢にうなされに？」

「悪夢をみるために早く部屋に行……くんじゃなくて」

「選ばれし者になるの？」

「代々の勇者達に認めてもらいに試練の洞窟に行……くんじゃなくて」

「浮気しに？」

「惜しい！ 少し近付いたけど意味が！」

「いや、でも、私の口からは……」

「なんでよ！ 美しい女の人を見に行こうって言ってるんだよ！」

「そういう趣味は無いんで……」

「あ……」

「うん……」

自分が言ったことの意味に気付き、二人で赤面してしまう。

この時代で女の人を覗き見るとはすなわち、その人に気があるということなのだ。私にもそんな趣味は無い。懐かしき友、東風谷早苗は『びいえる』というジャンルに興味を持ち始めていたという記憶が、なぜか一瞬頭の中に浮かんできた。『びいえる』ってなに？

「いやいやいやいやいや。私はただ単純に好奇心で言っただけで」

「好奇心……。やっぱり緑、美しい女のこと気になるんか」

「ちがうちがうちがうちがう。あの、どれだけ美しいのになって。

ヤマメとどう違うのかなって」

「私と比べるの……。それって、私にも気が……」

「おかしいおかしいおかしい。とにかく、行こうよ」

「ち、近付くなっ！」

「……」

「……？」

どう言っても変なとられ方をする。私はヤマメの説得を諦め、無言で頭の団子を握り、Uターンする。そしてそのままヤマメが反応しない内に、入り口に向かって走り出した。

「や、やめる！ 私をその道に引き込まないでくれ！」
「私は正常だっ！」

二人でギャーギャー騒ぎつつ、人が集まっている家を探すことにした。

.....

「お。この列か」

水橋清里の家を出て通りを歩いてみると、通行人（漢）達が一定の方向に進んでいるのが分かり、便乗させてもらった。そうしているとすぐに長蛇の列を見つけ、まだ見ぬ女の姿に期待感を抱く。

「長い長い。緑、並ぶのやめよう」

「あー、こんなにいると日が暮れちゃうかもしれないしね」

先頭が見えない程の長さである。

「でもめげない。どこかに抜け道があるハズ」

「はあ。そんなに見たいのかい。私、戻っていいか？」

「.....」

これから抜け道を探すのに二人では自由に動けない。別れてまで見る必要性は全く感じられないが、ここまで来てしまった以上何と

してでも見てみたい。意地だ。帰るのがいつになるか分からないし、ヤマメを無理矢理付き合わせるのも悪い。村が壊滅してから、ヤマメはずっと私と一緒になのだ。たまには一人になる時間も必要だろう。アフターケアを欠かさないと頼れる友好的な私である。

私はヤマメの団子を手放し、少し先に進んで言う。

「いいよ。帰りな」

「うわっ。格好付けた。……じゃあお言葉に甘えて、お先に帰らせてもらうよ」

少女の話聞いてから、私の中に眠っていた魔物も目覚めてしまった。数百年振りに封印が解かれてしまったのだ。私の両目には、今やフィルターがかかっている。何彼につけて格好良いシーンを思い浮べてしまう困ったフィルターだ。

私とヤマメは互いに背を向け、それぞれの道を歩み始めた

ただ別れるだけのシーンでも格好良く見えてしまつて大変である。

「まず、先頭を探さなくては」

ターゲット見つけないと見通しがつかない。私はそのまま、列を横目に進む。もしかしたら水橋清里がいるかもしれない。

この時代の貴族の形式なのか、一人ずつ並んで列を成しているのではなく、貴族と従者で構成された十数人の固まりがぼこんぼこんと並んでいる。最後尾の方には一般人もいた覚えがある。貴族優先なのだろう。

あと、におう。

水橋清里の家ではそうでもなかったが、この団体からはむせ返るような甘ったるい匂いが鼻を突く。これが美の形だから、と自分を納得させて鼻を塞ぐ。さらに手を顔の前で振って匂いを飛ばす仕草をし、数回咳き込む。言葉を用いない嫌味。

野生少女な私とヤマメからは、また違った匂いを発しているのだろう。しかしそれは慣れてしまっていて何も感じない。自分を棚に上げて相手を批判する必殺技を使用しているのだ。

真っ直ぐ歩いているうちに、列は街の外に続いているのが明らかになった。ついさつき通った門をくぐると、私が行ったことのない方向に列が向かっている。はぐれると、即迷子ルートだ。

勇気のある私はそれでも進む。どこまで続くか予想がつかなくなつたため、暗くなるまでに帰れるよう小走りで進む。気付いたんだけど、さっきから列が全然動かない。まだ開店してないのか。

この土地は四方を森で囲まれているらしく、間もなく森に入ってしまった。生育している植物は、主に背の高い竹だ。

竹藪での人間が通る道は、ぐるりと孤を描くようになっていて、私はそれを一直線に進みショートカットを試みる。が、志半ばでそれを断念した。

何かにつまづいたのである。

「…………敵かつ!？」

幸い転ぶことはなかったが、つまづいた原因である物体が、柔らかい感触をしていたので振り返って見る。

「…………人？」

長い髪のカタマリが落ちていた。これ動いたらホラーだよ。タイ

トルに「呪」っていう漢字が入りそうなホラー映画になるよ。

恐る恐る近付いて様子を見てみると、カタマリが突然動き出して私の足を髪の中から生えてきた手で掴み、音声を発した。

「……こわいの」

「ぎゃあああああああああつー!!」

怖い!? 怖いだって!? 私はあなたがコワイデスヨ!

どうしよう呪われた。私の妖怪生活はここで終わりか。これからは怨霊として生活していかねばならないのか。そうなっても今の生活が大きく変わる訳ではないね。じゃあいいか。

「我汝ト怨霊ノ契リヲ望ム我汝ト怨霊ノ契リヲ望ム……!」

「……一緒に来て」

霊は私の祈りを無視してもっさり立ち上がった。

長い髪が二つに割れ、中から白くやわらかそうな顔がこんにちはむき立てのゆで卵を連想させる。中身は切りそろえられた前髪に、ちゃんと開けば大きいであろう瞳。今は線目で残念な状態。あとは、絶妙な高さの鼻とふるんな唇。これで霊じゃなかったらすごくかわいらしい人だ。美しいのとは少し違う。

霊は私の服をつかんで放さない。私を闇の世界に引き込みたいらしい。

「い、嫌だ! わわ私はこの世界の住人だ!」

「……こわいの」

最初のセリフをもう一度言って、今度は私の腕を掴んでくる。

「ななな何が怖いのかなあ? 私も今恐怖と戦っているのですが」

「……夢」

「ゆめ？」

「悪い夢を見たの。それで思わず家を飛び出してきてしまったんだけど」

「こ、これは……。水橋清里宅で少女が言ってた「悪夢にうなされて家を抜け出した女」なのか……。？少女の空想が実現している。ならば私は将来的にこの霊と駆け落ちすることになるというのか。ありえへん。」

「夢の内容をあなたに話しても意味がないわ。とにかくこわいから一緒に来て」

「そそそそ空から舞い降りてきた追っ手は……。？」

「……！あなた……。私の正体を知って……。？」

なにその反応！ 筋書き通りに話が進んでいくよ！

「ねえ。あなたは私の名前が分かる？」

「え、え、あの、か」

「もういいわ。私も覚悟を決めた。続きは家で聞かせて」

とつさに思い付いた名字「片倉」を言おうとしたら、霊はおめめを大きく開き即行で止めてきた。そして強い力で腕を引っ張られる。霊は周りの貴族達に見つからないように、竹の間をかくぐって進んで行く。腕を掴まれている私は上手く身動きがとれずに、竹という竹に体当たりをする羽目に。

「あぐつ、あのもうちょっとゆっくりうがっ」

「貴族が帰っていないなくなった夜に話を聞かせてもらうわ。それまで私と共に行動しなさい」

「ひつ、私は夜までに帰らなければうおっ」

霊は私の話を聞こうともせず、速いペースで竹藪を攻略する。霊とは基本的に一方的な意思疎通しか成立しないのである。

「もう来るなんて……。私はまだやり残したことがあるのに……！」

この世に未練がある霊のようだ。ならば私がその未練を手っ取り早く解消してやれば、霊は成仏し、私は駆け落ちせずに済むのではなからうか。

「あ！ おじいちゃん！」

霊が叫び、急に足を止める。前方には腰が曲がった老人がいる。霊の言動から察するに、死んでしまった霊の遺族だと予想する。でもなぜこんな道なき場所に？

「おお、おお、おお」

「私を探してくれてたの！？ ごめんなさい！」

「……はえ？」

「じ！ め！ ん！ な！ さ！ い！」

「……おお。帰ろうかの」

老人には霊が見えていないようだった。話が全くかみ合っていない。

「おじいちゃんは耳が遠くてね」

「そうだね。きっとそうだよね！」

霊は自分が死んでいることに気付いていないのだろう。老人は孫

か娘である娘の影を追い、こんな所で彷徨っているんだ。なんて悲しい家族なんだ！

それから少女は老人のスローペースに合わせて歩き、私は竹にぶつかるとはなくなつた。

双方に余裕ができて、霊は私に話し掛ける。

「名を名乗りなさい。これから話し合う上で呼び名がないと不便なもの」

命令形だよ。えっと、どうしよう。偽名はもういいか。

「私は木葉緑。あなたは？」

自己紹介のついでに相手の名前も引き出す。霊や片倉と呼ぶ訳にもいくまい。

「成る程、本人確認ね。抜かりないわね。……いいわ。私は蓬萊山ほうらい輝夜んかくや。これからあなたが月に戻す大罪人の名前よ」

「私が？ いや待て、私は味方だアツ！ 信じてくれ！」

霊　ホーライサンさんが電波を受信していたみたいなので、乗ってあげた。月に帰るかぐや姫、童話の内容そのものじゃん。どうせ偽名だろう。

「味方ですって？ あなた、どこの所属？」

「守矢神社です……」

「聞いたことないわね。新しくできたのかしら」

「ホーライサンサンさんは、私に何を求めているのでしょうか」

「さんさんさん……。いや、それはこっちのセリフよ。木葉は私に

用があるんじゃないの？」

まずい。このままでは無意味な言い合いになりそう。いったん整理だ。

「私は今話題の女の人を見に、すぐ近くの街から走ってきた一般人ホーライさんは悪夢を見て家から飛び出した設定の幽霊。間違っている点がありますか？」

「私の所の説明が全部間違ってるよ！ 悪夢を見て飛び出したのは設定じゃなくて本当のこと！ それに私は幽霊じゃなく生きてる人間！」

ホーライサンさんはがっかりした様子で私の腕を解放した。

「…………ふう。どうやら私の考え過ぎだったようね。あなたは私のぞきにきた、少し頭が残念な男。そういうことね？」

「私は正常だ！」

男を否定する言葉が抜けてた！ なんで皆間違えるんだよ！

あれか、ノリか？ 今日はい、少年漫画のノリで行動してたのが駄目なのか？ くそう。

「わ、私は女だ！」

「……………………え？」

そんな目をまん丸にして見る必要はないでしょ。失礼な。

「…………おじいちゃん。この人家に上げていい？」

ホーライさんが私をお持ち帰りするらしい。

「……………ほえ？」

「こーの！ ひ！ と！ い！ れ！ る！ よ！」

「おお、おともだちかえ」

「う！ ん！」

そうなんだ。

「ふ、ふふふふふ。今調度同世代の話し相手が欲しいと思ってたの。木葉は無害の変態みたいだし、家でゲーム……言っても分からないか。とにかく遊びましょう？」

「ゲームだと……！」

変態発言は特別に許してやろう。ゲームだって！？ まさかこの時代の人からGAMEの言葉を開けるとは思っても見なかった。いやでもこれは名前だけであって機械がどーのこーのしたやつじゃなくてアナログな遊びではないのか。でもでもそしたらゲームなんて言葉は出るハズないし万が一の可能性があるかも……。

「……………ふふふふふ。喜んで」

「そう言ってもらえて嬉しいわ。ふふふふふ」

ホーライさんかぐや。こいつ、只者じゃない……。

「かぐや。もうすぐで着くぞえ」

ホーライさんのおじいちゃんがこちらを向いて竹藪の出口を指差した。

「顔を隠さなきゃ。木葉も私を隠すように歩いて」

「恥ずかしがり屋さん？」

「違うわよ！ あなたは私を見にきたのなら分かるでしょ！」

もしかしてこれが街で噂の美しい女？

「……………え？」

「なによ！ 私の美しさが分からないの！？」

「あー、大丈夫。美しい美しい」

余りにも簡単に会えたから、思ったのと違う感じがした。

「……………いいわ。木葉が女なのか私が美しいのか、続きは家で……………」

「勝負して決める……………！」

私とホーライさんとおじいちゃん。三人は目的地に向かって一歩一歩、歩んで行く。

私達の戦いはまだまだこれからだ！ みんな、応援してくれ！

なんだか打ち切りみたいである。

一陽來復、まあるい月です

さて、気持ちだけ勢いよくホーライさんの家にお邪魔したのだが、ホーライさんは覗きにきた貴族達が帰るまで自由に動けない。ホーライさん　もうかぐやさんでいいや　は、私を真っ暗な部屋に案内し、そこで二人で夜になるまで待つことにした。一日位私がいなくたってヤマメが心配することはないだろう。

かぐやさんの部屋は本当に真っ暗で、貴族から覗かれる心配など皆無な引き籠もり空間だった。これでは貴族が帰らないんじゃないか、とかぐやさんに聞いてみると、別の部屋に身代り人形が置いてあるらしく、それを見てまんまと騙された貴族がどんどん帰っていくそうだ。

かぐやさんはダミー部屋にいることになっていたので、私達は真っ暗部屋で音も出すことができない。なのでかぐやさんは真っ暗な中、私の為に布団を敷いてくれて、そこで夜まで寝ようと言われた。私の隣には元から布団が敷いてあるようで、そこがかぐやさんの居場所だ。万年床だよ。完璧な引き籠もり空間だよ。

そして、慣れない他人の家で無理矢理目を閉じ、夜になった。かもしれない。ずっと真っ暗で時間が分からないのだ。

「さあ！　勝負の時間よ！」

パツ、と明かりが点く。

「え……？ これ、電気……？」

頭上にはドーナツ型の発光体が、和風な笠をつけて天井からつり下げられていた。

「木葉、知ってるの？」

「あ、まあ、聞いたことある程度だけど……」

「ふうん。以外と知られてるのね」

未来から来た長生きの妖怪であることは、もちろん隠す。世の人間でないとかかと不便なのだ。

電気を使った明かりが発明されるのはずっと先で、今の人間達は知る由もないこと。しかし引き籠もり（決定）で、世間に疎いかぐやさんは私の有り得ない知識を不思議に思わない。

明るくなった部屋を見回すと、おびただしい量の機械類、それに電力を供給する発電機のようなブロックと、それを繋ぐコードの束。機械をよく見てみると、全てに共通のロゴが。

『YATSUI GROUP』

この光景、見たことがある。うん、今やっと思い出したよ。私がこの世界に来たばかりのことだ。明らかにオーバーテクノロジーな街があつて、その中心である会社がヤツイグループだったんだ。

でも、あの街の人は反対派を除いて月の移住なる計画を実行したはずだ。何百年も前に。

そこがかぐやさんと出会った時の言葉が再生される。

「私は蓬萊山輝夜ほうらいさんかくや。これからあなたが月に戻す大罪人の名よ」

これは、偶然の一致か？ いや、こんなの偶然だと思えない。な

で持ち込んだ。一回起きたが、私を見ると再び気を失ってしまい、かなり時間がかかった。

「おばあちゃんじゃない！ 18歳だ！」

「はいはい。じゃあ木葉はもう何億年も前からいるわけ？」

「え？ 私はまだ数百年しか……しまった！」

「あら？ 私と同じ位じゃない。つまらないの」

「え。つてことは、真のおばあちゃんはおくやさん……？」

「私は不老不死だからそういうのは関係ないの。木葉が数百歳なら、あなたが見たのはきつと最後の輸送ね」

「最後？」

「そうよ。世界中の人達を一人の力で月に移すんだもの。あの人は何回も何回も月に行ったり来たりして、何万何億年もかけて少しずつこなしていったんだわ」

「あの人って、このヤツイグループの社長さん？ 何億年も生きてるの!？」

「彼女は天才よ。彼女にとって寿命をなくすなんてことは呼吸をする程度の問題でしかなかったの。なんだかよくわからないナノマシンで成長を止めてたわ」

科学も進歩しすぎるとメルヘンワールドに飛び立つというのがよく分かった。ナノマシンなんて言葉が普通に、しかもこの時代で出てくるなんて。

こんなおかしな展開になったのも、全部水橋清里の家で少女がした妄想が悪い。

「彼女って、あの……えつと……」

なんて名前だったけ。思い出せない。あ那时的映像ならかすかに思い出せるんだけど……。

「ヤツイグループ新会長の、銀髪でナース服な……」

「えーりん！ えーりん！」

「そうそう！ その人！ なにその掛け声」

「社歌よ」

「ださっ！」

「ださくない！ かた苦しいのよりかは断然盛り上がるんだから！」

「えーりんえーりん叫んでる会社なんてやだあ！」

「木葉も叫べば恥ずかしくなくなるよ！ ほら一緒に！」

「嫌だ！ これ宗教の勧誘みたいだよ！」

かぐやさんと少し距離を置きたくなった。

「……でも、何億年も生きてるのに新会長？」

「そこら辺は私にはよく分からないわ。最後の街が永琳の故郷か何かだったんじゃないかしら？ ある程度発展させておいて、永琳が他の地域の人々を月に住居させるまで家族に統治を任せる、みたいだね」

「じゃあ会長の家族もサイボーグなわけだ」

「そうよ。流石に全世代が生きてるワケじゃないけど、永琳から数えて三世代位なら今もびんぴんしてると思うわ」

カタカナ語が通じて嬉しい。

確かに危険を伴う移住を、真っ先に自分の故郷で試すのは気が引ける。成功したとしてもお月さまにはまだ何も無い状態だ。他のコミュニティを使い、あらかじめ月の土地を開拓していれば、引越してすぐに快適な空間が手に入る。

こんな途方もない計画をよくも実行したものだ。天才の考えることはよう分らん。

「まあ私も最後の街にいたんだけどね」

「いたの!? 知らなかったー」

「私は家で文化的活動ゲームをしていたから」

「くっ……! かぐやさんがのんきに活動している間、私は死にそうな目にあつてたというのに……!」

「大変ねー妖怪さんは」

「すごい他人事」

「だって会つたばかりだもの」

「そうだ。会つたばかりだ。私はかぐやさんと決着をつけるためにお邪魔してるだけなんだから」

「そうね。ようやく始められるわね。手加減はしないわよ」

「そっちこそ、長年ペーえすペーで鍛えた私の腕に平伏すがいい」

その時! 両者のお腹の虫が合唱し始めた! ぐーぐー。

立ちひざ状態の私と仰向けで寝っ転がっているかぐやさんの時が止まる。

「(かぐや)。ごはんじゃ」

となりの部屋からかぐやさんのおじいちゃん呼び声が聞こえてくる。

「……勝負はお預けよ」

「……今日は帰らせてもらつ。明日また来る!」

話しているうちに時間がきてしまったようだ。人様の家でご馳走になるのは気が引けるし、何よりも水橋清里の家で少女がごはんを用意して待っているかもしれない。外は真っ暗だが、街までの道はしっかりあるので迷わず帰れる。すなわちここでさよならだ。ゲーム、したかったのに……。

時は再び動き出し、私とかぐやさんは部屋を出る。

「おともだちも食べていくかえ？」

「いえ、家に用意されてるんで……」

「おお、おお、今用意するのでな、少し待」

「え、いや」

「（木葉、おじいちゃん、耳遠いから）」

おじいちゃんの言葉の途中で、かぐやさんが耳打ちしてくる。

「（大声で断って）」

「い！り！ま！せ！ん！」

「……ほえ？ そうかそうか。じゃあ元氣での」

「お邪魔しましたー」

「……なんですと？」

私の挨拶が聞こえなかったようだが、自分の中では伝わったことにして家を出る。

玄関扉の所までかぐやさんは見送りにきてくれた。

「じゃあまた明日。絶対来なさいよ！」

「言われなくとも」

満月に照らされ、私とかぐや姫はお互いに再戦の誓いを結び、別れた。

こうやって友達の家遊びに行くなんてこと、久しぶりだ。最近はお会ってからそのまま住み込むことが多かったからね。

.....

「少女！ おい少女！ どこだア！」

水橋清里に無事帰還した私は、変な妄想をした少女と話し合いをするべく、入り口の時点で叫び始めた。

「少女！ いるのは分かってる！ 大人しく出てくるんだ！」

「あ、トミ、お帰り」

「少女ー！ あ水橋清里、相変わらずだね」

そういえばこの家ではまだ富山柴左衛門のままだった。二つの名を持つ私、なんだかカッコいいね。外で少女少女叫んでいるので相殺されるが。

水橋清里はなんで外にいるんだろう。

「少・女！ ちょっとオハナシするだけだから！ 出てきましょうーねー！」

「.....なによ」

出てきた出てきた。家の中からでてきた。

「おいこら少女！ 君が悪夢にうなされた女と出会うなんて言ったから本当に出会ってしまったじゃないか！ 予言通りだよ！」

「え、あなたが選ばれし者.....。うわっ」

「何だその反応は！ 絶対に駆け落ちなんてしないからね！」

「.....今日は最悪だわ。清里はまた女を連れ込むしこれは選ばれし者だし.....」

「これって言うな。って、また女を連れ込んだ……？」
「……はあ。詳しくはそこで反省している清里に聞いて。私からは説明したくないわ」

だから外にいるのか。庭で正座してる。

少女は頭を垂れて部屋の中へ戻ってしまった。向こうがそんなテンションだと私がどうしていいか分からなくなるじゃないか。
気を取り直して背後の水橋清里に注意を向ける。

「水橋清里オ！ また女を連れ込むとはドオイウ事だア！？」

ハーレムでも作る気なのかコイツは。だらしない。私は少女の怒りを代弁して水橋清里に詰め寄る。

「こ、これには深い理由があつて……」
「理由？」

怒りの代弁はもう終わった。はっきり言つて人数が増えても増えなくても興味ない。自分の家じゃないからね。へっへっへ。

「なんて言えばいいんだろう。迷子？ いや、捨て子？ いやいや遊びに来た子？」

「一つに絞りなさい」
「あー、色々複雑だね。僕からは言えないよ。その子は今、ヤマメと一緒にいるからトミも行ってきたら？」

「成る程。自分で説明するのが面倒だと。少女に言つてこよ」
「違う違う！ お願だから！ 僕からは言えないことだから！」

「ふふふふふ」
「許してえ！」

水橋清里の反応が面白くてつい遊んでしまう。

プライバシーを守るために言えないってというのは分かるから、少女に告げ口なんてしないよ。

「さて。ヤマメはいつもの部屋にいるだろう」

私達に割り当てられた部屋のことだ。ここから100メートル走をしなければならぬ。

水橋清里の真横でクラウチングスタートの体勢をとり、1、3、5、7、9とカウントして駆け出す。

32秒かけて部屋に辿り着き、漏れ出す明かりに少し安心感を覚える。

「ヤマメー！ 泣いてた？ ねえ泣いてた？」

一人の時間を使って、故郷の事を考えていただろう。でも一人だと悪い方向に考えがちだから、こうして第三者がりセットするのも大事だ。ただ、やり過ぎると嫌なヤツになってしまうので適度に。

「うっさいよ！ 今お客さんがいるんだから！」

水橋清里の言っていた人だろう。簾をめぐって部屋に入り、仕切りから顔を覗かせて様子を窺う。

「緑……。あんたって、もしかして人見知りなのかい？ 私と出会った時も中々心を開かなかったし」

「……あの、私、出てった方が……」

「いいよいいよ。ほら緑、入ってきな」

くっ、ここまでか。私は自ら敵地に足を踏み入れなければならぬ

いよいよだ。

「……失礼しまーす」

「ごめんね。緑は最初、こんなもんだから」

「……いえ。私にもその気持ち、よく分かるから……」

敵は長い黒髪の物体。後ろを向いているのでかぐやさんみたいに見える。私は敵の背後に座らせてもらうことにする。

「緑。馬鹿？」

「敵の目の前に姿を見せる位なら！ 私は！ 馬鹿でも構わないっ

！……」

「……あの、緑さん？ 私、攻撃しないから……」

そうやって敵は私の方を向いてくる。かぐやさんをぱっつんとすると、この人はぱっつんぱっつんだ。二段構えである。

「や、やめろ見るんじゃない！ ぐあああああああ！」

「緑、元気だねえ」

「……なんかすいません……」

最近の若者の常套句だ。とりあえず謝っておくという。こいつは許せん。

「君、名前は？」

これから説教をする上で、相手の名前を知っておくと無駄に威圧感が与えられるようになる。

「……。いまだにはる……今田春なんて……」

未だ春。偽名決定だ。ならばこっちだって……。

「私は富山しばっ」

「もう偽名はいいよ！」

「……緑さんですよね？」

「はい。なんかすいません」

とりあえず謝った。

「未だ春なんて、偽名でしょ？」

「……そうなんだけど、本名はちよつと教えられない……」

「そんなすごい名前なの？」

「……もう片仮名とか入っちゃつてると、思う……」

「片仮名なんて名前にならないだろう！ あれは坊さんの文字だぞ！」

ヤマメがストップをかける。こんな時代からカタカナフアンタムつてあるんだ。でも坊さんの文字だけじゃなくて、少女の妄想フアンタムに出てくるような漢字スキルの振り仮名ブレイクにも使うんじゃない？

「……とにかく、教えられないから……」

「分かった、未だ春でいいよ。よろしく」

「やっと名乗った名前が偽名なんてねえ……。私はそういう人に縁があるのか？」

ヤマメは私が来る前にも未だ春から名前を聞き出していたらしい。とことん初対面の人に嫌われるヤマメだ。だらしのない水橋清里を除いて。

「さて、ごはんはまだ？」

イレギュラーな存在のせいで話し辛かったことを、一段落ついたところで切り出す。私はごはんを食べる為にかぐやさんの家から走ってきたんだ。

「もう終わったよ。緑が遅いから」

「……緑さんの分は私のに回って……」
「え……」

目の前が真っ暗になる頭が真っ白になる胃が空っぽである。私の目からは大粒の涙がぽつんぽつんと、出せる位の栄養を摂っていないにもかかわらずとめどなく溢れ出す。手や足からは力が抜け、私の心の中には「無」の一文字が通り抜ける。

「は、ははははははははははああああ……」

「ああ緑！ そんな本気泣きしないで！ 少女に言って作ってもら
うから！」

「……なんかすいません……」

やはり未だ春は、私の敵だ。

.....

翌朝。きつちり二食分の朝食を平らげ、皆様に「出かけてくる」と言い残し、かぐやさんの家までやってきた。私の周りには相変わ

らず覗きに来た貴族達が大勢並んでいるのだが、昨日よりも熱気が強い気がする。

そんなお盛んな人間供は放っておいて、私は堂々と入り口から尋ねる。

「たのもー！ 木葉でーす！」

辺りの喧騒に私の美しい声がかき消された。チャイムとかがあれば連打するのに。

「ピンポーン！」

自分で言うことにした。十秒程したところで、貴族達にばれないよう少しだけ戸を開けて顔を出したかぐやさんが出迎えてくれた。

「今日ちよつと面倒な用事ができたから、私の部屋で待っていてくれない……？」

私の耳元で小さな声を出して話すかぐやさん。私はそれに無言でうなずき、そつと戸を開け中に入る。かぐやさんに案内されて昨日と同じ部屋に入る。

「あれ？ 明るい……。あと機材は？」

かぐやさんの部屋は昨日のメカニックな構造とは違い、中央には座るための畳と部屋を仕切る壁は襖ではなく簾。隣の部屋からシルエイトが見える程度の透け透け具合だ。

「今日貴族達が求婚しに家に入ってくるのをすっかり忘れててね……」

「あんなにあつた機械類はどこかにしまったの？」
「あ、これよ」

そう言つてかぐやさんは足が隠れる程長いスカートのポケットから、摘める位の小さな球体を出す。

「月の収納具。こつちに来るとき、これに全部入れて隠し持ってたの」

「こんな小さいのに？ ……月つて、意味不明」

「なんでもアリよ」

「………そうですね」

で、ここは求婚しに来た貴族達とかぐやさんの対談の場となる訳で、そんな所で私は待つていなきやならないのか。

「かぐやさん、私、別の部屋にいた方がいいんじゃないの？」

「いーのいーの。どうせ全部断わるつもりなんだから。私と貴族の茶番劇だと思つて楽しんでくれれば幸いだわ」

まるで悪女だ。まあ、よく知りもしない男と無理に結婚する必要は皆無だからいいんだけどね。

この状況は月から来たかぐやさんがおじいちゃんに育てられてある日求婚される、『竹取物語』の内容そのものだ。実写版だ。舞台の中心とも言えるこの場所に座つて主人公と話している私。なんだか複雑な気分だ。

「せつかく来てくれたのに悪いわね」

「いや。かぐやさんが望んでやつてることじゃないでしょ？」

「そうね。身代り人形に騙された愚かな男の奇行だもの。だけど相手は身分が高くつて断わると家が潰されちゃうかもしれないし………」

「はあ。大変ですなあ」

「大変よ。……でもこれも、あと少しで終わるかも」

当事者の愚痴を生で聞けて新鮮だ。かぐやさんが急に落ち込んでしまったが、恐らくそれは月に帰る日を思ったことだろう。きつと怖い夢というので天からの啓示でも受けたんだ。電波を受信したんだ。

「対談中は私の隣で寝っ転がっててもいいわ。でも部屋から出るのは後々面倒になるからやめてね。あなたは男なのだから」

「……くっ」

反論したいがその対象はかぐやさんではなく外にいる大勢の貴族なので、無力な私はこらえるしかない。

「かぐや〜。時間じゃぞ〜」

時間を知らせるおじいちゃんの声。アラーム役だ。

「来たみたいね。じゃあ木葉、頼んだわよ」

「寝てればいいんだね」

そうしてかぐやさんは畳の上に座り、私は隣で寝っ転がった。

これから始まる生放送が非常に楽しみでございます。

一竿風月、スリル満点です（前書き）

あとがき。

輝夜のお話は他の筆者の方々が書いてくれていますので、あまり引き延ばさないことにしました。

今回初めて三人称を用いてみたのですが……あれは難しい。もっと練習しなきゃ。

一竿風月、スリル満点です

かぐやさんが配置につくと、外で待っていた貴族が簾で仕切られた隣の部屋に入ってきた。その数五人。大勢並んでいた割には少ないと思つたが、『竹取物語』の内容を思い出すと、求婚してきたのは確かに五人だったと自己解決。

「ようこそおいでくださいました本日はお日柄も良く絶好の求婚日和となつておりますのでご用求を聞かせて頂きましょう」

棒読みである。

かぐやさんが言い終わると五人が好き放題に喋り始めた。簾の妨害によつて誰が喋っているのかは分からない。

「世にも美しきなよ竹のかぐや姫と婚約の契りを交わしとう御座います」

「貴女様の美しさは私めが最も良く知っております故、どうか私を選んでくれませぬか」

「長く艶のある美しい御髪に白雪を思わせる瑞々しい肌。私の心には貴女様の姿形が染み付いて離れませぬ」

「私の愛はこの中で群を抜いております。この熱は一生覚めやらぬことにございましょう」

「私を好きになつても良いのだぞ」

と、皆愛の込もつた告白をする。ああ、どこかにエチケット袋な

いかな。

かぐやさんは途中何度も舌打ちをしていた。身代わり人形を覗き見られただけでここまで言われているのだから、その怒りも理解できる。ただ、こんな感情表現が豊かな人がかのかぐや姫だと思つて、私の中で確立していた清楚な姫のイメージが木っ端微塵に碎け散る。最後の人の挑発ともとれる発言が終わると、かぐやさんは手に力を込めつつも、丁寧な話し方で返答する。

「その要求は喜んでお受けいたします。ただし条件がございませす」

おっ！ これはあの「無理難題」が始まるシーンじゃ……！！

「今から私の祖父が貴方様に渡す紙に、私の要望が書いてありますので、それを叶えられた方のみとの婚約を受け入れましょう」

奥でおじいちゃんらしき人影が紙を配っている。中身を見たいと思つと、かぐやさんが下書き用紙らしきものを取り出して私に見せてくれた。

虹の霊刀（ATC2500）

材料

火鼠の皮衣	x 1
蓬萊の玉の枝	x 3
竜の頸の玉	x 2
仏の御石の鉢	x 1
燕の子安具	x 3

盗むじゃないと取れない！

「………………。あ、そう」

ゲームのメモ書きだった。これから強い武器でも合成するのだから。下の方にあるかぐやさんの手書きコメントが妙に生々しくて困る。私の中でのかぐや姫が次々と爆発していつてる。

かぐやさんってば本当にやる気が無いんだね。偉い人に対してここまでいい加減になれるかぐやさんが羨ましいよ。

「注意点は一つ。必ず自らの力で問題を解決することです。では皆様方、健闘をお祈り申し上げます」

かぐやさんがさっさと締めると、貴族達は一秒でも早く課題を終わらせたいのか、我先にと言わんばかりの勢いで帰って行った。

「…………ふう」

面倒事が終わって、ほっと一息のかぐやさん。

「木葉、私これから婚約を断わる言い訳を考えなきゃならないの。あいつらたぶん金の力で課題を解決してくると思うから。そんなわけでも対戦はできそうにないわ」

「いいよいいよ。いいものを見せてもらっただし」

特等席で歴史の流れを見届けるといふ前代未聞の体験をってしまった私。もうお腹いっぱいだ。

「じゃっ！ 帰るね！」

「ほーい。あ、いつ貴族が来るか予想できないから、当分の間はウチに来ちゃだめよ」

「決着つかないじゃん！」

「残念ね……。いつそのこと逃げ出そうかしら」

今後の予定としては、貴族が課題をクリアしてかぐやさんがそれを嘘だと見破り解散。そしてすぐに帝が求婚にやって来て、それを断わる前に月からかぐやさんの迎えが来る。帝は阻止しようと兵を送るが願いは叶わずかぐやさんは昇天する、というストーリーを辿るはずだ。だとすると、私とかぐやさんが会える日は残っていない……？ 月のゲーム機を見ることなく、私はかぐやさんと別れなければならぬのか。

しかし私にはどうすることもできない。歴史を変えるなんて、ちっぽけな私が為せるものではないのだ。無念だよ。

「かぐやさん、次の満月の晩にお別れを言いに行くから……！」

「木葉はなんで私の予定を当ててくるの？」

かぐやさんの言葉に返答するのは難しいので、私は聞こえないフリをしておじいちゃんに挨拶して家を出た。

.....

「……………緑さん、どこに行ってたの……………？」

水橋清里の家に帰還すると、新メンバー・未だ春が庭で散歩をしていた。

「噂の美女のところに行ってた」

「……！ あの、藤原って人いなかった……？ 美女に求婚した人なんだけど……！」

未だ春が過剰反応した。あれか、その藤原って人が未だ春に関係しているのか。

「五人いて誰が誰なのか分からなかったよ。ちなみに美女のかぐやさんに無理難題を出されてみんな出かけたよ」

「……くっそあのジジイが……！ 緑さん、私の正体を教えましょう」

なんで私に教えるの？

「私の本名は藤原妹紅^{ふじわらのもいこう}。あのジジイの娘。今から帰ってジジイを殴ってくるから、清里さんよろしく言っておいて！」

寡黙キャラが一転して元気娘に。そして藤原ジジイさんを殴るべく、未だ春改めもこーは走って行ってしまった。うむ。展開が早過ぎて理解が追い付かぬ。

「……そうだ。ヤマメと遊ぼう」

今の一連の出来事は無かったことにした。

水橋清里の家に入ったばかりの設定である私は、最初から何も無い庭を百メートル走って自分の部屋に入る。ヤマメの気配が一つ。

「ヤマメー、あーそーぼー」
「お帰りー。遊ばないよ」

ヤマメに拒絶されてしまった。苦楽を共に経験してきた仲なのに、きっぱりと拒絶された。

「私とヤマメはその程度の関係だったんだね……」
「何を言ってるんだ」
「……っ！」

ヤマメが喋り終えた瞬間、背後から息を飲むような音と皿を落として割ったような音が聞こえた。振り向くと少女の姿と足元にお皿の破片が。

「お、少女。なんでお皿割ったの？ 嫌がらせ？ 私に踏ませる気なの？」
「あ、あんた達、ずっと一緒にいると思ったら……、そういう関係だったのね……！ ばっちいわ」
「違うよ！ みど……、富山は頭がおかしいのは前から分かっているだろう！？」

ヤマメさんのナイスじゃないフォローー。

「そそそっね。……つまらない」

最後の一言はよく聞こえなかったが、どうせ私への暴言だろう。ヤマメは遊んでくれない、名も無き少女は私をいじめる……。再び一人孤独に空を眺める生活が始まるのか。次の満月の日が待ち遠しいね。

.....

日々の無駄遣い。ほぼ不老の私だからできる芸当である。

つまり今日 満月までの一箇月間はボーっとして過ごした。掃除しろだの洗濯しろだのとうるさかったヤマメと少女は、最近諦めたような目で私を見るようになった。

まあそんなことはどうでもいい。今夜はかぐや姫の昇天の日だ。私はヤマメと少女に別れを告げ、かぐやさんの家の近く、全体を見渡せる木の上に座ってみた。

「おーい！ かぐやさん！」

多くの兵士で混雑していて、私の呼び声は届かない。

こんなに数をそろえても、月の科学力の前では役に立たないだろう。残念だったね。

「来たぞ！ 配置につけい！」

兵士の一人が大声で命令すると辺りは一気に静かになった。聞こえるのは虫の音と頭上でけたたましく鳴るエンジン音。

「エンジン音!？」

空を見上げると、黒塗りの高級車が群れを成して近付いているのが分かった。もっと他に良いのは無かったのか。最初から最後まで、ことごとく私の夢を打ち砕いてくる。

私がつくりしている間に、兵士達は空飛ぶ車に向かって弓を引き絞り、放つ。

その一部は車に当たるが大したダメージにはならず、車はほとんど地上に近づく。

「一群は除染、二から四群は近辺にて待機。以降は上空にて様子を見よ」

車から感情を失った人の声がする。

一群と呼ばれた車三台は、ただちにかぐやさんの家の敷地内に着陸し、窓を半分開けて何かを投げた。

瞬間、それらは爆発。車の外で攻撃するのを忘れ、呆然としていた兵士は文字通り色んな方向に飛散ってしまった。すごく残酷です。手で目をふさぐが指の間から見続けちゃう。

爆発が収まると車から白の防護服を着た人が降り、L字型の武器銃で残った兵士をあつと言う間に撃ち殺す。すごく残酷です。

遠くからだから見ていられるのです。

掃除が終わると、車の中からもう一人、ナース服の女性が出てくる。言わずと知れた、八意永琳ヤツイグループ会長である。

私は危険を顧みずにかぐやさんの家に接近する。車の後ろに隠れて会話を聞いてやるのだ。

「姫。お迎えに参りました」

「永琳……、私、帰りたくないよ……！」

かぐやさんが中から顔を出して、会長と会話を始める。

「ですが姫様、ここは穢れ切った地上です。月の民が暮らすような場所ではありません」

「じゃあ私は穢れたんだ。今の生活が楽しいんだもの」

「いいえ姫様。貴女は今この時より地上の穢れを纏わぬ月人なので。なぜなら罪の償いを終えたから」

「穢れ穢れって言うてるけどこの世界は全然汚くないよ！」

「穢れています。姫も心当りが無い訳ではありませんよね？ そう、今周りを見ても分かることです。姫を独占しようとした地上の人間が金と権力で人を動かし、このような状況になっているのでしょう？ これらの主は今頃別の場所で座り、ゆっくり酒でも飲んでいる事でしょうね」

「うっ……」

言葉につまるかぐやさん。言われてみると確かに穢れている。武力に物言わせ、必死に生きるヤマメ達の村を潰した政府。金に物言わせ、会長の言うようにかぐやさんを独占しようとする帝や難題を無理矢理解決しようとした貴族達。権力欲しさに、はるか昔の街で、会長をやめさせるべく罠に嵌めようとした会社員達。

確かにキタナイ。でもそれとは別に水橋清里みたいな優しい人とか、守矢神社の温かい家庭とかも存在しているのだ。私の能力がそうであるように、「汚いものがあるかわりに、美しいものがある」という交換が成り立っているのである。

プラスとマイナスが合わさってできるゼロなのか、プラスもマイナスもないただのゼロなのか、問題はそこなのだろう。

「さあ姫、綺麗な月に帰りましょう」

「……い、いやだっ！」

「……」

「永琳！ チャンスをちょうだい！ あなたがここでしばらく暮らすことができれば私を連れ帰らないで！ 耐えられなければ一緒に帰る！」

「……」

かぐやさんの説得に会長は頭を垂れ、深い溜め息をつく。

「……………本当、姫は昔から物事を良いように言い包めるのが上手です。私は何度、それに心を動かされたことが……………」

「永琳！　お願い！」

「こつなったら姫は意地でも動かないのでしょうか？　姫の願いは強制です。ずるいです」

会長は私に背を向けていて、どんな表現をしているのか分からない。しかし昔を懐かしむような彼女の物言いから、察することはできるだろう。

会長は頭を上げてかぐやさんと見合う。

「……………良いでしょう。それもまた一興」

「永琳！」

「車に乗って下さい。これから一っ走りしますよ」

「そのまま連れ帰らないでよね！」

「私がそんな穢いことをするとでも？」

「いいえ！」

なんだか和解したようだ。

「おじーちゃん！　おばーちゃん！　今までありがとうー！　元気でねー！」

「土産として不死の薬を差し上げます。姫を育ててくれたことを感謝します」

「ご家族の方にも別れを済まし、軽い足どりで私が隠れている車の方に来る。おばあちゃんっていたんだ。」

「姫、これから他の月人を撒かなくてはなりません。覚悟と準備はよろしいですか？」

「オッケーよ！」

かぐやさんは私の反対側にあるドアから中に入るが、運転席はこちら側だ。高級車なのに右側ハンドルだ。

そうなれば必然的に、会長と私の目が合う。

「……あら」

「こんばんは」

挨拶は大事。

動きを止めた会長を見て不思議に思ったかぐやさんは、車内からこちらを覗く。私の姿を発見したかぐやさんは、半分だけ開いている窓を全開にした。

「木葉！ 来てくれたのね！」

「やあ」

「姫のお友達……？ あの、これからこの乗り物で走り回るんだけど、轢かれる危険性があるわ。だから、乗る？」

「あ、はい」

行き先不明。どうなるか分からないが轢かれるのはごめんだ。

かぐやさんがドアを開けてくれたので、そこから乗り込む。会長も運転席に座り、エンジンをかける。すると防護服を着た月人達は、慌てた様子もなくこちらに駆け寄って来る。ロボットみたいな人達だ。

「うわー久し振りだー……！」

「私は十数年振りね」

「話は後よ。今は一気に逃げることに集中」

言い終わるや否や、会長はいきなりエンジン全開で走り出す。同時に前後左右と空で待機していた車が動き始める。

「姫、銃の扱いは？」

「大丈夫よ。ここ何十年で鍛えてあるから。ゲームで」

「じゃあ姫、近くの車を撃って！」

会長は片手でハンドルを捌きながら、もう片方の手で引き出しから銃を取り出し、かぐやさんと私に投げて渡す。

「タイヤを狙うのが早いわ！ トリガーを引くだけで撃てるから！」

「分かったわ！ 木葉、あなたも手伝って！」

「……まじですか？」

拳銃なんて持ったことないのに。この重みが、生々しい。

と思っっているそばからかぐやさんは開いている窓から接近する車を撃つ。

「木葉早く！」

「はいはいやりますよ！」

ちゃんと、ね、人を撃たないように。タイヤだけを狙う。

目を瞑ると狙いが変な方向に向いて危ないので、よく見て人差し指でゆっくり引き金を引く。少し手が震えているのが分かる。

引き金の抵抗がなくなっただけだと思つと、耳が痛くなるような銃声と共に近くの車のタイヤが空気を吐き出し、バランスを取れなくなってくるると回りながら減速。……あれ、た、たのしい。

「うおーーーーー！」

変な火が点いてしまった。一度やって無害だと分かるともう止まらない。調子に乗って後方の車二三台と上空の車三台をバンバン撃ち落とす。はるか後方で爆発音が聞こえたが見ない振り。

「姫！ 前も頼むわ！」

「了解！ 木葉も気付いたらお願い！」

「うおーーーーー！」

竹林の狭い道に入り、追っ手は私達の横につけなくなる。前の車を撃って減速したものと衝突しないよう、会長は巧みなハンドル操作で避ける。避けると言うよりかは無理に突っ込んでる印象も受けるが、それでも車が壊れないのは、矢を弾く強化ボティのおかげだろう。

「永琳！ あと何台位！？」

「上空二十に後方五。前は片付いたわ」

「よし！ すぐに終わる！」

そんな会話中にも私はドカドカ撃つ。一気に五台減った。もちろん全部タイヤを狙って撃ってるよ。

数秒で追っ手は半分に。狭い道を抜け前方に見えるは私の拠点となっている街。

「木葉、平城京から来たんでしょ！？ 送ってくわ！」

「うん、ってあれ平城京だったの！？」

余裕が出てきた所で新事実。納豆食べたい。

「永琳、あそこで一回止まって」

「時間はあまりとれませんかよ」

「木葉を降ろすだけだから」

ばーんばーんばーん、と最後の三台がスリップして停止する。あつけなかった。

「木葉、あなたとゲームしたかったよ。また、またいつか会えるよね！」

止まる時間は無いので車内でお別れ会だ。

「私も月のゲーム機が見てみたかったんだけどねえ」

「そういえば木葉、ゲーム機は知っているのに月のことは分かってないみたいない言い方するし、私が今日月に帰るのを知っていたみたいだったし……。木葉って」

「着いたわよ。早く降りて」

言葉の途中でタイムリミット。言われた通りに素早く降り、小さくじゃあねと言ってドアを閉める。

かぐやさんは窓に貼り付いて私を見る。そんな時間は一秒も持たず、車は再び猛スピードで発進した。

「……………何ともまあ、アグレッシブなかぐや姫だったのでしょ」

静寂が訪れた平城京の前で、私は今日の出来事に「KAGUYA」逃げのびる少女」と、洋画のようなタイトルを付けたくなった。

.....

かぐや姫が従者と共に脱走した翌日。

僅かに欠けた月からひらひらと布のような物が落ちてきました。

ゆっくり、ゆっくりと地上に落ちるそれは、白く光る蝶の姿でした。

ゆっくり、ゆっくり落ちた先は、日本一高いと言われる不死の山。そこには一つ、二つ、人影がありません。

「月の残した運命に翻弄されるのは誰ぞ、誰ぞ」
「.....」

喋っているのは美しい女性。その身で花を表す程の、美しい女性。対して黙っているのは少女。白銀の髪が風に揺られ、悲しげです。

「美しさは穢れから生まれる。穢れは美しさから生まれる。それは理想、野望、恋愛、嫉妬、憧憬、羨望」

「.....」
「無からは無しか生まれぬ。それを有とし美と名付けるか、無は無のままに在るべきか」
「.....」

山の頂で、二人は月を眺めます。

「おまえはこの世界と月の世界、どちらが正しいと思うか」
「.....私は」

少女が初めて発した言葉を、女性はやさしい表情で聞きました。

.....

KAGUYAの一件が終わって数十日後、遊び相手が旅立ってしまえば再びヒマになった私は、ヤマメと少女と一緒に団子を食べっていると、変な人が敷地内に入り込んできた。

「清里さん！ いるー！？」

遠くの庭で清里を呼ぶ声がするのだ。すぐに三人で様子を見に行つたが、誰もいない。

「きーよーさーとーさーん！」

違う。庭の白石と同化していて、遠目からだと思ひ付かなかつただけだ。

侵入者は白石のように真っ白な髪を生やし、真っ赤な瞳を持った少女だった。

「あ、緑さんにヤマメさんに……名前が分からない少女さん」

「誰？」

「誰だい？」

「紅い目……っ！ か、かつこいいわ……！」

向こうは私達を知っているようだが、生憎私には白化個体の友人はいない。

「私だよ。藤原妹紅だよ」

「藤原さん!？」

ずっと前にいなくなってから一度も現れず、やっと帰ってきたと思ったら真っ白に。夏休みを終え二箇月振りに会った友人が、髪を黄色く染めピアスをズボズボ刺し、見違えてしまった時の気分である。ただもこーとはあまり話したことがなく、友人とまでは行かないが。

これはきつと、偽名の時と同じノリだ。体を張って自分を偽っているんだ。私よりも重度の人見知りなの？

「正体を現せ！」

「正体? ……ああこの姿？」

もこーは悟ったように上を向く。空には何も無いね。

「私、不死になったからよろしく」

一竿風月、スリル満点です（後書き）

秋姉妹的カーチエイズ

「魔理沙だぜ！」

「穰子です！」

「来ちゃったぜ」

「お姉ちゃああん！ わたしのお姉ちゃんはどこ！？ 返してよ

！」

「静葉は今ごろさとりと酒盛りをしているだろう」

「なんで!？」

「孤独同士思うことがあるんだろう」

「お姉ちゃんにはわたしがいるじゃん！」

「あ」

「な、なに？」

「あけおめだぜ！」

「あ、はいどうも。あけましておめでと〜ございます」

「……」

「……」

「……」

「いいからお姉ちゃんを返して！」

「次回、『もこたんぐれる』。ここから歴史は始まる……」

「変なタイトルつけないでよ……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3050v/>

東方現葉幻詩

2012年1月6日10時47分発行